明治三十六年九月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第三巻第十一號

記事要目




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

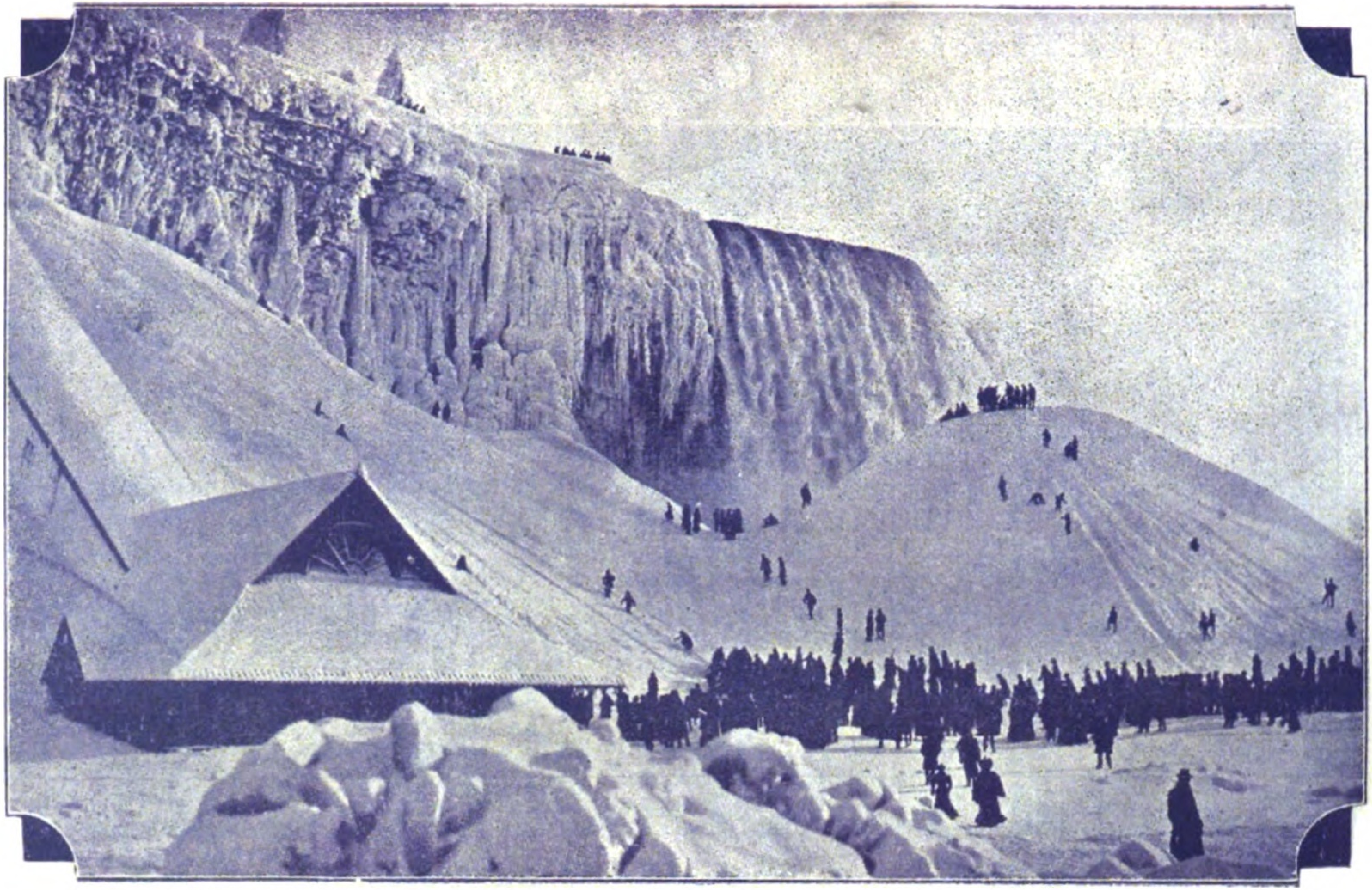
女學世界 第參卷第拾壹號 目次



(博進社工場印行)

井上獨逸公使夫人すゑ子

（嚴冬の撮影）



（記事參照）

ナイヤガラ瀑下の凍山



ナイヤガラの瀑布

渡邊男爵の家庭



四男甕麿　長男千春　三女千菊

二女鶴子　千春夫人とめ子　千秋翁　令閨とし子　長女千夏

毎月一回十五日發行す　主筆竹貫登代多君　八月十五日發行す

數學講義錄

特殊之師友　壹ヶ年卒業　唯一之餘師

本講義錄は言文一体にして算術代數幾何の三科目を平易に講演し其問題は何れも次號に詳解して自修者に便す

本講義錄は研究資料の一欄を設け知名數學家の論文を掲げ又篤志者の意見を掲げて斯學者有益の參考書とす

算術之部

第四號

解義　諸等數、命數、加減乘除解義

課目　整數性質ヨリ最小公倍數

代數學部

第四號

解義　代數式、加減乘除、問題解義

課目　括弧用法ヨリ因數分解法

幾何學部

第四號

解義　中心角、弦ト弓形、問題解義

課目　二ツノ圓ト內外接形

研究資料

▲本項は毎號各部▲

▲卷末に挿入せり▲

○新初等幾何學　鈴木長利

○消去法數理學　松岡文太郎

○分數言算の必要　込銀平馬

○日本數學程度　遠藤利貞

第壹號第五版　第貳號第四版　第參號再版出來す

各科定價

一册（六十四頁）正價金十錢

三册（三ヶ月分）正價金二十九錢

六册（六ヶ月分）正價金五十七錢

十二册（十二ヶ月）正價金壹圓十錢

此外に郵税一册金五厘

本講義錄は時々懸賞課題を掲載して答案を募集し優等者には規定の賞品を與へ又臨時增刊をも發行し報道を勉む

本講義錄質問應答の一欄を設け何人にても質疑し應答する所とし又數學課題の一欄を設け學生諸子の出題を掲ぐ

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（甲の一）

大橋乙羽君著

衣服と流行

正價二十五錢
郵税八錢

衣服は體を蔽ひ寒を防ぐ實用の外又美を添へ氣品を加ふ故に社會の進歩に隨て衣服彌美に流行益盛なり本書は和洋兩服の製法用法より模樣色合を始め古來流行嗜好の變遷及今時の流行等を詳叙し又足らざる所は畫を用ひ懇切丁寧に説明す紳士貴女若し本書を參考に資せば風采彌々優美高尚なるべし

博文館發兌

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印刷又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上文どころに文書圖畫數十百枚を印刷し得へし本品ては諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

◎定價（ニオンス堅裝罐詰送料共）金四十錢

（郵劵代用壹割增）

東京神田末廣町卅八

中村屋商店

肺病

千葉縣安房國北條町

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付御望の方は郵劵封入にて御照會あれ

川名助次郎

専賣 安全剃刀 特許



最新發明ノ特許品柄ノ先ニ耳トホリアリ自在ニ回轉ス耳鼻穴ノ他ヘ思通ニ剃レ小兒ノ頭ヲ剃ルニハ至極妙陸海軍人海員海外移住者並ニ旅行ニハ是非必要品ナリ

發賣元 東京日本橋本石町四丁目十番地 三劍商店

定價
甲 壹圓五拾錢 替刄付箱納
乙 壹圓 紙函納
丙 七拾五錢

（甲の二）

有効奇藥

試用の上眞僞を知り玉へ

如何なる虫齒劇痛のせば夢の如く根切全治になる不思議の虫齒藥でも輕症は一袋重症は三袋も續けて服用

九仙散 三包一袋入 定價金九錢 送料二錢

トラホームに用ひ驚くべく其外一切の眼病有効の目藥

晴光水 一瓶拾錢 送料二錢

本家 新潟縣刈羽郡石地町 名達藥舖

大取次 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口商店

（郵劵代用は必壹割增の事）

博文館各雜誌
取次廣告

東京京橋區尾張町（電話新橋八五一）
弘報堂

東京神田區千代田町（電話本局一四四）
博報堂

筆戰之良友

秀才文壇

◎紙面大改良

◎名家文壇◎成功史傳◎特別文壇◎普通文◎新體詩◎漢詩◎和歌◎俳句◎青年議會◎學海一瀾等

▲毎月一回一日發行▲正價一冊郵税共金拾壹錢◎六冊全六拾三錢◎十二冊全壹圓二拾錢◎郵券代用必ず一割増之事

◎毎號材料豐富

東京小石川區指ヶ谷町百十三　文光堂發行

◎女學生監督

◎夫洋行中に付七八名を限り自宅に寄宿せしむ
但夜間は英語を教授す

東京小石川區春日町四十三番地　近藤

開業

私事多年東京産科婦人科病院ニ奉職致候處今般辭職左記ノ處ニ開業候間此段御假知中上候

赤坂區新町二ノ十五（鶴ノ湯向）
急用ニハ電新二九五〇

産婆　尾花ヨシ

高等女學校程度學科 初號より取揃 送本の準備有

會長 子爵 岡部長職君

七號まで既刊 八號九月三日發行

講師◎修身、篠田教授◎國語、佐方教授◎地理、伊藤校長◎裁縫、下田學監◎歴史、喜多見舍監◎禮法、小笠原講師◎兒童心理、松木文學士◎女子衛生、鷲山校長◎割烹、赤堀講師其他名家論説會員の文章和歌等趣味津々

一種獨特の 通信教授 各科解釋付

女子學術講義

（目下入會の好時期）

女學世界へ廣告中
割引券
入會金特に拾錢に減ず
但し九月中

（見本郵券卅錢）

我が教育會は女子の爲講習を開き更に講義錄を發行す◎講義中難解の文字には別に註釋を加へ女子の讀易く了解し易き註釋あれば註釋講義錄なり◎入會金廿錢◎會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五拾錢壹年三圓一學期間四圓五拾錢◎入會者に會員證◎卒業者に卒業證書を授く◎卒業期一ヶ年半

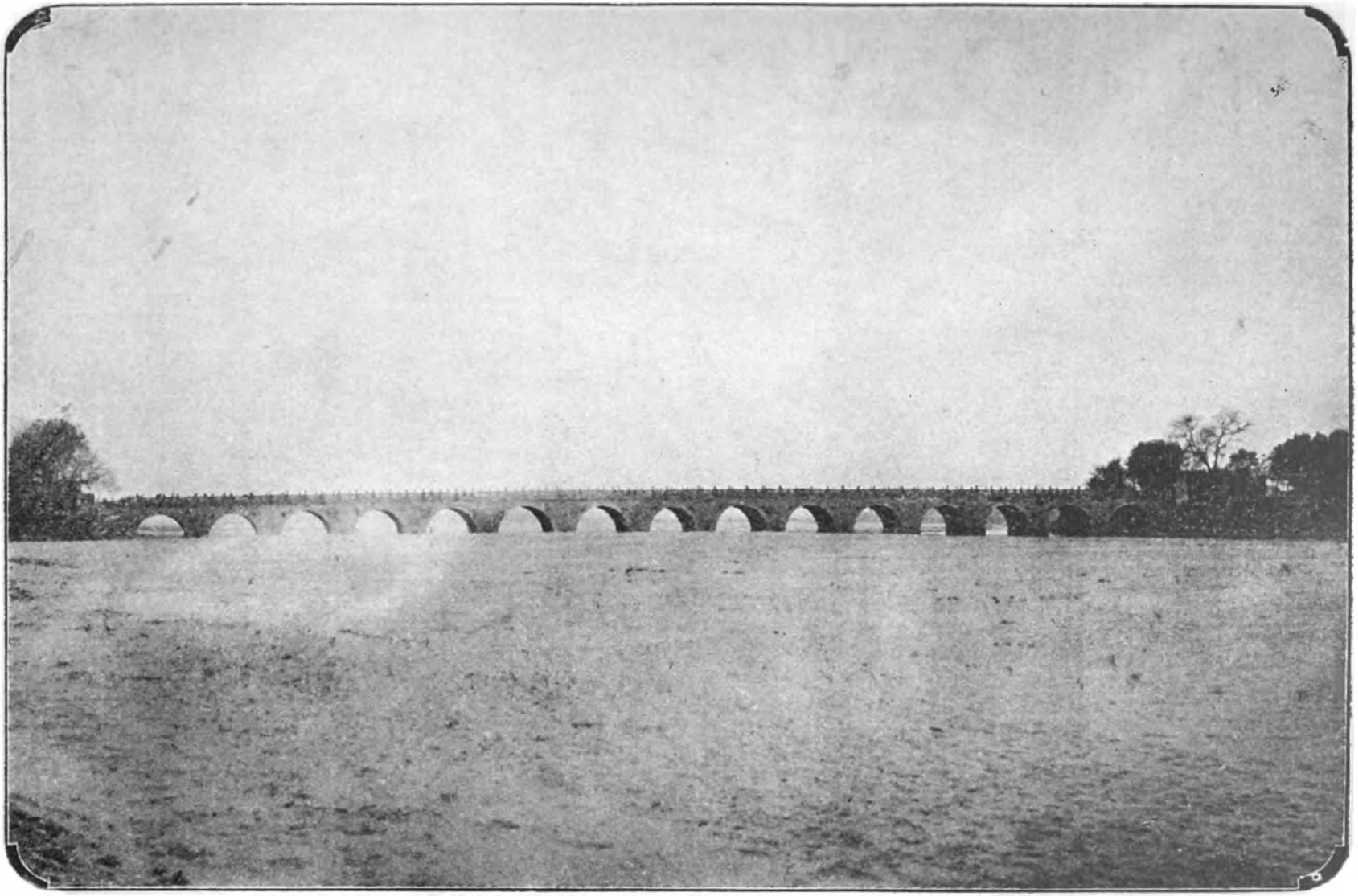
東京神田一橋通町
帝國教育會内
東京府教育會附屬
女子講學會

（甲の三）



（校長鷲山彌生氏）

東京女醫學校生徒幷職員



北清風物（支那北京双臺橋）



紀州新宮河原の景



（陶器神社奉納）

大阪の陶器人形

文學博士三上參次先生序文
文學博士芳賀矢一先生序文
山本九馬亭著

文學士藤岡作太郎先生序文
文學士嶋文次郎先生序文
越路太夫改 竹本攝津大椽
竹本彌太夫賛助

淨瑠璃通解

全部拾貳冊
菊判大和綴
正價 一冊卅五錢六冊二圓全部三圓八十錢郵税一冊六錢

▲第壹編……製本既成發賣

淨曲が德川文學の精華にして當時の世態を反照せしにも係はらず學者其人を惜みて其書を捨て敢て一顧を與へざりしかば永く磨かゝさるの玉となりて空しく今日に至れり近時諸大家漸く其篇を認めこれが研究に從事するを見る著者久しく斯文に研鑽し精勵遂に通解を完ふす此文學は上雲上より下裏長屋に至る迄神祇釋敎戀無常あらゆる社會の狀態を寫せるものなれば用語の範圍頗る廣く隨て解釋の難澁なるもの尠しとせず著者玆に注意し臺詞曲節の調より歷史地理の大に涉り隻語を遺さず正を質し至を求めて斯文の精華を啓發して餘蘊なし蓋し淨曲の寶庫は此得かたきの秘鑰を得て始て世に萬丈の光彩を放つものといふべし

水谷不倒君校訂
●義太夫百番
全壹冊洋裝上製美本
正價壹圓郵税拾貳錢

博文館編輯局校
●淨瑠璃名作集
全壹冊洋裝金文字入
正價六十錢郵税十六錢

(乙の一)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

毛はへ藥

はつぼう等のはげ●まゆげ●口ひげ●はへ際うすき●婦人こまあたりの●近頃流行の禿頭やけど●できもの
はげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む

原名（ベグネス）乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢二種共送料拾四錢●本劑を塗擦すれば皮膚は速に新陳代謝をなし皮膚を改造し毛根を發生せしむるを以て如何なる禿も甲價壹瓶で必毛髮發生す

通經新劑 藥名ピルリシ

血道を全治し古血惡血を一掃す効能極て烈強なるも毫も身體に害なし安心して服用あれ價半劑六十錢壹劑壹圓廿錢貳劑貳圓卌錢特製參圓五十錢

子宮を痛ず如何程長き月經とまりも忽ち流下す依て二三ヶ月位迄のは一劑分も用ゆれば快通流下す又特製を用ゆれば數ヶ月以上のとまりも必ず安全に流下す決て後の患ひなし本劑は特に流經藥として効驗の外月經不通不順より起る子宮

化學的 色白くる藥 新名バンドロン（容液）

本劑は貴女紳士淑女粹客間に大に高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑を塗擦すれば主成分は皮膚のグランド氣吼に藥力に依より吸收せられ皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ色素を漂白すると共に皮膚を改造するが故に如何程色黑きも壹瓶で白色に變化し●にきび●吹出物を去り秀美艶麗の容貌となるを確證す乙價貳圓甲價特製參圓五拾錢送料拾四錢

らい病 新治療藥 ダービン

ダービンは多年の研究と實驗の結果遂にレプラ菌に就て一大成効をなしに本劑の發見に依り不治の癩病にも必全治すべき者と斷定せらる依て弊館率先し初て患者諸君に照會す試に一劑を用いよ必ず大効あり三劑用ゆれば誓て全治確證す問壹劑參圓貳劑五圓參劑七圓郵券參錢送れ説明書進呈す

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

天下の人士に告ぐ

國家は一人の相集まりて成る者にて其人々の無病壯健なるは即ち國家の無病壯健なるなり、無病壯健なる國家にして始めて世界に雄飛すべし、今や文明の聖世に遇ひ衛生の道大に進み、到る處病院國手の備へわらざるはなしと雖も人は病の器なれば何時急病の發するやも圖り難し、此時に當て之れが豫防の良藥なくんば一厘の差は千里の誤り遂に醫師の治療を受くる機を失し貴重の生命を棄るとなきにしもあらず、且つ常に攝生を貴重んじて身体の壯健ならんとを欲する人は此太陽丹を携帶して自他の便に供するは誠に國家の爲めと云はさるを得ざるなり、大方の諸君幸に之れを贅語に附せず陸續御使用わらんとを乞ふ

東京日本橋病院長 醫學士 岡本武次先生新發見藥

懷中新藥 太陽丹

吐瀉　下痢　船車酒の醉　頭痛眩暉　胸腹痛等に著効あり　殊に食後四五粒つゝ用ふる時は時候中り食中り食物滯り等の患なく精神爽快音聲淸淨ならしむ

（價）千百粒入金壹圓〜二百十五粒入廿五錢〜五十粒入金五錢　五百粒入金五十錢〜百五粒入金十錢〜全國郵送料二錢宛

發賣元 東京日本橋區本石町大通り角 電話本局二八六 藥種貿易商 博愛堂本店

取次所は到處の藥店にわり品切の節は直接注文を乞

（乙の二）

帝國百科全書

第九拾九編

理學士　奥村英夫君著

保險通論

（製本既成）

全壹册

上製　正價金五十錢　郵税金十錢

並製　正價金卅五錢　郵税金八錢

本書は第一編に於て保險歴史の大要を略說し以て保險活動の普通本體を說述して保險活動に普通必須なる原素を說明し第三編に於ては保險行爲の中に付き諸般の關係を定むる慣習法發生するを以て國家制定の法令と相待て其活動を規定す著者久しく海外に在ふの要なし希くは保險の方法を各般の事業に應用して蹉躓の患を除かんは一面進步發達を計る必須要件なれば實業家の一顧を要すへきや當然也

第百編

文學士　大町桂月君著

日本文明史

（近日發行）

全壹册

上製　正價金五十錢　郵税金拾錢

並製　正價金卅五錢　郵税金八錢

史眼炬の如く才筆縱横吾國三千年史の人文發達の跡を尋ね來りて之を掌上に指すが如し文學や美術や宗教や道德や工藝や風俗や物質的なると精神的なるとに拘らず我國の文明の由來及び發達はすべて紙表に躍動す普通の政治史以外稀に見るの好著述なり

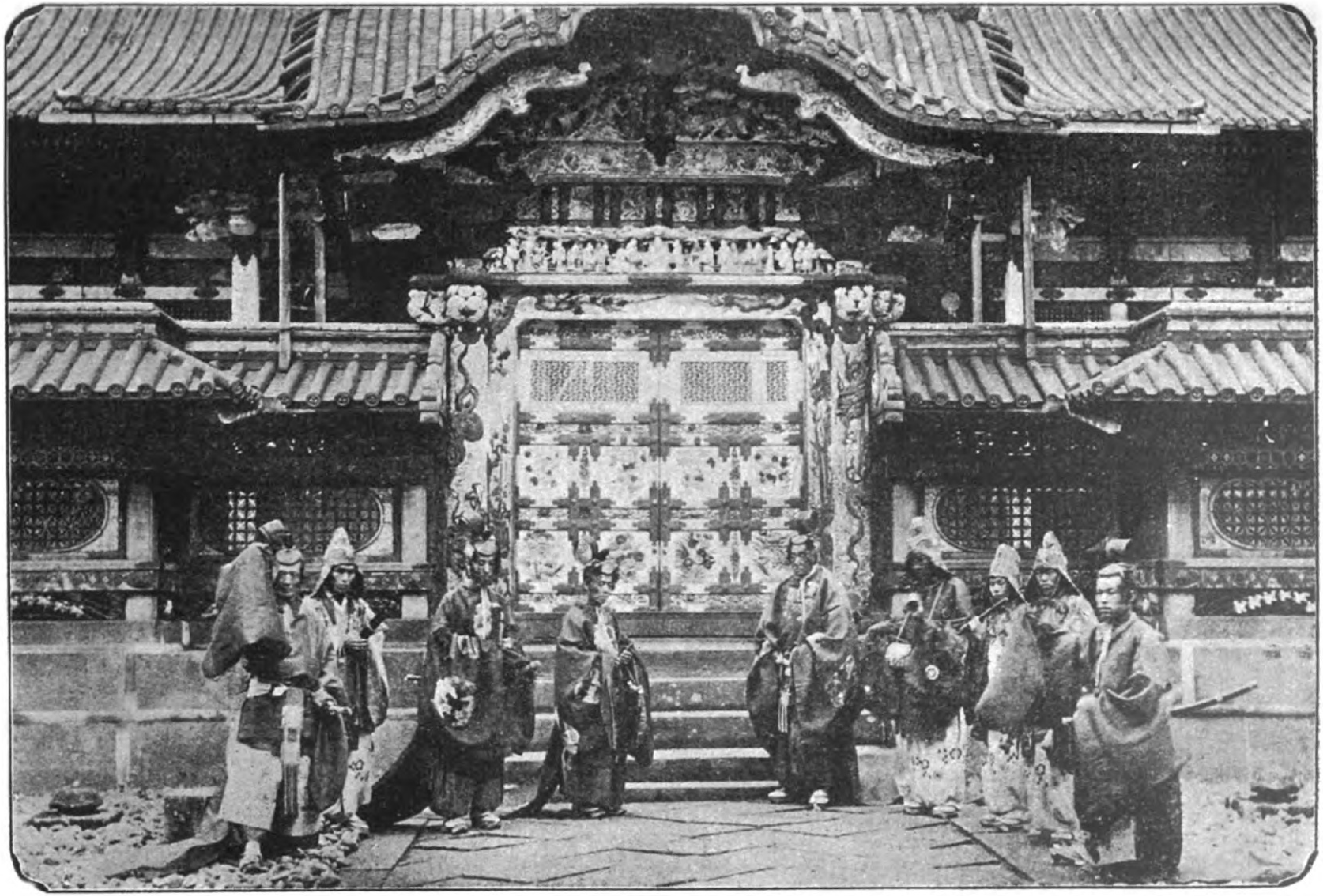
（乙の四）

發兌元　博文館

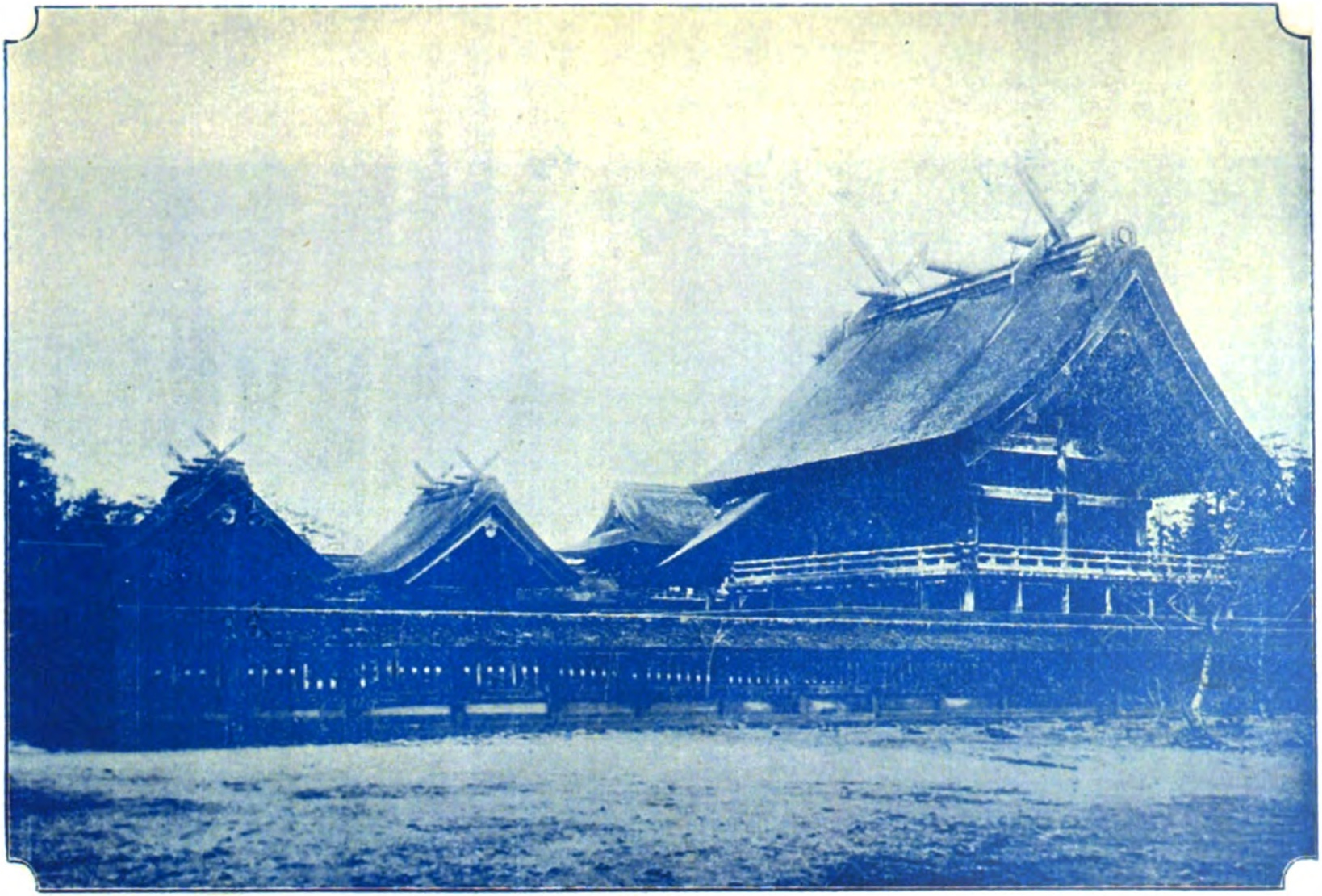


（東京神田駿河臺に在り）

東京露西亞司教ニコライ會堂



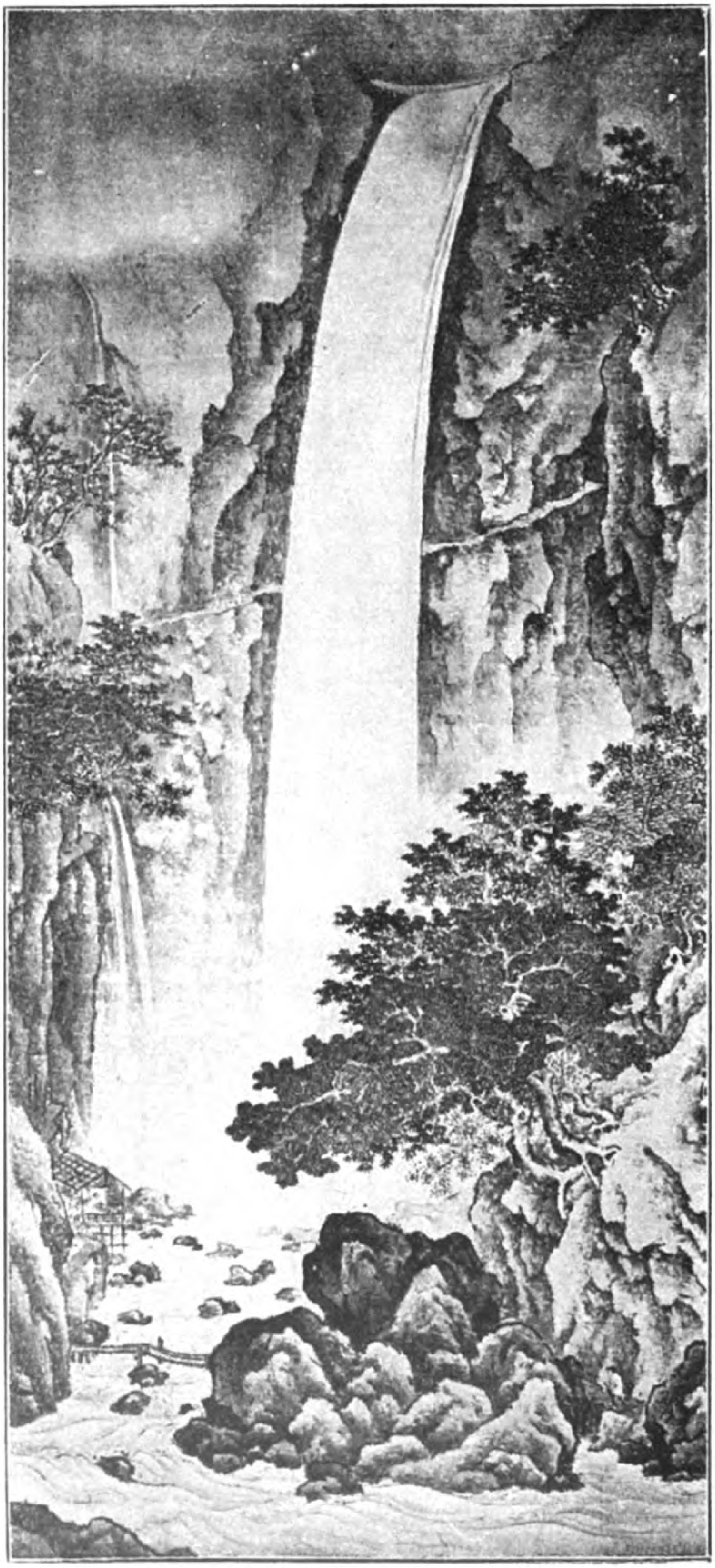
日光神廟の唐門



（社の裏面）

出雲の大社

日光瀑布



佐竹永湖筆

農商務省農務局編纂

大日本農史

全貳冊

洋装紙數千卌四頁
正價金貳圓五拾錢
小包　送料六百匁

上巻——神代史、上世史、中世史
下巻——近世史、農事參考書解題

土地の肥沃氣候の温和最も美穀を産するに適す、古來我國農を以て立て豐葦原瑞穗國の稱あるは宜なり、故に歷朝常に民食を重んじ萬機の政務主として農桑に原つく然れども物換り星移りて史書散佚し今にして之を探討するにあらずんば遂に文獻の徵すべきもの無きに至らん本省此に見る所あり明治十六年四月省中に農史編纂掛を置き曾て品川子爵當時農商務大輔として之を統督し田中芳男氏之が長となり黑川眞賴溝口傳三織田完之の三氏をして編纂に從事せしめ拮据遂に本史を大成せらる上は神代に始まり下現時に及び上下二千五百歳農業上の事跡は細大漏すことなし其參考書の如きは官庫の秘錄に徵し各藩の圖書を探り凡そ八百七十餘部を涉獵す其考據の該博と記事の正確とは固より論なく全編三十五巻二千頁に至り之を熟讀せは其利用厚生の道に於て發明稗益すること蓋し夥多なるべし

横井農學博士
外七學士合著

(農學) 農學大全

全一冊洋装背皮金文字入
正價二圓五十錢小包六百匁

大内農學士著

(中等教育) 農學通論

全一冊洋装背皮金文字入
正價金九十錢郵税十錢

(四の二)

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

●新奇發明 増酒資料(さけふやすもと)

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明 新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油三倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内::右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して偽傳者に欺かるゝこと勿れ::(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授産館

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製八拾錢特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくどし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



●わきが(腋臭症) 根治確證 新發見藥

醫療資藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

(丙の二)

(四の一)

(丙の四)

明治少年節用

學習院長 公爵 近衞篤麿君題字

帝國大學名譽教授 文學博士男爵 加藤弘之君序文

巖谷小波君 武田櫻桃君 木村小舟君 共編

十一月三日天長節發兌

紙數七百頁内外

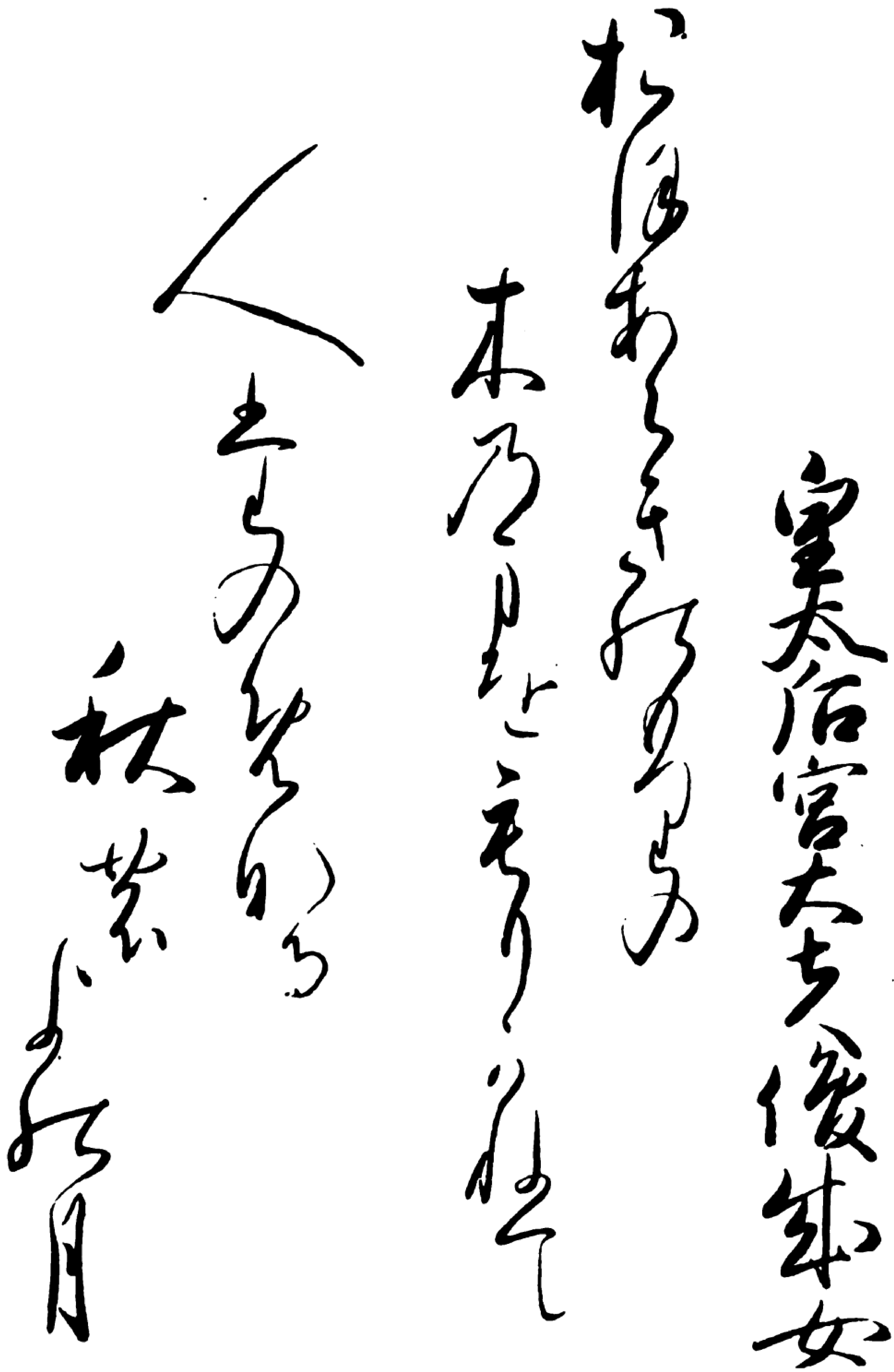
挿繪約數百個

總クロース美本

定價郵税未完

明治少年節用は出でたりこの書の口繪には我が**東宮仝妃兩殿下**をはじめ奉り**兩皇孫殿下**の御尊影をかゝげ**各訂盟國々旗**及び**日本勳章の等級陸海軍服制**等すべて精巧無比なる**彩色石版**を以て印刷したるもの**内容**にいたりては**鼇頭**にお伽噺二十四題、日本歷史、西洋歷史、日本立志談、西洋英雄傳、等を收めまた**本文**は**教育勅語**を始め、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、鑛物、農業、工業、商業、体操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、内外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟、通用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急療法、學校案内、旅行案内、郵便案内、遊學案内、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢洋對照年表、年齡早見表あり**日本少年座右の寶典**とは即ちこの書の謂也

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆

藤原秀能

あしひきの
山路の苔の
露乃上に
ねさめ夜ふかき
月をみるかな

坂正臣先生筆

蜻蛉　初雁　しの

すゞむし　女郎花

新涼　きぬた　梨

蕎麦　柿

阪正臣先生筆

萩花盛のよし日本
は殊にあつさ厳しくおはし
多摩の方に出懸申
すべく明後日ころいでつゞ
御哉御返事中お待ち
いのしこ

藜の花

跡見花蹊女史筆



桐の一葉

跡見花蹊女史筆



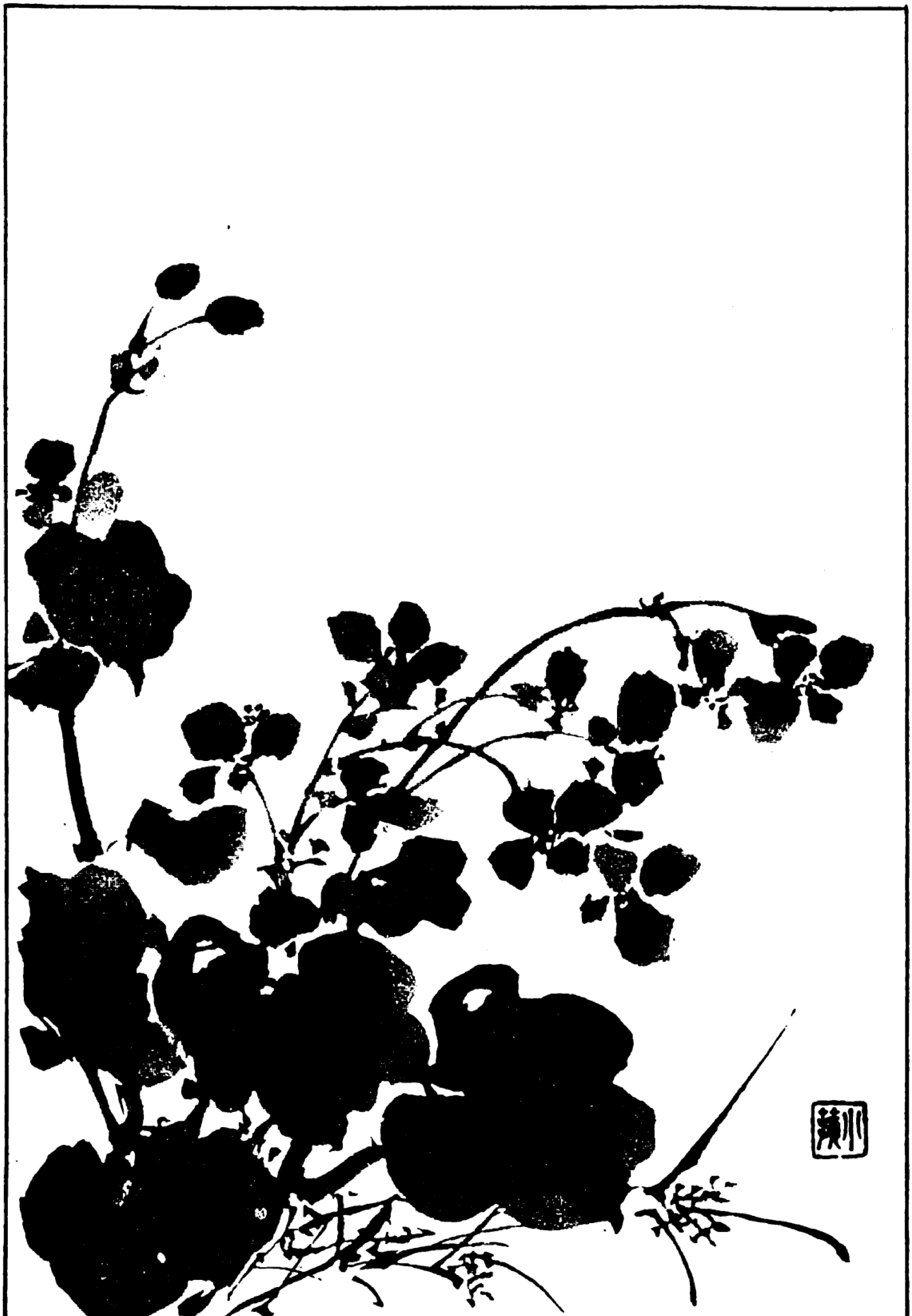
葛の葉と虫



野口小蘋女史筆

秋海棠

野口小蘋女史筆



東京帝國大學
文科大學長 文學博士 井上哲次郎先生述

巽軒講話集

洋裝菊判紙數五百頁
貳編近日發行
正價金八拾錢
郵稅金拾二錢

本書目次

文學博士 井上哲次郎先生述 ● 巽軒講話集（初編） 正價金七十錢 郵稅金十二錢

文學博士 井上圓了先生述 ● 甫水論集（全壹册） 正價金五十錢 郵稅金十錢

文學博士 加藤弘之先生述 ● 天則百話（全壹册） 正價金三十錢 郵稅金六錢

（丁の一）

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

故文學博士 小中村清矩先生校閲
文學博士 萩野由之先生、池邊義象先生、增田于信先生 校訂

日本古代法典

全壹冊

洋裝紙數千〇五十頁
正價壹圓貳拾錢
小包送料六百匁

帝國古代の法典、散逸して今は探ること容易ならず。此編は故文學博士小中村清矩先生主となり、萩野、池邊、增田、の諸先生と共に、博く探り、周く求めて、漸く纂輯し、諸家の秘本に就て校訂せられたるなり。乃ち第一編は律疏殘編、律逸。第二編は法曹至要抄。第三編は貞永式目、同新編追加、第四編は建武式目、仝追加。第五編は禁裏內御法式、公家法式、武家諸法渡、諸士法度、江戶高札、御定書百ヶ條を編次す。凡そ帝國に法律ありて以來、明治以前までの金科玉條は盡く本書に備はる。前年出版したりしも、久しく賣切れて、高需に應すると能はさりしが今回再版成りたれば世に法律研究に志ある人々は、必す一本を備へられんとを請ふ

文學博士 萩野由之先生編

●大日本通史 上卷

全三册洋裝背皮金文字入中下二卷未刊
上卷正價金壹圓五拾錢、小包送料四百匁

本書は萩野博士が該博なる學殖と雄健なる筆力とにより有ゆる史材を撰擇して其正精なるものに由り詳を盡し委を極めて編まれたるものにして筆を神代に起し安德帝の壇浦崩御の條に至る間我國に於ける政教諸般の事項より治亂興廢の事蹟に至る迄一として備はらさるなし實に我國史中其高位にあるといふも誣言にあらす尙中卷下卷の發行亦遠からす諸君是非篋中に此書を欠くべからす

(丁の二)

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

發兌元　東京本町博文館

（丁の四）

節方に秋に入つて、天高く氣清く、燈下最も親しむべき此讀書の好時に際して、中學世界の秋季增刊は出づ、六月以來天下に募りたる懸賞文の披露にして、種目は論文、抒情文、叙事文、小說、新体詩、漢詩、和歌、俳句、英獨文にして、撰評は大町桂月、中內蝶二、嚴谷小波、高島捨太、水野繁太郎、佐々木信綱、岸上質軒等諸氏の手に成り、入撰の作品百數十篇に上れり、全誌二百四十頁內約八十頁を割きて、名流雜俎欄に宛て左の諸編を收む

中學世界
秋季增刊

白雲黄葉

九月廿日發行

名流雜俎

- 瀧の窟……江見水蔭君
- 哀愁……德田秋聲君
- 平安朝の和歌批評家……與謝野鐵幹君
- 落第……石橋思案君
- 桑港の妖怪……松原廿三階堂君
- 中央亞細亞の麒麟兒……國府犀東君

女学世界

第三卷第拾壹號



婦人の品格

如何に錦繍の美を着飾り、如何に臙脂の艶を装ふとも、若しその言語粗野、その擧動陋劣ならば、決して美なる女子と言ふ可からず、何となれば錦繍臙脂の外形美は金錢さへ有れば容易に買ひ得らるべければなり、されど眞成の美は、外形以外に、自ら氣品といふもの、存せる女性に於て初て之を認め得べく、たとひ陶猗の富を積むとも購ひ得べきにあらざるなり、故に沐猴にして冠すといふは男子のみに限らず、外形の美に釣合ふ丈の人格の養成は女子に取つて、尤も必要の事なり。さらば、女子の人格は如何にして之を作り得べきか、予輩は之を獨立の見識、自重の氣概にありとなす。女子にして此の見識と斯の氣概とを養成すれば、氣品は自ら高尚となり、風體は自から優美となり、進退坐作その度を失はず、言語動作その節に合ひ、淑女として耻しからぬ品格を備ふるに至らんなり。

今の世女子教育の標準を定めて、良妻賢母となすと雖、予輩は良妻賢母以前に、先づ女らしき人格を養はんことを主張す、女子に如上の資格さへあらば、良妻賢母の域には言はずとも達し得らるべきものなりと信す。



秋のおとづれ

鎌倉右大臣

白露

秋ははや來にけるものを大かたの野にも山にも露ぞおくなる

秋はしめの歌

すむ人もなき宿なれど荻の葉の露をたづねて秋は來にけり

秋風

夕されは衣手さむしたかまどの尾上の宮の秋の初風

七夕

天の河霧立わたるひこ星のつまむかへ舟はやもこがなん

秋のはしめの月あかゝりし夜

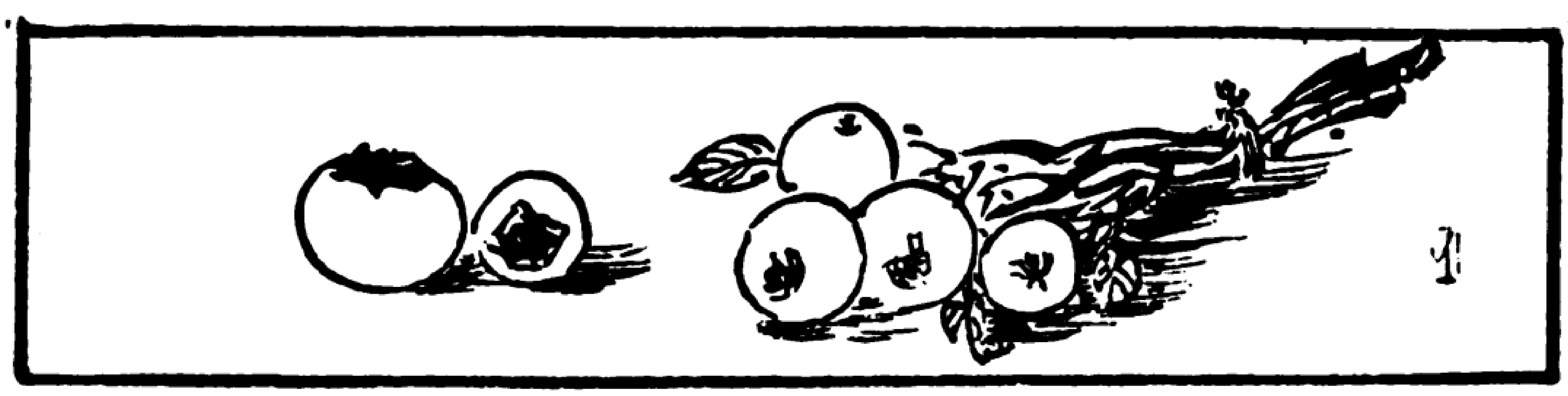
天の原雲なき宵に久方の月さへ渡るかさゝきのはし、

あさかほ

風を待つ草の葉におくつゆよりもあだなるものは朝顔の花

八月十五夜

久方の月のひかりし清ければ秋のなかばを雲にしるかな



勤儉の話

猥りに流行を追ふべからす

棚橋絢子

流行といへば一概に追ふは人情であるけれども其流行の裏面に就て利害得失をよく〳〵考へねばならぬ尤も害の全くなきものは稀であるか其中利多く害少きをとり又害を除きつゝ進行するが肝要と思ふ先衣類でみても一時人の目に立つ程美しきものは年數も經ないに早くいたみ又色合によりては早くさめ易く地合の痛む事あり茶鼠のかゝつたものゝ如きは美麗なれど爲に宜しくない故に大に後悔する事がある年若な人のいかにも昔めいたのも面白くはないが餘り流行を追ふのは不爲なるのみならず其の人品もはかられて奥ゆかしくないものである。

白粉を禁止するとか髪を束髪にして油を付ないといふ事は此頃の流行であるがそうすれば遂に顔も洗はないで宜いといふ事にもならうそれでは娘盛り美を競ふ時期に蓬頭垢面はいか成ものにや何れ首面の掃除行屆かざる上は襟にも垢のつくも厭はぬ様なるは勢ひやむを得ない事である昔の人も首面宜敷掃除すべし顔を洗ふは心を清らかにせんが爲なり髪を櫛づるは心の理らんことを欲するが爲なり白粉をつくるは心の和を思ふ爲なりともいふてあるされば外部を掃除するは内部を掃除する種ともなるのである。

西洋人も白粉を塗ると申す事である日本人も生徒の時分は兎も角も色が黒いから自然のならはしとも成居る事故ゐながら止めるにも及ぶまい又西洋人が髪に油をつけないとて日本人も其まねをする方がよいと思ふ人が多くあるが是も西洋人は帽子を冠るから油か着てはよごれるし帽子に飾りが付て居るから子細はないが日本人は髪それが飾りと成て居るこれも帽子にするとよいといふ人もあるが日本服に帽子とは餘り見よくないからする者がないさすれば矢張髪を飾りとせねばならぬそれに油もつけず蓬頭では實に見ぐるしい且毛がちつて不潔でもある日本でも近頃ねばらぬ油が出來て居る髪に油をつけず帽子の似合ふ樣にするには洋服を着ねばならぬ洋服を着れば家も西洋風でなければならずそうするは容易な事ではないすべて物事は根本立て枝葉に及ぶが順序である先づ家屋が根本である其根本が改まつた上ならば枝葉はすぐに付て廻る其根本立たない内から枝葉のみやかましくいへば勞して功なきのみならず却て弊害が多い樣である。

衛生に付ても西洋は肉類を多分に食する故こんきもつよく身躰も强壯長生もするとて滋養品をたべなければならぬ樣に思ひ誰も〳〵くめんしても肉類を食しやれ玉子やれ牛乳やれ何と我身分をも考へず人參呑でくびく〳〵るといふ樣に是も一時の流行西洋熱にうかされ野菜は纎維があるから不消化とて彼も惡い是も惡いと一と頃は野菜にたべてよいものは殆んとない樣であつたが近來は豆には滋養分が多い人參はよろしい味噌汁もよいとかいふ樣になつたので我々は大に安心して食するが肝心の西洋は左樣なものでないといふ事を此頃弘道會の雜誌に谷干城先生の實見談が載てあつた勤儉といふ題の中に佛蘭西は大變奢侈な國である金が多いからどんとん使ふ歐羅巴の内でも佛蘭西程奢侈な國はないと申しますが能く立入て吟味して見まするときして決してさうでな

い佛蘭西程倹約な國はないそれなら巴里はどうか巴里へ往て見ると實に盛な勢ひでどん〳〵金を撒散らして居るがあれはどうかと云ふて見ると是は皆種々の面白い事をして旅人に金を使はすやうにして自分はどうかと云ふて見ると倹約で誠に金は一文を剰いで使ふと云ふ程倹約するのであります佛蘭西は最も農業の發達して居る所でありますから農家の生活のことに就て一寸例を御話し申上げて見やうと思ふ此佛蘭西は殊に南方巴里からして南の方が農業が大變開けて居るそこ抔へ往て見ますと農家はどう云ふ食事をして居るかといふと黒パンと云ふて極粗末な麥である其黒パンを二週間に一度焼のです十四日目に温かなパンを食ふそれから肉はどうかと云ふて見るとあちらの御祭り日曜に肉を食ふ其肉もこちらの鮮肉即(ビステキ)の如きものを食ふかと云ふと決してそれは食はない矢張り牛の塩をしたやつを食ふですそれも澤山には食はないほんの此位(此時手を以て五寸大の圓形を示さる)に切つたものを皿に一ッ宛食ふそうしてあとは農家でありますから野菜類を食ひますそうしてパンはどうするかと云ふと牛酪は御承知の通り三種になつて居るこちらへ來て居るのは多くは上等の牛酪であります上中下三等になつて居るが農家抔では三等目の極く粗末な牛酪で我々が嗅いで見ると餘程臭くて我々と雖とも食ふに難ずるやうなものでありますそれを食ふ殆んとこちらで味噌を附けて食ふやうにやつて居るそれから一方では鶏を飼ひます鶏も餘計は飼はぬ六七羽飼ひますそれから家鴨を飼ふあちらは多く牛馬耕であるから必ず牛馬を飼ふのであります牛馬を飼ふには水溜りがなくてはならぬから小さな池が拵へてある其池をたゞ措くは無益でありますから即ち夫れへ家鴨が數羽放してあるそれから山羊と云ふ御承知の通りのものを又二三匹飼つて居る即ち一方では麥を植付る傍に鶏家鴨山羊のやうなものを飼ふて居るそれで鶏卵抔は定めて

さういふ鹽梅であるから勝手に食ふでわらうと思ふ所が決して食はないそれは誠に驚く程儉約なもので其飼ふ所の玉子抔は皆集めてそうしてわちらはそういふとに手が廻つて居るから買ひに來る人があると三ッでも四ッでも賣るそうして殆んど副產物で經濟を立てる樣になつて居る鷄なども飼つて居るから食ふかと云ふに決して食はぬ金になるものなれば色々の方面を以て養育して金を作る趣向をするそうして自分はどうかといふて見ると金を拵へる一方でなか〳〵貧乏人の生活と云ふものはもう殆んと秩序的で我々は大に金の出來るまでは決して善いものを食ふべきものでないと殆んど自分信じて居るやうな有樣でわりますかういふ有樣であるから如何に貧家と見える農家でも必ず貯蓄が案外非常にある云々とあつた。

斯の如く富の度の高い國すら勤儉を守つて居るが我國は度が低い然るに衛生とか滋養とかいふて誰しもよき物を好むは人情であるから得手に帆といふ鹽梅むやみに流行を追ふがつまり奢侈に陷る迄にて富國の觀念何れにあるや一向に分らぬ實に歎ずべき事である。

敎育も同樣我國人は兎角流行を追ふ癖があつて何か珍敷說でもあると其利害得失をもよく〳〵考へずひたすら新規に走り其弊のわらはれてから始て改良〳〵とさわぎだす其より始に其裏面の利害得失を察しみて聊たりとも害と見とめたならそれを片ぱしから除きつゝ徐々として進み行たなら却て成功を得ること早いものであると思はれる子供にしても學校敎育は普通一般であるから夫にして置て家庭敎育をほどこすには當時の流行になづます其子の性質其好む所を考へ其適當と思ふ事を目的としたえす其種の事に注意して進ましめたらば大に益あるべし名ある人も幼稚の時より其好む所を貫いてなられたるが多い流行を追ふてなりたるは少いと思ふ終り

に望で今一言申たいは教育の根本たる道德の思想を養成する御話しなど唱歌なり皆激烈なるを悦び士氣を奮發興起せしむる爲なりとて此種の者が甚だ流行するが幼年者はたゞさへ活氣盛なるもの故之が爲にやゝもすればとんでもない考を起し身を誤る者も往々出來る樣に思ふ孔明が靜に非ざれば遠きをいたすなく儉に非ざれば身を修むるなしといはれたが其は實に幼年者に取りて頂門の一針と思はる又小兒を敎ふるには安祥恭敬を先とすべしと古人の謂はれたるが如き頗る味ひありといふべし此意を以て幼年者を導かれたらば思ひ半に過んと思ふによりいさゝか愚意を述てたのであります。

（完）

明月

今宵は正に明月なり、予は狗の如く門を馳出づ。天に雲なし、月半空にあり、大なる都會は朗かなる影に照され、巷の上は眞砂布きたらんが如し。月色追ひて流るゝ人群、旁午して斷ゆることなし、美なるかな明月！、彼は其夜を日中に優りて美ならしめたり、日は餘りに寫實なれど、月は其の淸光をもて總の實際を美化せり。

夜は漸く更けて、月益白く、人漸く罕にして巷益朗かに瞻視街の窮る處まで、洞徹す。年壯き男女の肩を並べて私語しゆくもの、光を避けて柳の陰に耦語するもの、人は今唯これのみ。其後、夜益更けて、月益冴え、夜半に到つて日中の如し。兩側の家人皆寐て、巷の上に予唯一人殘れり。（自然兒）

奥座敷と臺所

家庭は此の世の天國にして人類生息の樂園なればその空氣は常に淸からざるべからず、その趣味は常に高尙ならざるべからず、さりながら、家庭は人間の生活する處ろなれば、俗事の關係甚だ繁く。啻に繁きのみならず、家庭は即ち人間萬事俗事の蝟集する處ろにして、日々の金錢の出入、買物の高下より臺所の、煮炊、米鹽、薪炭、酒屋、八百屋の出入、物の價が高いの廉いの、或は收入が多いとか尠いとか又は儉約が出來るとか出來ないとか、貧乏はつらいとか、金錢は貴といとか、その外種々雜多な俗小俗情を心に思ひ、口にも言ひして始めてその家を經營し行くものなれば、その家庭に向つて趣味の高尙、氣風の淸純なるを求むるは甚だ困難の事情なきにあらず。本來卑俗を以て成り立つ處の家庭に向つて、高尙、優美、偉大なる觀念と趣味とを以てその家を經紀せよとす丶むるは聊か無理なる注文ならん。されど。今日の世の中にて卑俗と言ひ、高尙と言ふも皆その人の心の持方如何にありて、その事柄の如何には關せざるものなり。譬へば金錢は多くの人より鄙俗の物と見做され居るものなれど、その金錢を以て學校に入り、學問智識を求め或は書籍を購ふて智見を廣むるの料となせば、金錢は決して卑俗のものにはあらず、若し之に反して其の金錢を以て、芝居を見、うなぎ飯を食ひ、料理店に登つて、酒を飮むの料となさば、元來貴とき金錢も極めて卑俗なるものとなり畢らん。さらば金錢は元來高尙のものにもあらねば、又卑俗のものにもあらず、之をして高尙のものたらしめ又卑俗のものたらしむるは皆その使ふ人の心掛如何にあつて存するものなれば、これを貪りたればとてその心掛だに高尙ならば敢て咎むべきにあらず、家を持つの覺悟も又是れに同じ、米を買ひ、薪を買ひ八百屋肴屋と日々交涉したればとて、心だに高尙ならばその事柄は決して卑俗にはあらざるなり。一世の傑人西鄕隆盛なればとて日々飯を食はずに生きてゐた譯でもなく、釋迦如來、孔夫子の如き大聖人とて空氣のみ

にて生きてゐた譯でもなければ、人間が世帯を持つは決して卑俗の事にあらざるなり。されどその世帯を持つに就ての心掛はいつも高尚にありたきものなり。

然るに今の世の中は金錢の勢力を見る事餘りに過大にして、又世帯を持つことを餘りに卑俗の事となすものの如し。遺憾千萬の次第といふべし。是を以て廣大なる門戸を構へ、美衣、美食し、手車にて威勢よく往來を駈け廻るを以て現代生活の理想となし、裏屋に住ひ、粗衣粗食してその日を送る事を終生の恥辱と心得、人間悲慘の極と見做すもの丶如し、一應は尤もの見解なるべしと雖もこの見解は人に理想といふもの丶なき處ろより起る見解にして、甚だ間違ふたる見解といふべし。成程人の家は立派にして我が家は古く破れたり、如何にも情なしとおもふべし、他人の衣服は美麗にして我が衣服は粗末なり。人間の弱點として必らず、悲しくおもふべしと雖も、これその人に理想のなきより生ずる無情、悲慘にして、敢て絶對の無情、絶對の悲慘にはあらざるなり。一點心に高尚の理想あらば、我が家の門戸鄙しければとて決して悲しみの生ずる所以はなき筈なり。人は人なり我れは我れたるべし、何ぞ濫りに他人を羨やむ事かあらん。

成程生活の安樂を求むるには金錢なかるべからず、社會に活動するにも金錢なかるべからず是に於てか金錢は大切なり、金は貴ときものなり、故に人は貯蓄を心掛ざるべからず、家に於ては節儉を務ざるべからず、子供を敎ゆるにも金の有難味を以てし、良人を戒しむるにも金の勢力を以てせざるべからず、さればとて一も金、二も金といふ有様にてはその家の空氣は如何なるべきや、斯る家庭に朝夕する良人の心卑吝となる恐れはなきか、良人はまだしも大切なる小兒の心は如何なるべきや。我が家は他の家よりも貧乏なり、その貧乏の原因は金のなきに在りといふの論法にて小供を導きたらば如何、無心の小兒之を何と感ずべき、縱しやその如き論法を以て導かずとも、母親の心がそこにあらば、小兒は直ちに母親の感化を受けて不知不識の間にその心を生ずるに至らん。誠に以て無情千萬の次第

といふべし。
されば世の母親たるものは、務めてその志を高尙にし、鄙俗なる世帶を爲すに高くして清き心掛を持つべきものなり。生活の困難なる事や、貧の辛さは餘り口外すべからず、すべて世帶の難義は一身に引受けて、金錢の事柄は良人にも子供にも又他の家人にも之れを聞かしめざるは勿論、飯を焚くにも肴を買ふにも、こつそりとして人の知らぬ間に於てし、貯金帳とか、小遣帳とかいふやうな醜陋なる物をそこらに拋げ散らす事なく、簞笥や葛籠をガタピシさせないやうにし、家の内をキチンと取締り、良人には善き書物など當がふてその志を養はせ、子供には雄壯活潑な話をして聞かせて其の性情の高く大なる事をつとむべし是れ實に良妻賢母たるものゝ深く心に思ふべき事なり。倩ら察するに今日の家庭、夫婦家族團欒の席上に於て動もすれば金錢の談をなし、世上の富貴貧賤、人の身の榮枯窮達を批評して、衣服飲食の事柄を喋々しく談ずる事多し、如何にも俗惡千萬の事柄にして、大人君子の耳に潔よしとせざるのみならず、少しく心あるものに聞かせても眉をひそめて苦笑せん、斯る卑俗の空氣に朝夕し、斯る劣等なる趣味の裡に育ちたる子女のいかでかよく高尙偉大の人物たるを得んや。家庭は一個の小天地なり、尊ぶへし重んずべし返すがへすも家庭の空氣は清純にありたきものなり返すがへすも家庭の趣味は優美高尙にありたきものなり。

（記者）

寒蟬

今や蜩の聲漸く稀にして、寒蟬の聲漸く多し。寒蟬の聲は秋と共に始れり、その初唯森ごとに啼きぬ、今は則樹ごとに啼けり。寒蟬!、爾はしも誰が爲に其「つく〱うし」を唱へる乎、爾自ら秋の思に堪へざるものありて、然る乎、抑も又老んとして悲み傷める大なる自然が、爾が口を假つて自ら啼くなきを得ん哉。信なる自然の詩人は爾なり、爾が連りに切りなる聲は、之を聽けるものをして、爲に唱へる自然に對して、涙も識らざる同情を有たしむ。（自然兒）

社交

貴婦人の嗜好

毛利公爵母堂

中村鈴子

公爵母堂は舊長州豐浦藩主毛利元周君の長女にして今の子爵毛利元敏君の叔母君に當る天保十四年三月を以て生れ文久元年を以て舊長州藩主毛利元德公に嫁し、慶應元年を以て今の元昭公を生む母堂天性仁慈にして夙に各種の婦人會に關係し貴婦人社會の長者として普く人の知る處なり

品川停車場の少し西の北側に、木立の奥深く御定紋の輝いた大名式の門を認めた時は、自づと襟を正しました。門番の翁に母堂の玄關を尋ねて、老松を後に若檜の列んだダラ〳〵坂を上り、高い黒塗の机を据ゑられた玄關から左手の應接間に通り、暫く松風の聲を聽いて居りますと、御家來が出で來りて私を導き長廊下を越て母堂の應接室へ參りました。母堂は小さい束髮に結ばれ、銀鼠の風通の單衣に焦茶繻珍の單帯を締められ、茶の平打帯留の金具は燦として光り、正しく合されし白絽の襦袢の襟は、透き通るやうな白い御顔に調和好く、ユッタリと椅子に掛けて居られましたが、ツと立たれて一應の御挨拶あり、先づ記者の產地を聞かれなど爲さいまして――、

▲御留守居

當主は縣地へ參つて居て、此方は私一人で御座いますから、毎日何や彼やで日を暮しまして、別にこれを致して樂むと申す程の事も御座いません。……イヱ用事は始終縣地の方へ問ひ合せまして取計らひますで御座いますから心配は御座いません、唯だチョット急な事だけは相談に預ります位で……。

▲旅行

御承知の通り此頃は方々の會へは出掛けますが、旅行は一躰不精の方で御座います。……尤も一位樣御存生中は能く御伴を致しました。昨年は一位樣の御年回で墓參の爲め縣地へ出向きました。ハイ鎌倉の別莊へは

寒暑に參つて、あの近邊位は廻ります。

▲舟

舟は如何も可けません、ズット以前航海の節、大層荒れて汽船の片輪が毀れた事が御坐いますので、懲りましたので御坐います、鎌倉で一位様が漁に御出掛の時は私は御供を斷り、何時も御留守居ばかり致して居りました、此處（品川）の汐干なぞに參つたとは御坐いません、併し海を眺めるのは大好で、歌の題なぞには面白いもので御坐います。



二十年前の毛利公爵の母堂

▲和歌

私などの歌は昔風で、唯今の御方々に御目に懸けるのは、お耻しう御坐います。……一位様が大層お凝り遊ばして、醫者も御病氣に障ると申して御止め申した位でしたから、私なぞ御相手に拙な歌を拵へまして直して戴いたり致しますと、矢張り精神を御遣ひになる事と存じまして、暫く止めて居りましたから、サッパリ出

來ません。近頃據ろ無く頼まれましても、ホンの自分が景色や花を見たりして感じたことを折に觸れて詠みますだけで、今度斯ういふ題で一ツと申されましても却々六かしいので御坐います。與風會などへ出ますと登になると存じますが、年を取ると漸々根氣が無くなりましてツイ怠つて居ります。

▲新聞小説

新聞は種々事務所の方からも參りまして、殘らず讀みも致しませんが、必要の出來事だけをアチコチ見まして後は女中達に讀ませて聽きます。以前私共は能く小説を見たもので御坐いますよ。一つは下情を知る爲で御坐いますチ。源氏なぞは只優美一方ですが、京傳三馬の作や、一九の膝栗毛、馬琴の八犬傳と云ふやうな種類の本は世間の有樣が善く寫して御坐いますから、昔は彼樣な物でも見なければ、世間の事情がサツパリ判りませんでしたチエ。近頃の手輕い小説も讀で見る方が宜しいかと思ひます。

▲演劇

芝居も折々舊臣達から誘はれるとも御坐いましたが、先ア滅多には參りません。狂言を見るのは面白う御坐いますが、狹い場所で混雜致すのが嫌ひで、成るべくは此方へ聘んで見たなら嘸宜しからうなんぞ申して好く笑ひます。壯士芝居は先達て初めて見ました。あれは江戸城明渡で毛利の事も筋に入つて居りますから、如何な事を致すかと存じて行つて見ました。左樣で御坐いますチエ、狂言と共に聽いて面白い鳴物が無いので、物足りない樣でしたが、併し壯士にしては却々好く致しますチエ。手踊も昔は隨分見ました、定めし御咄に御聞きでしやうが、祭禮の山車や踊屋臺の御上覽が濟んで歸る時、舊屋敷（櫻田の御屋敷）の御物見へ出まして見物致しましたが、其時に此方から所望して踊らせたので御坐います。其他の時は御狂言師を呼び寄せました。

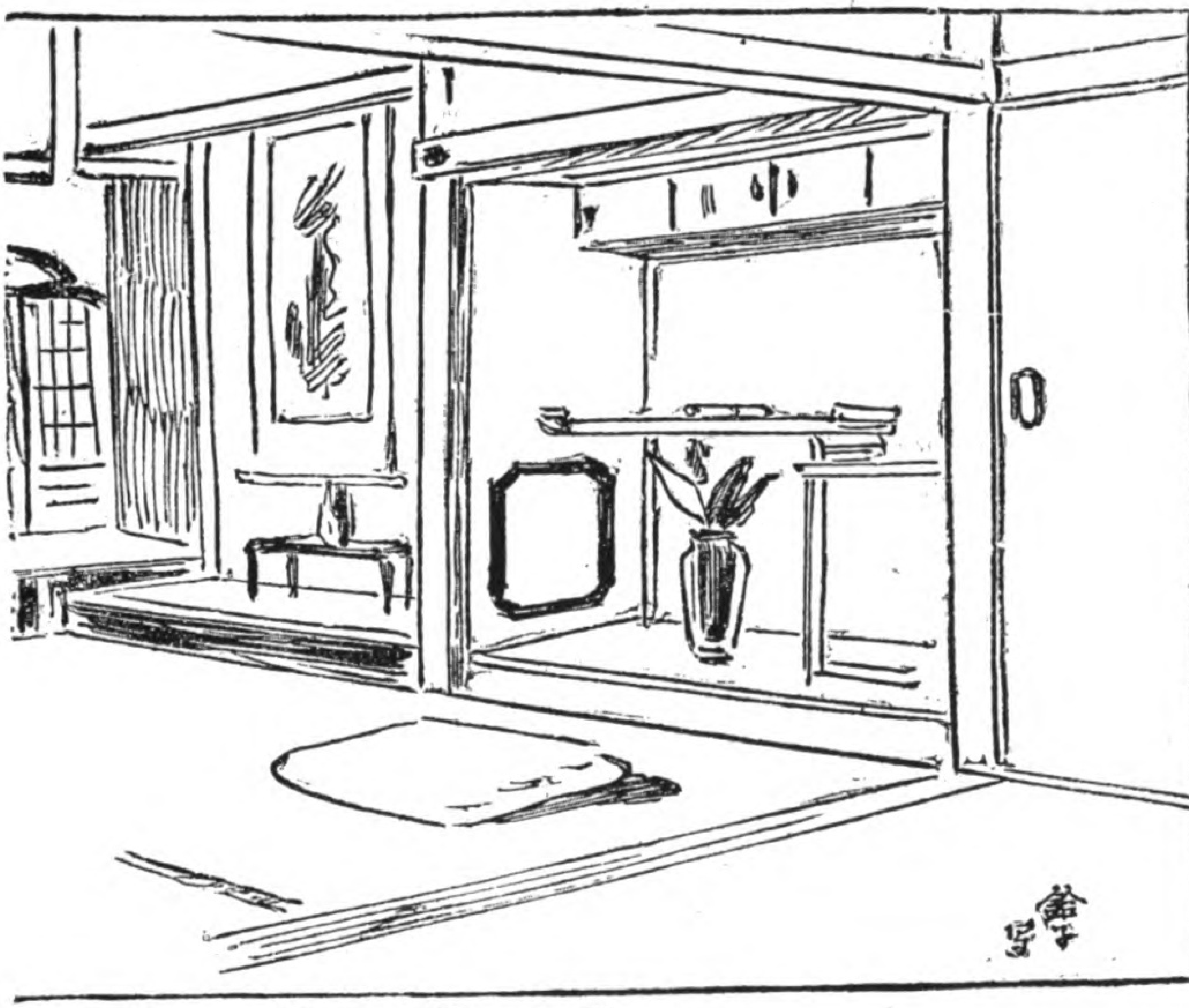
▲音樂

私共には一向判りませんが、西洋の音樂も却々結搆なもので御坐いますチエ。琴は當節餘り致しません、

唯だ側の者に彈かせて樂みます位で。……祝日や誕生日には二本榎の孫達（男爵毛利五郎氏の御子達）も呼び寄せ女中共に彈かせて樂ので御坐います。此方でも以前は折々長唄の師匠や常盤津の太夫を呼びまして、義太夫は一段が却々長う御坐いますし、餘り氣がつまりまして、却て長唄や常盤津の方が氣が晴れるやうで御坐います。

▲歌留多、萬歲、猿曳、

お正月には女中を大勢集めて、歌留多の戰爭を見物致します。彼の市中では唯今でも萬歳は參りますか知らん……、それではお猿も參ります子。ハイ此方あたりへ參つたのはお猿萬歳で、お猿が裝束を着て御幣を持つて踊りました。



毛利家の

▲圍碁

碁で御坐いますか、深いとは存じませんが、好で御坐いますから、見て居ましても、石の活死位は判ります。

▲花見

花は好で、牡丹、薔薇、菊、秋草、其折々の花が庭に咲きますと皆樣を御呼び申すのが樂みで御坐いますので、別段に花見

と申して遠くへ出掛けますのは好みません。昔の御花見で御坐いますか、上野なぞでは幕を張つて其中で花見を致し、周圍は山の御目付に頼んで酔ふた者なぞの狼藉を警護して貰ひました。御茶屋へは勿論參られぬので、御辨當を幕の中で開くので御坐いました、尤も十二社の上の茶店へは休んだ上も御坐いました。

▲淺草の昔と今

よく昔の事を申しますが、淺草へ參詣の時も、途中は鋲打の駕籠で少しも外は見えませんし、境内を歩くには女中が大勢で日傘を翳して全然躰を隱して了ひますから、何があるのかサッパリ判りません。よく錦繪に



御座敷

御坐いましやう、彼の通りです。唯今では自分で蝙蝠傘を持つて歩きますから、店に並んで居る品も見えて慰みになります。昨年も當主の上京の時、一緒に花屋敷の繰り人形を見に參りました。パノラマは此頃日清戰爭のを見ました、面白い物では御坐いますが、入る道が狹くつてゴタ〳〵して居て厭で御坐いました。

▲服裝

柄の嗜好と申して、年寄ですから別に……、洋服は宮中へ上る時と會へ出す時、又は寫眞を撮る時なぞに着けますが、種々幾通りも拵へません。和服で出ますに

は、昔の癖が失せないので、如何な粗末な品でも紋が付かないと氣が濟まぬ樣です、それで意氣な着物を着る氣になりません。緋の袴は惜しい物と思ひますが、これも時世で御坐いますからネエ。

▲髮飾

「片はづし」で御坐いますか、あれは年を取つた女中の頭で、私共は「さげ下地」に結つて居りました。若い女中は島田から「縱吹し」、それから「横吹し」、「片はづし」と云ふ順に變ります。唯今の女中達は御互に結ひ合つたり、又商賣人を呼んで致させたり爲ますが、私のは女中が結ひます、髮なぞモウ獨りで如何するとも出來ません。

▲食事

折々洋食をいたゞきますが、ドチラかと申せば、日本料理の方が宜しう御坐います。牛乳も醫者に申されまして、ヤツト飲み習ひました。

▲手藝

針仕事は唯今お話し申すとお耻しい次第ですが、纏つた物を縫ふとは耻のやうになつて居ましたので、ホンの慰みに桔梗袋など縫つたり致す位でした、誠に惡い習慣で御坐いましたネエ。ハイ御細工物は「箸差」や「紙挾」など種々拵へました。

▲武術

大名では馬と長刀だけを女子に敎えたもので御坐います。長刀は極子供の時分人が使つて居るのを見て、よく其眞似をして揮り廻して見ましたが、別に稽古は致しません。馬は少しも乘りません、動物は嫌ですから……

▲飼養動物

一躰動物を飼ふのは好みません、自由を壓へ付けて憫然でなりませんから……、但庭に他から貰ひました鶴が二羽居りますが、隨分古い物です、後で御覽遊ばせ。

▲茶道と活花

丁度私が修業盛りは世の中が騷々しい時分でしたから、是れぞと云つて仕込まれた藝も御坐いません。手習の盛りも唯だゴタ〳〵と過して了ひました、御茶や

活花も矢張稽古が足りません。此方へ參りましてから
も、御維新の頃、一位様は毎日會議に御出掛に爲り、御歸りも遲う御坐いますし、可なり心配が御坐いまして、夜分もロク／＼臥らない事が御坐いました。

▲山口言葉

十九の時に山口へ參つて丁度十一年居りました、參りたては山口の言葉を家來に通辯させて、稽古致したので御坐います。彼方の言葉が判りませんと、下々の事も解りませんし、又家來を使ふとも出來ませんから……。如何も初めの内は少しも判りませんで困りました、東京で「子エ」と申すとを「ナア」と申しますよ。東京へ歸りました當坐は、山口の言葉を使つて居りましたが、漸々又可笑しくなつて元に還つて仕舞ひました。

▲母堂の御召使

母堂は御話の間も折々打笑まれて居られましたが、階級の隔てを置かれず、如何にも鷹揚で氣品の高い上に、善く世態人情に通せらるゝ事が判りました。

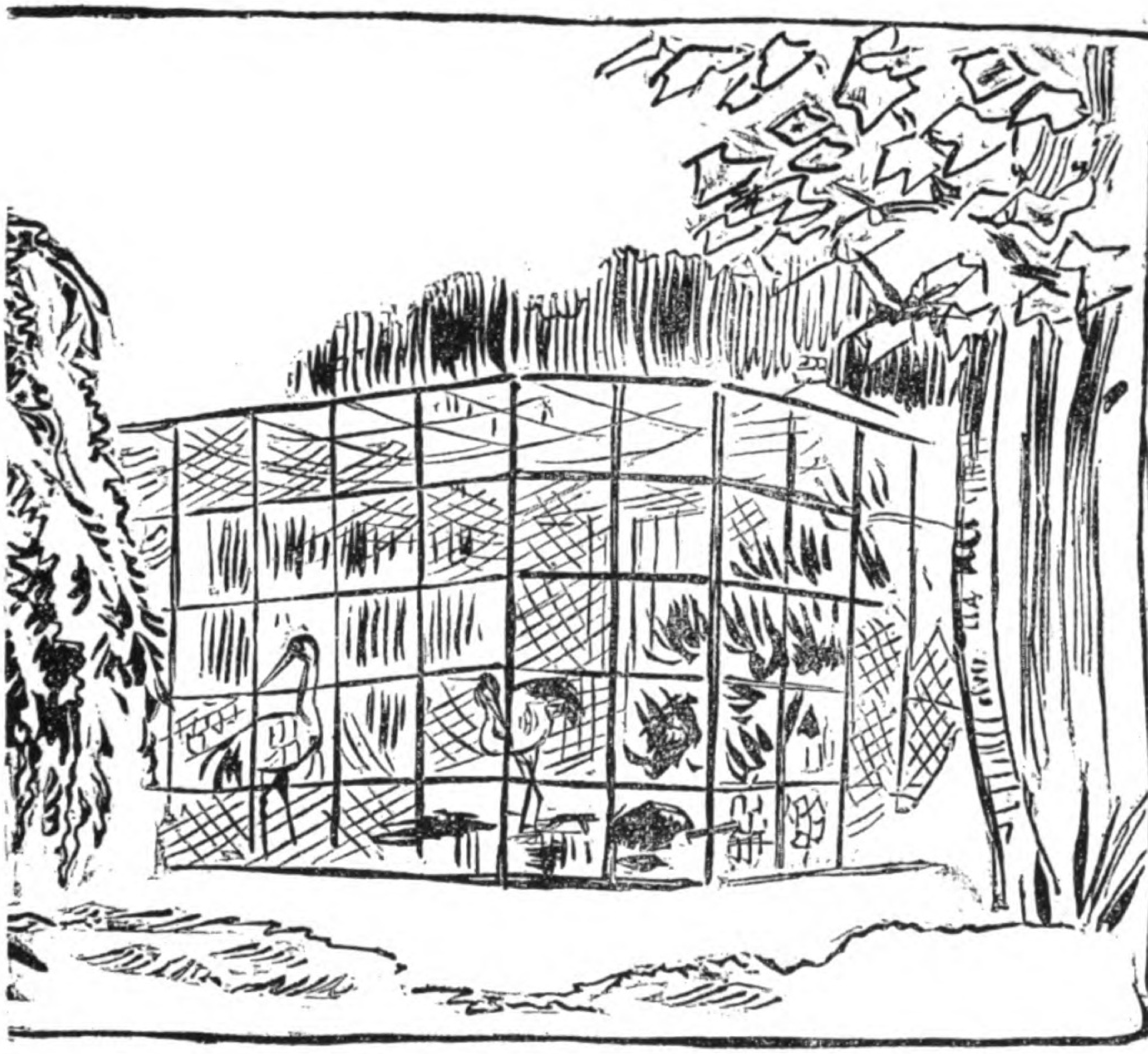
記者が元昭公御居間拜見を願ふと、〇〇、純然たる大名的裝置で、迚も十幾分間の拙い寫生や文章を習はぬ筆に盡すとは出來ません。母堂は薄緣を敷詰た幅一間の椽側の障子に倚られ、記者の寫生を御覽かた〳〵記者の伺上げた所ろを答へられました。

私の召使の女中は若いのや、年取りましたのや皆で七人ほと居ります。イエ始終側には置きません、用事の時に呼びます。彼方の座敷で御坐いますか、當主が留守で滅多に開けませんので汚う御坐いますが、唯今誰ぞに御案内致させましやう。

▲御　庭

呼鈴を押して御家來を召され案内を御命じになつて、其間に寫眞を探して置くと仰しやいました。記者は御家來に導かれて芝生の御庭先より柴折戶を出ましたが、枝垂櫻と青桐の間に在る雲形の池へ鐵網

を被せられ御話の丹頂鶴二羽が居りました、好く鳴くさうで、餌の鰌は池へ入れて遣らるゝとの事です。これより御家來は一部〳〵に就て懇切に說明の勞を執られましたが、軈て芝生に傍て牡丹畑を一周りすると、北の方に土產神の八幡宮が鎭座されてあり、兩側には松、杉、榎などの喬木が亭々と雲を凌ぎ、枝と枝と交り葉と葉と摩れ合つて品川沖から來る風に稷々と鳴るに相和して朝晩に亂蟬の聲も奏樂の心地が致しました。樹の下には人の身長ほどもある躑躅が列を成して、歩いても〳〵容易に盡きず、滿開の時は紅白錯綜して錦の樣であると承りました。途漸く盡きる所の左に萩幾叢あり、右に毛利家代々の畫像堂と靈祠と祭具庫が御坐いました、一昨日（七月十六日）は御祖先元就公の祭典日で園遊會を催されたとの御事。是れよりダラ〳〵低くなつた處が外廓の



御庭の鶴

生垣で、此處には陶製腰掛が幾個も配置されてあり、御臺場あたりの眞帆片帆から房總の山まで一目の中に集り、「天開二畫圖一即江山」とか申す句も思ひ出されます。北へ折て松の梢に避雷針が結び付けあるを見ましたが、日本で避雷柱の嚆矢であると承りました。御出入の橐駝師は重に麻布の仙華園主人、呉服は白木屋に御用を仰せ付けらるゝ事など承りつゝ、復び芝生に上つた時、お長屋の方と見えて乳母車を押しつゝ樹間を歩いて居ました。

▲元昭公御住居

御椽の段を上つて、西洋室を改築された元昭公御住居を拝見致しましたが、御書院、御納戸、御化粧部屋、御湯殿まで數知れぬ室毎〳〵をサッサと通る時、數年來觀覧を希望した舊大名方の室内裝置は眼前に在る嬉しさに鈍い眼は疲れ狹い腦は餘裕が無くなりました。夢心地で拝見し了つて、以前の應接室へ戻り、御寫眞を拝借して御暇申上げましたが、「馬繋」ぞの後の杉から蜩の聲が聞えました。



岡部子爵夫人

夫人坻子は加賀宰相贈從二位前田慶寧侯の第五女にして夫人の姉君は實に有栖川宮妃慰子殿下なり夫人の誕生は慶應三年五月にして舊岸和田藩主岡部長職子に嫁したるは明治二十五年なり其眞率にして挾む所なく階級を忘れて善く交るは交際社會の歎美する所

春は麥畑の雲雀の上下する處、西南の空遥かに富士の殘雪を眺め得らるゝとは、高田千登世町なる岡部子爵邸で御坐います。高田の砂利場を上り切つて、雜司ケ谷街道へ出ると直に同邸ですが、三人の植木屋が玄關脇の「かなめもち」の刈込をして居りました。案内を乞ふて、玻璃障子を開け放して凊々とした應接間へ通されましたが、御庭先の赤松や短葉松から大久保、中野の森まで、濃く淡く畫かれた樣な自然は、快活なパ

ノラマを觀て居る心地が致しました、床は高麗縁の薄べりを一ぱいに敷詰め、障子の內側に萠黃色の縁を取つて總の下つてる公卿住居式の御簾を幾つも捲き上、眞鍮の環で止めてありました。椽と向ひ合つた出入口にも、矢張これと同樣の御簾を垂れた大きい架燈口があつて、其下に長椅子を据ゑ、次に蒔繪の書棚を置かれ、畫卷、國華など許多積み重ね、ピアノ、洋風書棚など順次。和洋折衷的に飾付けられたのが、如何にも手際に見受けられました。忽ち見る右手の芝山の陰から、白縮の浴衣に赤メレンス鹿子のシゴキを結び下げ麥藁帽を被られた八歲と六歲位の令孃が胡蝶を追ひつつ小走りに上り來られしを。其後から女中も現はれて、何事か笑ひ興じて、軈て一同奧の御部屋へ入られた樣でした。此時丁度出で來られました夫人は、新月の眉、薔薇の唇、水際の立つた艶々しい生際、本當に恍惚するやうな御容姿、濡羽色の髪を無雜作に結ばれた束髪に金製の小さい菊釵を插され、細かい堅縞の白上布に、小豆色一本獨鈷の絽と支那黑緞子の打合帶を結ばれ、薄い藍鼠に白く秋草を拔いた繻絆の襟と白縮緬に墨畵の紅葉を染め出した帶揚が一層瀟洒に見上られ、素足に鼠羅紗の上靴を穿いて椅子に掛けられました。

偖御話は――、

▲育兒

小さい子供が澤山で御坐いますから、明けても暮れても子供の世話ばかりで、何を致して樂む暇も御坐いません、で自然嗜好と云ふものも無くなりました、私の持ちました子供は、男子が四人、女子が四人、總領が十一歲 一番下は今年生れたばかりで御坐います。成るだけ自分で育てゝ見たいと思ひまして、乳母は置かずに私の乳で育てます。尤も私の乳は細う御坐いますから、生れると直ぐ牛乳を少しづゝ飲み習はせて、乳が出なくなると牛乳ばかりに致します。小さいのを手掛けますうちは滅多に餘所へも出掛けられませんが、據ろ無く出ます時には、殘らず置いて參るとに定めて御坐いまして、子供も決して後を追ひません。みんなズラリと玄關に並んで、行つていらつしやいと申

して居ります。

▲子供の衛生

同じ樣に機嫌よく遊んで居るやうでも、毎日氣を附けなければならぬのは、汚いお話しですが便通で御坐いますよ、これさへ毎日定つてゐれば安心ですが、二日も滞つたら捨て丶置かれません。大勢の中には先天によつて種々な持病が御坐いまして、十一歳の男子は頭の髪が延びると直に咽喉病を起しますが、一月に二度づ丶刈り込んで置きますれば、無病なので御坐います。



岡部子爵夫人

次は又腸胃病が癖ですから、秘結すると灌腸を致して遣るのです。六歳より上の子供には、毎朝水浴を怠らず致させますが、其爲か風を引かないのは不思議で御坐いますよ。……ハイ水浴に夏から慣しまして……。

▲醫者

チヨツトした事に醫者を呼ぶのは厄介で御坐いますし、醫者も此方で

聞く通りな返辭をして、何だか張合が無い樣ですから、大抵出來るだけの事は致して遣ります。イエ巧者と申す次第では御坐いませんが、始終手掛けて居ますと身體の樣子が判るものです。尤も怪我なぞは仕方がありません、先頃女の子が腕の骨を違へました時には、取敢へず綳帶だけ致して直に佐藤(三吉)さんに願ひましたら、瞬間にスッカリ元どほりに御治しなさいました。各自の子供に人は附けて御坐いましても、夜分など時々氣を附けませんと寢冷を致しますし、隨分世話な事で御坐います。

▲食物

時々は子供に西洋料理を食べさせますが、一體は粗食に致して居ります。主人も子供には粗食の方が體の爲に善いと申します。男の子は兵隊にも出なければならず、女の方は成長の後、緣あつて如何な家へ片付くないとも申されませんから、却々贅澤な癖は附けられません。

▲衣服

祝ひには據ろ無く拵へて着せますが、平常は一切粗服と定めて置きます。あの改良服で御坐いますか、私は大嫌ひで御坐います。只今の袴もモウ一息ですネ、此袴に就て、過日加納の奥さん(加納久宜子夫人)が新聞にお書きになりましたが、私も少し考へて居る事が御坐います。未だ實驗致して見ませんから判りませんが、御話しだけチョット致しましやう。一躰袴は脛の現はれる心配が無く、活潑に歩けて子供には至極結搆ですが、胸の所へ幅の廣い長い紐を幾重も〳〵卷きつけますのが、衛生上宜しく無いと思ひます。それで此紐を廢して緣に致し、腰の所で一つ廻した丈にして丁度洋服下着のやうにフークを二つばかり附けた物で留めましたなら、伸縮も自在ではあるし、胸も引締めず、又無益な長い紐がなくなれば、呉服も少しで出來ます。裁縫も隨つて手輕で、經濟上からも餘程便利だらうと存じますが、如何な物ですか是から拵へて見やうと思つて居ります。靴は大贊成で何處の運動にも靴を穿かせて遣ります。

▲復習

漸々大勢になりますと、私ばかりでは行屆きませんし、乳呑子を抱へて居つては復習も思ふやうに爲て遣られませんので、男女別々に教師を聘んで賴んで置きます。男の教師は此頃チヨツト歸國して居りました、十九歲になる長男（先夫人の令息）が面倒を見て呉れます。御承知の通り緣付（日下義雄氏へ）きましたの共、義理ある子供が三人も御坐いますが、皆性質の善い者ばかりで、私に深切なのは申す迄もなく、小さい弟や妹をそれは〳〵優しく致して、學校の世話なぞ親も及びません程で御坐います。

▲新聞小說

新聞は種々參りまして、ホンのちよい〳〵と見る位がヤツトで、あとは主人の讀むのを聞く位の事で御座います。小說は元から大好で、隨分凝つた者で御座いますが、讀み掛けると夢中になつて何も彼も御留守になりますので、只今はチヨツトも覗かない事に致して居ります。ハイ誰の作でも見ましたが、一番好きだつたのは涙香のでしたよ。

▲書畫

和歌も畫も此頃はスツカリお廢しで御座います。畫は不幸にして師匠が四度も變りましたから可けません。最初は蓮畫きの環翠、次は渡邊小華に就き、其次は國の者で、一番末に熊谷直彦に學びました。直彥さんの畫は寫生派で御座いますネ。小兒の時分、學科の中で一番好であつたのは書で御座いまして、米庵の後の萬菴に習ひました。每朝早アく起きては大抵二百枚づゝ大きい字や小さい字を缺かさず書きました。此頃の學校の習字は初めから六ケしい字を敎えて、又バッタリ止めて了ふのですが、あれでは困ります。私は出來もしないで斯う申すと甚だ失禮ですが、近頃御婦人には御名筆がありますけれども、御男子方に御能書の方は滅多に無いやうですネ。宅の子供も小學校を卒業したら、少し習字を勉强させなければならぬと思つて居ます。

當年五歲にならるゝ圓く太られた可愛い令息が、最前から此室に來られ椅子の上に登つたり降りたりし

て遊んで居られましたが、此時夫人の膝にもたれて主客の顔を眺められたのは、如何にも無邪氣で氣高う御座いました。

▲お話

當節の子供は種種の話をくとく聞きたがる樣でして、餘り幼少のうちなぞは腦に害がありますから、成るべくお話を爲て聽かせません。それでも子供は好加減に質問して、智識を開くのに割合熱心なものですネ。人人が人人、顔の變つてる通り皆な氣象が違つて居まして、親の方にも自然氣が合ふと合はぬのが有りますけれど、斯樣な愛憎は注意して腹の中に仕舞ひ込んで、何の子も同じ樣に致して遣ります。ハイ此子は末の方ですが、割合に鷹揚な性質ですよ。

▲音樂

ピアノは好きで折々彈きます。子供も私に似て音樂好きで、矢張ピア



御縁先に於ける岡部夫人

ノを彈きますよ。琴は山木に習ひましたが、最早暫く彈いたこともありませんので、スッカリ忘れました。今に娘達が稽古を始めましたら、復習て遣る位は出來やうかと思つて居ます。

▲舞踏

舞踏會はスッカリ廢りました。此頃小學校の遊戲の中に舞踏の樣な事を致しますネ。運動には好う御座いましやう。在來の踊りもあれで猥褻な詞さへ無ければ可いものだと思ひます。

▲茶の湯

お茶も花も習ふとは習ひました。ハイお茶は石州から宗和に移りまして……。私は此茶の湯は大嫌ひなのです。行儀と申しても茶室の中ばかりの事で、外へ出たら矢張り不行儀では何にもなりません。それに態々狹苦しい部屋に閉ぢ込めて、活潑な精神を壓へて了うんですネ。一躰あの手つきが氣に入りません。彼樣な不具の樣な手眞似を子供に敎えて何の益になりましやう。是から社會に出る者には、ホントウに無用の長物ですネ。女禮式も餘り凝つて偏よると、交際に不都合だと思ひます。彼の女禮式の先生など、始終斯樣な風で、と兩袖を合され女禮式先生の身振宜しくあつて、……私の眞似が可笑しいつて、皆が笑ひますが、融通の利かないと、あれはあれつきりの事ですネ。併し女の子は疎暴になつても可けませんし、只今の女子敎育ほど六ケしいものは有りません。

▲學校

幼稚園は此頃止めさせました。大きいのは學習院と華族女學校へ通はせますが、男の子は大抵歩いて通はせ、女の子は車で送り迎ひだけ致して、學校へ附けては置きません。附いて居る者は暇で困りますし、學校の方でも迷惑致します。

▲丸髷化粧

私が丸髷に結ひます次第は、この子供の多いのに每朝〳〵束髮に結ぶのも隨分厄介で御座いまして、丸髷なら三日や四日はチヤンとして居りますので却て世話が無いからです。それのみならず急に外へ出掛ける折

にも振付が利きます。衛生には悪いとも申しますが、併し髪の緩まつた間から空氣が入つて、割合に涼しう御座います。白粉は嫌ひで、あれはドウモ可けませんチエ。併し日本の風習としては身嗜みの一つですから、全然廢す次第にも參りますまい。私なぞも他出の時、據ろ無い場合には、白粉に代用して衛生に害のない物を傅けます。

▲令息の日本海一週

又長男は學習院の學生で、當年十九歳になりましたが、誠に旅行好ですから、夏季休業中には成るべく旅行を致させます。昨年は單身寫眞器械を肩にして内地を周遊しましたが、本年は日本海一週を思ひ立ちまして、矢張り單身で出掛けました。全躰上流の子弟は、夏季休業には温泉とか海水浴とかで随分贅澤に遊ぶ風習でありますが、日本海一週旅行を致すとなどは、精神上から見ましても、又身躰上から見ましても、實際利益となる事と思ひまして、喜で出發させました。

▲旅行

御覧の通り田舎住居で、見晴しは宜しう御座いますし、涼しい事と申したら、土用中でも風のある時は、此處の障子を閉めます位ですから、態々大騒ぎして遠方へ避暑に出掛ける必要は御座いません。旅行など窮窟な思ひをするより家に居た方がイクラ氣樂で宜いか知れないつて、皆左様申して居ります。唯だ海は珍らしう御座いまして、大森位へは時々出掛けます、昨日も大勢連で參つて終日遊んで歸りました。

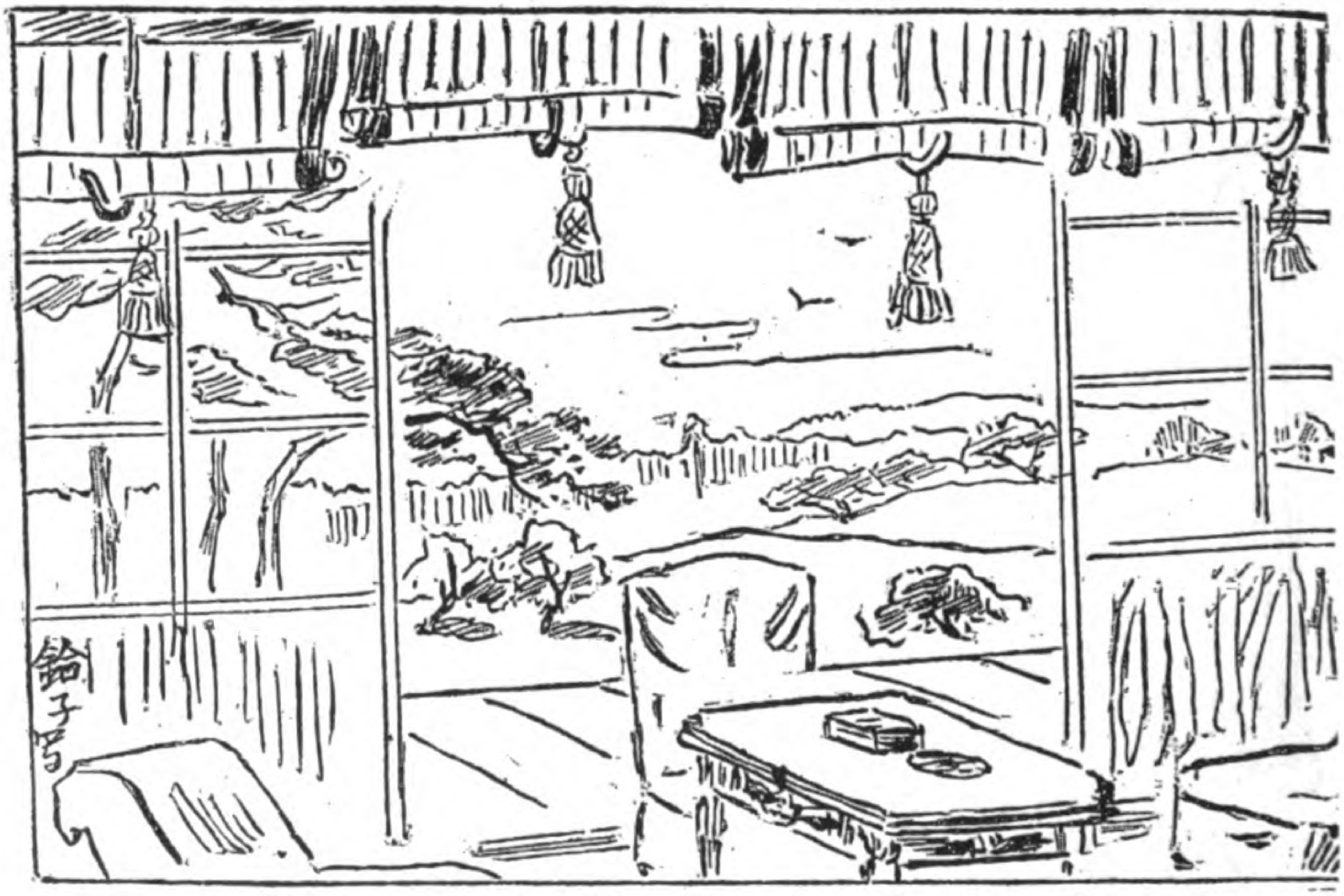
▲洋行中止

公使の時參るばかりに仕度致し、連れて行く子供と預ける子供とをチャンと定めて萬事の準備が出來ました。所が御止めに成つた方が復行らつしやる事になつて、此方は中止致しましたのです、ホントウに惜しい事を致しました。

▲座敷の飾付

此應接間の造方は主人が随分考へたので御座います。御客の時開ける次の室が日本風で、此處ばかり全然西洋風でも權衡が惡う御座いま

すから、種々工夫して斯様な御簾を拵へたので、先ア折衷に致した積です。ハイあの石膏彫刻（種蒔老爺の立像）、は美術學校の生徒の作ですが、チョット好い考で御坐います。一躰此邊は元麥畑で立木一つ無い處でしたのを、主人がこゝら歩いたとき大好な富士の見えるのに惚込んで、直ぐ買入れたので御坐います。それですから是れだけの庭木を殘らず方々の植木屋から運ばせました、池袋の方からも取寄せました。山の下の方に池がありますが、御覽になるなら御案内致しましやう、餘り手入を致さない庭で何處も



岡部邸の應接間

草茫々で御坐いますよ。

記者は大喜びで拜見を願ひましたが、夫人は椽先の階子を下りられ、小山の芝生を輕く疾く歩まれつゝ

一度西洋芝を植ゑましたが、何故か生ませんので、又日本芝に植ゑ變へました。イエ風雅でも御坐いませんが、主人が却々庭に凝ります方で、チヨット土佐風に拵へた積りで御坐います。

兩側の熊笹に沿ふて細道を上り、古雅な四阿の中の大きい腰掛を拜見致しましたが、これは榧の根株で下總から御主人が持ち來られ、上部は火鉢に造られたとの

御事、四阿の後には束ねた枯木の枝が澤山積み重ねてあり、此處に暫く立つて眺めましたが、御領分の三町歩ばかりある青田の外道を緩々歩み行く馬士二三人は宛然畫中の物で御坐いました。軈て前の赤土坂を下りて、葦の繁つた池に濃綠色の小波を眺め、崖側の南瓜畑より鞦韆テニスなど爲さる御子達の運動場を通て、遊嬉室を拜見致しました。此室はズット本邸より離れて建てられた十五疊敷の平屋造で、硝子戸棚の中には、剝製の鳥、模型軍艦、組木、飯事道具まで置かれてあり、其鴨居に「遊嬉」二字を黒胡麻で現した木地の額(緣は麻の葉形に色紙を切組で列べあり)を掛けられてありましたが、これは御主人の御細工で、御子達が手傳はれたとの御事です。



岡部邸遊戯室

尙御子達が麥藁、や江ノ島貝や榧の葉で樣々の圖案を凝して、錦繪、石版畫などの額緣を作られたのもありましたので、智育に行屆かれた夫人の御心掛に深く感じ入りました。軈て以前の令息と三令孃が引續いて此室へ來られ、玩具のオルガンを彈き、組木を並べなど睦し氣に遊んで居られました。記者は夫人に隨ふて、又元の應接間へ戻りました時、御主人は椽側傳ひに此室へ入り來られ、興味ある美術談を成されました。其一二を擧げますれば、趣味深き景は强ち實際上の絕勝でない事（一）。廣大な勝景を描けば却て纒りの附き難い事（二）。遠景ばかり描いては



物にならぬ事（三）を始めとして、每朝立ち上る炊烟の色合、月夜に於ける遠近の樹影が此庭に最も妙趣ある事（四）雪の解けかゝつたとき小松が著しく黑く際立つのは調子が惡い事（五）などで御坐いました。軈て長坐を謝て御暇申上ぐる時、夫人は態々送り出でられ、

車で御出で御坐いましたか、目白の停車場は直ですから、汽車で又御出で下さい。

と仰しやつたので、舊百萬石の令孃なる夫人（夫人は舊加州藩主前田侯の令孃のお優しさに感淚を催しました。

▲一家團欒の樂

人間には貴賤貧富樣々でありますが、如何なる境遇に在りましても、家族の和合は萬福の基と存じます。生活の上に何一つ不自由のない立派な家でも、其内部に立入ますと、眞に温なる親愛の情を以て充されて居るのは甚だ尠いと思ひます。主人は多年西洋に居りましたが、彼の良き家庭の摸樣を聞きますと、一家親和の有樣言ふに言はれぬ妙味を多く認むると申しまして、今の日本社會に行はるゝ風俗習慣にては、未だ清淨にして濃厚なる家内團欒の妙味を正當に味ふて居る者は甚だ稀であると歎息して居りますが、誠に幸の事には、私方は母始め多人數でありますけれども、何れも健全で一家團欒の眞味を常に感じつゝ暮して居ります。又子供は一人も缺けませず、皆丈夫に成長致しますとは、親の身としては無限の快樂であります。私は行届きませんが、母の責任として此多くの子供を成るべく過ち少く育て上げたいと思ひまして、幾多の心配と共に樂しき希望を持て居ります。

井上公使夫人すゑ子

歐洲の外交社會に其人ありと知られたる駐獨公使井上夫人は、井上伯爵の姪にして幼より伯の家に養はれ、六七才の頃横濱の英國狀師ラウダー氏の家庭に入つて其の訓陶を受け、後井上伯夫妻に伴はれて英國に到り、謹勤なる良家に托せられて英國風の教育を受けたる人なり。伯の令嗣たる良人勝之助氏も亦た少年彼の地に學び英國の教育を受けられし人なれば、世にも芽出度き好偶といふ可し。夫人の語學に於て英語に堪能なる外、佛蘭西語を自由にし、獨逸語に達せり、夫人は亦た讀書に大の趣味を有し、加ふるに家事經濟を能くし、公使館内外の出來事は悉く英文を以て之を自己の日記に書き留むるといふ、夫人が良人を助けて外交の活舞臺に雄飛し、而も花の如き彼の地の貴婦人間に進歩的日本女子の好標本として目せられつゝある所以のもの、亦た宜なるかな　（口繪解）

當代名流の家庭

勝間生

近來家庭の事を兎や角論ずるやうに成て來たのは喜ぶ可き現象である。然し空論に許走つてゐては實際家庭の經營に何の裨益も無いのである。故に余は徒らに論議することを避けて、活きたる模範を實世間に求むるといふ方針で、良家庭の令聞ある名門紳士を訪問し、主人公が其の家庭に對する意見や理想を叩き、其の家風や教育や經濟や裝飾や娛樂や、其他萬般の家事に就て談話を乞ひ、之を誌上に紹介して、家庭經營の資に供する積りである、讀者諸君幸に之を諒せられよ。

渡邊千秋男

男爵渡邊千秋君は信州高遠藩士にして前大藏大臣渡邊國武子の實兄なり、維新の際勤王說を持して諸方に遊說し、明治の始め伊奈縣少參事となり爾來鹿兒島縣大書記官行政裁判所評定官北海道長官內務次官等に歷任し現に內藏頭の重職たり

芝濱に施餓鬼の烟火が催された夕、豫て日報社員原子の紹介により、男爵より會見を期せられてゐたので編輯局の事務が濟むや、余は俥を驅つて男爵を高輪の邸に訪ねた、先づ門を這入つて玄關に案內を請ふと、女中が取次に出て來て、余を右手の一段高き庵室めきた處に導かれた。

▲客間の裝置　此處の入口には不迎來者不送行者の文字を鯨の鬚に白字で顯はした物が懸けてある。其の正面には甲冑を初め刀劍、重藤の弓、矢壺、舊式の鐵砲、鞍鐙、旗差物、虎の皮の敷物等が順序よく飾り付てある。二階に登る階子段には手摺の代に軍幕の紐を打渡して昇降の便としてある。其を登ると十疊敷の座敷、品海を見下して眺望頗る佳し。余は此室に通されて待つと暫時、其の間室內の裝置を觀ると床の間には威容嚴然たる一領の甲冑が飾付て在て、長押には朱柄の槍が懸けてあるので、身は是れ凜然たる武門の家庭に捕拿と成つた樣な思ひがせられた。軈て主人の男爵は出て來られて殷懃に坐を薦められた、余は寒暄の挨拶を

終り、直に訪問の意を述べた所、男爵には快く諾はれて、一夕の清談を試みられた。

▲信州の舊棲　男爵は先づ口を開いて信州の生家より解き起して曰く、私の家は上諏訪でも古い家で、歷代田舍住を爲てゐた士族であつた、家は舊家ではあるし富裕でもあつたから、所謂衣食足りて禮節を知るので、見苦しい樣な事は無つた、私の家は渡邊綱の子孫で代代上諏訪に住居致しましたから、屋敷の内に無比の古木が在て、其を神木神社と稱へ祠を立てゝ氏神と致してあつた位、古い家でありますから、大抵の人は生家を賣るが、私は金をかけて保存してある。けれど昔の儘、少しの裝飾も加へては無い、先年畫工を遣つて生家の茅葺屋根を寫生させ、其を額にして兄弟兩家に分ちました、是は昔の家庭を思ひ出す爲め、儉樸を守らしむる爲めの一端なのであります。

▲男爵の父母　母は三輪と申す者の娘でフキ子と言ひましたが、子女の敎育に意を用ゐられまして、縫物の傍ら四書五經の素讀位は敎へて吳ました。一昨年國の家を修繕に人を遣はした時、私共兄弟が習つたいろはや一二の清書双紙に母が筆を加へて直してあるのを發見しましたので、當方に持ち歸らせ、保存する爲、裏打をさせに今朝實は隣の經師屋に遣つた所です。斯の如く家庭敎育に力を致された母の恩は實に我々の感謝する所であります、併し殘念な事には、母は母の三十八歲の時歿られた、誠に早死で御在ます。父は政德と申して、文晁の弟子で號を雪湖と稱へ、書を米庵に學び詩を大窪詩佛に習ひました。幕府の末、藩主忠誠公が閣老となられたので、其の伴をして公務にたづさはりました。忠誠公は樂翁公の外長孫であつたから、數々樂翁公にも接近しました。私の漢學の師匠は渡邊坦平と言つた人ですが、此の人は時流を擢んでゝ居たため世に用ゐられず早く隱居して了つた、左傳が得意でして、常に門弟を戒めて「學問は實用を尊ぶ、死文字句に拘泥するな、經書を繙くにも註を讀むな、本文を讀め」と言はれた位の人です。と語られ、

▲男爵の家族　其より話頭を轉じて現時の家庭に入

り、其の家族を列擧された。男爵の家族は即ち左の如し。

男爵千秋君　妻とし子君
長男千春君　文學士、英國留學より歸朝し番町の別邸に寓す　妻留子　大山大將の令孃
長女千夏君　舍弟國武子の秘書官であつた法學士の頴川三四郎といふ人に嫁す。
二男千冬君　法學士、國武子の養嗣子
三男鹿丸君　明治學院卒業
二女鶴子君　華族女學校卒業
三女千菊君　華族女學校生徒

▲家庭と快樂　扨、言はるゝやう、「國武」とは一家の樣に致して居りまして、互に行つたり來たりして、謠曲を聞かせ合ひ、大磯の夜雨莊にも兩家合同して參るのです。家庭の快樂を圖る爲めには球戯場をしつらひ音樂室の設もあつて、ピアノ、オルガン、ヴアイオリンを備へて置きます。洋樂の教師としては奧公義氏を聘して、一週一二回家庭音樂會を開きます。琴は生田流の名人松島糸路と申すのが參ります。是は國武の邸内に住んで居りますが、東京にも比類のない名手で御在ます。私は酒を嗜みますから、知事を致してゐた頃は三四升飮んだものです、平素の時は毎夕一家團欒の席で酒を用ゐながら謠をする、家族は其を聞いて樂しむ、其柄晩餐の折は皆が世間で見聞して來た事を出し合せて話す、併し風敎上に關する事や人の毀譽に渡る事は避けねばならぬ。で之に代ゆるに謠曲や音樂を用ゐます、春夕秋夜家族一同が音樂室に集り、或は球戯室に入つて樂しく遊ぶのは最も愉快の事である。私共は子供に至るまで皆な讀書を好みますので、和漢洋共相應に藏書があるから、遠からず私立圖書館を建て、日を期して公開し、又た談話室を置いて親族知友間の娛樂に供したら面白からうと思ふ。家庭の快樂といふも方面が多くなければならぬで、盆栽を陳列して植物上の談話を試み、之に依つて我人共に自然の美を樂しむやうにしてあります。屋敷は凡そ四五千坪ありますが、珍らしい屋敷で德川時代に鷹の場だつたさうで三代將軍が歌を詠んだといふ紅葉があります。玆處に林道春の孫の春齋が碑を立てゝ、家康公休息の場といふ意

味を記して在たさうですけれど、惜しい事には、嘉永年中臺場を建てる折、折角の碑を海中に持つて行て了つた。兎に角這ういふ由緒がありますから、其處を運動場にして、家族遊戯の場に充てゝあります。

▲團欒の基礎　其柄、一口に一家團欒と申しますが、眞の團欒を作るには、作る丈のもの即ち基本となり要素となるものが無ければならん、其故私の家では教育、倹樸、和樂の三種を以て家庭の基本としてある、此の三種が家庭の團欒に最も必要であると申すのは、教育を忽にすると親は善かつたが子の代には惡くなつて、父祖の名を辱しむる樣な事になる。是は隨分世間に多くある事で、貴下方が御承知の通りです。次には倹樸ですが、倹樸質素を守らないで貴きに成り過ぎると、驕奢に成つて、遂には家庭を紊亂し、家庭の空氣を不潔にする樣な事になる。今一ッは和樂、是が無いと家族同士が一致しないで面白くない結果に陷る。其故此の三の基本が纒つて始めて一家團欒の實を得、幸福圓滿なる家庭を作ることになる。斯ういふ譯であるから私共では家庭内に於ける和樂を專一とし、芝居を見に行くとか料理店へ揚るとかいふ樣な、快樂を外に求めることは爲ない、で、さういふ類の事は千春千冬も殆と知らない位です。

▲男爵邸の家事向　唯今普請中ですが、是も倹樸の趣旨に基いて檜材等は一切用ゐませぬ。毎日の食物におきましても、妻と娘と手づから調理致しまして、コックの手を煩はさぬのです。衣服の如きも紬を極度とし、其以上は用ゐさせません。ソラカラ衣服の料にとて庭に桑を植えてありますが、之で養蠶を致し、糸をとり、妻には幸ひ機杼の心得もあるものですから、其を織つて着せる。内藏頭の經濟上より見れば却つて高い物につきます。けれど母自身が遣て呉たとなると、子供達が直接に母の恩を着るとになるから、至極宜しいのである。私の家では妻一人が經濟、裁縫割烹等の事を取り賄ひ、娘も其方に仕込で居ります。故に家令家扶の如きものは一人も無い、但だ其の代りに青年輩を置いて、之を親に代つて世話して遣る、下女なぞも一軒の

家より姉から妹まで同胞四人が順々に參つた樣な譯で、召使を慈しむのは和順和樂の一つですから、私共では勝手で角突合したりするものは無い、是は國武の方も同樣です。其故和樂、儉樸、教育の三種は直接間接に必要なることで、之に由て家庭の健全を得らるるのです……渡邊の家庭を申すとまア斯ういふ樣な次第であります。と諄々語り了はられた。

▲家庭の賜　叉手語を改めて、私共兄弟が親任官勳一等並んで華族に列せられたのは、外に比類の無い事であるが、是といふも畢竟父母の代の家庭が然らしめたのであります。我々の今日あるに至つたのは母訓が兄弟の體に浸潤してゐるからであると言つて、母訓の尊い事を妻にも申聞けてゐる。そこで私の子供兄弟が揃つて學士となる、是も亦た異數の事で我々の家庭が然らしめたのであるから、誠に喜ぶべき事だと思ひます。妹は二十一の時良人に別れて、唯今五十になるま



渡邊家信州諏訪の舊棲

家庭實驗談

で寡婦で通して居りますが、是は國武の家に同居して、遺子の高山直純（法科大學生）と申すのを敎育する傍ら、國武の世話を致して居りますが、是も偏に家訓の結果であらうと思はれます。誠に此の家庭なるものは一朝一夕に作り得らるゝものでなく、累代養ひ來つた良習慣が、層々功を積んで、醇良なる家庭を濟すのだと思はれるので御在ます、と語られ、頗る得意の態で在つた。

▲床間の甲冑　かくて男爵は床の間を指し、「此の通り甲冑をはじめ、先祖より傳はる武器を室内に陳列して置きますが、是は武士道保存の意味で、子弟を敎育する上にも間接に裨益があるし、士風を維持する一助ともなりますから、御覧の通りの裝置にしてあります。で園遊會の時も白麻の軍幕を幕串共に用ゐることにして居ります。

と、是で家庭談は終り、あとは餘談に移つたのであるが、時正に二更、余は長座を謝して、其の邸を出でた折しも一發の烟火中空に開いて、喝采の聲を聞くので、在つた。

家庭 幸福十二箇條

楠公家訓

○珍膳も毎日向へば味甘からず
○書は筆法を踏まず達者なるを善しとす
○善事をなすを思はんよりは惡事をなす勿れ
○物事に肝要を知れ
○食は腹一ぱい
○貪慾を思はんよりは足ることを知れ
○鷄鳴に起きざれば日暮に悔あり
○人に善事を施し報を思ふな
○節儉質素は堅城の如し
○華美慢心は讐敵の如し
○己れが身を思ふて人を害ふなかれ
○身の分限を知るを直とす
○拔群の大功を立てんよりは二君を思ふな
○勝にほこりて敗をとる勿れ
○心に剛を好めば柔よりして勝をあらはせ
○人を知り己を知りてこそ業に強し
○業は日々新にすべし
○遊惰に過ぐれば財貧し
○事節儉なれば事福の基
○謙遜のものは途に倖來る
○不遜のものは終に災害を來す
○業をはげみて家内睦ければ磐城の如し
○家内不和なれば身代を失ふ基
○火を能くたしなめ

◀其　一▶　本郷　吉見さだ子

1 良夫に配偶するもの
2 家庭の和樂を得るもの
3 子あるもの
4 獨立の生活を營むもの
5 勤儉忍耐し得るもの
6 何事にも不滿を抱かざるもの
7 日常の仕事の樂みを持つこと
8 常識を備へたるもの
9 金錢の貯へあるもの
10 朋友多きもの
11 貧に堪へ粗衣粗食を憂へざるもの
12 大家高樓、美なる衣服・美なる容貌、美なる食は一番御仕舞なり

右は健康とか、富貴とかを別問題として申したものに候若しすべての點よりいへば第一は身の健康と、心の平安に御座候

◀其　二▶　麻布　さかへ

（一）家庭の圓滿なること
（二）家庭に理想あること
崇高なる理想を有し、不斷に之を實行して、家に特殊の光彩あらんを要す。
（三）家に定業のあること
恒産はなくも可し、されど定業は無かるべからず、
（四）無病息災なること
（五）家族の氣が利きたること
（六）家庭に宗教のあること
宗教ある家は安寧なり、信仰ある家は堅固なり、
（七）女房の苦勞人なること
酢いも甘いも嚙み分けて、痒い所に手の屆く程の如才内儀をいふ。
（八）家族に教育のあること
（九）飯の旨く喰へること
三度の飯が旨く喰へるは幸福の大なるものなり、旨くなきものを旨く喰せるに至つては細君の技倆に待つより外はなし
（十）家人の奇麗好なること
（十一）家庭に娯樂機關を備へたること
家庭を外にして快樂を漁る必要なからん程の娯樂的設備は是非にありたきものなり
（十二）子供のあること

◀其　三▶　信濃　北野はる子

（一）健康
タトエ萬金の富あるも、タトエ暁冠の榮あるも、人間健康に欠くる處あらば、天下の幸福を得るものとは言ひ難し
（二）家庭の和樂
一個人としては健康第一なれど家庭にありては和樂第一に候和樂なければ富も貴も沙漠のことし
（三）常識智能
個人として必要なるは健康に次いで智能なり、人間智能なければ世に處す事能はじ

（四）家計の獨立
我が身を勞して衣食し、我心の欲する處に向つて生活するは人生の本義

（五）富貴
富なければ人に侮られ、地位なければ人と生れし甲斐なし得たきは富貴にこそあれ

（六）才藝
多藝多能にして人にすぐれたるもの幸福に候

（七）容貌
天の興ふる處の麗質は人間幸福の一なるべし

十二ヶ條とわれと妾の信ずる處ろこの外になし

▲其 四▼　かをる

一　戀愛の滿足を得し事（享）
二　健康なる子を設けし事（享）
三　良人の名譽を樂むの境遇（未享）
四　一家の前途に望ある事
五　三度の食事を美味しく焚く境界（享）
六　快よき睡眠を得る事（享）
七　父母兄弟の多くある事（不享）
八　財產の自由なる事（享）
九　容貌の美なる事（不享）
十　學問あり才藝ある事（不享）
十一　家を持つに他人の干渉なき事
十二　我が地位境遇を滿足にする事（享）

右十二ヶ條次第不同に記述いたし候右いづれもわたくしの信ずる處ろに候へ共悉くこの個條を享得したるものに無之候第三第七第九第十はわたくしの得ざる處ろに候へ共第四と第十一とはわたくしの半得んとしつゝ有る處ろに候第一は初め不滿足に候ひしも年たつに隨て滿足に相成候

▲其 五▼　伊勢たみ子

長　壽
長壽は健康の賜なり長壽ならざれば何事も出來ず故に健康な幸福の第一とす

福　德
福は勉強の賜なり德は正直の賜なり故勉強と正直は幸福の母也

子　孫
富あるも壽あるも子孫なければ樂薄し

和　樂
家庭に和樂なければ人間に休息なし和樂は幸福の影也

右四ヶ條いづれを一としいづれを二とする事能はざれどもまづ健康を以て第一といたし候

▲其 六▼　大阪 北濱吉枝

（一）無病息災（健康）
（二）夫婦和合（和樂）
（三）子孫繁昌（多產）
（四）稼業盛榮（富貴）
（五）無事平安（安樂）
（六）安心立命（家計の獨立）

幸福十二ヶ條も煎じつめれば右の六ヶ條に歸し申すべく候

其七

神奈川　ゆ　づ　る

そも人生の幸福とは心神上の幸福にして而も目前現在のみに事止まらず主として將來に關連するものなれば幸福てふ言や短なりと雖も其意や深遠些々たる一片の筆紙に盡さる可しとも思はねど左に掲ぐる如き幸福なる人といふも過なかるべきか

第一、心の豐裕なる人、　身は如何に美衣美食に飽くとも心安らけく意平ならされは何を以てか幸といはん心公明正大ならされは凡そ恐怖恥辱羨望嫉妬の邪念交に伴ひ來りて胸中眞の快樂望むべからす斯る人の滿足は僞りの幸福の一端のみ

第二、愛に富める人、　愛は凡その美の根源也此愛の活動なくは何を以てか社會に對し人に對し將た又た我身に顧みて心の滿足を得べきや不安の念に煩悶する者いかでか幸といふべき分きても女子は仁愛てふ事深く味ふべきなり

第三、心正しき人、　胸中一點の邪念なく天地に對し人に向ひ又た我眞心に顧みて恥づる事なきを心正しき人といふ斯くてこそ絶えぬ快樂は心に得る物なれ豈々たる世や人の毀譽褒貶何ぞ憂ふるに足らん

第四、足る事を知る人、　希望は遠く志は大ならざる可からするいれ慾てふ物に對しては飽く事を知るを要す人自ら境遇あり運命あり限りなき慾望は人生の幸福を伴ふ物に非ずと知るべし

第五、克己心強き人、　オいみちく能世の常ならさる聖人はいさばらず凡ての人の言ふ可くして實行し難きは己に勝つてふ一事也蓋し克已心強き人は自ら意志薄弱より起る惡心を防ぐ事を得るものなり

第六、忍耐力強き人、　なべての人の胸に有らまほしきは實に此力也精神一到何事不成の古言は忍耐てふ此力有て始て悟るべきなり

第七、勤勉なる人、　怠りは身に墮落の習慣を起し而も改め難くして事成功の望を失ひ遂に煩悶不平の媒介たるを免れず勉め勵む者は心中常に其功果を樂しむ餘裕ある者也

第八、苦しみに逢ふ人、　艱難は身を玉にすの古言は今も空しからす辛苦に逢はさるの人は快樂の眞味をしる能はずといふも不可なからんか

第九、心誠實なる人、　眞實てふ事は此れ人生第一の美德なり此心ある人にして始て慈心あり同情の涙あり獻身の勇氣も起る者なれ斯る人いかでか幸ならすといはんや

第十、理に明なる人、　かゝる人は事物の判斷處理に過失少く後悔の憂薄し人間元と情に因て活動すべき物なれとこは教育の力能く其智識を發展せしめ美つしき情の活動と相待て愛に圓滿なる幸福を得べきか

第十一、信仰の熱き人、　神聖なる信仰の熱き人は精神確實にして悲歎失望憂慮の念起る時にも胸中自ら慰籍の神宿る者なり

第十二、身體健康なる人、　身體強壯なる人必すしも精神確固たるとは保し難きも意志薄弱てふ事怯弱なる身體に起因する事少なからすそはともあれ人生を此世に保つ以上は身體壯健ならすして何を以て此社會に働くを得べき弱き身體に伴ふ精神の不愉快のみにても到底不幸の人たるを免れざるなり

▲其　八▼

本郷　井上　芳子

(一)血統の純潔なる家柄に生れたる事。

〔肺病、天刑病等の如き遺傳性疾病なく又は新平民ならざる〕

(二)天性強健なる事。

〔如何なる艱難にも屈撓せざる。即ち「健康なる精神は健康なる身體に宿る」〕

(三)天性才智。　容貌。　共に衆に秀れたる、　及び高德なる事。

〔德と智と備はりたるの幸福云ふまでもなけれど容貌は殊に女子には必要なり〕

(四)相當の財産及身分を有する事。

（身分、財産は必ずしも上流ならず共可なり。日々事足り。人にほどこし得る程ならば）

（五）樂しき家庭。

（秩序整然—家族健康—家業繁榮—勤勉—儉素なる事。嫁しては よき夫あり よき舅姑あり 且つよき子女あり 和氣藹々たる家風をなし得る事）

（六）獨立したる政府の下に在る事。

（他國に類ひなき國柄、他國の干渉なき國、制度整ひ臣民安心して業務を執り得る事）

（七）文明開化女子教育の隆盛なる事。

（女子の責任も亦重大となるに從ひ男子と同樣學問なし得る事）

（八）親類和合親密なる事。

（九）信仰ある事。

（神佛、儒、耶蘇いづれにてもよし、即安心を得るに在り、迷信せざる限りは可し女子にありては更らに可）

（十）良師良友を有する事。

（十一）天災地異なく社會平穩なる事。

（氣候にさはりなく豐作るな）

（十二）積極的の快樂を爲し得る事

（書籍、新聞・雜誌等によりて得らるゝ快樂。著書をなして社會を覺醒する快樂。敎育をして純良なる人物を作り得らるゝ快樂）

右は妾が只今の身分として堅く信ずる所の幸福なり。

▲其　九▼

淺草　中島冴子

1 相愛し相敬する平和なる家庭

2 一家皆健康なる事

3 信用ある人

4 理想を實行しつゝある人

5 下には親まれ上には愛せらるゝ人

6 兄弟姉妹皆國家に有益なる人となること

7 文明の世にある國民

8 豐年

9 異郷にありて懇切にさるゝこと

10 安心立命の人

11 消極的慈善事業と共に積極的慈善事業の擴張さるゝこと

12 歸郷の夜一家集合して庭前の月を眺めつゝ學業の結果東都の有樣など語りし折

▲其　十▼

麹町　去る大家に仕へる下婢とよの

一、奥樣が苦勞人で被爲在ること

苦勞なすつた御方に、何處か違ひます、チヨッとした事にも人情をふくんでれ、人使が善いんですもの。

二、奥樣がマメで被爲入ること

無性な奥樣は大嫌ひ。奥樣が先に立つて働いて矣れると大層樂ですよ、

三、時間のキマリが善いこと

三度の御飯時より始め、御よんなるときも、御ひんなる時も、時間がキチント極つて居ますと、誠に働き善いので御在ます、

四、思ひやりの御在なさること

これがあると無いとでは、極樂と地獄ほどの相違があります、

五、子供の無いこと

我儘な言ひ分ですけれど、子供の無い方が、善う御ざんすわ、

良家風の紹介

羽仁もと子

門野幾之進氏の家庭

慶應義塾副社頭門野幾之進氏の家庭も、また私の實際に存じて居ります良家庭の一で御坐います。夫人駿子は一ッ橋にありました（今のお茶の水）高等女學校の卒業生でありますが、その平生は所謂女學生上りの細君のためにこの上もなき好模範であると思ひます。私の折にふれて伺ひました夫人のお話一二を記して見たいと思ひます。

夫人はいつかたわしを持つて手づから臺所の土罐を掃除して居られました。いつもあなたは此樣なことまで遊ばしますかと云ひますと、いつもと云ふ譯でもないですが掃除は矢張椽の下や下水から始めねばなりません座敷の上は誰にでも氣がつきますが、見えない所は用の多い女中達には、兎角忘れがちになりますゆゑ、時時見てやりますのでと申されました。同家は夫人のお言葉の通り、椽の下にさへ箒目を絶やさぬほどでありますゆゑ、室內の整頓して居ることは申すまでもなく、殊に臺所の心地よく始末されてゐるのには、親しく同家に出入する人の一樣に感服するところで御坐います。客間居間などの掃除は雜巾掛けまでも夫人自らなさるとのことです。

新聞の廣告を拜見しますと、此節は竈の種類もなかなか澤山あるやうですが、何れがよからうとお思ひになりますかと申しましたところ、左樣ですねえ、それは分りかねますが、私などはまだ破れもいたしませぬゆゑ、前のこの竈をその儘用ゐて居ります。どんなに

焚物のいらぬやうに出來た竈でも、悠々と不注意に火を焚いて居りますなら、決して經濟的には參らぬもので、少々不完全でも氣をつけて餘計な火を焚かぬ方が寧そ無駄がなからうと思ひます。例へばうでものをするにしても、煮えすぎるまで火を焚いて、その物の味を損じた上に、餘計な薪まで費ふやうでは、道具が何程立派であらうと、その甲斐がなからうと存じます。で、その樣なとは始終臺所を下女にばかり任せて置いては出來ないとで、手づから折



折出て見ては監督しなければなりません。

夫人はなほも、私などは御覽の通り隨分お三どんのするとまでも、手づから致す方ではありますが、併し一家の主婦の役目はなか／＼多いもので、到底何も彼も一人といふ譯には參りませんで下婢を雇ふのでありますが、その下婢を使ふには前に申したやうに、注意して監督しなければなりません、そして唯臺所を見廻つて、アーコーと指圖をするといふ丈では、またなかなか効

能がないのです。人を使はうと思ふなら、まづ自分にそれ丈の仕事が立派に出來て居なければなりません。いくら命令を立派にしても、ナニ奥様はお口ばかりで私が一日居なからうもんなら、御飯もたべることが出來ないだろうと思はれるやうでは、到底駄目で御座います。コンナやり方では奥さんに耻かしいと女中に思はせる丈のことがありましたなら別に小言は云はんでも、女中から氣を注けるもので、例へば一度戸棚をわけて掃除のしやうの雜なのを見ながら、一度位はそれなり默つて仕舞つても平生自分のすることがちやんとして、女中に示しが出來て居ますと、氣のあるものなら必ずハツト心附くので御座います。



勝手は汚ないから出るのが嫌なと、思ふ方がありますなら、それは大變間違つたことで御座います。臺所でも掃除さへ届きますなら座敷と少しも變りがないので、座敷とて不注意に扱ひますなら、矢張汚れるに違ひありません。殊に糠味噌の中に出來たお香の物は召し食つても、糠

味噌のいれものは汚ないものとして、殆ど一目も御覧になつたことのない奥様もあるやうに思ひますが、糠味噌の入れものも瓶にいたして、始終まわりを拭きさへすれば、汚れる筈がありません。客間の装飾も大切ですが、隠れて居る糠味噌入れも客の前に持ち出しても耻かしくない程にありたいと思ひます。清潔の德は唯に目に見て氣持のよい斗でなく、衛生の上は勿論、經濟上にも少からぬ關係を有つて居ります。例へば之からさきはよく醬油などのかびる時ですが、それにしても出す度毎に呑口を清潔に拭いて置きますと、決して深くはかびないもので、その外家にしても、道具にしても清潔にいたしますと、よく保つもので御坐います。

夫人には三人のお子さんがありまして、總領の方は今年十三の男のお子で、十歳の頃より慶應義塾の幼稚舎に寄宿して居られます。夫人はこの事に就て、子供を寄宿舎にいれるのは何うかと仰やつて下さる方もありますが、男の子の十歳位は椀白盛りでありまして、随分様々の惡戯をするもので御坐います、それに宅では次が女で御坐いますが、氣の勝つた方でして、なかなか兄さんに負けてばかりは居りません、椀白盛りの兄さんと一所になるので、妹まで氣が荒らくなるので御坐います。そして幼い間は成る丈間食をさせないやうに氣をつけて居りましたが、十位になりますとお菓子の在所を覺えて仕舞つて、此方が與るのを待つては居ずに、自分に取つて食べるといふやうなことですが、寄宿舎にいれましてからは、身體もよくなり、一つ置きの土曜から日曜にかけて歸つて來ますが、前とは打つて變つて妹にも、女中達にも大層優しくいたします。

夫人は此樣な工夫を以て家を修め、子女を教育して居られますゆゑ、その家庭は實に晴やかに快活で御坐います。折々親しき御婦人がたを食事におよびになる時はまたいつもお手料理でありまして、そのお料理の思ひ附きなど、淡泊に愉快げな夫人の人と爲りとは、何人をも樂しませ、滿足させるので御坐います。

母親の資格

（大庭仁藏氏談）

本篇は研月會の幹事大庭仁藏氏が同會に於て述べられたる趣旨を會員の一人が筆記して本誌に寄せたるものなり

むかし羅馬の詩人ホレースと云ふ人が一篇の詩を賦して羅馬家庭の亂れたるを嘆じましたが幾年ならずして其國が滅びた、又獨逸の史家タシタスと云ふ人が一度チウトニック人の家德を賞しましたが幾歳ならずして其國が隆盛を極めました、家德の盛衰は國家の盛衰に相關すること實に斯樣なものである、一家の治亂忽かせにすべきことではありません、一國の本は家庭にあり、一家の本は夫婦にあるのであります、夫婦にして健全ならざれば家庭は亂れ、家庭が亂るれば社會に及ぼし、遂には國家の興敗に關係すると前に述べたる如きであります、故に私は夫婦の中殊に婦人の健全に重きを置くのであります、健全と云へば單に身體ばかりが壯健なるのみではありません、心も身體も渾て立派に出來て居るのであります、婦人の健全であるとないとに依て其家庭に及ぼす力は比較的男子よりも著しい、つまり家庭は主に婦人に依て支配さるゝのである、家に良妻賢母なければ遂に其家は長く安全なる家庭を保つことが出來ず、國に良家庭なければ、遂に社會の改良をなすことが出來ぬのであります、故に私は社會が良婦人を作りて其健全なる家庭の上に社會を樹てたく思ふ心から世の母たるべきものに就ひて聊か卑見を述べて、あらゆる家庭に諮り御相談いたすので御座ります。

先づ私は母たるの資格と云へば直ちに其教育の有無を意味するのであると思ふ母として教育のなきものは則ち母たるの資格のないものであつて、教育を享けたるものは母たるの價値を有するものと惟ふ、是れ教育なるものは母の資格を形作る上に於て其一大要素であるからである、此要素の欠乏したるものは假令幾人の子を生して什麼なる才智、什麼なる慈愛に富み、亦婦人に於けるいかなる技藝を有すると雖も斷じて母たるに

適せないものと推定するのである、箇は啻に子を生したるが爲めに形體上母としての名稱を附するに止まりて此等の名前は禽獸界でも亦其通語があるであろふと思ふ。私は今母が其要素即ち敎育の有無に係はる利害の一端を述べよふと思ふ。

凡そ母たらん者は其子の丈夫に且又賢くならん事を願ふのであります、如何に情けが淺きものでも其子を愚物となし且又早く殺そふとするものはないのであります、併し無學のために子供の育て方敎へ方を知らない母親は其心が之を期するに非らずして而かも行の結果自から之に似るべき處置をなす事があります、倘し能く考へて大に戒しめなんだときには不人情之より甚しいものはないのであります。

世の諺に子供は育ち難しと云います、けれども子供は本來育ちにくきものではない至つて育ち易きものであると私は考へる、惣じて何物を問はず新に此世に出づる生きたる物は皆元氣が熾にして育ち易いのである、試みに草木の例を以て考ふるときは此理が最も明かであると思ふ、彼の筍又は蕗の臺の樣な新芽に生氣の熾なるものを見ても又其他の草木にても凡そ新芽の出づる處には元氣が集り活潑にして自から發達するの勢は實に隆なるものであります、倘し人が中途にして之を害せざりしならば、すべて芽は立派に成長するものであつて枯るゝよふなことは至つて稀なるものである、人間の新芽とも云ふべき幼兒の成長することは亦當さに斯くの如きものであります、故に彼等は極めて育ち易いものである、但だ之を育ちにくゝするのは實に母親が無學であるからであろふと惟ふ。

百姓が米を作るには先づ稻の作り方を知つて居る、もし之を知らずして耕作したならば稻は乍ちにして枯るゝのである、植木屋が植木を仕立つるには先づ植木の性質を知り之に隨つて相當の術を施すのである、もし之を知らずして培養したならば植木は久しからずして倒るゝのである、一羽の小鳥を飼ふにも夫れ〳〵の學問があり、一疋の金魚を育つるにも又其養い方を聞かなければならんのである、誰か小供に金魚やカナリー

ーヤを預けて其亂暴なる手に飼養を任するものがありましよふか、誰か白人に花や木、稲や麥などを托して其無學なる管理に耕作を一任する者がありましよふか、然るに未だ全く子供の育て方を知らないところの母親が天地間の珍客たり萬物靈妙の長たる處の此貴き人の子を育てんとして居る、實に危きことはこの上もないことであります、夫れゆへに育ちにくゝなつて不幸にして短命の多いのは無論當り前の事かと考へられます。

先づ産前産後の心得は如何

母親の資格



に、おギヤア〳〵と云つて心細げに泣く赤兒は何を求めて居るか、乳は如何ほどの割に飲すべきか、牛乳の良否は何によりて知らんか、乳母は如何にして撰ばんか、着物は如何ほどの温度にすべきか、稍長じで後ち齒の生へる頃の保護は如何に、其頃の食物は如何、夜は幾時間程眠らすべきか、晝は如何なる處に遊ばす可きか、温度何度以上に高まる時は如何に、呼吸の具合變りたる時は如何に、通じが何ほどに變りたる時は如何に、凡そ此等變時に於ける心得は云ふに及ば

ず、時々刻々の間寸分も等閑にすべからざる心掛は實に言葉に言い盡されん位であります、然るに殆んど此等の心掛なき母親が其子を取扱ふときは唯之を害するの外はないのであります、彼の茶碗すら亂暴なる手にて取扱へば唯だ毀すのみである、取扱い方を知らぬ母親の手は亂暴なことでありますまいか、實に險呑な事と考へます、假令其心は蜜の様でも其手は刺の如きものである、觸るゝ處の人は其身を傷ふばかりである、故に何ぞ其子を害せずして止みましよふか、世の多の子供が育ち難きは必竟其母が爲す業であると思います。

英國にて名高き學者のスペンサーと云ふ人が云ふには、世上母が殺すところの子は數十萬あり、たとい殺さずとも母が病氣にするところの子は數百萬ある、又たとい殺さず病氣にせずとも母が手を以て弱くする處の子は數千萬ある、是皆無學なる母がなす業であると云つて居ります、幼兒を喪ふたる母親が死骸を棺に納めて、暫時の間花を供へ線香の烟り細々と立ち登る下に、落涙數行、涙をぼろ〳〵とおとし、袖を濕して歎ずるには噫嘻天道は是なりや非なりや、如何なる無情の風ぞ、此可愛い吾兒を奪ひ去ると云つて居ります、而かも其聲や悲し其愁腸や憫むべしであります、然れとも其子を殺したものは母が怨むところの無情の風にあらず、又母が恨むところの非道の天でもないのであります、實は其棺の上に涙を落し愁くところの母親其人の爲せる業であろふと思います。

此故に假令子を愛すと云ふも、此愛を施すところの實を知らなんだならは却て災いするに均しいのである、母の軟き手は毒刄となり、其優しく抱くところの腕は縲絏の繩となり、其膝は死の床となるのでありましよふ、故に母に無くてならぬのは、母としての親切なる愛にあらず、（此愛は何れの母にもあり）つまり此愛を當然に現はす可き智惠であります、ゆへにルーソーと云ふ學者が申ますには母に要するは單に其愛に非らずして學びたる智惠を備へたる其愛なりと申して居ります、旨き哉この言。

夫れ吾愛子の身體を傷害するは不人情の甚しきものであるけれども、其身體を傷害するは尙忍ばれる、其心を傷害するに至つては最も甚しき不人情であらうと思ふ、抑も人の人たるは其心の立派なる所にあります、心がもし其美を失つて居れば身體が如何に健全なりとも誇るに足りないのである、むかしより相撲取が天下を取りたる事を聞ない、腕力が如何に強く身體が如何に健康なりとも其心が倘し痛んで居れば病人に均しいのであります、されば母たらん人は其兒の身體に懸念すると同時に亦其心の敎育の上に注意せなければならんのであります。

然るに母が此事に注意せざる一層甚しいものがあります、夫れ小供には小供の心がある、ゆゑに此心を遇するには之に相應したる一定の處置法に據らなければならん、後には均しく大人となる可きものなればとて初より大人の心を持成す可き法を之に適用するのは、喩へば稻は後に米を生ずるものなればとて初より稻を煑て食はんとする樣なものであります、必竟時を知らざるの愚であると思ふ、玆に一例を以て申せば、子供が二六時中、朝から晩まで遊戲奔走するを見て人は之をアソビと申ます、元來遊びと云ふものは必しも良しい事ではないけれども此所謂遊びは大人に謂ふ心の遊びとは全く意味を異にすることを知らなければならん、大人の遊びは眞の遊びにて仕事でない、けれども小供の遊びなるものは、其仕事である、其勉强である、其神聖なる勞働であります、宛ら是れ學校にて書物を讀み議事堂にて會議をなし職工が其工場で仕事をする樣なものであると思ふ、故に小供の遊を妨ぐるのは其勉强を妨ぐるのである、然るに之に反して其遊を助けて之を善きに導くは其學問を善きに敎ふるのと同じことであります、然るに母は此道理を知らず、子供が遊び奔走するのを見て之を唯だ無益のアソビと思つて居ります、此誤解からしてさま〲の過を生ずるのであります。

賴山陽が幼き時は姆に負はれて、夜、月を見て指して、あれは何であるかと問はれました所が、姆は當惑して

其答が曖昧であつた爲めに、山陽は愈々不審を起し、ます／＼疑ひ遂に庭に下りて泣いたと云ふことを言い傳へて居ります、斯樣に凡そ人の幼稚なる時は常に事毎に質問するものであります、試みに幼兒の手を引き又は之れを背負ふて、外に出でゝ草や木、家や生き物など樣々の物を見すれば、幼兒は其見る物毎に目を圓くし一々不審を起して之れを疑問することでありましよう、斯の如く其の問ふのは學問であります、其熱心に問ふのは勉强の熱心なのであります、人がもし此由緣を知りて一々親切に答へたならば、彼は益々勵み愈愈多く質問することであろう、是れ彼の學力の大に進むことゝ知らなければならん、然るに世間通常の母は此の道理を辨へず、子供が一々聞かんとするをませたりとしオコシヤなりとしウルサシと云つて居ります、遂には叱て擯斥するのである、是れは幼兒の心を知らずして其折角に起りたる勉强心を根から挫くのと同一であります。

又幼兒は人の同情を得んとを欲し升、新らしき花を見付け不思議なる虫を見當りたる時杯は、大聲を發し周章しく馳せ來りて母親に告げる、此時母たるものは假令其虫が詰らんものでも、又其花が珍しくないものでも、其子の心を察して深く之に同情を表して諸共に珍重し喜ぶ所の心を現はさなければならんのであり升、然るに母は其道理を知らざるが故に、冷淡に之をもてなし益もなきことをなすなと言はぬ斗りに一度見て再び顧向きもせないものがある、此時子供の失望は如何でありましよう、失望とは勇氣を殺すとであり升、彼が珍しきものを見出んとするの心が之にて挫かる、即ち其勉强の心を中折せらるゝのであり升母は斯くの如くにて知らず識らず其子の勉强心を傷ふのである、其子が七八歲となれば小學校にて怠り、十五六歲とならば中學校にて惰けるのである此時に至りて母は其子の怠惰なるのを責むるとも之を怠惰にしたのは即ち其母當人にてあるとを覺悟せなければなりません。

或人が曰ひ升には、子供が人形を毀つのは、生理學者が人躰を解剖せんとするの心に均しい、子供が障子に

穴を明けて窺くのは、天文學者が望遠鏡にて天を窺ふの心に均しと云ふて居り升、這は眞に能く子供の心を穿つた言葉であり升、子供は眞面目にて爲すことを人に笑はれ、勉强して爲すとを人に妨げられ、善心にて爲すとを人に叱らるゝ、而して此人と云ふのは大抵は其母親である、斯樣にて其子は後々情が曲り心がひがみ氣力の挫けた人となるのであり升、而して斯くするのは大抵其母親であり升。

實に母が子供を愛する所の愛と云ふものは天地間に遺る唯一の誠てあり升、其愛は蜜よりも甘く眞珠よりも貴い、故に誰か其愛の切なるとを疑ふものがありましようか、無いのである、然れとも學ばぬ所の愛は愛なきに均いのであり升、母は斯樣にして其愛兒の体を傷け、又其心を害ふのである、子を生むものは母である、けれとも之を殺すのも亦母である、唯た之を生むとは犬も豕も能くするのである、犬豕の出來ないのは之を教育するとである、然れとも之を教育せずして其靈を殺し殺したる靈を懷かせて只た朽ち果つべき肉体をのみ與ふる所の母は遂に犬豕と相かはらんのであると思ふ。

必竟其過の源は學ばぬ故である、故に母たる人は生理學心理學教育學等を知らなければならんのである、之を知らんには一通りの學問を修めなければならん、此學問なき女子は假令縫針の道を能くし料理に精くても母たるに適せない、又資格がないのである、多少恰好せざる衣物を着ても身体に害はない、又多少味が惡くても料理は尚は忍ぶことが出來る然れとも生理心理教育を知らずして其子の全身全靈を殺すには比べられんのである、要するに女子には一通りの學問をさせなければならん、妻たり母たらん人は一通りの學問を知らなければならん、此用意なくして娘を嫁するのは、父母終生の耻辱である、此覺悟なくして妻となり母となるは人を害し世を毒し其一家に災すると實に大なる者である此故に私は、右の如く至極平易に其利害を述べて、母たるの資格を作るに、其要素は教育にありて、女子にして學問なきものは母としての價値なき

ものと斷定して憚らんのであります。

乞ふ世の女子よ、子を持てる母よ、花見遊山芝居寄席又は渾ての無益なる行樂を止めて、其子女をして他日女子たり母たるの資格を作らしむる事に努められよ、左れば君の一家は其末に於て他日完全なる家庭となることであらうと思ふ。

家庭と宗教

藤葉女史

人智開發の上に一部の勢力を有て居升處の宗教的教へが此社會の風俗を善も惡も爲る計では無く、直接に吾人の衛生に關係を有つて居る事が誠に大きう御座い升。

儒教に身體髮膚を毀損する勿れと云ふて有升、第一に身體の攝生を本として無病息災で慾を制すると云ふ事が其根本となつて居ます、之等は今日科學的に論じ升衛生の上に於ても極く必要な事で有りまして、今日と雖若之に反するならば衛生上害のある事は勿論で有升。

佛教の説にも過慾を戒むるは儒教と同じ事で最も欲望する處の人の慾を極點迄至らせない樣に爲ると云ふので、我心に一點の病ましい處の無い樣に勤め升、良心に咎める處がなければ身心共に安かで睡眠食事共に快く、從つて充分なる營養物となつて身体の養ひとなる事が誠に多う御座い升。

クリスト教でも殊に自分の生命を輕じ損するのを以て大なる罪惡として有升、佛教では未來の安心安樂を説き升爲に往々生命を輕ずると云ふ風が有升が、此教では自殺など云ふ事は最も神意にもとつた罪惡として有升、之等は實に社會人類の進歩發達上少なからぬ影響を及ぼす事と存升。

以上は種々の宗教が人心に及ぼす効果の方面に就いて云ふたので有升が、之に反して之と共に起る處の害毒の方も亦決して少ないとは申されません。

○宗教の衛生に及ぼす害毒

昔蘇我氏の時代に始めて佛教が渡來してから幾多の變遷がありましたが、終に今日に至る迄微力乍も依然として猶存して居ます、其間に人心に及ぼした効果も大きう御座いましたが夫と共に害毒を流した事も實に多う御座います之は佛教其物の悪いと云ふのではなくて布教の方法の悪かつた爲で有升。

何人も無病息災で健康を保存し長命になり度いと云のは誰も一様に願ふ處で御座います、併しながら神佛に



依り頼で其目的を達られるものと考へさせたのは實に其法を誤つた一でありますす傳染病流行病猖獗を極めた曉に、神佛の祈禱が何の甲斐が有りましよう、一家の平安を祈るとか安産のお守り札をいたゞくとか實に文明衛生の進歩したる現時に於ても或る一部には今猶之等の事が盛に行はれつゝあります、甚だしきに至りましては斷食、斷物とか寒中に水垢離をとるとか一笑にも價しない様な事をして滿足して居る者も有ます。閑靜なのを以て唯一の療法とする精神病者の枕頭で怪

しい香をたいたり耳も聾せんばかりに聲張り上げて何の爲に祈るので有ましよう。

流行病とか疫病とかゞ盛になりかけますと、神前に捧げた御水を戴くと治るなど丶愚にも付かぬ事を信じて腐敗した水も頓着なく用ふるとが有ります。こんな事は多く其筋から禁じられるのは當然の事で有ります、併かゝる迷信者でも醫師の命令を奉ずるならばまだしも恕すべきでありますが、不幸にして一朝病重く醫薬の効果がはか／＼しくない事でもありますと夫よりは有難い御祈禱の方がよほど勝つて居るとして斷然醫を退けて何の容赦もなく死に瀕して居る病人にいかゞの祈禱をしたりして終に喧々の内に此世を去らしめる事が無い共限りません、之等は勿論其極端の例を申たのでは有升が世間には之に類似した所業は澤山あります

試に彼の有名な成田の不動樣とか笠森稲荷とかへ行つて御覧なさいまし薄暗い何となく陰氣な物悽い斷食堂に顔色青ざめ肉は落ちて骨と皮ばかりの人が枕頭に一の水の入つた土瓶を置いて横になつたまゝ身動きもせられないで呻吟して居るでは御座いませんか實に之等は開けた人が見たら何と感ずるで有ましようか、其當人は夫で有難いのかも知りませんか、こんな事をしては健全な人でも病氣にならずに居られましようか否慥に病氣になつて寢て居るのです、實に野蠻と云ひましようか愚と云ひましようか明治の文明と口癖の樣に云ふて居る側に猶こんな事をして居るとは、誠に歎ずべき事であります。

○迷信の弊害

併し世の中ては之等のいろ／＼の方法に依つて現に治つたと云ふて確な證據を擧げて迷信者が有難がる事が御座います併し之は偶然の事で斯うすれば是非なほるものと固く信じ切れば神經の作用で治する事の有りますのは恰もヒステリー患者が自分の神經からいろいろの夢想を畫いて病氣を善も惡もする樣なものであります又精神に異狀のある人が頭から水を浴びた爲夫が偶然生理的にかなつて病氣が治ると云ふともある或は灸をすへた爲に一時に身体に激烈な熱を與へたが爲め次

第に快方に赴くとか百度詣をしたのが自然身体の運動となつて夫が爲に平癒すると云ふことは無い共限りません併之等は皆其時々の僥倖でありまして生理及び解剖學の進だ今日醫藥の効果の確實なのには迚も及ばぬ事であります。

其他我國の祭日とか祭禮とかに就いて考へますと祭禮の方になりますと大抵一日では無くて其前後數日は業を休て所謂お祭り騷ぎをして種々と衛生に善くないものを食べるとか又處に依つては二日も三日も騷ぎ續けて時々は徹夜などもする事があり升。斯う云ふ事は只衛生上に害のある計りでなく經濟の上にもいろ〳〵の方面に弊害を及ぼすと云ふ事は明で御座います。

祝祭日に飲食をすると云ふ起原を尋ねますに彼の正月に屠蘇酒を祝ふとか雜煮餅七草の粥など云ふのが始でありまして其わけは宗教的迷信から凡ての疫病を拂ふと云ふ意味で食したもので有るそうです然るに今日になりましてはそんなわけは忘れてしまつて何でも之等のお祝には佳味いものを澤山食べるのを以て滿足と致しまして却つて身体を損ふ樣な事の往々あり升のは誠に殘念な事であります。

○祝祭日の惡弊

又昔から祝祭日の食物に付いて危險なのは神佛の前に捧げたお供物を後で大勢の人がわけて戴くと云ふ事であり升、之も一種の迷信で之を食べると一切の疫病除けになるなど丶申しまして多少腐敗に傾いたのも頓着なく食べる事が有ります、幸にして何事も無た時には御利益の有難い處と云ふ事が出來升が一朝之等の人々が何か其食物の中にわるいものが有つた爲に一時に病氣に罹るなど云ふ事が有升たならば如何に靈驗の炳焉かなる神佛の力も之に至つては一向に有難いとは申されませんでしようそんな事は社會の衛生上注意すべき事でせう。

クリスト教にも元より弊害は全くないと云ふ事は申されませんが、日本に古くよりある宗教では主に佛教とか之に似よりのものが多く之等の弊害に比べますれば極く僅のものであろうと思ひますから、此處には主に

前者に付いて述べたので御座います。

家庭小言

溫和清秀なる家庭に養はれたる兒童は心身の調和發達順應して自ら天稟の美性を顯表すべきを以て、その心思快活整秀にして、後來よく事業に堪ゆべき多幸の人たるの素を養ふものなり、性急にして激し易く懶惰放縱にして事に堪へず、終に一生を社會の不具者となり了るも凡てこれ家庭にある日受くる所の感化作用の良否に由るものにして、春風和喧なる林園の花が美はしき實を結び氣候不順にして花時風雨に侵されし枝の實を結ぶこと少きの道理を知らは思半に過ん、家庭整修の輕忽に附すべからざること斯の如し、然れど愛に溺るゝものは嚴に失し父母の性急にして激し易きものは嚴に過ぎて、爲にその中庸を得ること頗る難く可憐の兒孫をして終生を薄幸に沒了せしむるもの世間甚だ多きなり。

左に記する所のもの固より一家の私言なれどもいさゝか家庭の誡となす

○兒童か善良なる心意より爲せる過失に就て之を叱責鞭撻して荒ら〳〵しく誹るは父母のなすへき事柄にあらず、須らく之を溫和にさとすを要す。

○小兒の面前にては醜陋の談話又は野卑なる行爲等を愼むべし凡て無垢なる兒童の心裡には善きも惡きも先入主となりて一生の素を爲すものなれはなり、宜しく潔白清嚴の擧動を目擊せしめてその善美なる天賦の稟性を誘掖すべし。

○起居飲食等は規則正しく習慣せしめさるべからず、かつ喫煙飲酒の如き害毒あるものは勉めて之を排斥し家庭に入らざらしむべし。

○外貌を整齊し身躰を淸潔にするの習慣を造れ、又た居室を洒掃し美しき花卉を以て之を飾り、その心神の開發を導くべし、居室の高潔外貌の整濟なるは大に兒童心身の調和に關係を有するものなり。

○父母の命令の嚴肅にして正當なることを心服せし

ひ。ては尤も大切なる事柄なり。

○玩具は注意して智識開發に有益なるものを供せよ、然れども過度に心氣を勞して却てその智力の萎縮するが如きことなきを謀らざるべからず。

○兒童の行爲にして賞すべきものあれば之を稱讚するに躊躇すること勿れ、凡て小兒は他の稱讚を上なく喜ぶものなれば之を行へば善良の行爲を誘發せしむるの一法に外ならず。

○兒童には充分に睡眠の時間を與へよ睡眠不充分なるに之を喚起するは、その身躰の發育を妨げ心氣の調和を害すること甚だしきものなることを忘るべからず。

小兒の間食に就て

小兒の間食程恐るべきものはなし若し其度を過しなば脾疳の病を起し之が爲に命を失ふに至るべしよし恢復するとあるも(セムシ)と云ふ不具者となりて一生不自由に暮らさねばならず愼むべきは小兒の間食なり。されば小兒に間食を與ふるには嚴格に時刻を定め可成消化し易きものを選ぶべし、乳兒には(カルヤキ)(鹽センベイ)最も適當なり、四五歳以上の小供には色々澤山ある也然ども砂糖を多量に用ひたる菓子は口當りよき故小兒の好む所なれど齒及び胃を害するものなれば與ゑざるを宜とす。

市街又は田舍の町には一文菓子屋とて不熟の菓物黑砂糖製の駄菓子を鬻ぐ店あり、此店前には十三四の小供を主とし四五歳の者及子守女日々群をなし父母に乞得たる錢を以て各々好める菓物を求めて貪ぼり食ひ滿腹せざれば飽かず、之等の習慣は都鄙皆同一にして最も惡しき事共なり、今日は警察も行屆きて不熟の菓物は直に差止らるゝと雖ども、そは最も長じたるものに限れるを以て父母としての目より視るときは食せしむ可らざるもの尙數多あり且つ小兒が此風習に感染するときは長じて金錢を浪費し終には親の異見を用ゐざるに至る、されば父母たる者は小兒をして自ら食物を求むるの惡習慣を防止することに勤めざる可からず

手土産に菓子折を携へ直接小兒に與ふる人あり、之も不宜其故は注意の深き親は小兒に間食を與ふる刻限及制限あるべし、然るに時ならず客人より小兒に手渡しするときは小兒は自己のものと心得如何に云聞すも離さず悉く與へては食傷すべし去とて喜び居る所を無理に奪ふて泣き出すとありては客の手前氣の毒になり親もホト〳〵困りて好意の贈物も却て仇となる可ればば小兒に與ふる者は必ず父母に渡さるべきなり。

宴席などに招かれて至りしときは、匍ひ來る主人の兒に膳の肴を與ふる者往々見受る所なるが、之亦不宜理由も略前と同様也、日本料理なれば口取もの丶内にては先蒲鉾なるべし、然れども歯の充分生へ揃はざる小兒に蒲鉾など與ふるは最も危險也兎角鵜呑して喉に支へ窒息することあり。

筆の序に喉支の治療の御話を申ます或人の話に小兒が食物を喉に支たるときは口を開かしめて、箸を入れ、或は脊を撫で下ても中々支が下るものに非ずか丶る時には紙にて紙捻を製し鼻の穴を擽るべし左るときは嚔と具に支へたるもの出るなり。

家庭科學

牛乳と玉子

人の乳でも子供の生れ立てに出ますものは新乳と云ひまして子供が之を飲みますと頻に下痢を致します、之は自然の生理的作用で母の胎内に居るうちに吸收しました惡い液などを排泄します爲に自然と斯うなつて居るのであります、之と同じ事で牛乳の初產の牛の乳は餘り宜しくありません五六疋生んだあとの乳が最も宜いものだそうです、併十四五疋も生んだ牛の乳はもはや滋養のあるよいものとは申されません。

乳の成分も日本の牛と西洋の牛とでは多少異います日本のものでも東京の牛、大阪の牛、九州の牛、とでは各々分析上異た處があります、東京の牛乳は最水分多く、大阪之に次ぎ九州は一番少ない、其代りに九

州の牛は脂肪が最も多く御座います。溶解した蛋白は東京の牛乳に最も多くチースの部分の最も多く取れるのは大阪であります、含水炭素（糖分）は九州のものに一番多く次に大阪、東京となつて居ます、鹽分灰分は丁度此反對になつて居ます、

之等の性分の多少は、飼養する場所とか食物とかに依つて大變に異つて來るのであります、前の樣に細い性分を一々八ヶ間しく云ふ必要は有りませんが其善惡は主として性分による事でありますから一通りの吟味をする事は極て必要であります。

我國に於きましても一定の分量より脂肪の少ないものは發賣を禁じられてあります、脂肪分の多いものを全乳と申し脂肪を取つたものを脫脂乳と申します、脫脂乳と雖決して賣る事を禁じられては居ませんが併し之でも百分の〇、五より以上脂肪のあるものでなければならんと云ふ事であります、全乳と申しますのは百分の二、七以上脂肪を含だものを云ひまして之より以上は幾何あつても宜しい、東京では殊更に嚴しくして有升で百分中三を含だものを全乳としてあります。

日本の牛は西洋の牛乳よりも脂肪は多く御座いますが搾り出す分量は少なう御座います、若自分の家で乳牛を置いて其乳を飲むと云ふ樣に致しますれば誠に何より安全でありますが之は田舍での話で繁華な都の眞中に居りましては中々斯う云ふわけに參りません、故に止むを得ず危險だと知りつゝ牛屋から取らねばなりません、牛屋では善い乳も惡い乳も一所にまぜて賣りますから、到底完全なものは得られません、大抵牛屋では夕搾、朝搾と云ふ樣にしてあります、夕搾の方は脂肪分は多う御座いますが糖分は朝搾の方に多い樣であります、一年中で申せば春夏の間は脂肪が少なくて秋から冬にかけて最も多くなります。鹽分など云ふものは重に子供の骨をかたまらせるに必要なものでありますから何れの乳の內にも燐酸石灰となつて御座います之等は他の食物の中にも隨分ありますが乳の內にあるものが一番必要な効能のあるものでありますから牛乳の中にも之の多いのが宜しう御座います。

牛乳の性質は中性のものが最善いもので、或時には酸と亞爾加里の兩方の反應を呈する事が御座ますが、之は別に惡いと云ふ程のものでもありません、最注意すべきは酸性とか亞爾加里性とかの一方のみの反應を表はした時。青色か黄色とか赤色とか云ふ色を帶びたる時。苦味。鹽氣等を含で居るものは必ず惡い乳であります。なぜ色が變つたり味が變つたりするかと申ますと、之は皆其中に入つた處の黴菌の作用であります。乳牛の乳房から出たてには先バイキンのない完全なもので有つても之を入れる器物とか搾るのに用ふる道具とかの不潔な爲に夫からバイキンが入込んで暫時の内に一寸立方の乳の内に五六百萬にも達する程多くのバイキンを發見する事があります。又乳のかたまる事が時々ありますが之は其中のバイキンの作用で乳が酸味を帶びて來る時にチースの部分がかたまるので有ます。其他に牛に何か病氣があつた爲に搾つた乳が直にかたまる事がありますが之等は吾々の方では知れませんが、兎に角かたまる乳は飲まないに若く事はありません。斯樣に種々のバイキンなどがありますから、是非共煮立て飲まねばなりませんが、之が又中々面倒なもので有りまして煮たてさへしますればバイキンは死にますが夫と共に滋養分も亦幾分か減ると云ふ説があります、又百度以上の熱に逢いますと其中の糖分がこげて色が惡くなつたりチースの部分が變じて消化しにくゝなつたり致します、又煮立て樣とする時に火のかげんでチースが上に浮いて夫がかたまつて丁度蓋をした樣になつて未だ沸騰すべき温度に至らないのに下の方の熱のもれる處がなくて止むを得ずふき出す事があります、夫でありますからよくかきまはしながら煮なければなりません兎角何かに付けて面倒でありまして純粹の生乳が得られゝば夫程結搆な事は御座いませんのであります。

西洋では牛乳から牛酪乾酪クリーム等を造り出しますが日本では生の乳が良い價に賣れますから日本製の牛酪なとは餘り食べられません日常使ひますものは大抵オランダあたりから來るので腐敗を防ぐ爲に鹽を多く

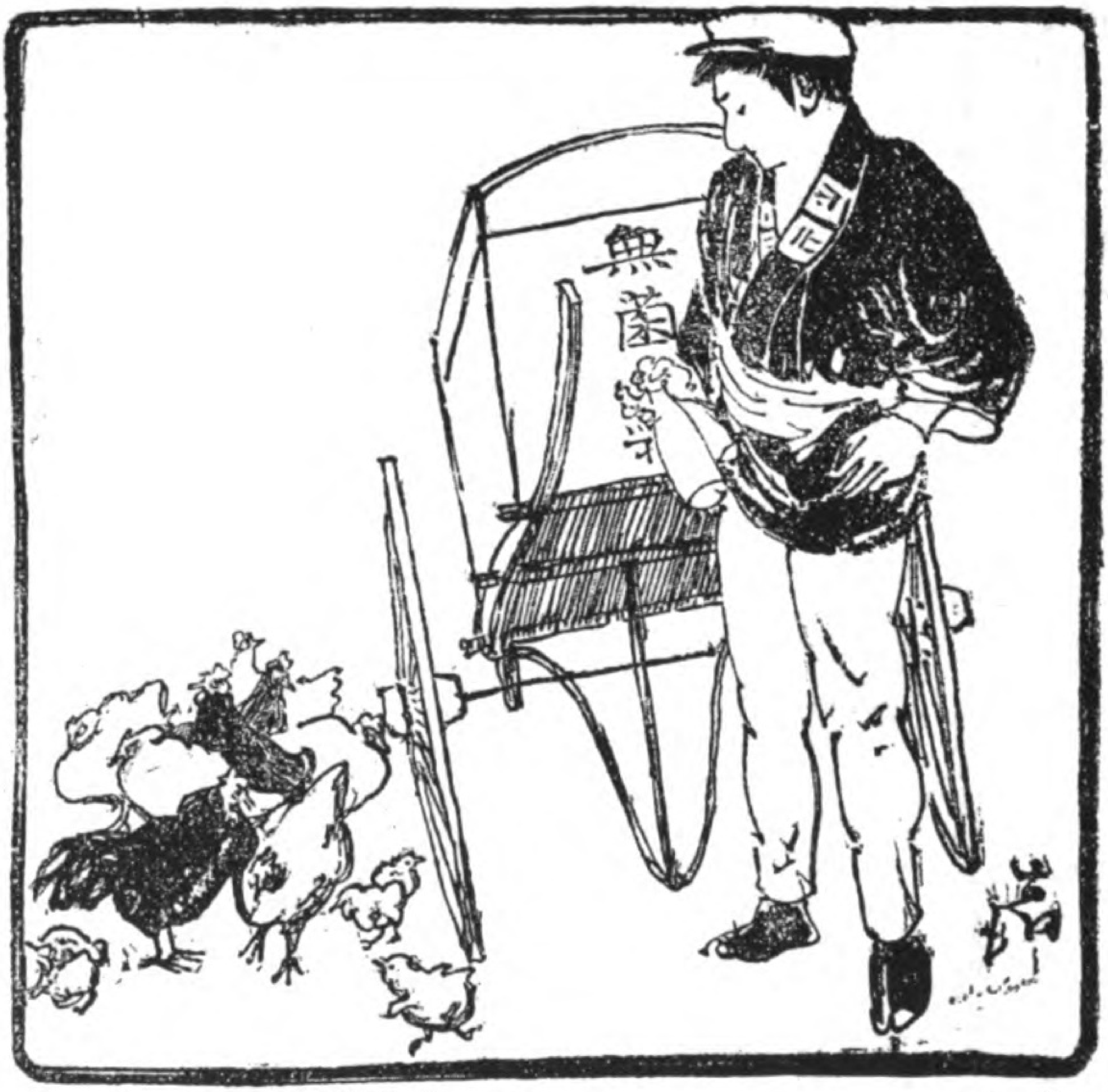
入れますから従つて風味は餘りよくわりません食べます時には鹽出しをしますと幾分か宜しう御座います。

牛乳を分析致しますと

水分	八七、一七
蛋白質	三、五五
脂肪	三、六九
含水炭素(糖分)	四、八八
鹽分	〇、七一

之を一晝夜程捨て置きますと上層にクリームが浮び出ますクリームは

水分	六八、八二
蛋白質	三、七六
脂肪分	二二、六六
含水炭素	四、二三
鹽分	〇、五三



此クリームをすくひ取つて後を其まゝにして置きますとバタを取る事が出來ます

バタは

水分	一三、五九
蛋白質	〇、七四
脂肪分	八四、三九
含水炭素	〇、六二
鹽分	〇、六六

バタを取りました後のものを酪餘と云ひまして未だ其中にも

水分	九〇、一二
蛋白	四、〇三
脂肪分	一、〇九
含水炭素	四、〇四
鹽分	〇、七二

之は日本では餘り御座いま

せんが歐洲あたりではある種類の病人には大變善い食物として用ひられて有ります之が自然に糖分が酸類に變ると同時に其中の蛋白質が一處に集まりましてチーズとなります之には

水分	三九、七九	蛋白質	二九、六七
脂肪	二三、六八	含水炭素	一、七九
鹽分	四、七三		

此後のものも又ある種類の病人に飮ませる事がありま す其他牛乳からコンデンスミルクとか乳酒なども製する事が出來ますが夫に就いては此處には略します。

▲玉子

玉子にも鷄、家鴨、鵞鳥などゝ種々の玉子がありますが鷄卵以下のものは餘り多くあるものでは無くて常食とする事の出來ないもので有りますから此處には只鷄の玉子に就いてのみ申しましよう。

玉子は乳に次ぐべき滋養品で有りまして肉類よりも勝つて居ると云ふ人も有りますが併肉類は肉類で玉子の及ばない滋養の點があり玉子にも肉より勝つた點もあれば劣た點も有りますからあながちに何れが勝ると云ふ事は出來ません故に玉子斗食べたからとて肉の代用をもする位に滋養分を得られるかと云ひますと然はまゐりません、玉子は之を身と殼とに分ちますと身の方には水分と固形體とありまして水分を拔き去りますと後が蛋白質、脂肪分、鹽分とになります玉子を目方に掛けて見ますと全量の一割一分は殼の目方でありまして目方の重くなるにつれて白味の方は多くなりますが黄味は割合に增さぬものであります之を分拆しました結果。

水分	七二、二	固形分	二七、四
蛋白質(白味黄味一所にして)			一一、九
脂肪分	一二、一	鹽分	〇、八三

白味のみを取つて分拆しますと

水分	八六、一	固形分	一三、九
蛋白質	一〇、五	鹽分	〇、五

黄味のみを見ますと

水分	五〇、七	固形分	四九、三
蛋白質	一二、一	鹽分	一、三

子供を養いますに乳の代りに玉子を食べさしても白味は餘り役にたゝんで黄味が重に用をなすのでありま す、玉子の殻は我々の食物とは成りませんが石灰分が多う御座いますから鳥類の餌として大變に効用がありま す此殻には無數の孔がありまして空氣が自由に出入しますからバイキンなどは勿論幾何でも入る事が出來ます故に貯へて置く時には此點に注意しなければなりません。

之は何して食べるのが一番善いかと云ひますに前には生とか半熟でなければ必ず消化しない樣に思つて居ましたが今日では人の体質に依つてよく煮えたものでも完全に消化する事が出來ると云ふ事です併一般に云ひますれば生よりもよく煮えたのよりも半熟が最も安全であります。

半熟を造りますには白味は六七十度でかたまりますが黄味は七八十度でなければかたまりませんから此考へで煮なければなりません。

前にも申しました通り玉子の中へは自由にバイキンなども出入しますバイキンの中には蛋白質を分解させる力を有て居るものがありまして此時には蛋白は變じて硫化水素が出來ます之が出來ますと破つた時に非常に臭氣を感じます少し出來たのでもゆでゝ後に黄味と白味との間に青色を帶びたのは之の出來て居る證據で有ります又黄味が亂れて居ますと光線を通さなくなりますから外から見ても解りますし、中にいろ〳〵の惡い瓦斯などが出來ますと自然に輕くなりますから鹽水に入れて見ると直に浮き上ります。

凡て何にかゝはらず食物は皆然でありますが殊に玉子などはなるべく新しいものを撰擇しなければなりませんが日數を經たものはたとへ腐敗して居ませんでも中には巳に生活力の止まつたものなどありまして滋養分のないものとなつたのなどありますから注意をしなければならない事であります。（藤葉女史）

皇孫兩殿下の御近狀

（箱根御避暑前の御模樣）

▲御遊戲と御體質

淳宮殿下は日に增し月に榮ゆる園生の若竹の如く御麗しくも御發育遊ばされ御體重も御降誕後滿一年二ヶ月として、御珍らしきほど御重く渡らせられ且つ御壯健にましまして醫藥を用ひ給ひし事なければ侍醫もたゞ御脈などを拜診するに止まるとの事なり併し御言語は未だ單語をさへ御發し遊ばさるゝにいたらず物を召させらるゝ時は「アーッ、アーッ」と仰せらるゝ計りなりされど御智慧のつかせらるゝ事は昨日よりも今日といふ御有樣ゆゑ御傍にかしづく方々がいと甲斐々々しき次第なりと打喜び居らるゝも理なれ、而して目下は御意に委せて御匍匐し給ふにまかせ奉つるに時々は玩弄箱もしくは御椅子の如きものを御賴りとして御嬉しき面地にて打立たせ給ふのみならず御笑顏の美くしき事中々なり、同殿下は御齡弱の御事とて別にこれぞと申し上ぐる程の御事柄はなけれど御體質の御すこやかに渡らせらるゝ丈けいと御活潑なる御氣象にて折り〳〵は御兄君に當らせらるゝ廸宮殿下の御遊びを御妨げさせらるゝ事なきにあらねど御優しき御兄君の御慰諭によりて直ちに御鎭まり遊ばさるゝとなり。

▲御居間と御附

又兩殿下の御居間は遙に目を放てば品海は指呼の中にあり近くは宏壯なる伯爵邸内の庭園を控へ西南に面して日當りもよく空氣の流通も完全なる三十疊の一間こそ兩殿下の嬉戲し給ふ御居間と定められ御器具の配置床の御裝飾に至るまで御養育上の注意殘るくまなく御寢間としては別々に二十疊餘の一間を用意しありとぞ、兩殿下ともに御年齡に伴ふ玩弄物の御好みはあれど其種類に至りては舶來品和製の區別なく大抵の珍らしき弄具をば備へさせらるれど危險なるもの着色したるもの(色の落ち易き)破壞し易きものなどは一切御取寄せ遊ばさゞる事となりをれり、侍醫にして兩殿下に近侍し交代に拜診するは醫學博士弘田長、加藤ドクトル、小原賴之、長田重雄の四氏と決定され御附の看護

婦には迪宮殿下の御專屬にて西野のぶ子、高木某の二人、淳宮殿下の御專屬は田中のぶ子、南やす子の二人共に二十一歲より二十五六の婦人なり然れども萬事に拔目なく近侍するは流石に數ある看護婦中より選拔せられたるものといふべし。

▲御飲料と御就寢

迪宮殿下は「コンデンスミルク」淳宮殿下は牛乳を召し上らる丶御事とて別にこれぞといふ御飲料を望ませられず餘りに御運動激しくして御咽喉の乾かせ給ひし時は少量の白湯（伯爵邸內の掘井戶より酌上げ煮沸せしもの）を御勸め申すばかりなり又兩殿下とも邸外へ御成あらせらる丶時の外は御意に叶はせらる丶に委せて御洋服御和服の孰れとも極らず昨今に於ける御洋服地は大抵「ピケ」或は絹更紗の類を用ゐさせられて御美くしく御輕裝に御仕立を命せられ又御和服の方は明石上布などに限らず白或は淺黃の毛斯倫地もしくは大縞の浴衣などをも召させられ白縮緬の兵古帶もて御身輕く御締め遊ばさる丶事なるが兩殿下の御寢あらせらる丶御模樣、且つ御寢具の事など如何にやと洩れ承はる所によれば御寢間の備後疊には緣の赤き緞子（大凡幅四尺長さ六尺にして中に薄き綿を容れしもの）の薄き敷物を擴げ其上に御敷蒲團金襴もて作りしものを載せ御掛蒲團としては佛蘭西より舶載せし毛蒲團をうちかけさせられ其中に白羽二重の御夜着を召させられ御安くと御寢に就かせらる丶さま最と愛でたし而して御寢間に擴げらる丶御蚊帳は大きさ九坪ばかりの麻の撰糸もて製出したるものにして御夜伽の方及び御附の看護婦は共に其御蚊帳の中に近侍するなり每朝御起床後は御室內御邸內の御運動などに半日を費やさせ給ひぬれと御中飯終りてよりは適宜の時を隔て丶御午睡に就かせられ午後三時のお八ッ時まで御安眠遊ばさる丶事御常例となり居れり。

▲御避暑

淳宮殿下の御誕生後御乳を勸めまゐらせし中村泰子は先頃健康常ならざりしため御暇を賜はり現在に至りては御子幹子（二十六）が一日三回宛これを勸めまゐら

すとか又昨今は炎熱熾くが如き折柄御避暑の爲め豫記の如く兩皇孫殿下には七月三十一日新橋驛を御發車遊ばされ御養育主任川村純義伯夫妻及び加藤、弘田の二侍醫、兒玉わき子、同千代子、御附の四看護婦御乳人等を隨へさせられ箱根宮の下なる富士ホテルへ御成あらせられ來九月下旬頃まで御滯在の御豫定なりと承はる（横濱貿易新聞より）

夏季小兒の養生

呉々も注意するのは小供が病氣の時に、往々召使なんぞに小供を托して醫師の所へ診察に遣す事がありますが、これは誠に惡るい事である。斯う云ふ時には成る丈け小供に始終接近して日常世話をして居る所の母親が伴れて來るがよろしい。大學の病院なんぞでも能く而う云ふ事があるが、病兒の容體なんぞに就て質問しても、女中は奥さんに聞いて來た事を云ふ丈けで其他の事は委しく知らんからして、夫れがために醫者が參考を取るのに甚だ困ることがございます。病兒の母は成るべく要事を繰合せて自身に伴れて來て充分に容體を述べる事が必要でございます。斯う云ふ事は小供の言語が不自由であれば、それ丈け尚は必要で御坐います、いくら醫師だからと云つても神樣で無い以上は述べて吳れぬ事は分からぬから、最も母親の心得て居らんければ成らぬ事でございます。恰かも裁判官が一人の罪人を糺すのに、多くの證人や證據物を捕へて、夫れに依つて裁判をすると同じに、醫師も多くの證據を取つて夫れによつて診斷をするのであるから、能く診察をして貰ふと思ふならば、詳らかに成るべく餘計病氣に就ての證據物を醫師に示すことが必要でございます。又素人方が一番困るのは、小供が急に熱を起した場合なんぞでございますが、其時に素人には、どう云ふところから其熱が起つたかと云ふ事は分らぬからして斯かる場合には取り敢ず醫師を迎へて診せるがよろしい、而うして醫師が來るまでのところは靜かに寢かして置いて頭腦でも冷やして遣る位の事より外は仕方

が無い・若し其間に何か食物でも欲しがつたならば、牛乳とかスップでも與へる位にして置くが宜しい。小供と云ふものは、五歳位までは割合に多く菜を食ふものでございます。夫れ故能く方々の阿母さんから宅の小供は誠に御飯を食べませんで、お副食物計り多く食べたがつて困ると云ふ訴へを聞きますが、これは少しも差支は無いと思ひます。一般に小供と云ふものは、飯は餘り食はんものでございます。副食物でも野菜物は大抵なものは食べさせても差支は無いが、肉類は或る年齢に達する迄は用ひぬ方が宜しい。成るべく魚肉の軟かい消化の宜しい、新鮮なものを選んで食べさせるがよいのです。畏れ多いことで御坐いますが、皇孫殿下なども未だ獸肉は少しも差上げませんで、魚肉ばかり上げて居ります。淳宮殿下の方は未だ御幼年で御出に成りますから、乳を多く差上げて居りますが、御兄宮の方は一日に牛乳二合位のもので、あとは御飯を一日に四度召上ります。其間には少な宛極く輕い消化のよろしい御菓子を召上ります。兩殿下共大變御智慧付が御速かで御坐いまして、お言葉の御發育よりはお智慧のお發育の方が非常に早いやうに見上げます。

（國民新聞弘田醫學博士談）

夏の食物

▲夏の食物　夏になると毎度お尋ねのあるのは何う云ふ食物が衛生にかなうかと云ふ事であるが夫れを尤も簡單に説明すれば「腐り易いもの丶腐らないものを食べる」と云ふ事に注意するのが肝心だ例へば玆に松魚の刺身がある之れは松魚の煮付けよりは腐り易すいが腐らない内に食べれば滋養もあるし消化も宜い又煮附と生節では煮付が此定義に當箝つて居るし生節と鰹節でも其通りだ斯う順序を立て丶考へて見れば何の食物でも極く見易い道理であらう松魚ばかりではない外の食物でも其通りです。

▲鹽魚と豌豆　鹽にしたり、乾した魚類を直に燒いて食べるものが多いが之れも間違つた咄だ一体鹽にし

たり乾したりするのは運搬や貯藏に便利なる爲めで其儘食べきものでない先づ水へ注けて柔にし充分鹽出しをして夫れから料理を仕なくては非常に消化を害する棒鱈や鯡を水に注け柔にしないで食べるものはないが鮭の如きは鹽にした儘食べる那れはモー少し料理の仕方もありそうなものだ豌豆なども食物としては滋養分があるが上の皮が硬くつて消化が悪い其皮を取るには一度ザッと炒つたら直樣夫れを桶へ入れ湯を掛けて其儘置き暫く經つて手で揉むと上の厚皮は取れて仕舞う斯樣にすれば至極消化し易くなる。

▲果實と菓子　果實に就ても注意しないと子供や老人は之れが爲め下痢を起す事が往々ある東京に居て新鮮な果實を食べようと云ふのは無理な譯で多くは未熟なものを木から取り田舎から運搬し夫れを東京の果物問屋の手で熟させる故眞の旨味はない木で熟したものでも子供や老人は煮て食べないと身體に害があるから況して未熟なものを無理に熟さした果物などは煮て食べるやうにしないと衛生上甚だ宜しくない菓子も近頃のは餘り砂糖が利き過ぎて澤山與へると子供には害になる殊に歯を損傷る事は夥だしい其の譯は糖分質が唾液に合つて乳酸となる乳酸は歯の琺瑯質を溶解する性質をもつて居るから夫れが爲め歯は自然と缺損て仕舞う「ワップル」でも菓子屋で賣つて居るのはジャミの分量が多過ぎるがモー少し衛生法に叶つた菓子を製造するやうに仕たい併し餅菓子などは砂糖を利かせないと腐敗し易い砂糖は一種の防腐劑であるから夫れで甘く仕過ぎるのだらう菓子は成る丈甘味の輕いビスケット製の物を選で子供に與へる樣に注意するが宜しい

（足立軍醫監の談）

脚氣と脂肪食

近頃の海外通信に依れば諾威學術協會大會の席上ユーヲエルマン博士の調査報告に次で脚氣の豫防方法として同會に於て決議せる條項に

第一　鑵詰の食物を食用とすることを禁ずること

第二　温暖なる氣候中は縱令僅少なるも脂肪性食物を

取るべきこと

第三常に馬鈴薯其他新鮮なる野菜及果實類を食用となすべきこと

を報道したるが此決議と同一なる學說は本邦に於ても狩野病院長狩野謙吉氏が數年來唱來りしものゝ由にて氏は既に昨年四月中第一回日本聯合醫學會に於ける脚氣病の討論に就き主張したる趣同氏の說は脂肪食減少が脚氣の原因を起すものなりと云ふにありてそは本邦人は歐米人又は支那人に比して脂肪食に缺くる所あるは明かなる事實なるのみならず支那の如きは晋より明に渉り脚氣病の多かりしこと當時の醫籍に明示しある所なるにも關はらず今日に至り殆んど皆無と云ふ程なるは其食物の變化に依るものなりとの（歷史上の考證に確定せぬ所あるも一變したるの形迹は充分なりと云）觀察を起因としたる研究にして脚氣病の豫防として相當の脂肪食を勸め治療法としては脂肪の食用及び注射に兼て下劑を投ずるを以て有効なりと論斷し爾來實際に就て研究中にありしに今亦海外の博士が此說を爲すことを耳にするは頗る愉快なりと

市內中等階級の家計

東京市本郷區某

一金六拾貳圓也

內譯

此家族八人夫婦に小兒四人（一人は學齡兒二人の一人は哺乳）妹一人下婢一人

金拾二圓	家賃	金參圓	衣服費月割
金拾圓	米代	金貳圓貳拾錢	保險料月割
金貳圓	鹽噌砂糖	金壹圓	物品損料月割
金壹圓八拾錢	薪炭石油	金貳圓	交際慈善費月割
金貳圓	下婢給金	金參圓	小供四人貯金
金四圓五拾錢	魚牛肉	金貳圓五拾錢	妹月謝學校費
金參圓	野菜類	金貳圓	新聞雜誌
金參圓五拾錢	小兒用品菓子	金五圓	主人小遣車代
金壹圓五拾錢	牛乳鷄卵		

附記　右家計の主働者は官吏にして一定の俸給の外臨時に收入なしされど時々旅費として不時の收入あり又年末の賞與等あれば是等は特別會計として貯蓄し避暑等遊樂の費となし又は不時の用に供するものなりとありたり。

密かに案ずるに右は中等階級の家計として見積必ずしも裕かなるも

のにあらざれど各種の項目に就て二割乃至三割位は減せらるべしと考ふ是を減じて貯蓄の部に繰入らるべきものなり、

同上（其二）

一家族七人夫婦、小供三人（一人は學齡兒一人は幼稚園一人は哺乳兒）下女二人

一金八拾五圓也　一ヶ月分賄費雜費として受取

一金八拾參圓八拾四錢　一ヶ月分支出

内譯

金七圓二拾錢	地代	金參圓	菓子代
金四圓五拾錢	諸税家屋保險料	金參圓七拾五錢	牛乳
金九圓	米代	金壹圓貳拾錢	新聞雜誌
金參圓五拾錢	薪炭費	金六拾五錢	點燈料
金四圓參拾錢	下女給金	金五圓	子供三人貯金
金貳圓七拾錢	雜費	金參圓	主婦小遣
金參圓拾五錢	（子供二人小遣及玩具）	金五圓	交際費
金參圓貳拾五錢	車代	金貳圓貳拾錢	二兒月謝
金八拾四錢	石油	金六圓參拾錢	衣服費
金貳圓七拾錢	（醤油、味噌、茶、砂糖）	金貳圓拾錢	備品費
金六圓五拾錢	魚、牛肉	金四圓	青物果物

評　此家計は、主人より給料として受取られたる金額にて支辨せらるゝにて、切りつめおれば餘裕少きは當然なり。其内にて尙は子女の貯金の用意あるいとゆかし。唯願ふは、此主人たる人、一切の收入を夫人の前に投出して、夫婦相與に家計に注意し以て貯蓄の增進を努められんことを。（愛國婦人）





季節總菜料理

附 手輕西洋料理

○カレーの料理法

「カレー」は原來辛味なる香味の名にして熱帶地方に産する二三の植物の種子に胡椒又は唐辛子などを加へ炒りて粉に製したるものなり扨「カレー」料理に用ゆる肉は何品にても總て皮を剝ぎ骨を除き脂肪分を取り去りたる上肉を賽形に切りて用ゆべし、又是に用ふる飯はなるべく軟らかめに炊きて冷へざる中に出すべし又その盛方は深き皿に盛りて其の傍らに「カレー」を注ぎ匙を添へて出すべし又飯のみ皿に盛り「カレー」は別の蓋ある小さな壷に入れ大匙を添へ飯の皿にも匙を添へ隨意に掬ひ取る樣にして出すもよし

○醬汁の拵へ方

「ソース」は食物に香氣を添ゆる爲めのかけ汁にして肉汁より製するもの牛酪より製するもの果實より製するもの又蔬菜より製するもの等其種類頗る多く孰れも種々の品々を調和したるものなり、扨てその製法はバタの新らしきもの十匁を「ソース」鍋にて溶かし少し火を遠ざけ四匁五分ばかりの饂飩粉を少しづゝ加へ匙にて能く攪きまわし



水二合或ひは牛乳を注し食鹽少しく程を加へて始終かきまわし四五分間ほど沸騰さすべし是れを臺としていろ／＼のものを調和して諸種の「ソース」を製するなり

○醃藏牛肉の拵へ方

三斤バカリの牛肉を同じ程の厚さにして三片か四片に切り鹽を充分に全體に擦り付け置き肉の隱るゝ程に水をさして鹽を入れ、鹽の入加減は生鷄卵を一個その中へ入れ浮上る位まで鹽を加ふべし又、此中に硝石の粉を小匙に一杯ほど加へ能く攪きまぜて後に肉を其中にならべ、其上に板を置き、重き壓をかけ凡二十時間程たちて其の鹽水ばかりを鍋に取りて沸騰せしめ而して充分にさまして又元の器に戻し壓を元の如になし、八九日の後に至り肉をソース鍋に入れ水を其肉の隱るゝ程に入れ一時間半ほど文火にて煮るべし、煮へ熟したれば火より下して肉を切出し冷むるを待ちて小口より二分位の厚みに切り四片か五片ほどつゝ皿にもり芥子丼にオランダ芹の嫩芽をよきほどにそへて出すべし

○蝦のあへ物

湯掻きたる蝦を薄く切るか又はさきて松茸牛蒡、百合根生麩など見計らひ、取合せ共に黑胡麻にてあへるなり是を黑あへといふ、又白あへ雲丹あへにするもよし、白あへには豆腐四分、白味噌三分、白胡麻三分の割合にて砂糖少し入るなり、雲丹あへは雲丹を其儘にてあへるか又かたければ酒にてとくべし

○巻き鯛

鯛の皮を引きて身を二枚にすき卸し、裏表とも鹽を能くふり板にておし付小石の重りを置き扨取出して水にてあらひ布巾にて能く拭ひ乾かして右の上になりし身に玉子の白身を塗り葛にまんぢう粉を等分に混ぜ又右の鯛にも引き少しふりかけてくろ／＼と巻ききつしりとつめて竹の皮にて巻きその上を藁にてくゝり蒸すなり。勿論小口切にして用ふべし

○初秋附合料理

例によりて初秋の附合を記さんまづ▲膾ならびにおさしみは○鯛細づくり○鯵脊こしいづれも白瓜せん三杯酢にて▲煮物として手輕ろきところ○茄子のつり出し○新芋のうま煮○鮑のふくら煮などよし▲汁は○新芋そら豆、○赤貝ひ冬瓜の面とり○泥鰌の骨拔○燒あゆ○鮑うす切等▲あへ物には○胡瓜もみ唐がらし味噌にて○藤豆ゆでゝ木の芽味噌○芋からごま酢等▲浸し物は○ぜんまい辛酢○藤豆黒胡麻あへ○燒茄子胡桃醤油▲揚物は○紫蘇の實○新生姜の根○茄子皮むき○藤豆等

○鮹の柔煮

鮹の腸と眼珠を拔取り脚を一本宛割り掛けて股の節即ち俗に鳶烏と稱するものを取除き又ヌタを水にて能く洗ひ去り脚の太き所は五分位の厚さ細き所は適宜に切りて敷笊を敷きたる鍋の中に入れ其中へ味淋を差して蓋をなし鮹の嵩ほど煮詰めたる所にて醤油を少し落して味を附け夫より鍋を下ろして冷めたる後盛出すべし

○蜆と辛の吸物

田舎味噌五十目ならば水五合割り沸立ちたる時鰹節を掻き入れ此汁を毛水納に掛けて別鍋へ漉入れ之を又沸立て其中へ能く研ぎたる蜆を落し椀に盛る時其中へ水にて溶きたる粉辛を箸の先に附けて落すなり

○鱚の酢作り

鱗を取り頭を落し夫より三枚におろして腹の薄肉を切取り薄鹽を當てたる後小骨を拔取りて水にて洗ひ一寸酢に浸して爪にて皮を剥取り肉を笹形に作りて器に盛る汁は味淋一合を五勺に煮詰め其れに酢五勺と醤油少許りを割りて前の笹形の作りに掛け山葵を添へて出すべし

○南瓜の煮附

南瓜を能く洗ひて適宜に切り之を鐵鍋に入れ其南瓜の嵩ほど水を差し砂糖を少し入れ落蓋をして煮附け大略汁の詰りたる時醤油を節く割りて暫時煮るなり但し箸にて攪運すべからず取上ぐる時には杓子を片手に持ち箸にて南瓜を寄附けて上ぐべし是れ南瓜を崩さぬ用心なり

○冬瓜味噌漬（以下漬物）

冬瓜を皮ともに斷ち、中實を深くすきとりて、一鹽して輕く押をかけ、

一夜水をとり、そして、布巾で水氣を拭ひ、次に皮を剝きて直に味噌に漬ける、で、味噌の上に水が溜れば、即ち味噌を取りかへ、そして、かういふ風にして二三度も取りかへれば、終に水は出なくなる、さすれば何時迄蓄へ置きても、風味は變らぬものです又金冬瓜といふのも、右のやうにして漬けるが、これも矢張り度々味噌を取りかへれば、永く蓄へることが出來ませぬ。

○花丸瓜糟漬

これは生で直く粕に漬けるのです、すべて生の儘で粕に漬ける時は、桶を二重底に拵へて、其下へ糠を入れ、そして、水を之に汲ひ取らすやうにする、さもなければ粕は直ぐ變味するものであります。糸瓜なども右の通にしてつけるのです。

○西瓜粕漬

西瓜の花落ち未だ若内に取りて、丸の儘粕につける是も花丸漬と同様にして漬けるので、紀州和歌山はこれの名代であります。

○初夢漬

花落茄子の蔕を切離し、甘く鹽押にしたのを、芥子と醤油と白砂糖とで鹽梅した中へ漬けるのですが、餘り永くは貯へ難いものであります。

○鼈甲漬

糠味噌漬の陳い茄子を丸で鹽出し、よく之を絞つて庖刀し、味淋酒を多量にかけて之を浸し三十日ばかりも置く時は、茄子は透き通つて宛然鼈甲のやうになる、そして、風味は奈良漬の茄子よりも一層上品なものになります。

○麹漬

醴麹三枚に味淋一升をかけて、ねかして置き、其中へ干瓜に鹽押茄子、干大根などを刻み込み、又紫蘇の實や、生姜、唐辛などをも少しづゝ加へ、能く漬かつた時に賞味するので、一名これを漬物の醍醐味ともいつてゐます。

○百味加藥漬

これは生姜、茗荷、茸、蓼、紫蘇、青柚子、山椒、蕃椒、など幾品と限らず鹽押にして蓄へるもので、生の品有合はぬ時など、之を鹽出して用ゐるので、料理などの心得あるべき人は是非とも拵へて置かねばならぬものであります。

○卷漬

太い大根を小口から薄くはやし、之をよく天日に干し、そして此一片で以て、細く切りたる鹽蓼、生姜などをきり〳〵と卷き、輪唐辛の帶を嵌め、そして、三杯酢につけるのであります。

○栾豆青漬

夏の土用中に隱元大角豆をとつて、豆腐の滓のよく水氣を絞りて鹽を等分に交ぜてある中へ漬け、そして、成る丈け動搖しないやうにして、蓄へるのです、冬季より春期へかけて鹽出し、唐金鍋で以て茹でれば、其色生の通り青くつて、風味もさのみ變らぬものであります。

夏の衛生

一日醫者

糸左近

▲赤痢病

〔流行の狀態及び余の經驗〕此病は春夏秋冬何れの時節にもあるけれど、其の中八月から十月までへかけて九月が最も多く流行する、であるから日本では九月を殊けて本病の注意時と言つても可い。

本病の流行地は九州四國が第一番で、間々大いなる死亡數を來すことと少くない。其の他の地方にも時に依つては猛烈を極むることがある。東京なども盛んにならうとすることがあれど、都程あつて、其の豫防の仕方が善いから、左程にならぬうちに消えて了ふ。私の實驗談を話しませうに、私が明治二十五年に醫者の資格を得たとき、郷里(越中)へ歸省すると、時は七月であつたが、赤痢は其の端緒を開いてゐて、一日二日と日を經るに從ひ、著しくなり、人心恟々歌唄ふ童の聲も、賤樵夫の木を伐る音も、唯々病床呻吟の聲と變じて了つた、我が村などは、僅か三十三の戶數に對し、六十餘人の患者、二十餘人の死亡數近鄕近邊はこれより酷い所もある、かゝる狀態であるから余に診を請ふもの甚だ多く、余も資格を得たばかりであるけれど、これを見捨るわけにもゆかず、上京の期日を延ばして、研究をし始めた。東雲に星を頂いて出ると三更に月を踏んで歸る有樣、十日餘りの間に投藥した數は千百七十餘人、それでも余は毅然として傳染らぬ、不思議であるから、例の研究心に驅られ、或る朝患者の糞便を自らが自らへ灌腸した、されど何の苦痛も感せぬから、又々往診の途に上り、夜の十時頃歸宅して漸く晩餐をすまし、いよ〳〵夢地に入らうとすると、俄然刺すが如き腹痛を感じて來た、さあ御參なれと之れより自ら治療に取りかゝつたが、仲々の重症で、一ヶ月の間唸り通した。話頭變つて上京してからも今日に至るまで

隨分本病を診察した、であるからかゝる恐しい病なれどこれが治療法についての經驗は左程他醫に讓るまいかと自賛してゐるのである。かゝる自惚話はさておいて、本病は確かに傳染病であつて、一度本病に罹れば二三年は免病質になるらしい、其の證據は余が歸省の翌年も亦前年に劣らぬ流行であつたが、前年の人で侵さるゝものは皆無の有樣で、余の經驗に依れば、三百人について僅かに一人の割合、しかも輕症である。

〔原因〕　本病の傳搬をなすものは、直接或は間接に糞便である。さうして其の糞便中の病毒は近年まで確でなかつたけれど、今は一種の赤痢黴菌であるといふことが醫者社會の輿論となつたのである。其の病毒は食物又は飲料に由つて体内に達するので、空氣から來るといふことは甚だ稀であらう。誘因となるものは感冒不良の飲食衆人の集合などである蔓延の媒介をなすものは、便所、衣服の交換、井水、河水などである。余の鄕里では前に述べた通り、三十三戸で六十餘人、其の翌年は三十幾人であつたのに、それより一里程隔つ某村には一人の患者がなきより其の村人は自慢して「赤痢に侵さるゝ奴は神の罰であるなど」言ふのを他村の者が聞いて、妬く思ひ、或る惡者が其の村人の飲料にしてゐる川の川上に行き、赤痢糞の着いた襁褓を洗つた。すると間もなく其の猖獗を逞うし、戸々到る所ウンウン〳〵の聲を發したである。嗚呼恐るべきは傳染病よりも寧ろ惡人である。



〔種類〕　(一)輕症赤痢(二)重症赤痢及び(三)慢性赤痢の三種である。

〔病狀〕（一）は胃加答兒や腸加答兒を以て初まることもあるし、或はさうでなくて初めより腹痛に續いて便意を感じ、厠にゆくと、血液に粘液を混せた塊り様の物を洩し、其の惡臭紛々として鼻を衝く、或は又夜間惡寒に續いて熱が出で、次に腹痛便意を感じ、どッと下るだらうと厠に走つて行くと、こはそも如何に甚だ小量の粘液或は血便を泄す。もはや濟んだと思つて寢床に歸る。間もなく便意を感ず、又走る、又同じく尠い。又歸る、又感ずる、斯の如く走る、ピチ〳〵唸る歸るといふやうに反復すること二十四時間に二十回乃至七十回にも及ぶ、さうして其の粘液血便を洩すときの苦しさは、恰も肛門を切るが如く、灼くが如く、地獄の責もかくやとあるまじと思はる。人はいざ知らず私の様な生地なしは愧かしながら男泣に泣いたである最も私のは重いので五回毎に玉といふ字を書いてゐたが、其の多い日は一晝夜に十五字を記したである。これに引き換へ小便は甚だ少くなつて、殆んと皆無であつた。舌は白苔を帶びて渇きを催ふす、其の熱のある人は食物を嫌ふけれど、熱のない人は少しも食慾を損せぬがある、斯様に苦むことが三四日又は二週間にも亘ると、厠に行く數が次第に減り、大便は大抵段々黑色に變じ、次に木の葉色に移り、血液がなくなり、粘液が止み、何時の間にか、便が多くなり、遂に平癒して了ふ。この時に至つては食慾進み平日厭いな物も旨くなる、されど此の時に氣を附けないと忽ち元の默阿彌となるものである、又其の最初からの養生及び治療法が惡いと右の様な工合に全快しないで（二）に變ずるものである。

（二）は最初より發ることもあれど、大抵は（一）より變ずるものである。最初より發るものは發熱して甚だしい沈衰の病狀を來し、腹痛烈しく血液粘液を泄すことも數多く、矢張り惡臭を放ち、裏急後重が酷く、舌は煤黑色に變り、眼球は陷落み音聲嘶嗄れ、小便は淋疾になたつかの如き感じを覺え、大便の臭氣は益々甚だしくなり、醫者は其の患者の室に到れば赤痢であるといふ診斷がつくやうになる。すると患者益々衰弱し

遂に往生安樂國に至るか或は(三)即ち慢性赤痢になるのである。されど其の全快に赴くのは熱度漸々下り終に平温に復し(一)の快復期と同じ狀態を以て目出度可祝。

(三)は(一)(二)より轉じたり、或は或る地方には特發することもある。厠に行く數は少ないが臭氣は依然として紛々たりである。さうして其の便は(一)(二)に比ぶれば、非常に稀く粘液及び血液は甚だしくはない、長く病んでゐる間には硬い糞便を洩したり、或は便秘することもある。されど患者は恢復したのではなくて眼窩凹み恰も老人のやうな姿となる故に老人は何と形容しようか死人の樣とでも言はう。否老人は其の死人たることを免がれぬと言つても可い否老人ばかりでなく若い血氣盛んの男女でも慢性となつたら大概は全快せぬと覺悟せねばならぬ。が併し死たい人も無からうから養生に養生を加へて百に一も平癒することを希はねばならぬ。さうして(三)の特徴と言つても可いのは盜汗である、衰弱である、全快するが如くに見ゆるかと思ふと、忽ち病勢進み、恰も濱道を歩く樣な有樣である。其の進むが三なら退くが二、遂に濱道ならぬ三途の川に赴くのである。



〔治不治〕（一）は大抵全快するけれど(二)は百に對する二十は不治(三)は百に對する八十は死ぬ。其の代り(三)は滅多にないのが幸である。併し十七八歳以上四十五歳以下の人で最初より余の治療を受け、余の命令通り守つてくるゝならば(一)は悉く治し(二)は百に對する二三(三)は百に對する十しか死なせぬ積りである。

〔療治〕　これには中々妙藥があるけれど、若しこれを敎へまうして皆樣が醫者の治療を請はないでゐなさる

と、誰も警察に報告する者がないから、或は公衆衛生を妨げんかの恐れがあるから惜いことには、其の養生方法だけに止めておこう。

(二)(三)は固より醫者の指揮を待つより外にない、又之を述ぶるは「一日醫者」を書く主意ではない、そこで(一)の病狀があつたら直ちに二日間の絶食が必要である。この絶食法は大抵の書物にもなく、他の醫者の餘り勸めぬことではあるが、余の經驗に依ると非常な効能がある。二日の絶食をして治療する者と否らざる者とは、其の治療方に就いて大いなる差がある。二日の絶食をして治療する者は其の厠に赴く數が尠く、それで其の腹痛などの苦しみは半分でもない、それから絶食と共に半身浴を行はねばならぬ、半身浴は攝氏四十五度位な温湯に十分間程宛一日五六回乃至七八回行ひさうしてこれは二日位でなく全快するまで、今日も明日もと續くるが可い。これも他書他醫の餘り述べぬことである。三日目からは流動体の食物ばかり即ち生鷄卵三個牛乳一合半位より漸次増し四個五個六個二合三合四合五合に到つて止め、其の他極めて軟らかき米粥甚だ少量を食ふのである。

又フランネルの腹卷は大必要である。これは余に限らず誰も勸むることで、全快後と雖尚二週間位は廢してはならぬ、又全快後は前にも述べた通り、食事に注意し冷水、氷水、酒類及び菓物などは勿論すべて消化のし難い者は一切避けねばならぬ。それから病中は一切運動をせぬ樣極めて靜臥してをらねばならぬ、厠に行くことも可成避けて虎子(便器)にてするが可い。これで大抵攝生法は述べたが、せめては一兩日だけの内服藥を書かぬのも餘り情ないやうであるから一つ書いておきませう。返す〲も隱蔽などせずに早く醫者の診療を受けて、天下公衆のために正道を守り玉へよ。

偖て其の藥は善いのが色々あるけれとも劇藥であるからこゝには之を略し素人の方の買る藥で言へば絶食最初の日

リチネ油　十五瓦

二日目からは

硝蒼　五、〇

之を三包に分けて、一日三回一包づゝ服むのである。
ま、この位にしておきませう。

▲虎列刺病

余は隨分患者を取り扱うたが、虎列刺だけは、唯診察に止まつて、終りまで治療したのは僅に一人しかないその理由は郷里で流行した時は、まだ幼少の折であるし、東京でのは診れば直に届ける故避病院に送られて了ふからであるであるから正直な所を言へば經驗がないから、唯書物上の智識を簡單に說いておかう。

〔種類〕細かに別れば五六通りになるが、素人の方には其れ程の必要がないから、(一)類似虎列刺(二)眞性虎列刺の二つにして說きませう。



〔原因〕本病の原因は類似眞性何れもコッホ氏の發見にかゝる「コンマバチルス」であることは誰も知つてゐるであらう。この黴菌は流動性及び半流動性の營養物に於ては發育するけれども、太陽の光線に曝すといふやうに、乾燥せしむれば、速に死んで了ふ。其の病毒の傳搬、誘因及び蔓延の仕方は赤痢病と粗同じければこゝには管々しく述べぬことにしよう、唯赤痢よりも其の傳染が速かで、しかも確かである。例へば該患者に接したとすれば大抵は傳染するけれど赤痢は比較的傳染せぬものである。

〔病狀〕(一)は下痢を以て始まり、次いで甚だしい嘔吐を來す嘔吐糞便の色は最初は褐色であれども、數回反覆するに從うて、米泔汁の樣になる、これは本病を鑑定する主なるものである、さうして其の排便其の嘔吐は何の疼痛もなくドシ〳〵始まる、さうなると患者は急に疲れ眼の球が非常に凹

み、口の渴きが甚だしく、さうして、二十四時間以上經つと腓腸筋が强直る又極輕いのは、この强直がなくて嘔吐下痢も止み漸々全快に赴くこともある。（二）は（一）より發し或は俄然甚だしき下痢嘔吐を發し、時としては多少血液を混ずることもある。其の色は輕症のと敢て異ならぬが、其の衰へ方は輕症よりは非常に甚だしく眼球の凹は勿論皮膚は冷たくなつ



て彈力が無くなり、唇や爪の色は白くなり、さうして患者は大熱があるとて衣服を脫ぎ、裸体になりたいと叫ものであるこれは實際熱のあるのではなくて、却つて內部の体温が高くないからである。次に舌が白くなつて其の運動甚だ困難になり、聲音嘶嗄れ或は全くなくなり、大苦悶大渴を訴へ四肢は痙攣を起し、これより次第〳〵に精神恍惚となり大抵は八時

間乃至二十四時間で寂滅するものである。余の經驗したと云ふのは、余の朋友で竹内と云ふ人であつたが、其の人は唯一人で、東京は小石川の音羽に小さき一戸を借り受けて、讀書三昧でゐた、或る日余は訪づれて四方山の話をしながら樂しみ笑つてゐた中にアッと叫けんで走る途端蹶いたと思ふ間もなく、早椽側で下痢嘔吐即ち米泔汁様の排泄物は川をなし、水



よ〳〵と叫ぶから、同情に驅られて、氷片を買つて食はせたり、石炭酸水をまいたり藥を飲ませたりして介抱したが、幸に余も傳染せず、竹内も十時間程で衰弱は非常であつたけれど、快復の方に赴い俄かに衰弱した。其の健康な者が俄かに重病に陥り、眼球の凹むことは大袈裟に言へば三寸も奥へ引込んだといふ有様で其の治るも亦早い、僅かに三四分で平然と

なつて了つた、若しこれが今一層重いか或は老人小兒であつたらそれきり斃れたのであらう。

〔治不治〕 ベルツ氏の言ふ所によれば、日本に於ける虎列剌の死亡數は、百に對する六十以上で、或る時は八十九十にも及ぶとのことである。實に恐れても懼れねばならぬ。

〔療治〕 固より第一着に報告して避病院に送らねばならぬが、其の間の瞬間は命脈の關する所大切なる父母や最愛の妻子は捨てらるゝものではない。かゝる場合には何うしたら可からうか、曰く氷片を喫せしめ。

羯布羅　二瓦
薄荷油　二瓦
アルコール　二十瓦

右二十滴程宛一杯の葡萄酒に浮べては飲ますことが必要である。又渇きを訴へたり、牛乳を冷しては飲ますことも覺えておかねばならぬ。其の他いろ〳〵の療法や取扱ひ方は警察醫等の指揮を遵奉すればそれで可い兎に角虎列剌に相違ないと思つたら普通醫よりも眞先に警察に届け出るが何より早道である。何うしても虎列剌の治療は避病院の醫師の方が熟練してゐることは確かである。

右の如く恐ろしいものであるから、流行の徴があつたら、左の豫防法を守らねばならぬ。

一、生水は必ず飲むべからず、假令ひ飲食器といへども、必ず沸湯を以て洗ふこと。
二、寢不足すべからず。
三、家の內外を問はず綺麗に掃除すること。
四、暴食過飲必ずなすまじき事。
五、衆人の集る場所には必ず行くべからず。
六、他所にて必ず飲食すべからざること。
七、新鮮なる物に非ざれば、食はぬことは言ふまでもなく、如何に新鮮なりとも必ず能く煮、能く炙ること。
八、飲食物は必ず蚊帳のやうな物を以て蠅などの入らぬやうにすること。
九、少しでも身体に不快を感ずる樣にあらば直ちに

醫師の診療を受くること。

十、親戚朋友の病氣たりとも、必ず見舞まじきこと

今や九月の上旬、殘暑は尙暴威を逞しうしてゐる。我が敬愛の貴女方よ、右の二つを注意して頂くと同時にこゝに、

誤解し易き九月衛生

といふ一項を書いておきますから、何うか讀んでイヤ實行して下さい。それは

春から七月まで非常に勉强したから、八月中は何の苦もなく海水浴や温泉場で遊び通し、ウント脳を養ひ、九月から大奮發を以て又非常な勉强をしよう。

との一事である。これは大へんな心得違で甚だしい不衛生である。

夫れ脳を使用するといふことは、筋肉を運動させると同じ道理で、猶能く使へば使ふ程發達するものである彼の鍛冶屋の手や、郵便配達夫の足が善く發達するやうなものである。然るに其の鍛冶屋郵便脚夫をして餘り馬車馬的に過勞せしむるか、或は俄に一ヶ月間程お姫様流に遊ばせるかしたならば何れも疲せ衰ろふるは鏡にかけて見るが如きものである。であるから八月休業中と雖も、日々二時間づゝの勉學をなし、九月になつても俄かに復舊しないで、二時間から三時間三時間より四時間といふやうな順々度を高めねばなりませぬ返す〲も馬車馬的からお姫様流と著るしい變化を與へては非常の不衛生である。

百花園の草花

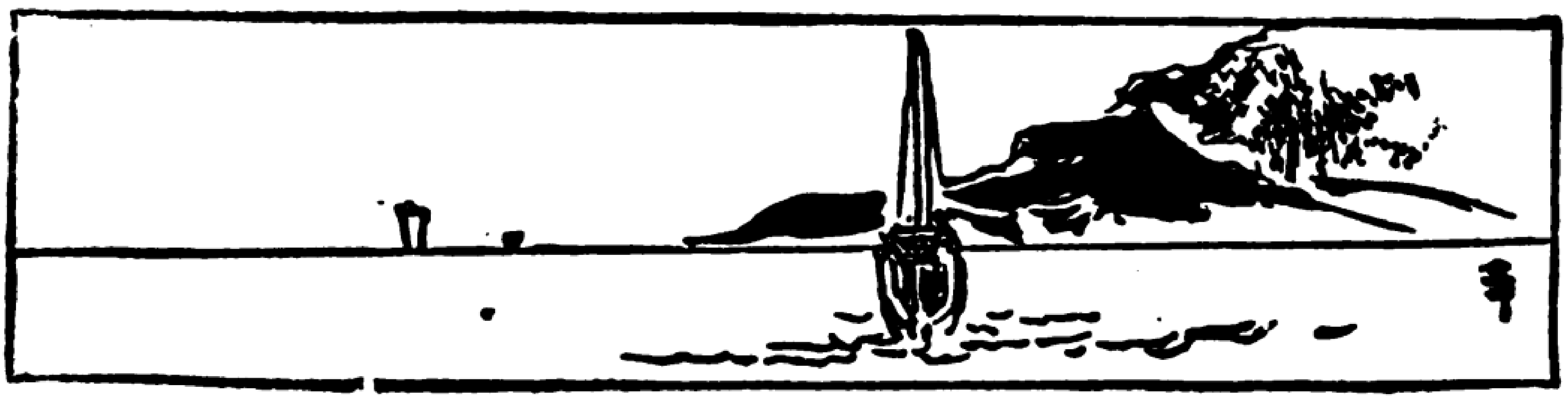
向島の百花園は今や夏草の眞盛りにして秋草も追々咲き初めたり目下なる草花は花魁草、檀特草、日葵、虎の尾、秋海棠、白紫桔梗、鳳仙花、鳥ぜ、姫ヤボシ、風月花、紅槿、白槿、三國草、小車草、浦島草、甘草、姫日葵、ガンピ、水錫梅、夏女郎花、夏ぜ、黄金光、夏萩、宮城野萩、美人蕉、益母草、藤毛糸、夜會草、朝顔、紅白蓮、紫陽花等にして尙芙蓉花、女郎花、葛花等種々の秋草も日を追ふて咲き初むべし。

家庭日記

京都　きよ子

七月三日　最もよく晴れたり朝飯後例の如く庭前にいでそゞろ歩きす父上秘蔵し給ふ鉢植の白薔薇一ツ咲出たりおくれ咲きの花は小さけれど芳しき薫りは涼しき朝風にかよひきていひ知ず心地すがすがし、午前九時改日なれば学の稽古に行、師の君朝の程より風邪の心地とか臥し居給へば見舞いひてすぐ帰り昼前は下女の手傳ひして摂物などする、裁縫ひの久しく来らざるに午後は母上の単縫ひまゐらす例の無器用なるながながにむつかしく二時ばかりにして漸々怪しげなる形に縫ひあげぬ、わが身ながらに情なう思はれぬ、夕方お隣りの富田様より庭内に實りたりとて見事なる杏子澤山頂戴すあまり味よければ下河原の姉上のもとへ少し持たしやり給ふ。五時夕食の用意する、料理、鯛、牛蒡煮付、鯛作り身、瓜鯛うち、山葵、きゝげひたし等。夜少し雨もようして蒸暑し早くより部屋にいり母上絹糸手柄編て日記つけ九時すぎ床にいる

七月四日　河鹿の一しきりなく聲に驚かされて起つればはや五時をすぎたりいつの程よりかいたく雨の降り出して軒の玉水の音しげくあたり薄暗く静閑しる限なし、八時すぎ継物にかゝる雨は少しく小降になりたれどさながら梅雨の如くいと陰氣なり、垣の紫陽花の枝おもしげにうなだれたるさま濡れ色の一きわあざやかなるに餘念なくみる折柄大津の姉上より郵便来る急ぎ打ひらき見しに別



にかはりたる事もなく最後に妾と妹にあて日々なすわざもおほかるべけれど必すしも勉の道ないそしみ給へ折々は女學世界にも投稿してはげみ給ふやうながながに始めより上手にはなれず勤めて書り給ふなといつもながらこまごまとのお示し身にしみて嬉しう思ひぬ。午後裁縫會の香紙継分等来る父上のみゆるしも出たりあすは日曜なり早くよりゆかむと妹の喜び限りなし四時半継物しまひ筆出して母上の御好みにて漁衣一曲弾く此時雨は全く降りやみて西さす夕日の影葉末の露の玉をみがきていとううつくしうみへたり、夜にいりて花子の君来り給ふ、お約束の、画帖、寫眞帖など出し川水画一層賞しまゐらす、くさぐさの御話なし総や會川行の御約束して八時半頃ひ来り帰り給ふ。あとかたづけ終り家庭文庫讀みて十時就床につく今日の調理　朝すまし汁青紫蘇うかし、あじつけ海苔、晝の物、豊あんぺい葛たまり、茄子甘煮、夜、豆腐味噌汁、鯛しほやき、瓜の玉子煮、大根膾あへ。

備前　四宮喜志

七月七日　五時起床　梅雨未だ止まず父上未だ大阪よりかへり来まさず多分神戸なる叔母様の許へお立ちよりの事とうけたまはりぬ昨日よりぬいかけの絣綾の小袖漸くぬいおはる母上いと早かりしと褒め給ふにひそかに嬉しくて雨は終に終日止まず日記つけて九時半就床

七月八日　定刻起床　雨は依然として降りつゞくいかにもあきはてたり下男兵吉の且那様のお迎にとて朝の程より

うろたへなるもなかしくやがて汽笛一聲それおかへりと下駄よ傘よと用意して汽船宿迄で行けば亦々お歸りなくしほ〳〵としてかへる樣笑止とも笑止待ちに待ちたる女學世界今朝來る嬉しさ云はん方なしされど夕食後の樂しみにとて封をもきらず心苦しさ云ふばかりなし晝食後母上の白綾の小袖縫ひはじむ午後六時夕食をすまし直に女學世界をひもとく十時半寢床。

七月九日　五時半起床今日も亦雨止まず益々降る故かいとれずごしたり今日こそは必ずお歸りと兵吉どものさはぎ居たるに流に父上には八日間の逗留にて海上も事無くおかへりありたり直に湯をわかし一同入浴し少し早やけれど晝食の用意にかゝるお土産としての浴衣地柄のよし惡しなど評とり〳〵晝食後は各見し事どもの話しに身入りて裁縫するもわすれ居たるにぞ急ぎ横麻の單羽織ぬいはじむ正午頃より生きかはりし樣なる好天氣となれり久し振りの日和眞に嬉しかりき午後六時ぬい終る夕食後新宅兄上もお出でになりて博覽會の評ばかり知らず〳〵時間たち床に入りしは早や十一時過ぎ。

長野　小林つね子

●七月五日　日曜雨　終日小止みだになくしていと物淋し、蠶の桑にこうじはてたり、幸に隣家にて昨日澤山切り込み置かれたるを五十貫目丈け讓りて貰ふ、午後五時頃蠶四眠にかゝる雪を欺く白妙の肌美しく二寸餘も有らんと思はるゝに首丈ッと高くもたげてあはれ何をか夢む



らん、下男等は納戸にて大麥の穗打をなす（三人にて一日中に五俵剝）今日の長野新聞に女生徒用夏帽子の廣告あり、美代子是非買て頂戴なとサン〳〵だゝを捏れる、父上蠶樣に桑を上げるお手傳しナさうすると乾度上げるからと命じ玉ふ、美代子忽ちいそ〳〵と我等の手傳するぞいと間無し。來信三、發信二。風呂を沸かして近隣を呼ぶ。夜に入りて寒氣をなほね寒暖計六十度となる、乃ち蠶室に四個のストーブを入れて温度を計り十一時過ぎ母上と倶に寢に就く。

●七月六日—月曜—晴—昨夜（午前二時ごろ）我家の廚所の壁を毀ちて盜賊忍入りぬ幸に母上眼をさましたまひて誰何したまふに賊も家の者も驚きて稍々しばしジタバタしたるが下男等の起き出でたる頃は賊は何地行きけん雲を霞の影だにもなし、父上は燭を乘らせて皆々と家の内より外まで探したまひしに賊の慌てゝ忘れ置きけん螺旋錐二挺と懷中洋燈小刀種々の合鍵など最初彼が入りたる壁の下に散亂しあり、家の中をも隈なく改め給ひしが未だ刻限の早かりし爲めにや一物をも損せざりしは先づ不幸中の幸とや云はまし、夜明けて被害屆を差出し程なく受持巡査の出張、近隣の見舞新聞社の探訪員など踵を接して來り御ふた方はそが接待に遑なく、我はとりあへず數葉の端書に顚末を認めて遠地の親戚許に報じぬ。此日は恰かも蠶の安眠中なるを以て斯かる珍事に遭遇して少しも周章せざりき、美代子此日の夕珍らしく螢狩に行かず、定めし昨夜の事のそれかあらぬか物に怖ぢての故な

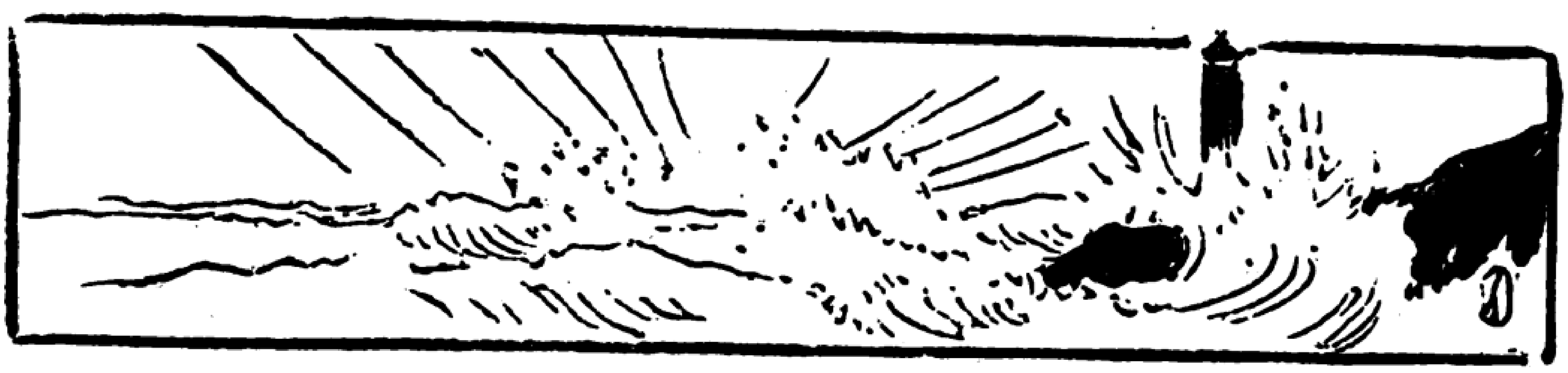
らんと父上は宣ふ、來信四(内電報一)、發信九、女學世界來る、昨日に打て變つて蒸し熱く正午寒暖計八十度を示す、十時就眠。此日二六新報前金一圓郵便爲替にて拂込む。

附記 盜賊の爲に破られたる壁の損所修繕の爲め左官の七造を半日頼み釘及鉄板代金六十八錢賃銀二十五錢を支拂ふ、外に端書十葉を購ふ。

●七月七日―火曜―雨―ふりみ降らずみ定めなくサツトサツと天氣なり、靈未だ起きず、爲に半日の暇を賜はりて久しく訪づれざりし書齋に入る、昨日着の女學世界一とほり目を通せり、記事にては例の大町先生の婦女雜觀、白粉問題、洋行の話、貴婦人の嗜好等殊にうれしく、繪畫にては大公盥最もめでたく、其他とりどりに面白く竹竹に卷を掩ふ能はざらしむるものありき。午後下男等田植の苗取に行く、我は獨書齋にありて女學世界の原稿をものす、夕刻迄に脱稿したるものは抒情文「弟の墓」消息文「姫百合に添へて友に贈る文」和歌「蓮、山居眺望、草雉」各一首宛なり乃ち直ちにポストに入れしめぬ。火燈し頃川中島の伯父上訪ひ玉ふ來意は昨夜の盜難見舞なりと、早速別室に案内して父上母上かたみにもてなし給ひ、我も折々言葉敵となりて遠路の勞を慰め參らす、發信一、來信三。

朱―すし、紅茶、栗羊羹。

夕飯―冷し素麺、さゝげと茄子のつゆ、鯛の煮付、刺身、玉子燒。以上は伯父様への献立なり。



附記 伯父様おいでに付き肴屋より通帳にて一圓十三錢の買物す。伯父様は下戸にてましませば酒屋と爆利とに用はなし。家への見舞に係る金品若干。別に我に「女學生の栞」英代子に吹風琴を賜はりぬ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

上田 成澤堯子

七月六日 曇り五時起床當番終り花菖蒲と美玉桃切けて挿し七時朝食濟む農休を待つて居つて商人業しみにして居つた近在の人此頃の天候惡しきに如何に力を落すであろう午前女兒洋服裁縫弟昨日のシャツ工合極上と喜ぶ自分できたより嬉しい午後待ちに待つた女學世界くる例に依り仕事等手につかない注文した簾戸出來上る父上と弟は夕暮から此戸を閉めて夜は蚊帳をつらずにねむれると喜むで居る美しい様なにくい様な心地がした金魚求める夜急き片付終へて女學世界見る先づ口繪なつかしい卒業生に話す如く覺ね婦女雜觀心にしみ御台所拜見に己が宗を省み撫子の菓子を憐み圖案に浴衣を思ひ刺繍の色を考へ貴婦人の嗜好に面影を忍び才媛飼藻に及び更にねむくない弟は云ふ宅の台所を參觀されたら姉さん進退谷まるであろうとけれど自分だけは免許のつもりである蝋燭掛上に願ひ十一時臥した。

献立

朝 馬鈴薯 煮豆 香の物

晝 みなとあげ 香の物

晩 さわらてりやき わかめ

七日 今日も又曇り目覺れば小弟朝顔の手入に餘念ない又汝に勝たれたか畑に行く菜園に行く朝露深き處新鮮の空氣實に小公園の趣がある野菜に植木皆父上が御丹精であるこゝかしこ胡瓜刻む音がする氣の持様か香もするが此様に丹精の品はあるまい八時片付く午前裁縫お向より梅を頂く來客晝食に魚皆無の爲スチウを出す思ひの外客の喜び一方ならず三度更へて製法を問ふたゆゑ作り方はやさしいが手懸た野菜でなくては此味はないと答へたら客實にと云ふた植込が一入茂る落葉松根つぎ芭蕉目にみゐて延びた湯に入る家人ざるでも持つて行かふかと云ふ其様にゆだる程長くもないに明日同窓會の幹事會を開く通知を貰ふ落雁作る甘味過ぎた洋服出來上り夏帽子初む女學世界に數へられて漬物をするお手傳をした夜女學世界見る日記書き終り寢うとすると末弟夢にかカツコカツコと云ふあゝ忘れた今日彼に下駄を初めて買つてやつたらうれしがつてはだしで持つて歩むで居つた其喜びを夢見て居るのであらう十一時臥した

朝　ごばう太煮
　　大阪漬

晝　スチウ
　　胡瓜もみ
　　やきつけ玉子
　　さゝげ澄汁

晩　ねぎなんばん
　　さゝげ汁
　　當座漬うり

小石川 すみ子

七日 五時起床雨まなくふる女學世界まゐるいと嬉しき事かぎりなしされどいそぎの畢物あればこゝろせかるゝをしひて縫ふつらさ兎角針もおくれがちなるいとをかし午後より料理會へまゐるよし子の君にも御出であるまた例の學校の昔話についおもしろきに氣の浮びて自分の役目の庖丁もつ手ぶりあやしきを見て中よしの親友などわらわる夜になりて今日の献立しるしてそれからゆるゆる女學世界よむまづ才媛詞藻見る佳調なりとれがひし已が腰折うたまぐれ幸ひに秀逸に出らるゝかと思へばいと嬉しきこゝちすいつもながら大町先生婦女雜觀おもしろなかしく拜見し親友寫生文とりどりおもしろしいつにても美文のみなり世にはかくばかり文才ある君たち多くおはし給ふもの哉と今更ながら己が無學なるをかなしみ且つうらやましさ心地すまだまだよみ度は山々なれど兄上樣明朝御國元へ御出立につき何かと用事お手傳して床につきしは目白の鐘十あまり一を聞きし頃今日の調理買物三十二錢牛肉一斤、八百屋十三錢・菓子十五錢・コヽア一罐五十錢

朝　根芋汁
　　生玉子
　　香の物

晝　鰺妻折燒
　　いんげん
　　香の物

晩　トマトスチュ、チツキンチヤプ、コロツケ、キヤベチ巻

八日 雨兄上樣一番汽車にて御出立につき二時より起き御辨當のサンドイッチ造る四時に宅を御出で遊ばす太郎のパーさんいつていらつしやいおぢいちやんにもよろしくと門迄送り行く可愛らしさ五時に皆々朝げ終ゐけふは御祖母樣の命日であるから佛檀はらい樣の一枚手向けゐ十時頃吉田の奥樣御出あり手製の菓子出すよく出來まし



たと仰せられいとむぐるしくきまりわろかりし三時頃雇後の伯母上のもとより御返事まゐる久しぶりにてこまごまなる御文殊しく拜見しぬ「なにごとも前となりし老の身もけふはうれしく思ふ昔の葉」とあるもなつかしまた例か小包にて送りくだされたる由たのしみにまた稍木檬よりはまた〳〵御返事まゐらおのれを見すて給ひしかはた病後の君のいかゞ遊はされしかとるま〳〵におもひ侯て聞きし友よりの消りの文はけふもきて夕ぐれさびし五月闇の頃折柄軒端の簡の咲は絶ね〳〵にて文机の上にはいと白きばらの一輪香りゆかしさかぎりなし小使鋼つけて例より早く九時床に入る買物魚屋二十六錢切手十枚三十錢元緒十耙九錢五厘、水油八錢小豆六合十三錢八厘今日の献立　カタン六十番二ッ十三錢　來信、五、書、七

ライスカレー　豆腐汁
朝　若め汁　韮菁の物焼　フクシュフライ
ビステーキ
菁の物　玉子焼　鋼茶碗むし

葦北　藤原ぬい子

六月二十三日晴六時過床揚をわかして門口に出て見ればおむかいのかき根に蔓附朝顔のところまだらに咲出て花は牡丹色にして青葉の中にまじりたる美くしさいも言はれず

食後着物二枚洗ふ午後床の花挿かへる二時頃昨日來りし女學世界姫百合を讀若葉の光りのいとあはれなりしなみだの出るも知らず頁く笑ひ給ふに氣の付きしもなかし東京玉簾女とはいかなる人にやにくきふでのすさびや桑繭世界の滔のよくわかりしよ自分も家計を定むるもをかし六時食げ湯に行帰に出女子學じゆつ講義を讀む十一時床しまふ實上會計して日記を書く十二時床につく



（八八）

京都　前田美子

六月十七日　晴明日は雨ぞと我も人も思ひ定めたりし昨日の夕暮にうつて變りたる今朝の空日影はれやかにさし渡れり朝のほど祖母君のみ墓に詣でゝ歸るやがて義姉君訪ひましぬ、み姿よりも先づ石炭酸の臭氣に打たれて驚けばあはれいみじうも右手を繃帯し玉へるなりけり。いかにかしけん今朝竈へのものを取らんと手さし伸べつる刹那とみに痛うなりたれば今しも醫師がりものしての歸さなりとのたまふ例の快活なる物語賑やかにわくが如き笑聲のうちに歸り玉へり。かくて午餐のいそぎしつゝ明日み佛に供へ來るべく獨りさま〳〵なる献立を胸に描きつ（汁）いもまき、淺草のり、わさび、（平）大原木ゆば、椎茸、江戸さゝげ、（猪口）もみうり、煮〳〵平干瓢、若茄子、青とうがらし、さて靈前の盛物には。枇杷、おけそく、若葉もち、などにせばやと母上に伺ひ奉ればみけしき常にもまして美はしう、世には孫の祭りとかや無へてかにかくに疎うなりゆくが多かるにいしくも思ひよせつる嬉しさよさはれ遠くいでたゝでは購ひがたきゆばならでも近き豆腐屋なゐ揚げものにてこと足るべきにと宣はする一言にさへいひしらぬ情ぞこもれるや。さばかり遠くも侍らぬをいかでみ心安う思召せ、暑きころは腸胃の消化力たれも〳〵鈍う侍れば脂肪おほからんものよりも淡きをこそと女學世界にも見え侍りなど答へ奉りつ。午後となりて伯母君おはしぬ、つゝましき御性質なつかしうしめやかなる御物語に長き日を暮らして夕餐の後送り參らせつ。長き竹の先きに笹の葉あまた結りつけたるを高うかざして螢來いと呼びつゝ群れゆく子らのあとにそひて家に歸れば早くも九時を過ぎたりき。

岩代　横山喜津子

八月一日、土晴れ渡り涼風吹く誠に心地よし、例刻起床朝食前中庭をはき水をうつ、百合の花美ごとに咲きをろ白桔梗まだつぼみなり、花は人目を慰め、精神を妊ふものなれば、我は大すきなり食後母上の單衣裁縫はじむ、今日は縣社蠶養神社の大祭日なり、夕かたに成りて參詣せん、夏蠶四眠起きる、祖母上大によろこび玉ひこんな老人に成つてもかひこ手傳が出來るのは、神々等の御惠みの深き故によるのだから、こがひ神社へ參詣して厚く御禮を申上、今度も春の如くよく出來ますよーにおねがひ申せよと仰せらる、魚屋きたる、生り二本求む、代價三拾錢拂ふなすのしぎやきをとゝのへ晝食いたす、母上なすがうまくやけたよとほめ玉ふ、誠にうれし、今日は朝よりうちはをはなちかねるほどの暑氣なり、田作のためには何よりのたからなり、單衣縫ひをはる、さきころ仕立しゑびちや袴にちゞみの單衣にて參詣に行く、とよ子まつ子同道す。風冷かなり途中富子に逢ふ土産にはせんべい一袋

二日、日、晴れ、先月の女學世界を見る、大町先生の婦女雜觀、野中刀自の金錢と女德は殊に有益なり、外のもありがたき敎へ草なり、北國婦人の生活、所變れば品變るとて風ぞくのをかしきところなり、我等も必ず惡しき所あるべし、つゝしむべきことなり、朝食に生りとなすを煮付てたべる。九時半一之町荒井陽文堂へ女禮式大全求めにゆくにおやにく品切にてせんすべなし、小學女禮式求む〃貳拾五錢也女學世界は七日頃に屆くらん、されど我文章はいかになりしや定めて沒書ならん、とにかく此本は家庭の眞友なり、末長く見たきものなり、夕食むし玉子なつなあい物にてたべる、今日は昨日より暑氣はげし、風呂をたてゝ入る、月殊に清らかにて鏡の如し雲井はるけき國にます、友のすがたをうつす由もかな。



伊勢　飯田きく子

鷄の鳴く頃より父上は會社に出勤せらる祖父は籬の傍にほゝゑみたる朝顔の白くれなゐむらさきなど一つ〳〵庭前に摘ねつけ給へば敏雄も目を覺ましてきのふ求めたる金魚に水を與へるなり

今朝早く髮結ひの女來りて姉上ははじめて新形の丸髷に結ひ給へりいかにその似合しき事よあはれ兄上の居給はゞ立派なる妻と云はれ給はんに朝げも終へたり祖父は隣りの主人と圍棊に餘念なく敏雄は魚釣りに出で行きたり姉上には茶、生花のたしなみありて妾にも常に敎へられぬ

弟の釣り來れる鯊とやらむいへる魚にて羹げをしたゝめたるに祖父もいたく喜び給ひて甘酒さへ召されぬいつもむし熱くして堪へられぬまゝ裏の樹陰に席を敷きて母上と姉上はたち縫ひせられ敏雄は祖父の話を聞きながら常に眠りゆくなり妾は詩集繙きて誦し居るに涼しき

風のなり〳〵木の葉をゆるがしてまことに心地よし
夕げは必ず凉臺にてしたゝむるを常とせり
東の方阿潜浦の黒船いさり舟さては眞帆片帆孕まして歸る舟さへ見ゆ渡り濟黒繪の如き松原の暮の景色を眺めつゝ樂しく夕げを給へるなり
あわれ平和の神よ世の浪風の吹き來らぬ此の睦まじき樂しきホームを永へに護り給へ

兵庫　柳田暢子

八月五日晴、朝風冷々と身にしみて、何ともいへない程、いゝ氣持、昨日より少し氣分はよいが、衰弱がひどい、つとめて、牛乳とぱんを頂く、父上九時の列車で岡山へ出張、明日御歸りなり、病床に横りながら、女學生の栞、女學生訓など、ひもどく、郷の友操樣より御文給はるからくも、したゝめ御返じす、すみの樣糸枝樣見舞にこられた、實に嬉しかつた、午後兄樣弟や友達と海水浴に行かれた、安原樣から水蜜桃澤山頂く、味ひ誠にうまく、五時頃横山先生が見へた、腎臟炎全くよくなつたと聞た時の嬉しさ、ヤッと安心した、やうやく二十日ぶりに入浴を許された、あとの心地のさわやかさ、何とも云へない、夕方兄樣や弟は歸て來られた、まつくろにぴかぴかと光て美しう、目斗りキラ〳〵何だかこわくツてよと云へば、兄樣から〳〵笑て居られる、夕食にはカツレツと生玉子ぱん頂く、妹らは散歩がてら神戸へ薬とりに行く、



日下部の與樣見舞に來給ふた、歸られてからヤッと日記をつけ今さら登た月をかやの中からながめつゝ、知らず知らずふかき夢路についた、此日の出金十一圓五十錢かや、十錢玉子、十錢五厘ぱん一斤半、八錢神戸滊車賃、六錢切手、八月六日晴天昨夜せきの爲めに、くるしめられた爲め、ヤッと目がさめたのが、八時實にむし暑い、病氣の身には一しほ絶へ難い、どうも食事が進まない、牛乳だけ頂た、おあい樣椽の樣蝶子樣から暑中見舞給はる、つとめて御返じ差出す、十時頃時子樣村下樣見舞に來られた、すぐ歸られた、涼しい風が通で來て實にいゝ心もち、知らない内に二時間眠れた、四時頃楽しい女學世界來た、何より嬉しい、今度も又文も歌も沒書になつた如何なれば斯く文才にうといのであろーかと、何となく悲しう、藤田いさを樣の、御文いつもうるはしく、妾に取りては師友とも思はれて、御なつかしさ、嬉しさ絶へ難い、如何なる君でいらツしやるのであろー何にしても御なつかしい、婦女雜觀、女子と體育、精力の不經濟、おもしろく讀まれた、貴嫁人の嗜好、中々おもしろい、大山捨松樣夫人の、御うつしゑいつもながらうつくしくいらツしやる、五時半父上歸て來られた、入浴後夕食につかる、松から知人より林檎あまた頂く、皆々と共に賞味す、八時日記をつけれむりにつく、此日の調理、朝じやが芋の汁、生玉子、香のもの、ひる、玉子やき、こいものにつけ、夕洋食、又出金は、五錢半紙、三十錢妹のりボン、三十六錢ジヤムかん、十錢らいおんはみがき、

▲田舎料理

あき子

日常用ふる山家料理をお目にかけむ

ゆで玉子あんかけ

ゆでゝ三つ位にきり深き皿へ盛りおき鍋に醤油にて味をつけ砂とう少し加へ沸騰したる時葛粉をときて入れよほと煮つめ下して右へ玉子のかくるゝまでに掛け口にはたでか山葵を用ゆ

百合の甘露煮

山ゆりを丸のまゝよく洗ひゆりの見へぬまでに水を入れよく煮て醤油とさとうにて加減よくあじをつけ露のなくなりたる頃食膳に上すべし誠に美味なり

なすの揚だし

中てなすの皮をむき二つに切りて水へひやかしからし油を鍋に入れよくやきてなすの水をぬきてなべにいれ醤油を加へふたを取らずしてやわらかに成るまで煮下すころみようがの子を入るれば殊によろし

もみつけ大根

少さき大根を葉共に一寸ほどに切りてすりばちに入れてよくもみ汁をすて適宜にしほを加へ一日ほど漬けてあまき時は醤油をかけて食す

桔梗根漬

花の咲かぬ前ほり取りて皮をむきよく洗ひて梅酢の中に漬け十日計りすぎて出せはべにの如くなりて至つてはぎれのよきものなり

にしんみそ漬

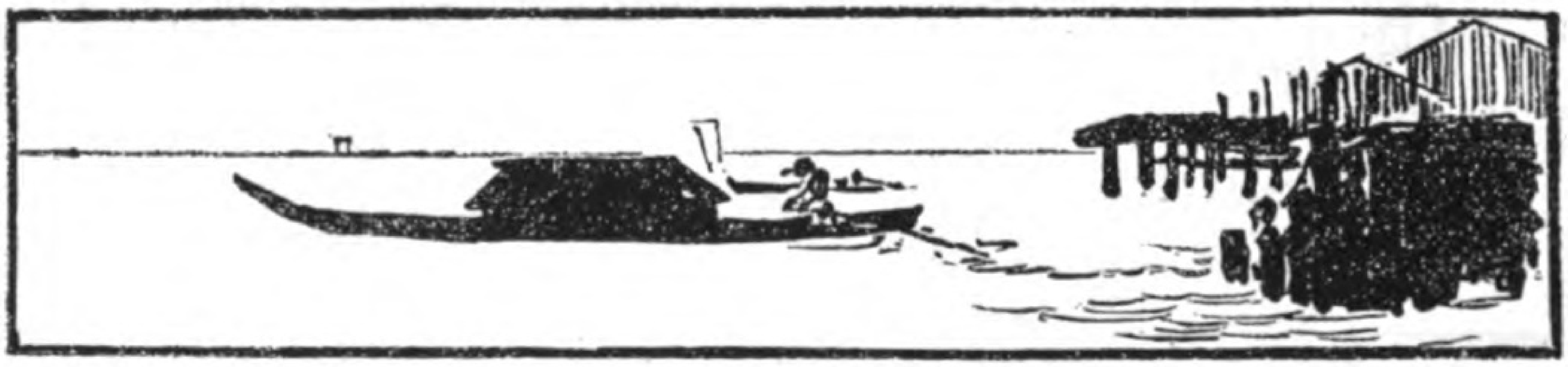
にしんをよく洗ひ半日ほど水に浸してみその中へつけ一日ほどすぎて食するなり

きうり酢つけ

若きうりを二分ほどにうちて砂とうしほ酢をまぜし中へ朝つけて夕方よろし、

梅せうちう漬

青梅を四つ位に切りてうめ一升に焼ちう一升砂とう三百目のわりにて漬よく蓋をなし密封して五十日立てば用ひらるゝなり、



美濃 高木庭子

八月五日五時起き出でゝ外を見れば昨夜迄降りし雨全くやみて空には一ひらの雲も無ければ朝げしたゝめし後衣服の洗濯をなす九時小間物屋來りし故油元結ハンカチーフ等を求む晝飯には土用丑の事故鰻を買ひ父上焼き給ひて食したり午後より瓶細工をなして後筝を出し眞の手の。。ふき四季の眺、酒等を温め夕方衣服を片付け七時夕げしたゝめ西の小川に行きて涼み十時寝に就く▲朝香の物、胡瓜のすま▲晝鰻のかば焼、玉子の菓子碗▲夕冷し素麵茄子の味噌汁●買物一圓二十八錢、（小間物）二十五錢、（鰻百二十目）十錢、（菓子）三十錢、（醤油）一升、〆一圓九十三錢○

六日、晴姿の愛せし朝顔今朝始めて咲く、いと嬉し前日洗ひし衣服に糊を附け其れより瓶細工にかゝり午後三時出來上れり思ひしよりも美事にて菊の花の色取いと眞く早く姉君に差し上げ度きと思ひぬ四時竹後村の元三方より鰻を貰ひたれば返禮として米一升やる、夕食に鰻を焼きて食す、夜は家政案内を讀む

▲朝煮豆、茄子、味噌汁、▲晝茄子と昆布煮付、豆腐のすまし、胡瓜の酢もみ、▲夕鰻かば焼、南瓜の煮物、新芋と玉子の菓子碗買物三錢（豆腐二丁）、一圓五錢（砂糖八斤）五錢（酢）、〆一圓十三錢

應用圖案 秋海棠



千佐子案

應用圖按 夕顏



同寫生



富士登山

婦人社會の優柔怯懦を以て充たされたる今日、吾人の耳朶に快響を傳ふるものあり、曰く、令夫人の壯擧、富士登山とす、今其の事柄を聞くに、去んぬる八月初旬の事なりき、嘉納治五郎夫人須磨子、長田秋濤夫人仲子の兩女史には、いで女てふものゝ体力健康を試みばやと 雄々しくも思ひ立たれたるを以て、嘉納治五郎氏の率ゐる登山一行に加はり、直立一萬二千尺の富士の山頂を極めんと 企てたる由なるが、今兩夫人の服裝を聞くに長田夫人は支那人が用ゐる如きダブ／＼したる股引、裁付やうの物を穿ち、 鍋笠、脚絆、 草鞋穿といふ出立、 嘉納夫人は行燈袴の股立高く取て、編笠を阿彌陀に被り、 法界節宜しくといふ扮装なりきと。 新橋に古能花咲耶姫の御社を拜み、 ゆらるゝ駕籠の中畑や、草野を分くる駒の足、 天狗の據むてふ太郎坊にホッと一息一休息、 木立を越ゐて一合目、二合三合行く程は何の氣無に進みしが、 五合六合漸々險しくなるにつれ、山の氣に襲れて、 吐氣を催し玉ひしは痛ましかりける限なり、 こゝぞ女の意氣地ぞと金剛杖に力足、蹈み締め／＼行く程に登る程に早や七合目にぞ着きにける。 いざ御泊りと岩室に草鞋足をのべならぬ御山の上の石枕、 明くれば草鞋、 穿き締めて、 羊腸なる嶮道を、覺束なくも辿りゆく。 見渡す下は駿河灣、 箱根の山はあれがとよ、 大きな景色で御在ますれ、と慰められつ慰めて、 手を取り腰を押されつゝ胸突八町屛風岩、辛くも登り着きにけり。 ヤレ嬉しやと岩間なる金明水に嗽ぎ、心地蘇生る樣覺ゐて淺間岳の茶屋室に疲勞を休めてぞ在しける。 暫くして嘉納夫人には 其人と共に鉢領廻りに出立たれ、 睜虎の巖や雷が岳、 底ひも知らぬ大坑を見るに氣も消ゐ心消ゐ。伊豆ヶ岳より藥師ヶ岳、安が河原を廻り廻りてぞ歸られける。扨しも下降は登るに引かへ一瀉千里の勢にて三里のハシリ砂路を辿り、二合二夕に下りけるに、 折しも迎の馬の來てありければ、渡りに舟のそれならで山路に駒の脊を借りて、 御殿場さして下り行く、御痛ましや嘉納夫人には馴れぬ旅路に、 顔は日に燒け、御脣は紫を帶び、 御手の甲は赤く腫れ膨れて、繃帶なしてぞ在しけるとなん。 女人の身にして登山を企てたりとて、敢て壯圖といふ程の事はなけれど、 愛宕の石段一つ登るにも呼吸を斷らす者の多き世の中なれば、 兩女史の壯遊の如きは、慥に女子社會の惰眠を覺すに足らんか、兎にも角にも目覺しき事なりけり。 今長田夫人が登山に就て訪問者に語られし一節に私の嬉しく思ひましたは、登山の途中、八十四歳になられる御老人の登山されたと聞きましたとて、其方には絶頂で御目に掛りお話を伺ひましたが、 紀州の方なさうで、目の療治に大阪へ來られソレから富士へ登らうと思召して御宅へは默つて登られたのださうで、宅へは登つてから知らせると仰しやつてゞムいました、又其前日には六十三になるお婆さんも登山されたとのことを何かました、又私共と前後して十七八の婦人と二十前後の婦人とが登られましたが、之れは女子大學の學生なさうで、 ソレから絶頂に東京何學校尋常四年生某と書いたものが貼てムいましたが、執れ十三か十四の御兒さんでしやうが感心なことと存じました、ソレで私共思ひますに女一人で登りますのも感心致しませぬが、御夫婦でお登りになる樣にし其御兒さんが十三四以上の方でムいましたら御一所に 御登りになりましたら、衛生の上からも教育の上からも幾らかお爲めになりはせぬかと存じますが、如何のものでムいましやう、 食物は麵麭と鑵詰を用意して參りましたので其處の御飯は戴きませんでしたがナカ／＼しやれたものが出來ますのでムますよ皆さんは饂飩の中に鷄肉や何かを入れましたものを、甘味しさうに召食つて入つしやいました、其處には鷄なども飼てあるのでムいますよ、又阿部川なども出來るとか申して居りました、 臥ります所は石で固つた室の樣な所で 晩なら五十疊も敷けますでしやう其處へ養育院の子供を寢かします樣に、二列に布團を延べまして枕合せに臥るのでムいます、 寒さは左程に感じませんでした、尤も私共は袷や襯衣や眞綿などを持て參りましたので餘り感じなかつたのかも知れません、云々

史傳

二宮尊徳 **家庭逸話（一）**

報徳生

社會主義共産主義と云へば、舶來の名で、西洋から舶來したもの丶樣に聞えるが、其實は必ずしも其うではなくつて、支那及び我邦に於ける仁政の主張者は、多く國家社會主義者である。中にも二宮尊徳など云ふ人は、明かに之が實行者であります。

全體此の二宮尊徳は何う云ふ人であつた乎と云ふと、徳川十一代將軍の天明七年に生れ、十三代將軍の安政三年に歿し、其間七十年の生涯を經た人で、身を立て家を興し長じては一身一家を公共に貢献して社會の爲に働いた。實に天晴れ立志の人であつた、扨その働は一身を立てる道を一村に行ひ、一村を立てる道を一藩に行ひ一藩よりして天下に行ひ天下を立てると云ふ方法で、修身齊家治國平天下に至るの遣口であります。扨其の一身を立てる道に就て考へた處の方法が四つある。

誠心を以て本とする。
勤勞を以て主とする。
分度を立てるを以て體とする。
推讓を以て用とする。

即ち誠心と云ふのは翁が立身術を行ふ所の精神、勤勞と云ふのは其作用、分度と云ひ、推讓と云ふのは、其方式と云ふことに成て居る。即ち其順序から言へば、先づ分度即ち豫算を立て丶、生活費と事業費とを區別し、生活は必ず其豫定の生活費内でして、何んな事があつても豫定額を越えることを許さないと言ふのが第一である。そうして一方の事業費を推讓即ち働かせて増殖して行くのが第二である。が、之を實行するに

は誠心を精神にし、勤勞を作用にしなければ成らぬと云ふことである。

其れから此の通りの事を行つて三綱領の目的を達するのが、則ち翁の立身術であります。三綱領とは、

徳を立てる。

智を開く。

富を致す。

と云ふ此の三つです。

而して此は單に其身を立て家を興すだけの術ですが、翁は更に之を一村へも、一藩へも、一國へも行はうとしたのです。して、其之を行ふ段に成つて、こゝに始めて共益主義の實行に成ります。其次第は、一村一藩一國を一經濟にして豫算を立て、一定の生活費內で一村一藩一國が暮して行く樣にし、其餘は全く特別會計にして、新富源の開拓に充てるのである。翁は是を興國安民法と稱へました。

又翁が天道人道を解釋した言に、

身を勤めて田を耕し、田を耕して稻を植ゑ、稻を植えて米を得、米を賣て財を得、財を施して民を救ひ、民を救ひて仁を得、仁を施して國を得。

身を勞して田を耕し、田を耕して稻を植ゑ、稻を植ゑて米を得、米を喰て體を養ひ、體を養て壽を保つ。天道の自然。

身を勞して田を耕し、田を耕して稻を植ゑ、稻を植ゑて米を得、米を施して民を救ひ、民を救ふて國を得。人道の自然。

と云ふのがあります。して其民を救ふと云ふのが、即ち、興國安民法の實行です、身を立て富を致すのは、則ち一面に體を養ひ壽を保つ爲めであり、一面に民を救ひ仁を得る爲めであるから、翁が身を立て[illegible]を致す所の道は、則ち他方の民を救ひ仁を得る道と一致して居るのである。即ち一身の福祉と共同の福祉とを調和して、並行はれることが出來るのである。

何の時代でも世間の要求は何である乎と云ふと、第一に家を富まし國を富ますと云ふことであるが、要求して居るにも拘らず世間では少しもそれを得て居ないが

翁は獨り之を得たのである。得て之を人にも傳へたのである。其方法を約めて言ふと、別に珍らしいことはない、誰も知つて居る勤と儉との二字に歸するのであるが、唯翁は此の勤と儉とを實行するに適當の方法を見出したのと、之を實行するに足りるだけの精神を有して居たのである。是が則ち彼の成功した所以です。

右は二宮尊德翁の人物と其生涯に就て批評を下したものでありますが、今この翁が單に我々婦人に就て如何なる關係を以て居るかといふに、それは即ち獨立自營、即ち一身を修めて一家の基礎を立つるといふ家政經濟に就て實に千古不拔の卓見を立て、そしてその實行に就て適當の方法を與へたといふ事です。その方法といふのは家計の分度といつて有名なものでありますから今翁の經歷を述る前にまづ此の分度に就て一言を費しませう。

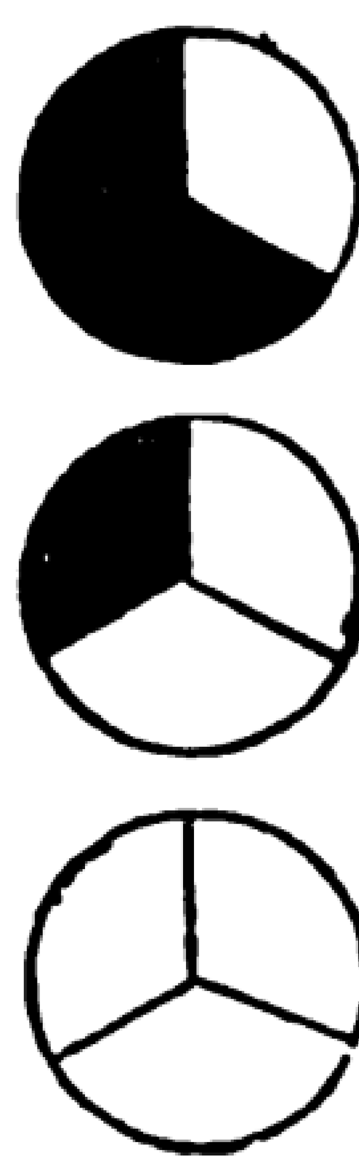


▲尊德翁一家分度の法

翁は舊小田原藩の人。天保弘化の間に於ける道德的經濟家として名高い人物なり、精勵刻苦して荒蕪を開墾し、或は節儉忍耐を以て人の家を起し產を興し、貧人を救ひ、富家を導く等其一生の事業擧げて數ふべからず所謂報德主義の經濟家として關東東北の地方今日に至るまでその德化に浴するもの頗る大なりといふべし。

二宮翁が案出せる一家分度の方法は要するに一ケ年の收入を平均してその內より二割乃至三割を之が分度となし、以て一ケ月家政の出費となすにあり。蓋し。金錢は世間の廻り持と唱へ、今日一圓の收入あれば一圓費ひ明日二圓の收入あれば又二圓

を費ひ、收入に隨つて消費せば頗る簡單にして甚だ氣樂なるがごとしされと人間は一日一夜にして其の生涯を畢るべきにあらず。今日あれば、又明日ありて生活せざるべからず、又人間社會には不慮の出來事ありて思ひ設けざる災厄に遭ふ事なしとせず。彼の蟻螂の如き昆虫と雖も春夏の候頻りに食を穴に蓄へて秋冬の準備をなすに萬物の靈たる人間にして蟻螂にだも如ざるべけんや故に人は應分の貯蓄をなして萬一に備へざるべからず。扨てこそ分度の必要を見るなれ、譬へば今茲に一ヶ年平均して千二百圓の收入ある者ならば、一ヶ月を百圓としその內より三割三分を減じ即ち六十六圓を以て一ヶ月家政の用途に充つるなり、譬へ如何なる必要あるも平時に於てはこれより越すべからず。譬へ贅澤をせんにも節儉をせんにも此の上を越すべからず、身に取つて必要なるもの又は急に入用すべきものあるも六十六圓と定めたる分度は決して動かすべからず若し萬止むなくば衣食の上より切詰めて補ふべきの方法なり、此の如くして數年を經過せば家道裕かになりて、時として不時の災厄に罹り一家の不幸に遭遇するが如き事あるも、最早其の家の土臺定りて鞏固なる事磐石の如くなれば決して困難を感ずるの憂なかるべしといふ、



二ケ月目　三ケ月目　四ケ月目

此の表によれば一二三ヶ月を辛抱して四ヶ月の始めに至れば一ヶ月分の收入全部を剩し一ヶ年に至れば三ヶ月分の收入を剩し得るの勘定となり、三年に一度の大災難を蒙る事あるも決して狼狽する樣の事なく一家安全にして將來の富貴を得べきものなり、勿論これは單に不時の災難に應ずるの準備として設けたるものゝみにあらず、是を以て借財を償却するの方法ともなし又轉じては、人を救ひ、世を益し萬物を理し、天命に應じて人事を盡すの方法にして兎に角一家安全の良策と心得べきものなり。

畢竟善良なる習慣を以て家道を行ふものにして克己忍耐の精神に外ならず。世間奢侈の爲めに苦しむの人、

よろしく反省すべきなり。云々

右は翁が一般の家計に就て、發明されし一の憲法なるが茲に又翁が人に依つて法を説き、その人を富ましたるの實例あり、如何に翁が平生の信仰堅實にしてその授くる處の敎訓人の意表に出でしかを吟味せば、粗翁の人と爲を知るに足るべし。

▲尊德翁世帶の訓戒

むかし或人、生活の困苦を訴へて尊德翁の許に至り、經濟の立行方を尋ねけるに、翁の曰く、貴公の收入は月々何程あるべきやと、その人答て曰ふ、月入僅かに三十金に過ぎずと、尊德一考して曰ふ。貴公の境界にて月入三十金は過分なり、生活の困難なるも無理ならず、今日より斷じて十金を我れに預けたまへ、二十金にて生活を立つべし、さすれば苦しみを訴ふる事なかるべしと。その人怪しんで曰く、三十金にて猶生計の困難なるにそれを減じて二十金となさばいよ〳〵増々困難に陥るべしと、翁の曰く經濟の極意は十金を扣除する處に在れども、今日に於て貴公にその說明をなすも無益なり。まづ眼を瞑つて我れにその十金を預くべし、他日その理由を發見すべしと。茲に於てその人、翁の言に隨ひ、毎月十金づゝ預けしが、初めの内は中中困難にして忍耐もなり兼たれど、こゝが經濟の極意なりければ、大に辛抱して、萬事をキリツメ、贅物を省き冗費を汰し、盛んに節儉を行ひければ、一と月經たぬ間に早くも前日の習慣を悉く打ち破り得て、新たなる習慣を作り二た月と經ち、三月と經つうちには最早その習慣が基礎となりて、二十金の生計少しも苦痛なく。かくて一ケ年を經過せし曉に於て翁が預りし百二十金の元金に若干の利息を添へて携へ來りいふやう、足下は今毎月二十金にて生活の出來る筈なり、さすればこの金は今日に在つて不用のものなり。この如く積んで今後十年すれば。一廉の富限となつて萬人の上に立つ事を得べし。若し彼の時足下が三十金にて生計困難とありしを増して四十金ともなさば、一時は安樂ならんも、その安樂は長く續くものにあらず、更ら

に増して五十金となすも又同様なり。六十金、七十金と上つて際限はなく、結局足下は生計の負債に倒れて生涯安樂の境に入る事難からん、是に於て予は一歩退いて足下に世帯の極意を示したるなり。三十金にて猶困難なる生計を二十金にキリツメて爲し遂ぐるの呼吸を了解したらんには富貴は期せずして至るべしとありければその人大に感嘆して爾來翁を神佛の如くに尊めたりとなん(この一節「女學生の栞」主婦の卷より拔萃)

▲翁の幼時

翁の家は相州足柄上郡栢山村の農夫にて父を利右衛門といひ、母をよしといふ夫婦の中に三人の子があつた翁はその長子で名を金次郎といひ尊德と稱した、天明七年は、有名な饑饉後の米價騰貴で、打壞しの流行した歲であるが、翁が相州酒匂川の邊りの栢山村で生れたのは、實に是歲の七月廿三日のことで、父利右衛門は時に年三十六、母よしは時に年廿一であつた。

そうして翁の家は、祖父銀右衛門の代に頗る勤儉で生計も豐かに、村内でも先づ富める方であつたが、父の代に成つてから、父が極めて好人物で且つ情け深く、色々の施しをしたり、人に金穀を貸したりなどして、家計が次第に傾き初め、萬事左まへに成つて、金次郎の生れた頃は最早生計が頗る困難を告げて居た。其中二人の弟か出來などして、其困難は愈增し、彼が家の烟は僅かに立つと云ふ名ばかりであつた。

人は斯の通りに落ち目に成ると、色々の禍の神か虚に乘じてさいなむものである。二宮一家の家計はたゞさへ此の通りであるに、寛政三年翁か五歲の時、近邊の酒匂川か洪水で、大口の隄か決れ、五六村を流し、一家の田圃は一畝も殘らす流されて、砂礫か積り、一夜の中に河原に成つて仕舞つた。是に至つて家の困難は殆と絕頂に達し、三子を養ふか爲に利右衛門夫婦の苦心焦慮をしたことは、實に言語に絕する程であつた。然し其儘では餓死するより外はないので、其翌寛政六年金次郎か六歲の時に、父利右衛門は、百方奔走して

僅かばかりの負債を起し、洪水で荒れた持地の開墾を始め、出來るに從つて之を質地にし、其金で次〳〵の開墾をして、多少の田地を拵へた。が、其生計は未だ容易に恢復と云ふ段には至らない。

其れから或年、利右衛門は、長い間病んで醫師にかゝつたか、藥代にすへき金がない。乃で父は洪歎して、『人の家の富んだり貧しく成つたりするのは、固より免れ難い事ではあるが、田地は先祖の田地であるのに、我が病氣を治す爲に之を減すとあつては、先祖へ對して不孝の罪を遁れる譯に參らないじやと云つても、醫師に療治をして貰つた藥價は何うしても拂はなくつては成らないから。』と曰つて、彼は已むを得ず、田地を賣り、金二両を得て之を持つて醫師の所へ禮に徃つた。そうして此の二両を出した所が、醫師は一家の貧乏を知つて居るから、怪で『何うして此の金を得た乎。』と問ふた。利右衛門は、『仰せの通り私は貧困を極めては居りまするが、いくら貧乏じやと申ても、療治をして戴いて置きながら、御禮をしないと云ふ筈はない、其故、まだ少しばかり田地の賣殘りがあつたのを賣つて御禮を致すことにしたのであります。固より十分ではありますまいが、何卒御納め下さい。』と、腹藏なく話した。すると、醫師は之を聽いて惻焉として涙を流し、『己等は今お前さんから御禮を貰はないと曰つて、別に暮しが立たないと云ふ譯ではない。然るにお前さんは、祖先以來の田地を賣つて一旦の義理を立て、其れが爲めに却て妻子を養ふことも出來ないと云ふことに成ると、何の事はない、己等がお前の病氣を直して上げて、却てお前の難儀を多くしたと云ふことに成る、其れは己等も斷じて出來



ないのであるから、己等に御禮などゝ云ふことは心配せずに、早く其金で田地を買戻して、後の難儀に成らない樣にしたが可い。』と曰つた●然し律義な利右衛門は『御禮をしなくつては何うも心に懸るから。』と曰つて、何うしても聽かない。底で醫師は『人の家の貧富と云ふのは別に定まつた約束があるではなく、今日貧乏でも何時富むか分らない、其故其御禮は暫くお前さんに預けて置いて、御前さんの家が豐かに成つた時に之を受けることに致さう。』と曰ひ、漸くのことで納得させたと云ふことである。

利右衛門が此の通りの人であつたから、其子の金次郎も天性誠篤律義なもので、而も敏明な才氣と雄々しい心情と殊に非常に强健な体軀とを有して居た。

翁の成功の基礎は、其誠心誠意に加へるに、此の敏明とか雄々しいとか强健であるとか云ふ樣な美質を以てした所にあつたらしいの

して、翁が此の通りの父の子で、如何にも誠實であり、律義であり、又雄々しい所もあつて、近江聖人の少時と能く似て居たことの逸話は、澤山傳へられてある。

▲尊德翁幼年の逸話

金次郎が九歲の時であつた。或日母に連られて親戚の武家へ法會に招かれて往つたが、厚い緣のものであるに拘らず、餘り貧乏をして居る所から輕蔑して、殆ど客らしい待遇をして與れない。彼は子供心にも其餘りと云へば無禮の甚しいのを憤つて甚だ不興の体であつた。然し母が色々に慰めたので、其席は無事に濟ました。子供さへ其程であつたから、其時母よし女が悔しく思つたのは何れ程であつたか知れないが、よし女は女だけに愼ましやかにして、形迹には顯はさなかつた。が、歸り路には覺えず『貧乏ほど辛いものはない。』と歎聲を漏らした。貧乏であればこそ人からも下げすまれて、無邪氣な子供にさへ此の通り世をも人をも恨ませるかと思つて、流石氣丈のよし女も胸が張り裂ける樣に感じたのである。而して彼金次郎は、母が痛心の体を見て、いろ〳〵之を慰め、川の邊りに犬の

子の病で死にそうに成つて居たのを見て、『阿母さんわの犬を御覽なさい、今死にかゝつて居るが、誰も藥を呉れる人もなく、着物もなくつて可哀相です。私などは阿父樣も、阿母樣もあつて、家もあり、ひもじい思ひをせずに居られるのだから嬉しい。』と言つた。其れで母も俄に機嫌が直り、連立つて家へ歸つたと云ふことである。彼が孝心の深かつたのは稚い時から此の通りであつた。



又父は酒が好きで、澤山は飲まないが毎日少しづゝ飲みたいと言ふた。が、例の貧乏であるから、多くは買ふてとが出來なかつたのである。然るに金次郎は之を悲しく思つて、稚い時から毎日草鞋を作り、之を賣つて日に一合づゝの酒を買ひ、之を父の晩酌に侑めた。

殊に寛政十年翁が十歳の時からは、父が重い病に罹つて病褥に就き、日に〳〵衰弱して往くだけであるから、貞節なよし女、孝行な金次郎は、深く之を歎いて、晝も夜も看病を怠らず、何程もない田畑さへ賣つて、治療に手を盡し、神佛に祈りなどしたが、別に効驗が見えない。從て彼等母子は、何やら何までか弱い手で立働き、此歲酒匂川の堤防修築かあつた時など、金次郎は父の代りに夫役に出て、『自分は弱年で一人前の仕事は出來ないから。』と曰つて、人の休む間も休まずに土石を運び、一生懸命に働き、寧しろ成人よりも多くの仕事をした。然し猶彼は自分で滿足でないと思つて、家へ歸つて夜半まで草鞋を拵へ、翌日は未明に其塲へ往つて、『私は若年で一人前の仕事が出來ないから、其力を補ふために草鞋を作つて來ました。私が力の足りない所を働いて下さる人に之を上げたいか

ら、どうぞ御請け下さい。』と言つて出した。其れで人々も深く之を感心致し、喜で其草鞋を受け、力を盡して彼が爲に働いて遣つたと云ふことがある。

此等は固より彼が父母存在の日の事で、未だ翁が自助自立の働きを發揮する齡に達しない前の出來事であるが、猶その性格の果して何う云ふものであつた乎、彼が稚い時から業に已に何う云ふ事をした人であつた乎、抑その性格が如何に早くから自助自立の人に成るべき傾向を有つて居る乎と云ふことを知るに、自ら餘りあらうと思はれる　（次號完結）　（未完）

文藝

皇子の御誕生（下）

鷹野止水

宮は、殿、いだき奉り給ひて、御はかしは小少將の君とら頭は宮のないしとりて、御さきにまゐる。唐衣は松の實の紋、裳はかいふをおりて、大海のすりめに、かたどれり。腰はうすものから草をぬひたり。少將の君は秋の草村、蝶、鳥などを白銀してつくりかゞやかしたり。おりものはかぎりありて、人の心にしくべいやうなければ、腰ばかりを例にたがへるなめり。殿の公達二所、源少將雅通など、うちまきをなげのゝしり。吾れたかううちならさんとあらそひさわぐ。遍照寺の

僧都護身にさぶらひ給ふ。かしらにも目にもあたるべけれは、扇をさゝげて、若かき人に笑はる。

◉釈義　○宮　御降誕の皇子をさす。○殿　道長公なり。○とら頭　紙にて作りたる虎の頭なり。此儀式に用る例なり。○御さきに來る　宮の先きにたちて參りしなり。○松の實の紋　唐衣の紋に松の實をあらはしたるなり。○かいふを織りて　海賦又は海部ともかく、海藻、波等をあらはしたるなり。○大海のすりめ云々　海賦を織りだして、大海の摺物にかたどれりとなり。○腰　裳の腰なり○うすものからくさ　羅に唐草ぬひたるなり。此處まで宮。内侍の裝束の有樣を叙したるなり。○おりものはかきり云々　このおりものは　錦又厚地の織物に紋を織り出したるものにて、この織物を用ゆるには位によりて制限あり。人のすき〲の儘に用ゆる能はず。されば裳の腰ばかりを通例のものとちがへたるなり。人の心にしくべいやうなければは人人の心の儘に好むものを着る事出來ざればといふ意なり。○殿の公達二所　道長公の子息頼通教通の兩人なり。○うちまきをなげ云々　うちまきは散米なり。惡魔を祓ふために米をなげて聲高に何言か唱ひたりとなり。○護身に侍ひ給ふ云々　皇子の御身を護るために侍ひたる、遍照寺の僧都は、頼通等のうちまく米の目にも口にもあたるとて、扇をさゝげて、散米をよけ、人々に笑はれたりとなり。



◉大意　道長公は皇子をいだき奉り。小少將の君ははかしもち。宮の内侍はとらがしらをもちて、皇子の御先にたち參りたり。其時の御裝束は、松の實の

紋つきたる唐衣に、海賦織り出したる裳、裳の腰は唐草をぬいたるうすものにて。小少將の裝束は秋の草村に蝶鳥など白銀にて作られたり。されば、もと織物は人々の位によりて制限ありて、己が心に好くまゝには出來ざれば、裳の腰丈は例のたがへて銀にて蝶鳥等を作られたるなり。道長公の公達二人は聲高にうちまきして、護身のため侍ひし僧都は扇にて其うちまきをよけ、わたりの人々に笑はれたりとなり。

七日のほど、かはる〳〵萬のものゝゞ漏りなく、しろきおまへに、人のやうだい色あひなどさへ、掲焉にあらはれたるを見わたすに、よきすみゑに、かみともをおほしたるやうに見ゆ。いとゞ物はしたなくて、かゞやかしき心地すれば、晝はをさ〳〵さし出でず。のどやかにて、東の對の局よりまう上る人々を見れば、色ゆるされたるは、織物のからきぬ、おなじうちきともなれば、中々うるはしくて、心々も見えず。ゆるされぬ人もすこしおとなびたるは、かたはらいたかるべきことはせで、唯えならぬ三重五重のうちきに、うは着は、織もの、無紋の唐衣、すくよかにして、かさねには、あや、うすものをしたる人もあり。

●釋義　○七日のほど　御降誕の日より七日間、即ち御七夜までの間なり。○かはる〳〵云々　彼も是もの萬の儀式漏りなく行はれたるなり。○しろきお前　御產殿は前にもありし如く、凡て白き御裝飾なれば、白き御前といへるなり。○人のやうだい色あい云々　人の容體、色の工合など、はつきりと明かに見えたりとなり。○掲焉にあらはれたり　掲焉は物の著しく目にたちて鮮明なるをいへば、こゝは鮮明にあらはれたりといふに仝じ。○よきすみゑ　よき墨繪なり。○かみともをおほしたる樣に見ゆ　髮を生した樣に見ゆといふ意にて、上手にかきて墨繪の人に髮を生じた如く見ゆとなり。おほしは生しなり。○いとゞ物はしたなくて　いとゞは甚だといふが如く。はしたなくは俗のきまり惡しとか聞がわろしとかいふに仝じ。○かゞやかしき心地　きまり

わろさに顔などほてり、晴れがましき心持すとなり
○をさ〳〵　大低とか大方とかいふが如し。○のどやかにて　のどかに攸然としての意、即ち晝は引き籠りて出仕せざればなり。○ひんがしの對の局　東の對屋の部屋なり。○まうのぼる人々　中宮の御所へ參上する人々なり。○いろゆるされたるは、いろゆるされたる人はの意。いろゆるさるるとは、禁色をゆるされたるにて、當時位階によりて衣裳の色に制限あり、其禁色をゆるされたるなり。○織物の唐衣　織物は錦又は厚板をいふ。唐衣の女の禮服の上着なり。○おなじうちき、うちきは袿とかく、打着又は内着といふ意にて重ねの上着又は下に着る衣なり。こゝはから衣と仝じ織り物の袿といふ意なり。
○ゆるされぬ人も云々　織物着用をゆるされぬ人も少し大人びた人はあまり目に立つ事はせざりしとなり。かたはらいたきは　傍より見て氣の毒に思ふといふ意にて片腹いたきなどかくはあて字なり。○えならぬ　いふにいはれぬといふ意の詞なり。○三重五重のうちき　三重の袿、五重の袿なり。七重、十二重などいふもあれど皆重の名なり。○うはぎは織物　うはぎは衣服の上着にて唐衣の下に着るものなれば、色ゆるされぬものにても着用するを得。○無紋の唐衣　無紋の絹即ち平絹にて作りし唐衣なり紋は模樣なり。○すくよかにして端正になり、正しく着なしたるなり。○かさね　裝束の下に襲ねて着る衣をいふ。○あやうすもの　綾羅なり。

○大意　皇子御降誕ありてより七日の間は萬の御儀式もれなく行はれ。御殿にさぶらふ人々の樣體、色あひなど、皆白きを用ゐたれば、著しく目だつて、恰もよき墨繪を見るが如くである、されば式部はあまり目だつて、きまり惡く思ひ、晝の間はなか〳〵出仕せず、引き籠り居りたれば、のどやかで、東の對の局より、中宮の御殿へ參上する人々を見れば、色ゆるされたる人は、織物の唐衣、袿などなれば、うるはしくいかめしくて、其人の心々も見えず、色ゆるされぬ人も少し年頃の大人びた人は三重五重の

袿に織物の上着きて、無紋の唐衣を正しく着。又綾と羅との重ね着た人もありたりとなり。
此段は中宮の御前にさぶらう女房達の裝束を描したるものなれば、當時の女官の服裝は察せらるれど、裝束には種々の故實もあり、別に研究すればなかなか興味あり。殊に此日記にあらはれたる服裝には、いまだ判明ならぬ節も多ければ、一段の研究を要す。

あふぎなど、みめにはおどろ〳〵しくかゞやかさで、よしなからぬさまにしたり。心ばへある本文うちかきなどして、いひあはせたるやうなるも、心々と思ひしかども、よはひのほど、おなじまちのは、をかしと見かはしたり、人の心のおもひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける。

●釋義　○あふぎなどみめには　扇などたゞ打見たる處はの意にて。みめには、たゞ打見たる所はといふ意なり。○おどろ〳〵しく　大層らしくとか、仰山らしくとかいふに仝じ、○かゞやかさで　輝かさでにて、あまり飾りて、ぴか〳〵とかゞやかさぬなり。○よしなからぬさま　故よしもなく、何の仔細もなき樣なり。○心ばへある　心の趣きあるの意。○本文　文章や詩などの句をいひ。○いひあはしたるやうなるも　言ひ交はして約束したる樣なるもといふ意なり。○心々と思ひしかども　言ひかはしたるにあらずして、各人の心々に思ひの儘とは思ひしかどもといふ意なり。○よはひのほど　年齡の程なり。○おなじまち　仝じ位の人だちの意。まちは方とか人とかいふが如し。即ちこゝは仝年輩といふに仝じ。○をかしと見かはしたり　約束したでもないのに、約束でもしたかの如く、仝じ樣の裝束したるは、をかしきと互に見かはしたりとなり。○人の心の思ひおくれぬ云々　人の心の我おくれじと思ふより、皆のものがかく物數奇の裝束したるは、明に見られたりとなり。

●大意　女房だちのもちたる扇など、打ち見れば、あまり仰山には飾りはせねど、互に心ばへある詩歌

なとかきつけたるは、互にはなしあふてかきたる如くなれと、別に言ひかはしたにはあらじと思ひしも、仝じ年輩の人達などの仝じ様なるは、如何にもをかしく見受けられた。此れを見れば、此處にさぶらふ人々の、我劣らじと物數奇の裝束したる樣子は明に見られたりとなり。

此段は此時の女房の裝束の皆仝じ樣なるを見て、人の心は、皆我れ劣らじ、後れじと思ふ樣見えてをかしと、式部の考へを記したるなれば。式部の人となりの一端を知るにたる。

三日にならせ給ふ夜は、宮つかさ大夫よりはじめて、御うぶやしなひつかふまつる。右衛門のかみは、おまへの事、ぢんのかけばん、しろかねの御さらなど、くはしくはみず。源中納言、藤宰相は、御ぞ、御ひつき衣ばこのをりたて、いれかたびら、つゝみおぼひ、したづくゑなど、おなじことの、おなじしろきなれども、しざま、人の心々見えつゝ、しつくしたり。近江守たかまさは、大かたのことゞもや、つかうまつらん、ひんがしのたいの、西のひさしは、上達部の座、北をかみにて二行に、南のひさしに殿上人の座は、にしをかみなり。しろきあやの御屏風どもを、もやのみすにそへて、とざまにたてわたしたり。

●釈義　これより御產養の御儀式の樣を記したり、○三日にならせ給ふ夜　御三夜なり。○宮つかさ云々　宮づかさは中宮職、職員なり、大夫は中宮職長官齊信なり。○御うぶやしなひつかふまつる　うぶやしなひは產養にて、小兒の生れたるを祝するにて三夜、五夜、七夜、五十日、百日等の御產養あり、この段は中宮職の人々より、物を奉りて御祝ひ申したる式なり。○右衛門かみ　大夫齊信なり。○おまへのこと　中宮の御前に奉るものに大夫仕ふまつる例なり。○ぢんのかけばん　沈香の樹にて作りたる御膳なり。ぢんは沈香なり。かけばんはかけである御膳なり。○しろかねの御さらは白銀にて造りし御皿なり、○くはしくはみず　委しくは見ざりしとなり。○源中納言　中宮權大夫源俊賢な

り。○藤宰相　藤原實成なり。○御ぞ　御產衣なり。○御むつき　襁褓の事なり。○衣はこのそりたて　衣ばこは衣筥なり。そりたては衣筥に付けたる織物なり。○いれかたびら　筥に小袖を入るゝ時下に敷くものにて、今の袱紗の如きものなり○つゝみおはひ　包物を被ふものなり。○したつくゑ　下机なり。○おなじことの云々　此源中納言、藤宰相の二人より奉れるもの、皆全じものにて、皆白きものなれどもといふ意なり。○しざま　仕樣なり、造り樣といふ意なり。○人の心々見えつゝ　全じ造り方なれども、人々の心々の樣は現はれたりとなり。○大方のことども　大概の事はといふ意。○つかうまつらん　仕奉るならんの意。○西のひさし　西側の廂の間をいふ。○北をかみにて　北の方を上座としてなり。○南の廂　南側の間なり。○西を上なり　西を上座としてなり。○もやの御簾にとり添へて云々　母屋の御簾に添へて御屛風を外側にたてまはしたりとなり。とさまは外側なり。

◉大意　御降誕ありて三日にならせ給ふ夜、中宮の大夫より御產養仕う奉れり。其儀式の樣は。先右衛門のかみは、おまへの事何かとせられたれど委しく見ず、源中納言、藤宰相の兩人より種々のものを奉りたれど、皆全し樣の作り方に全じ白色のものゝみなりとなり、皆全じ物なれば更に代りはなき樣なれども、互に念入れて作りし心々は、其物にあらはれたり。近江守たかまさは大概の事は皆仕ふまつりしならん。其時の人々の座席は西の間は上達部にて、北を上座として二行に並び。南の間は殿上人にて、西を上座としたり。白綾の御屛風などは母屋のみすに添へて外側にたて廻したりとなり。

此段は御三夜の御產養の儀式の樣をうつしたるなり。此式につゞきて、五夜、七夜、五十日等の式あれど皆大同小異のものなれはこゝにて筆をとゞむ。

（完）

英語實習

藤生貞子

通俗書翰文用句集

{Your letter has just reached me.
{I have just received your letter.

御手紙唯今拜誦致候。

I am very much obliged for your prompt reply.

早速御返事被下難有存申候。

Many thanks for your favour.

御手紙難有存候。

I beg you will excuse my neglect.

御不沙汰申上候段御海恕被下度候。

If you will favour me with a call, I will give you the details.

私宅まで御光來被下候はゞ詳細申上ぐべく候。

I must apologize for the delay.

延引の段、不惡御許し被下度候。

Yours of the 15th has given me much uneasiness.

十五日附の御手紙拜見いたし、大に心痛いたし候。

I have just heard from your cousin, that you are the first of our school-girl circle who has taken upon herself the cares and duties of a wife.

御從兄樣より承はり候へば、あなた樣には(御結婚の由)、私共學校友達のうちにて最も早く家政を御執り遊ばし候お方と、ならせられ候趣。

May every year of your married life find you happier than the last.

御結婚後は歳ごとに益々御多祥の程祈上候。

I offer you my most sincere congratulations.

謹んで御祝ひ申上候。

英　和　對　譯

(原文は津田梅子女史校)

Beauty and the Beast.

美人とけもの

II.

Left alone, poor Beauty felt much frightened, but *by and by* she *plucked up courage,* as the Beast seemed quite gentle and kind, and enjoyed the beautiful things she found in the castle.

一人とり殘されまして、慣れな美人は非常に恐ろしく思ひました。が、獸が全くおだやかで親切に見えましたから程なく勇氣を奮ひ起し、そして城内に在る奇麗な物を見て自ら慰めて居りました。

Every morning the Beast came to talk with her, and he always asked, "Are you happy, Beauty?" And she always replied. "Very happy, Beast."

毎朝けものは其女の所へお話をしに參りました。そしていつも尋ねまするには、"美しい姉さま、あなたは樂しいのですか?" そして、此女のいつも答へますには、"大變たのしいのよ、ねヱおまへ"。

But as the days *went by,* she longed to see her family again, and one evening she told the Beast of her wish. He did not want her to go, but *at last* he said: "You will surely *come back* in a month?"

併しかうして幾日も過ちましたとき、此女は今ひとたび自分の家の人に遇ひたいと思ひました。そして或る日の夕がた其希望をけものに申しました。獸は其女の行くを好みませなんだが遂に彼の申しましたには: "きッと一ヶ月以内にお歸りなさるでせうね?"

"O yes, Beast, I promise."

"はいはい、それはお約束します。"

"Then you may go, Beauty, but if you do not keep your promise, your poor Beast will die."

"それでは行きなすつても宜しい。併し若しも此の約束を御守りなさらねば私(あなたの可愛想な獸)は死むでしまうでしやう。

Then beauty went home. Her father was delighted to see her, but the sisters hated her more than ever, because she was dressed in finer clothes than they.

そこで美人は家へ歸りました。父は其娘に會ひまして喜びましたが、其姉どもは今までよりも、一層この女を嫌ひました。なぜかと申せば、此美人は姉どもよりも遙に美しい衣物を着て居ましたから。

(*To be continued.*)

(つゞく)

熟語用法練習

At bottom.

He is a very good man *at bottom.*

わの方は實はよい御人なんです。

at bottom=本來は、眞底(しんそこ)。

At fault.

If we ask whence this comes, every one is *at fault.*

私共が、之は何處から來たのかと尋ねますと、皆答に窮します。

at fault=途方に暮れる、窮す、まごつく。

At hand.

(1) Our holidays are *at hand.*

私どもの休日は近よりました。

(2) I have never seen the prince so near *at hand.*

私は今まで、そんな近間で宮さまを拜した事はござりません。

at hand=近く、接して、そばに

(此句は第一の例に於けるごとく、時に就ても用ひ、また第二例の如く場所の接近に就てもいふなり)

At heart.

He seems to be kind and gentle, but he is not so *at heart.*

わの方は親切で、おとなしい樣に見えますが、實際はそうでわりません。

at heart=腹のなかは、眞の性質は。

At home.

(1) I will be *at home* to-morrow.

私は明日在宅のつもりです。

(2) He is *at home* in the English language.

彼は英語に精通せり。

(3) Make yourself *at home.*

どうぞお樂にわそばせ。

I stayed in that hotel, where I felt quite *at home.*

私は其ホテルに逗留して居ましたが、氣樂にして居りました。

at home=(1) 在宅。(不在は from home といふ)

(2) 熟達す、通曉す、明なり。

(3) 安樂にす、なれヽヽしくす。

消　息　文

（往　信）

Uyeda Shinshu.
July. 29th 1903.

My dear cousin.

I reached home safely last night. My parent, grandmother, brothers and sisters are all very well, they seem to be glad to have me home.

I am quite surprised to see my youngest sister grown up so big and pretty since I saw her last summer.

Well it is so cool in here, I enjoy this country life very much, every body are so kind and trying the please me.

I hope you will give us a visit if you can, please give my kind regard to your mother and I will write you often. Good-by.

from your loving cousin,
Toshi. Matsuhashi.

上田　信州
七月廿九日　千九百三年

愛する從姉妹

私は昨夜無事に歸宅しました、私の兩親、祖母、兄弟又姉妹等皆無事でございます、皆んな私の歸宅をよろこんで居る樣に見受けます、

私の一ばん幼き妹が去年の夏に見た時よりも大きくきれいなむすめになつたにはおどろきました、

まあ此所は眞に凉しいのが愉快でございます、皆んなが親切で私をよろこばせよふとつとめてくれます、

あなたも、一寸なりと御出でくださる樣に御願ひ致します、おかー樣へよろしく、之れから度々手紙を差上げます、　さようなら

あなたの愛するイトコ
松橋とし子

（返　信）

Koishikawa Tokyo.
August. 1st 1903.

Dear cousin.

I received your letter few days ago, and am so glad to hear that you are all well and happy.

Your home is such a dear and happy one; so I am sure you will enjoy it better than any where else. I hope I can have a visit, but as you know, father is away and I must stay home.

I will send Jogakusekai and other interesting magazines by the next mail. Write to me often, I am always waiting to hear from you. Giving love to all of your family.

Good by.
from your cousin,
Haru. Yamada.

小石川　東京
八月一日　千九百三年

愛する從姉妹　私は二三日前あなたからの御手紙をいたゞきました、皆樣が御無事で御たのしき御樣子を伺ひうれしく存じます、

あなたの御宅は信に愛すべく又たのしき御家庭故あなたが外々の何所よりも御愉快に感せらるゝ事と存じます、

私も一寸參りたく存じますが父の留守の内は宅に居らなければなりません、

女學世界及び種々面白き雜誌類は次便を以て御送り申します、度々御樣子承り度く始終御手紙を待つて居ります、

御家内中皆樣へよろしく願ひます、　さようなら

あなたの從姉妹なる
山田春より

科學

暴風雨の話

（秋の山野）

佐藤禮介

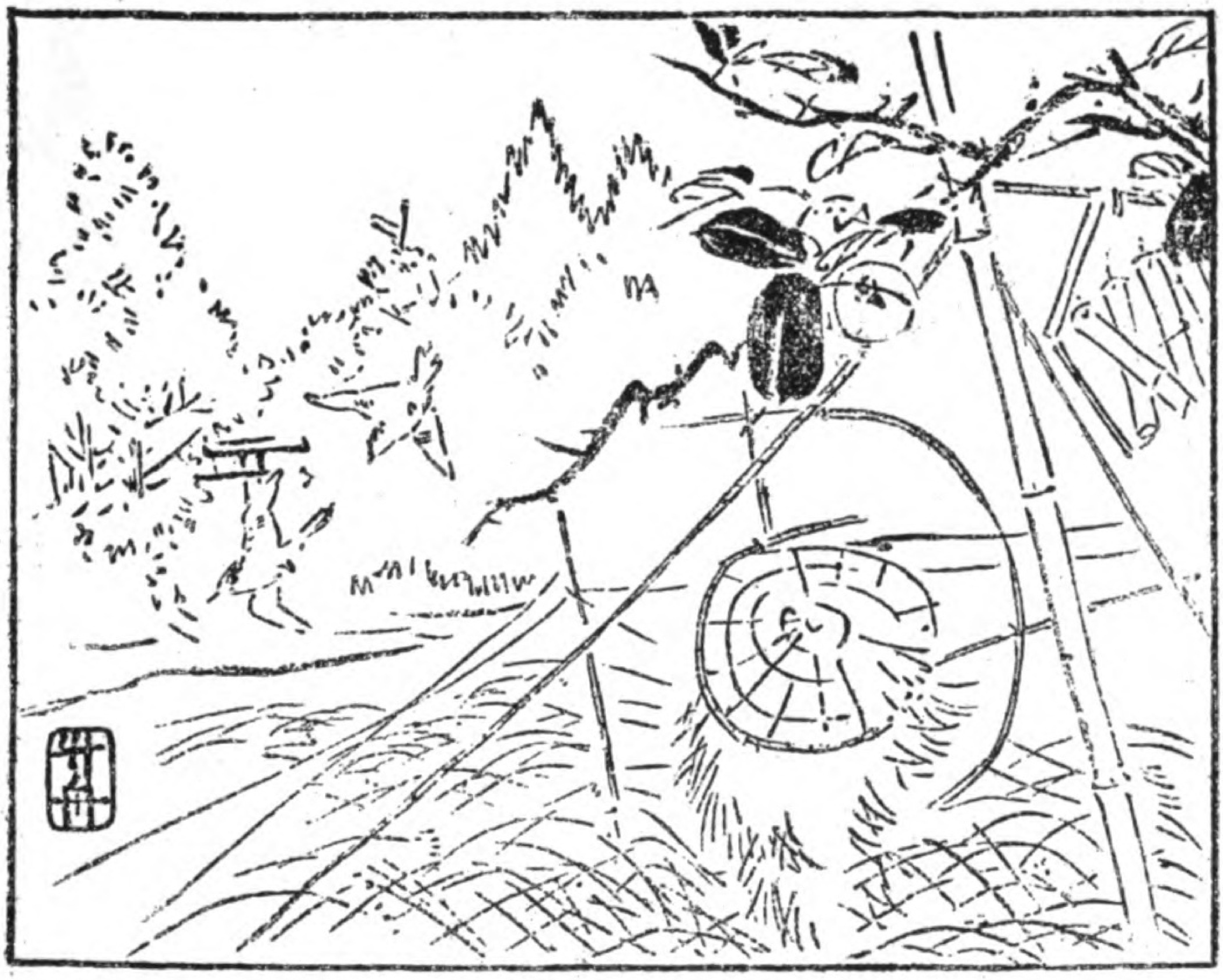
九月といへば、最早秋の初めであるが、殘暑は毎年なかく烈しいもので、夏の土用中よりも、ひといやうなことがあります。しかし時節の遷り變りは又爭はれぬもので、日中は如何に暑くても苦しくても朝と夕暮との涼しいことは確に暑中と異つて居ります。それ故田の面を見渡せば緑の波を打つて居つた稻も昨日と變つて今日は背白い穗が出揃つて恰も白浪の泡立つ様に風に揺られて居ります。斯様に穗が、僅かに出たばかりなのは、稻の晩稲で、早稲では最早穗が黄ばんで風吹けば黄色な浪がうねうねして居ります。穏かに吹けば野山に遊ぶ稚兒の鬢髮を梳づる風。怒り暴れゝば大木や人家をも吹き倒す風、あゝ、此の風は草や木に何んな仕事をするでありましやうか。

（一）草木と風

暴風の後には誰人も世の中に風といふものがなかつたら、と思ふでありましやう。しかし地上に風といふものがなかつたなら、稻も麥も稷も稗も實らないことになります。一體是等の五穀の類は雄蕋の花粉が風の力で送られて雌蕋に附く爲に實るものでありますから若し風といふ媒介がなかつたら、五穀は全く實らす大凶饉となるでありましやう。

それ程大切な風も若し暴れ出したら最後、非常な損害を與へるのであります、殊に暴風の多いのは二百十日ごろであります。是は立春（例年では二月四日）から算へて二百十日目でありまして、是も年によつて少し

の違ひはありますが通例九月一日ごろであります。此の日に次いで暴風の多いのは二百廿日の前後であります。多年の統計に依れば暴風の最も多いのは、九月廿三、十四、十五の三日の中だそうです、暴風の起るのは地球上の或る一局部に甚しい低氣壓を生ずる爲であります、既に低氣壓を生ずれば高氣壓の處より烈しい勢を以て風が渦巻の樣な姿で低氣壓の所に向つて吹き込みます、それ故、低氣壓の場所は暴風の中心となるのです、そして又北の低氣壓の部分はだん〳〵と他



の方に移りて行くものですから、暴風も亦北の低氣壓の進む方向に移るのであります。二百十日前後の頃我が國に襲うて來る暴風は「フイリッピン」群島（印度の東に當る）の東方の海中に低氣壓が起る爲でありまして北の低氣壓の中心はだん〳〵と北の方に進みます北の進路は一定しては居りませぬが、通例は、二つの路を進みます、北の一は「フイリッピン」群島から北に進み九州と中國とを荒して日本海に入るもので、他の一は我が南海岸から本州を通り北海道を貫いて北部の

海に出づるものであります、二百十日前後の暴風は早稻の稻實つた頃で、又晩稻の花盛りの頃に襲ふて來るものですから、農家では非常に此の時の風を恐れて居るのであります、稻田を襲ふ所の暴風はどうしても防ぐことが出來ませぬが林檎や梨、柿、葡萄などの果樹園では例年暴風の吹き來る方向に松杉の樣な並木を植え付けて其の暴風の害を幾分か防ぐことが出來ます。

(二) 秋の七草

天氣晴れ渡つた日、秋の野を徘徊すれば先づ目に觸れるものは種々の草花でしやう、遠い山、近き田畑、皆緑に色取られて居る中に赤き白き、黄色など樣々の秋草が咲き亂れて居る有樣は又云ふに云はれぬ景色であります、秋草の多くある中で世の人が七草を數へて居るのは其の花が別けて一種の趣きがあるからでありましやう、七草とは何々であるかといふに萬葉集に山上憶良が秋の野の花を詠める歌には

萩が花、尾花、葛花、瞿麥の花、女郎花、また藤袴
朝顔の花

とあるので世の人の七草も亦此の七種を指すのであらうと思ひます。

▲萩――萩は高さ五六尺位の灌木であつて山野に自生するものですが、其の莖や葉の形の優美なのと、其の花の愛らしい爲に庭園に移し植えられるのです、昔から人が賞美もし種々に手入をして培養した爲に今では樣々の變種が出來て居ります、其の變種の重なるものは宮城野萩、山萩、本萩、などであります、中にも宮城野萩は一名糸萩、又みだれ萩と稱へまして花の枝は長く糸の樣に垂れ、花は白いのと紫のとあります花咲く日數も長いものですから、最も賞美せられます萩の花は豌豆や蠶豆などの花に似て蝶の形に似て居るので蝶形花と名づけられてあります。

▲尾花――尾花は芒の穗の出でたのを謂ふのであります、芒の穗は其の形、獸の尾に似て居る所から尾花と名づけたのだといふ說があります、芒は稻、麥など、同じ類に屬しまして禾本類であります、莖が細長くて節が高いことや、葉の脈が皆竝んで居て、裂けば縱に

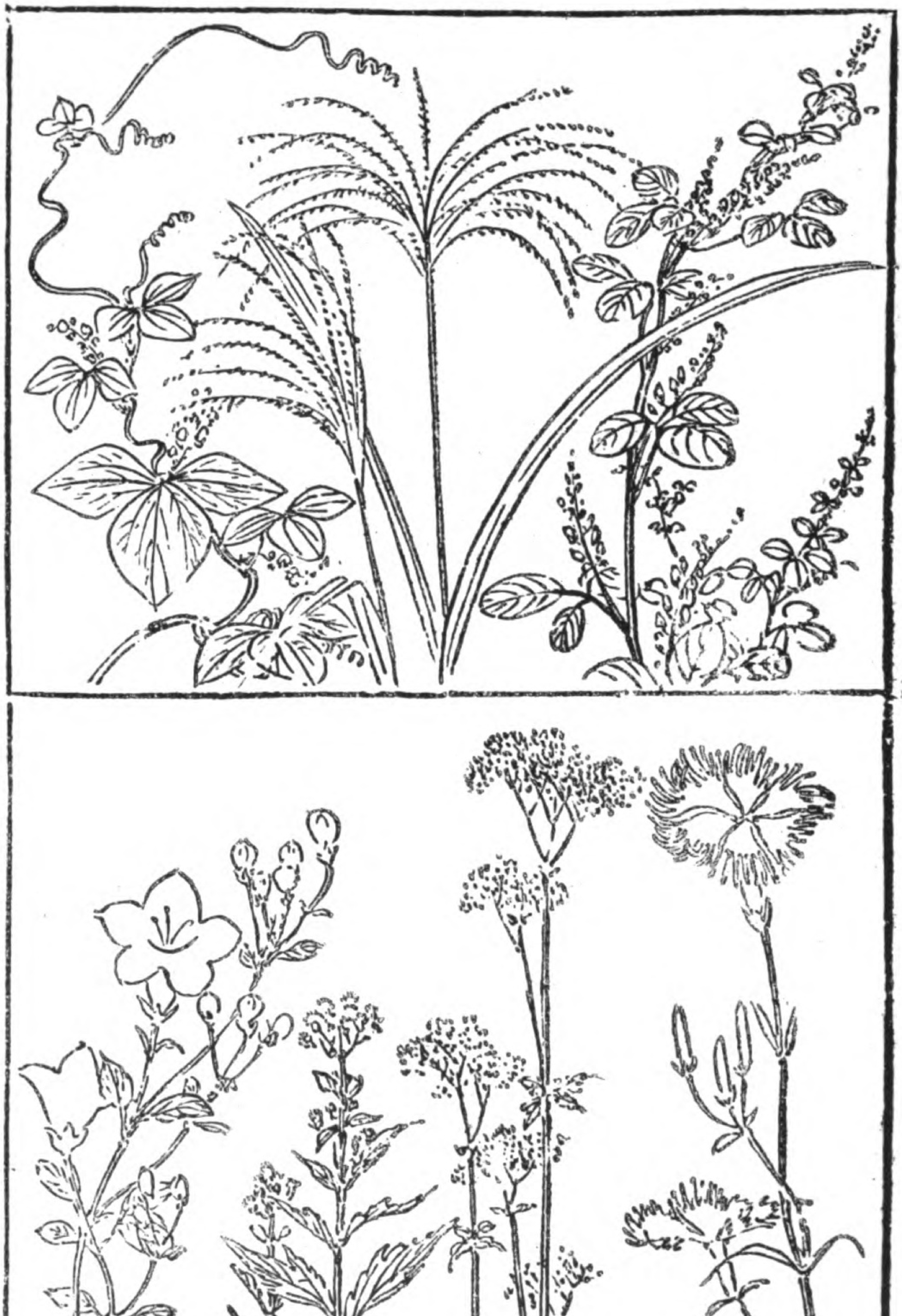
割れることなどが此の類の特別な點であります、莖が細いけれども大層丈夫であるから中々風に吹き倒される樣なことはなく風吹けば靡き伏せども風通り過ぎれば再び起き上がるから丁度人が手招きするに似て居る處から、古人も

おひかはるこや撫子の花すゝき
招かば人もゆきて見つべし

など詠じたので。つまり節高く維管束多い爲に斯樣に強いのであります、尾花の白い毛は何かといふに是は芒の種子に生じた毛であります、尾花の熟しまするど其の種子は尾花の穗から離れ、其の毛を風受けにして思ひ思ひに飛んで行きます種子は程良い處に落つれば芽を出して芒となります。其れ故尾花の毛は種子を撒き散して芒を繁殖させる手段であると思はれます。

▲葛――葛は蔓草であつて葉の形やゝ豆の葉に似て居り蔓にも葉にも茶色の毛が密生し、秋には葉の付け根から三四寸位の總が出て其の總に數多の赤紫色の花を生じます花は萩や豌豆などゝ同じ形でやはり蝶形花であります、實も亦大豆の莢に能く似て居ります、葛は中々有用の草であつて其の蔓で繩を作り皮では布を織り、蔓と葉とは牛馬の飼草として甚だ宜しい、又葛の根を搗き砕いて嚢で漉せば葛粉を作ることが出來ます葛粉の用途は皆人の知る所でありましやう、しかし眞正の葛粉を製することは中々容易でない從つて甚だ高價であります其れ故通例世間で葛粉と稱して廉價で賣り捌いて居るのは皆馬鈴薯から取つた澱粉であります。

▲撫子――撫子は又瞿麥とも書きます莖は一尺餘りであります、山野にも自生しますが其の花が美しい所から、庭園にも移して植られます莖細くて花瓣大きく色も美しくありますから庭草として眺めるには至つて宜しくあります、花瓣の色は淡紅いろで其の緣がきざきざに裂けて居るので一としほの風情があります、又石竹と名づけられて盆栽にもせられ庭園にも植えられてあるものは昔時支那又は朝鮮などから舶來したもので一名カラナデシコと云はれます、我が邦の野原に自



生する撫子に比べると石竹の花は花瓣の縁の裂け方が淺いものであります、しかし石竹は變りものが澤山ありまして花瓣に八重も一重もあり、其の色には赤、白紫など樣々のものがあります。

▲女郎花――女郎花は高さ三四尺ばかりの草であつて花は黄色で、至つて小さくありますが花が數多く群をなしてゐるのと花に近い小枝が皆黄色であるので、遠くから見ると一つの大きい黄色な花の樣に見えます、斯樣に美しい花ですから昔の歌人や風流な人は女郎花の花の色は蒸せる粟の如しなど云つて居ります、此の花は生花に用ひ或は七月は精靈祭に捧げます、日本では斯樣に賞讃して眺めますのに支那では餘り賞美せぬと見え、其の花の臭氣は醬の腐敗したるものに似て居るといふのでヲミナヘシのことを漢字では敗醬と書きます。

▲藤袴――藤袴は莖の高さ三四尺から六七尺位にも生長する草であります莖の頂に澤山の細い枝を出して其の先に小さい淡紫色の花を開きます、花は小菊の心に似て、別に目立つ樣な花瓣がありません、一向見映のない花であります、しかし美しくない代りに香氣は中々良くあります、此の花は眺めるよりも寧ろ芳ばしき香氣を賞美すべきものであります、花に香氣あるばかりでなく莖や葉にも香氣があつて之を乾せば益香氣を放ちます、又之を簷下に懸けて置きますれば半ケ月も香氣を失ひません、それゆゑ便所の臭氣を消す爲に掛けて置く處などがあります。

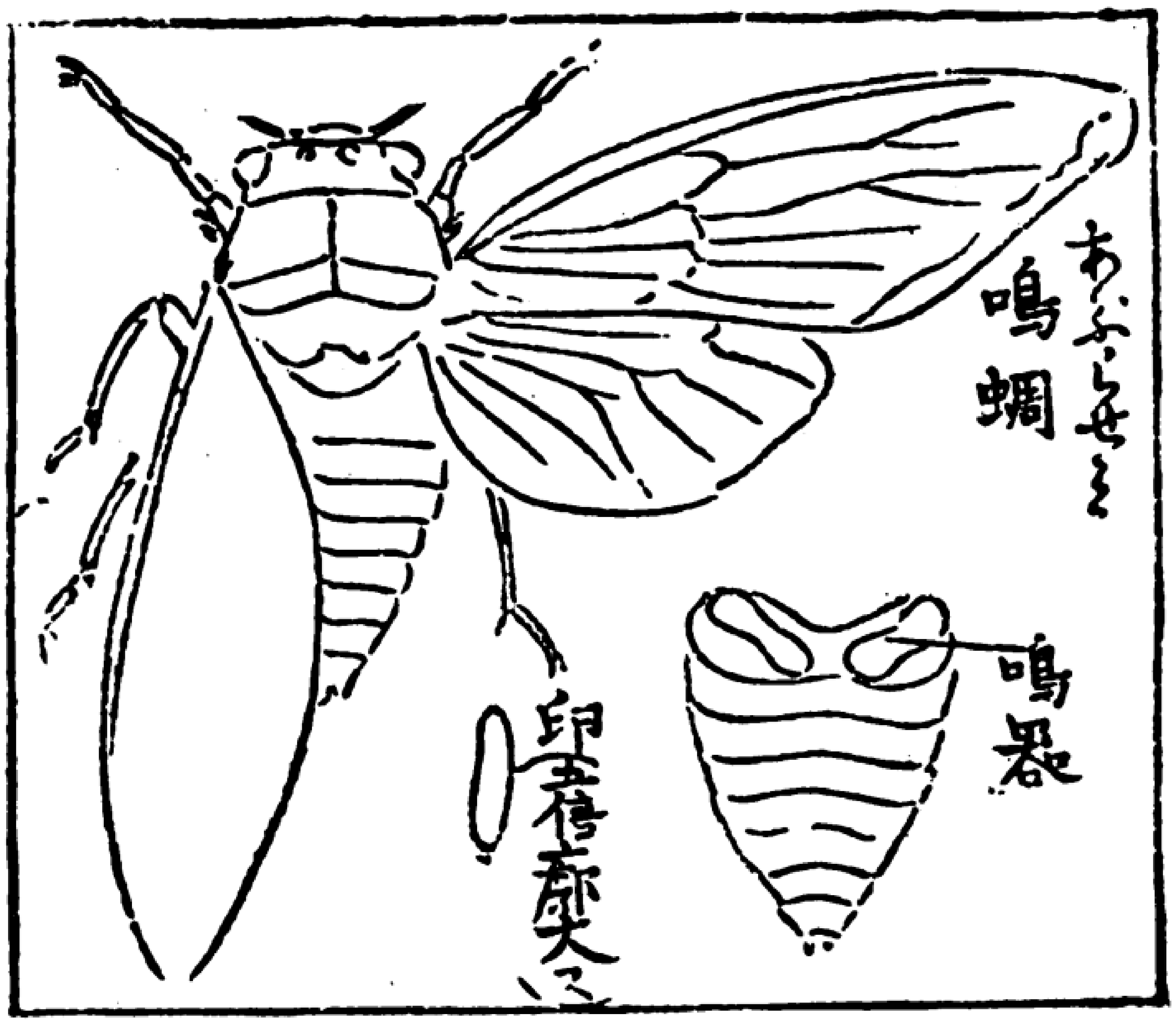
▲朝顏――世の人が通例朝顏といふは垣根などに卷き付く蔓草の牽牛花を指すのでありますが、昔は垣根に植え付ける木槿一名キハチスをも朝顏といひ又桔梗をも朝顏といつた例があります、しかし蔓草の牽牛花は元來外國から舶來したもので憶良の時代にありしや疑はし況して野原に自生するものではありません、又木槿は八九尺餘にも生長する木でありますから、草の仲間入りして七草に算へられる譯がありません、其れ故、山上憶良が

秋の野に咲きたる花ををよび折り

かきかぞふれば七種の花

と詠める歌の中なる朝顔は今人の桔梗を名づくる草であらうと思はれます

昔の朝顔即ち今の桔梗は我が國に昔から在つた草で、しかも我が國中どこの山野にも自生するもので且つ俗にもキキヤウ、カルカヤ、ヲミナヘシなど唱へて人に持てはやさるゝ所から考ふるもキキヤウを七草の一に算へることゝ思はれます新撰字鏡といふ書にもアサガホの名の下に桔梗を擧てあるそうです、桔梗は高さ三四尺ばかりに生長する草で、殊に日當り良き野原に繁ります、莖の頂に青紫色の美しい花を開きます、植木屋などで變種を作つたものには花の色の淡藍なるもの白色なるもの八重なるものなど様々あります、花が美しきゆゑ観賞の爲に庭に植えられますが根は掘り取つて薬に用ひ若き芽は煠で、水に浸し苦味を除いて浸物として食用に致します。



(三) 蟬の最後

蟬には種々の種類がありますが多くは九月を以て最後の月となします、高き梢にミン〳〵と鳴く蛁蟟も蟬は中々高いけれども蟬の終りは何となく今は我が身の最後であるといふ様に聞えます、カナ〳〵〳〵と朝な夕なに近傍の森で鳴く茅蜩、蟬は中中活潑であるが蟬の終りは何となく今は我が生命の臨終である、といふ様に聞えます、ツクツクボウシ〳〵と鳴く寒蟬、ジイと鳴く鳴蜩、鳴き蟬は様々であるが大抵九月は蟬類の生命の終りであります、蟬の悲しいのも歌の哀れなのも亦無理ならぬことであります。

蟬の壽命と其生涯——是等の蟬は悉く今を限りに鳴き盡し、今月を限りに死するのでありますが、然らば皆死に絶えるのでありましやうか、否々何の種類も死に絶えるものはありませぬ、斯様に鳴くのは皆親蟲の雄でありまして、雄は蟬の競爭をして居るのであります、雌なる親蟲は全く聲を出しませぬから、世の人は之を唖蟬といひます、此の唖蟬と嘲られて居るのは實に各々の種類の母蟬なのです。

雌雄の親蟬は地の中から匍ひ出で皮を脱いで樹に登り雄は聲を限りに鳴いて二日か三日で死んで仕舞います雌の親蟬も地から出て二三日間で卵を樹の皮に生み付けて間もなく死にます、吾等の家の周圍に最も普通なる鳴蜩は通常一疋の雌が四百粒から六百粒の卵を產みます、卵は長さ七厘幅一厘五毛位で皆細長くて越瓜に似た形であります。

卵は十日前後で孵つて小さな細長い蟲となつて地の中に潜り込みます、地中で樹の根の液汁を吸つてだんだん生長し、二年の長い月日、眞暗な土の中に生活して充分生長すると、皮を脱いで親蟬となり。始めて日光輝く此の明かなる世界に匍ひ出でます、そこで聲を張り揚げ歌ひ喜ぶのも、束の間、只の二日か三日間で死するのです、暗の世に二年、明るき世に二日、是れ蟬の生涯であります、是も天命と云はゞ致し方なきものゝ、實に憐むべき壽命ではありませぬか。

（完）

食物の科學

白非規矩郎

我れ〳〵の身體に尤も必要なものは衣食住の三つでありますが、其中でも殊に必要でもあり又た利害の直ぐに顯はれるものは食物です、先づ早い話が衣類は少少位麁末でも暑寒さへ凌がれゝば差支はない、又た住居にしてもそうです、なるほど一疊に二人四人と詰めましては無論害のあることですが、三疊に二人居るも

四疊半に二人居るも結局少し樂である位の差であります、併し食物は決して左樣な譯には參りません、古人も「命は食にあり」と云はれましたが、實に其通りで強ち旨いもの計りを喰べたからとて長生をすると限らないが、飽食で押通してはドーしても他界旅行を早める樣になりませう。

食物は體育、則ち體を養ふて行くことには何によりも先きに立つものである。外國では標準食料とか保健食料とか申して、日々使用する食料の分析配合の方法などを示したものが澤山ありますので、毎日の惣菜を調理いたしますのにも頗る便利でありますが、日本の食料には未だ斯樣なことを示されたものが殊に尠ない樣であります、尤も衛生試驗所の報告や大家の說なども時々拜見いたしますが、全く庖厨の爲めにとて記されたものは見受ませんから、ザット御話いたしませう。

扨てドういう食品が體育に合ふかと申すのに、先づ身體の生活機の作用から考へねばなりません。則ち人體の成分と申すものは常に一定の分解作用を受けて居るものでして、尿となつて體外に排泄するものもあれば、又た炭酸氣若くは水分となつて外界へ呼出するものもあると申す樣に、體質の消耗は片時も休んでは居りません、唯だ其れ〲人の生活の工合で多いか少いかの違ひがあるだけであります、則ち常に働いて居るものは遊んで居るものよりも多く消耗する、又た強いものは弱いものよりも多く消耗すると申した樣な譯であります、其れゆゑ成るべく健康で長命をしやうと申すのには、斷えず體の構造に適した食料を體内へ送つて補給いたすより他に方法はありません、畢竟身體を益々健康にいたすのも又た衰弱を招きますのも、唯だ此補給の仕方如何に依るのであります、殊に發育期の中にある人達のためと致しては其差引が平均するだけでは決して十分とは申されません、必ず消耗よりは補給の方を増さねばなりません。

我れ〲が日々用ひて居る食物の中で、身體構造の上に營養となるものを調べて見ると、先づ三種になり

ます。

▲第一は含窒素物――又た成形質ともいふ。肉類の中の肉繊維、鳥卵の蛋白、乳汁の乾酪素、豆類の植物乾酪素、など何れも之れに屬します。

▲第二は無窒素物――又た燃燒質ともいふ。動植物の脂肪や植物油、米麥蔬菜の澱粉、乳汁の乳糖、菓實の糖類など、何れも之れに屬します。

▲第三は鹽類――則ち常に用ひます食鹽、動植物の各食品中に多少含んで居る燐酸鹽、石灰鹽、苦土鹽、などで燃燒いたすと灰分となつて殘るものであります。

此の三種のものは何れも身體の中で異つた方面に營養を與へますものでして、摘んで申しますと第一は重に肉質の器械の構成を支持いたして、身心動作の原資料となります最も貴い養分であります、又た第二は體内の燃料とでも申すもので重に體溫の保續を裨けますもの、第三は凡ての骨骼の構成新陳代謝に必要なものであります。

其故日々の食事で體育の目的を達して資料の消耗補給を工合よく致さうといふには、先づ第一に此三種の營養分を十分に含んで居るものでなければなりません、又た甲の分量と乙の分量とは略々一定の割合に致さねばなりません、之れは學者に依つて其定め方に多少の相違もありますが、去る博士の說に依ると甲が一なれば乙は一八位で宜しからうとの事であります、即ち每人一日に要します營養分は

含窒素　　一八、三瓦

無窒素(炭素)　　三二九、四瓦

程になります。

又た之れに亞で必要なことは食物の調理法でして、體育の目的としては食物の味を好くする斗りでなく、出來るだけ消化し易い形狀に變化(即ち割烹)させますのです、凡て食物で人體を營養するといふのは、其滋養分子が直ぐに血液の中へ吸取れるか、乃至は消化變性となつて其れから血液の中へ吸收せられて、體質を組織いたすものとなります、體質を組織すれば之れで全く其の役目を盡して營養の作用を了つたのでありま

す。

斯様な譯ですから如何に結構な滋養品でも、少しも體内で消化吸收をせないで、空に胃腸を通過して體外へ排泄する事になると、反て無効有害のものになります、其故に食物は成るべく消化の爲し易い様、吸收の出來よい様に致すのが肝心です、則ち之れを工合よく調理致すのが體育的料理法であります。

まづ例へて申すと米は能く白らげて炊くときは、其澱粉へ十分に水が含まる様にするとか肉類は燒て熱の爲めに肉纖維を收縮させ適度の硬さにするとか、蔬菜は皮を去て其組織の十分に破壊する様に熟煮するとか申す様にするのであります。

又た食物を料理いたすに最も必要なる加味品は、直接に營養品となる譯でもないが、嗅味の二官と消化機の神經とを刺戟して、頗る食慾を促し消化を助けるものですから無くてはならぬ品です、則ち醤油、味淋、砂糖、酢、食鹽、酒、茶、珈琲や各種の香の物などです、若し斯様なものを全く省いてしまふと、折角の蛋白質、脂肪、含水炭素などゝいふ營養分も盡く無味淡白のものになります、偶まには自然に好味を持て居る食物もありますが、決して無類の珍味として絶えず用ゆる譯には參りません、十分飽食しても猶ほ足らんとか、又た何程飢ても欲しくないと申すのも、畢竟加味品の使ひ方一つにあるのですから、原料を撰ぶと共に之れに注意することを忘れてはなりません。

以上のことを摘んで申すと、

（一）食物は蛋白質、脂肪、含水炭素、無機鹽類、水分、などを十分に含んで居るものを撰ぶこと、

（二）各養分は容易く消化吸收の出來る形態なること、

（三）養分の消化を催進する加味品を工合よく配合すること、の三點であります。

食物は斯様に吾々の身體の上に尤も緊要なる關係のあることですから、小は一人の健康を左右し、大は一國の強弱に及ぼすと申しても差支ないのでせう、其故身体を健康に致すのには先づ何よりも平生の食物を改

良撰擇することが第一でわります、其れには平生用ひて居る食料品の中でドういふものが幾くら位養分があると申すことを心得て居つて、日々の惣菜献立をなされる節に能く考へ合せて料理いたされたならば、甘く喰べた上に身體が強壯になる譯ですから、次に衛生局東京試驗所で分析致されました、日用食品の重なものを掲げて御目に掛けます。

▲日用滋養食品

概して穀物は澱粉、無窒素物）に富めるものなるを以て體内燃料となり體温の　度を保くるによろしと

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	植物纖維素	灰分	水分
豆腐	七、六五	四、八一	—	一、九二	〇、四八	八六、二五
油揚	二三、九六	一八、七一	〇、四八	〇、〇八	一、三五	五七、四〇
雪花菜	五、六八	〇、八四	六、五五	二、九〇	〇、五九	八四、八八
[illegible]	一〇、八九	〇、〇七	六、二四	—	二、四三	七〇、三七
湯葉	四一、五三	二五、六三	一六、六五	〇、四六	二、八三	一三、五五
生麩	一五、三三	〇、一七	一四、五七	〇、一五	〇、三六	七一、二二
鰹節	七五、六〇	四、一一	—	—	四、〇三	一四、二〇
乾瓢	八、一九	一、四四	四四、一五 二〇、〇八	一〇、九九	四、六三	一〇、五四
白味噌	一二、一三	四、六二	一四、〇三	三、八五	一〇、一一	四四、九〇
赤味噌	一三、四一	四、六四	一一、三六	四、七三	一四、〇三	四八、四四
[illegible]素麺	一一、五五	〇、〇四	七七、一一	〇、三二	〇、三九	一三、九八
蒟蒻	〇、〇二	—	五、一〇	〇、二六	〇、四八	九四、二五

▲穀類

概して野菜は蛋白、澱粉、脂肪、灰分を含めど其大部分は水分にして大抵の野菜は百中六十乃至九十四五を含むものなれば野菜のみにて常食とはなすべからざるなり蔬菜穀物を通じて成分の魚獸肉に近きものは▲湯葉▲豆腐▲味噌▲大豆▲胡麻

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	植物纖維素	灰分	水分
米	七、九九	〇、五五	七四、二一 〇、〇二	〇、五五	〇、一四	一六、一六
小麥粉	一一、七七	〇、九七	七〇、五五	〇、七六	〇、七七	一四、九七
大豆	三八、七一	一七、四四	二四、〇五	二、四七	五、〇〇	一三、四四
小豆	二二、〇一	〇、四三	五六、八九	六、四四	三、〇八	一二、一六
蠶豆	二六、八八	一、二九	四九、七四	一、三二	三、一一	一五、六六

▲蔬菜類

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	植物纖維素	灰分	水分
甘藷	一、五五	〇、一九	二八、一〇 四、〇〇	二、四六	〇、九五	六六、六六
里芋	一、四〇	〇、〇八	一一、一〇 一、〇〇	〇、六七	〇、九九	八四、二〇
薯蕷	二、七七	〇、一五	一七、九〇	一、九九	一、一七	七六、二〇
蓮根	一、七七	一、〇八	一〇、八六	〇、八四	一、一五	八五、九九
土當歸	一、〇六	〇、一〇	二、四四 〇、四二	〇、六四	〇、七七	九五、一〇
慈姑	四、七七	〇、二〇	二六、六六	〇、九五	一、四四	六五、八八
葱	一、四七	〇、〇九	四、三五	一、〇六	〇、四四	九二、九九

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	植物纖維	灰分	水分
牛蒡	一、三六	〇、〇七	二〇、二五	二、一八	〇、六四	七五、四七
胡蘿蔔（ニンジン）	一、一四	〇、三五	七、四一	一、一〇	〇、七七	八九、二三
萊菔（ダイコン）	〇、五五	〇、〇一	三、〇七	〇、四一	〇、四九	九五、四七
蕪（カブ）	〇、四四	〇、〇四	二、七七	〇、七一	〇、四三	九五、六〇
三河島菜	二、二四	〇、三四	〇、九九	一、八六	一、五五	九三、〇八
胡麻	一九、五五	四五、一五	一九、四五	—	一〇、二三	六、六五
柿（種抜き）	〇、四六	〇、一三	一三、四六	三、九六	〇、五五	八五、五五
茄子（ナス）	一、〇〇	〇、〇六	四、一二	一、四一	〇、四一	九三、〇〇
栗	三、六〇	〇、六八	三六、四九	一、一三	一、三一	五七、八九

▲海藻類

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	植物纖維素	灰分	水分
乾海苔	二三、五五	一、三四	四一、三一	—	九、五五	二三、六九
青海苔	一九、五五	一、五五	四六、八	—	一九、三一	一三、五五
昆布	七、二一	〇、八〇	四九、七〇	—	二一、二一	二一、〇八

▲菌茸類

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	灰分	水分
椎茸	一一、六三	一、六八	六七、七三	四、三七	一四、五九
松茸	三、七三	〇、七六	一二、七八	一、〇〇	八一、七三

▲魚貝類

▲概して肉類は魚、獣、鳥に限らず蛋白質（窒素物）に富めるが故に人体の成形分となり即ち肉の原料となるものなり

▲肉類には澱粉質を少しも含まざるものなり

	蛋白質	脂肪	灰分	水分
鰤多脂	一七、六五	三、〇七	一、三八	七七、九〇
比目魚	一九、一六	〇、四七	一、一二	七九、二五
鮪多脂	一七、〇七	四、五一	一、四二	七七、〇〇
松魚	二五、〇六	一、二一	一、〇〇	七二、七三
鰷魚	一八、〇九	〇、六〇	一、三二	七九、九九
鰻	二一、三九	六、七二	一、六四	七〇、二五
鯉	一八、〇九	一一、五三	一、一四	六九、二四
泥鰌	一八、四三	二、六九	一、五六	七七、三二
伊勢鰕	二一、五二	〇、四二	一、七七	七六、二九
蛤	一三、一九	〇、八一	一、八八	八四、一二

平生何處の臺所でも重に用ひられますものは先づ右の通りであります、猶ほ肉類の成分を掲げて見ませう。

▲肉卵類

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	灰分	水分
牡牛中脂	二一、三九	五、一九	〇	一、一七	七二、二五
牝牛全躯不均	一九、八六	七、七〇	〇、四一	一、〇七	七〇、九六
豚肉多脂	一四、五四	三七、三四	〇	〇、七二	四七、四〇
馬肉	二四、四九	〇、七二	〇	一、一七	七三、六二
鶏肉多脂	一八、四九	九、三四	一、二〇	〇、九一	七〇、〇六
全雛肉	一九、七二	一、四二	一、二七	一、三七	七六、二二
鴨	二二、六五	三、一一	二、三三	一、〇九	七〇、八二
鶏卵	一二、五五	一二、一一	〇、五五	一、一二	七三、六七

日用食品の大体についての分析は之れで十分だらうと思ひます、次に保健食料と標準食料とを申して見ませう。

▲保健食料

外國では餘程以前から衛生學者化學者などで、食料を試驗したものが澤山あつて、殊に英國や獨逸などでは學者が多年の經驗の上からして、各種の營業を無業中等業、力役業の三種に分けましたり、又た無業、中等業、業業、劇業の四種にも分けてあります。何れも能く其業に堪えられ、身体を害せぬ樣、十分の營養分を含んだ食料を定めて、之れを保健食料と申して居ります。

此保健食料も人に依りて種々の定め法がありますが、獨逸のウオイト氏は多年經驗の上から中等業者の保健食料を少くとも一日に

▲窒素　一八、三瓦

▲炭素　三二、八瓦

を用ひねばならぬと定められました。

ソコで此窒素十八、三瓦は百十八瓦の蛋白質から仰ぐとして、此百十八瓦の蛋白質の中には既に六十三瓦の炭素を含んで居りますゆゑ、殘り二百六十五瓦の炭素を脂肪か又たは含水炭素から資ればよい事になります、而し脂肪の中にある炭素と含水炭素の中の炭素とは、營養の上から見ましても効能に強弱の違ひがありますし、又た其炭素の殘らず脂肪とか含水炭素とか斗りから資りますと、嗜好を續けて參ることが出來ません、其故双方から適度の割合にして炭素を得ることにすると、次の樣なものになります、之れが全く中等業者の保健食料です。

	分量	窒素	炭素
蛋白質	一一八瓦	一八三瓦	六三瓦
脂肪	五六瓦	—	四三瓦
含水炭素	五〇〇瓦	—	二二二瓦
合計	六七四瓦	一八三瓦	三二八瓦
窒炭二素比例		一	一八

併し我國で之れを直ぐに應用しやうといふことにはチト參り兼ねるのです、体量にしても氣候にしても習

慣にしても、大分歐米とは其趨きが違つて居りますし殊に体量は迚も外國人に及ばないのでありますから、從つて此れだけの養分を要さぬとてもよい事であります、其故東京試驗所の田原氏は本邦人の保健食料として次の樣に定められました、

養分	分量	窒素	炭素
蛋白質	九六瓦	一四、九瓦	五一瓦
脂肪	二〇瓦	―	一五瓦
含水炭素	四五〇瓦	―	二〇〇瓦
合計	五六六瓦	一四、九瓦	二六六瓦

是れまで申した事で普通の人は毎日幾くら位の養分があればよいといふ事は御分りになつたらうと思ひます、併し前に申した分量比例は全く學説の上から割り出されたのですから、其れならどういふものを喰べたなら凡そ此位の養分が得られやうか、と申すことは鳥渡分り惡いのであります、之れには次の標準食料に依て日々の惣菜を加減なされたら、頗る便利であらうと思ひます。

▲標準食料

●第一例

牛乳		一合
味噌		五匁
野菜	葱にんじん、れんこん、うど だいこん、たけのこの類	二十匁
	馬鈴薯さつまいも、さと いも、くわゐの類	二十匁
	胡瓜しろう りの類	十五匁
肉類		六十匁
白米		四合

●第二例

鷄卵		二個
味噌		五匁
野菜	小松菜ほうれん草、せり、三つば、うぐひす菜の類	三十匁
	蕪根うど、にんじん、だいこん かぶら、たけのこの類	十匁
	百合くわゐ、な がいもの類	二十匁
魚類	鯛ぼら、ぶり、なま づ、さわらの類	三十匁
	鮪はうぼう、すゝき、むつ、 いしもち、どじやうの類	三十五匁
白米		四合

●第三例

豆腐	二十五匁
豆類 さやいんげん、ゑんどう、うづらまめの類	十五匁
魚類 ひらめ、きす、こひ、あいなめ、かれい、いさき、あぢ、ふな、はぜの類	二十五匁
燒麩 ゆばの類	三匁
油類 ごまの油、豚脂、牛脂、牛酪、オレーブの類	一匁
肉類 鷄肉、牛肉、豚肉の類	三十匁
味噌 なめものゝ類	十匁
白米	四合

のやうなものでして、此等の養分を調べて見ますと、

	蛋白質	脂肪	含水炭素
第一例の養分	九五、七瓦	二八、〇瓦	四五四、三瓦
第二例の養分	一〇一、〇瓦	一九、二瓦	四四六、六瓦
第三例の養分	一〇一、五瓦	一九、四瓦	四三四、七瓦

の割合になつて居ります。

扨て前に申した樣な次第で、食物は體育と申す事に付ては尤も大切なものであります、運動を致すも体育なら、土地や家屋を撰びますのも體育の一部分ではありますが、先づ何により先きに立ちますものは食物であります、其故第一に平生の食物に就て出來ますだけ改良もし、精撰もして十分に營養分を資られることを望みますので、又たこれは左程に費用や手數を掛けないでも、臺所主任の方の工夫機轉次第で十分に出來やうと思ひます。

以上は田原氏の日本食の調査と江口襄氏の飲食品分析表によりました。其故猶ほ詳しい事を御調べなされたい方は、右の書を御覽になればよろしからうと思ひます。

（をはり）

東京人の肉食

牛肉店の市内各處に散在する所を以て見ると江戸兒は餘程肉食をスク樣に思はるゝが、さてドレ丈の肉をくらうかと調べて見ると一年間の屠殺頭數が馬六千八百九十四頭、豚一萬五千五百十一頭、牛二萬八千〇八十五頭で、三者合計五萬〇四百九十頭に上つて居る、試に此の牛豚馬の數で府下の現戸數四十二萬二千二百四戸を除すれば一年間八戸にて丁度馬か豚か將た牛かの一頭を屠ると云ふ勘定になる、近處合壁八軒の組合で以て一年間に漸く一頭の肉を食ふに過ぎぬといふ樣では未だ以て肉食を誇るに足らぬのである、ゲが一歩を進めて市と郡とを別々に分けて觀察すると面白い現象が出て來るのである、市は現戸數卅一萬六千五百二十七戸で一年間の屠殺高が四萬八千九百二十九頭、郡は十萬五千六百七十七戸にて屠殺高が一千五百六十一頭である、即ち市は六戸にて一年間に牛豚馬を一頭宛食うて居るに一方郡に於ては六十七戸にて漸く一頭を平げるといふ實況である

西洋 少女の遊戯

巖谷小波

(下) 室内の部

其一 エルザレム詣り

遊手は大きな室の内に、椅子を一列にならべて、それに腰をかけてゐる。但し椅子の數は、遊手の數より一つ寡くしておく。例へば遊手十二人なれば、椅子を十一脚丈ならべ、一人は旅人になつて、手に杖を持ちながら、傍に立つて居り、そしてその他の者は、皆それぞれ旅行用の物品、若くは交通機關に假定しておくので。それで用意がとゝのへば、旅人は室内を廻り歩行きながら、旅行の様子を談しはじめるので、そして其中に、旅行用の品の名を云ふのである。例へば、

「私は此間エルザレムへお詣りしました。まづ最初海岸へ出ますのに、汽車に乗つて行きました。」

と云ふと、遊手の中で、汽車になつてゐるものは、まづ座を立つて、旅人の後について行くので、

「それから私は、丈夫なカバンと、奇麗な洋傘を持つて行きました」

そこでカバンや傘になつた人は、また立つて其後につきます。

「海岸へ着いて港にまゐりますと、今度は大きな船に乗りました。その船には磁石が御座いました」

とこゝで船及び磁石になつた者が出る。

「海上も至つて無事に、小亜細亜に上陸いたしましてそれから陸路を、駱駝に乗つてまゐりました。尤も永い旅行のことで、此邊は不便な處で御座いますから、「ビスケット」や水瓶まで、皆用意してまゐりました」

かういふ様に汽車、カバン、傘、船、磁石、駱駝、「ビスケット」水瓶と、凡て旅行に必要なるものゝ名を云つて談しをするので、遊手の多數若くは全体が、皆その名を云はれて、旅人の後についたなら、旅人は室内を種々に歩行きまわつて、良い頃に杖で床をトンとたたくので。するとそれを合圖に。遊手は一度に列をはなれて、早く椅子に腰をかけて了ふのである。その時後れると、椅子が無く成つてしまふから、今度はその

者が旅人となつて、又遊戯をつゞけるのである。

其二　汽車遊戯

この遊戯も前と同じく、遊手の數より一つ椅子の數を減らしそれを長く前後につゞけて、室の内にならべてをく。最初遊手は、ちやんと行列をつくつて、その先頭にゐるもの、歩く方向にしたがつて、色々な唱歌をうたひながら、椅子の周圍をぐる／＼まはるので、その先頭にゐる者が、不意に

「乘車ッ」

と云ふ合圖をすると、遊手は一度に列を解いて、急いで椅子に腰をかけるので、殘りたる者がまた先頭になつて遊ぶのである。

其三　波立つ海

一人の遊手が海となつて、その他の者は、鯛とか鱸とか云ふ魚になるので、まづ椅子をずらりと列べて、それに魚は腰をかけてゐるのである。さて海になつた者は、その傍を歩行きながら、魚の名を呼ぶと、呼ばれたものは、立つて海の後について行くのである、而して魚がみんな呼ばれて後に付くと、海は

「浪が高くよせて來た。海が惡く暴れて來た。空が暗く成つて來た。ソレ暴風がやつて來た。」

と云ひながら、室の内をぐる／＼廻るのである。すると魚もそれに連れて、海のするとほりにしてゐるので、その中に海は、立ちとまつて、

「ソレ風がないだ」

と云ふと、遊手は速に椅子をとるので、其時椅子をとり損じた者は、今度は海になつて、その遊戯をつゞけるのである。

其四　盲牛（目隱し遊び）

遊手は圓をつくつて、眞中に目隱しをした者が、手に短い杖をもつてゐる、遊手は圓をつくりながら、二三遍何か唱歌を唱ひながらまはるので、いゝ時分に眞中の盲牛が、杖でトンと床をたゝくと、それで悉皆は沈默つて、靜に立ち止らなければ成らない。そこで盲牛は、杖で誰か一人を指して、

「啼いて御覽！」

と云ふと、その人はいろ／＼な作り聲をして、誰だか解らぬ樣に答へるので。それを盲牛が聞きわけて、その人の名を指すのであるが、當てられたその人が、今度は代つて盲牛になる。

其五　「ヤコブ」は何處だ？

遊手は大きな圓をつくり、眞中に目隱しをした者が

二人立ち、一人が他の一人を捉へるのである。まづその中の一人が、

『「ヤコブ」は何處だ？』

と云ふと、他の者は

『私は此處だ！』

と云ふので、その聲を便りに、それを捉へに行くのである、もし「ヤコブ」が捉つて了へば、圈の中から二人出て代るのだが、それ迄は圈にゐる見物人は靜にしてゐて、ヤコブが近くにゐるか、又は方角違ひに向つて圈につき當る處ある時分に『止まれ』とか、又は『氣を付けろ』とか注意をしてやるが、其他は默つて居なければ成らぬ。

其六　隣りの御方はお好ですか。

遊手はなるべく椅子を不規則に幷べて、それに腰を懸けてゐる。一人は鬼になつて立つてゐて、誰れでも任意の人の前に行つて、その人に問かけるのです。

『貴君は隣のお方はお好ですか』

と問はれた人は、

『右のお方も左のお方も、みんな私は大好です。』

と答へたなら、又他の人のところへ行つて、前のとほりたづねるのですが、

『私の右のお方はいやですから、何卒〇〇さんと代つてほしいのです。』

と云ふと、直ぐにその右手に腰をかけてゐた人は、名指された人と席を換るのですが、その席を換へる間に、自分の席を鬼に取られて了うと、今度はその人が鬼に成るのです。

其七　反對遊び、

遊手は卓を圍んで坐て、手ん手に「ハンケチ」を丸め手に持つてゐると、その中の一人が指揮者になつて、

『放したり！持つたり！』

と初は徐に、後にはだん〳〵急に云ふのですが、遊手は皆指揮者の爲すのとは反對のことをするのです。例へば指揮者が「ハンケチ」を卓の上に置いて、

『放したり！』

と云つた時には、遊手は「ハンケチ」を手に持つてゐればよいが、もしその時指揮者のするのに釣り込まれて、放してはいけないので。而して度々間違へた者は、罰として何か藝をするのである。

其八　指環まわし。

遊手は大きな輪をつくつて、坐に着き、長い紐か糸に指環をとほし、紐の兩端を括り、それを兩手で膝の

上に持つて、右へなりとも又左へなりとも、紐を繰つて、指輪を少しも知れない樣にまわすと、圈の中には、一人鬼になつた者がゐて、宜い時分に足で床を踏み、又は手をたゝいて合圖をすると、廻して居る紐の運動を一時に止める。其の時鬼は考へて、誰の手に指輪がゐるかを當るのだが。名を指された者は、掌をひらいて指環が有か無いかを見せ、當てられたら代つて鬼になるのだ。

其九　お金貨、お金貨、まわつて來い！

遊手は大きな圈をつくつて坐り、

『お金貨、お金貨、まわつて來い！
手から、手へと、まわつて來い！』

と唄ひながら、一個の貨幣、もしくはそれと同じ樣な少い物を、隣の人の手へ手速くそつと渡すのである。而して中にゐる鬼を迷はす樣に、持つてゐる者は、待たないような顏をしてゐるのだが、鬼はまたよく考へて、それを持つてゐる者を指すのである。

其十　仕立屋さん在宅ですか

遊手は圈をつくつて椅子にかけてゐると、一人は立つて圈の中にゐる。而して中を歩行きながら、一人の前に立つて聞くのだ。

『仕立屋さんは在宅ですか？』

聞かれた人は、

『イヽエ、お隣家です』

と答へるのだ。その中に問はれた人と向ひ合つてゐる者は、誰とでも隨意にそつと坐を取り換るのだが、換へられた人は、また何處へでも行けるのだが、その間にうつかり空いた椅子を鬼にとられると、今度は鬼に成らなければ成らない。

其十一　旅行遊戯

遊手は圈をつくつて坐り、而してまづそれ〳〵に、土地の名を撰んでをくのである。その中央で、一人は目隱しゝて、旅行談をはじめるのである。例へば、

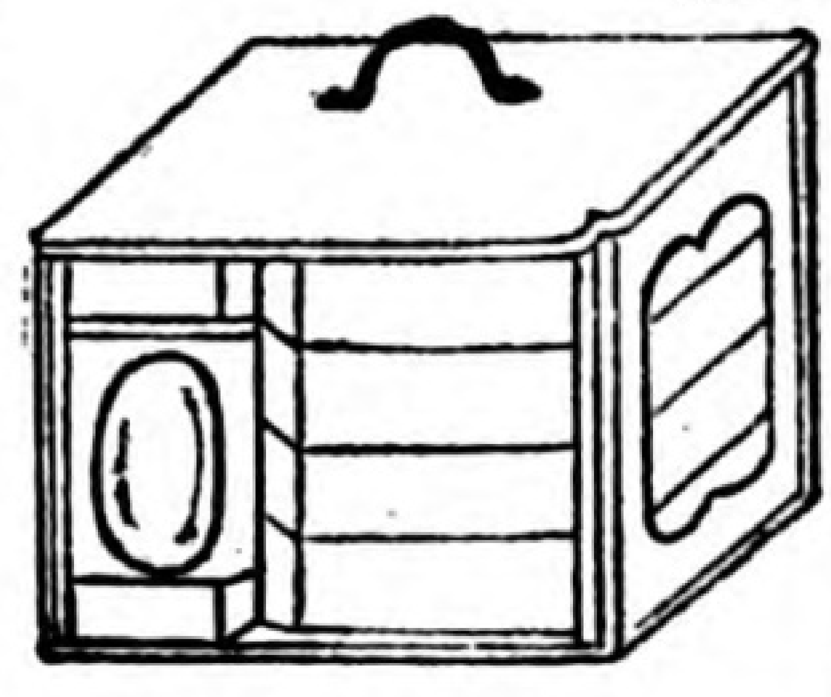
『靜岡へ行つて、それから仙臺に寄り、又新潟へ出て、直ぐ大阪へ行きました。』

と順序かまはずに云ふと、靜岡とか仙臺とか、かねて名の付いてゐる者は、速に坐を換へて、その話の順にならぶのである。その中に鬼は、誰かを一人捉へるのであるが、誰も捉らずに濟むと、悉皆は

『まづ無事に着きました』

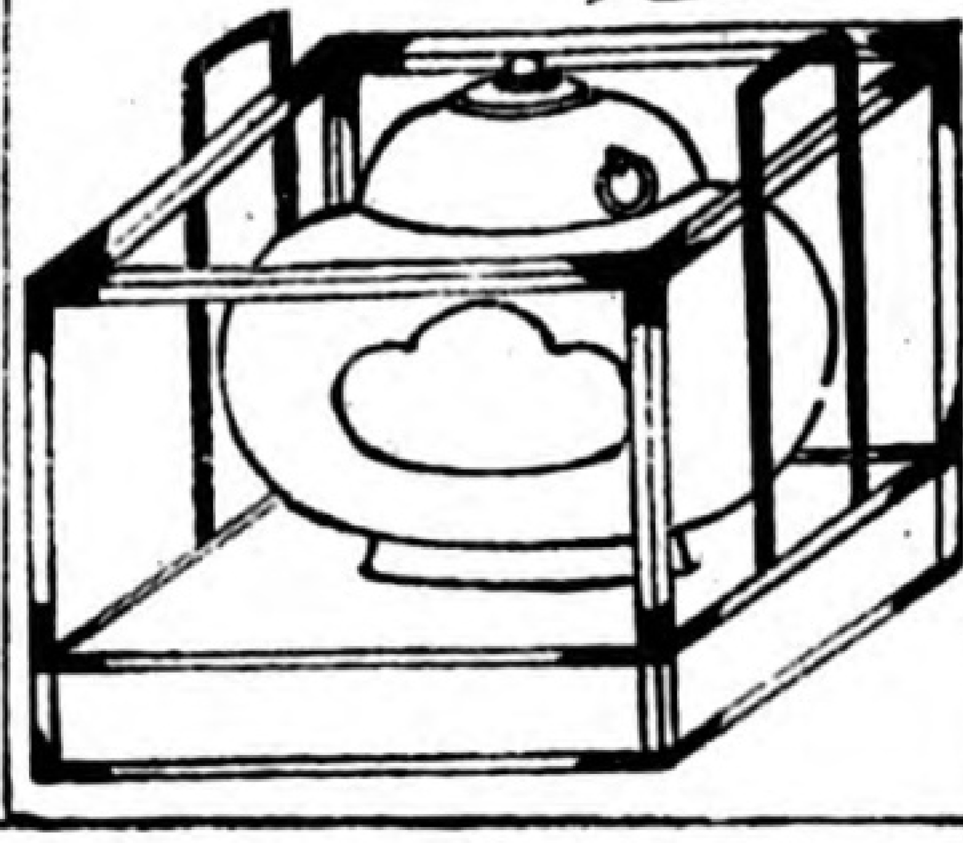
と云ふのです。捉へられゝばその者が、今度は鬼に成るのである。　（完）

提盒



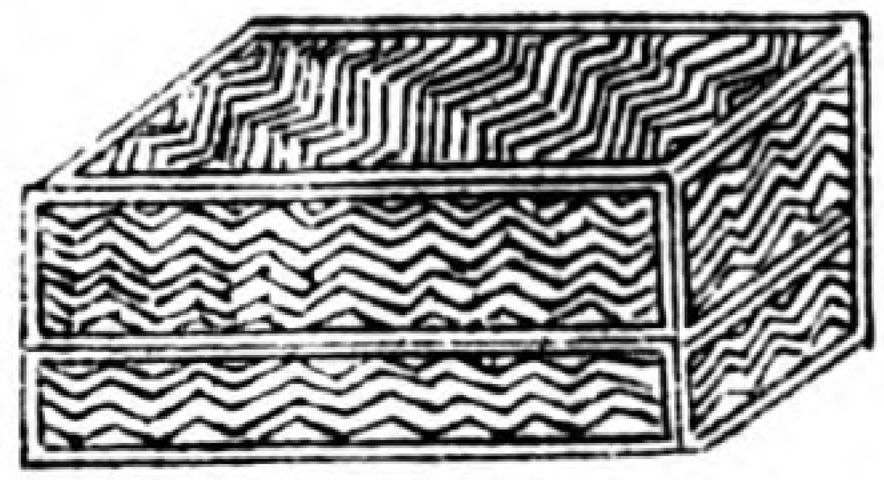
提盒は今の提重なり料理を入れて山野に持ち運ぶものなり

提爐



提爐は俗に茶辨當といふ花見遊山の節貴人の供に携へ行くものなり

笥



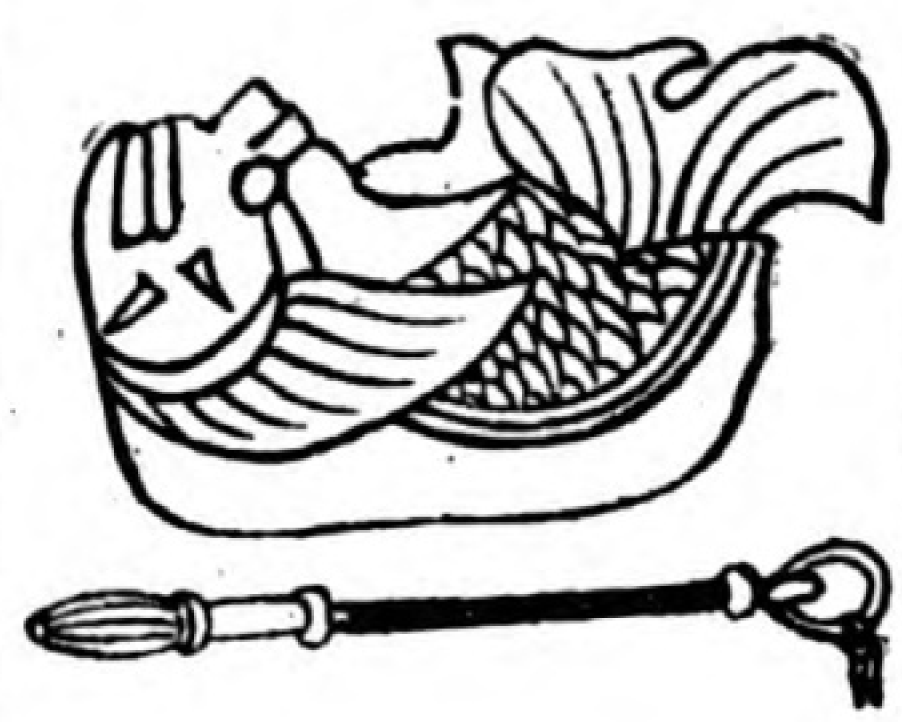
笥ははこなり食物衣類を容るゝもの、竹木にて造る漆を塗りたるものを塗箱といふ

彝



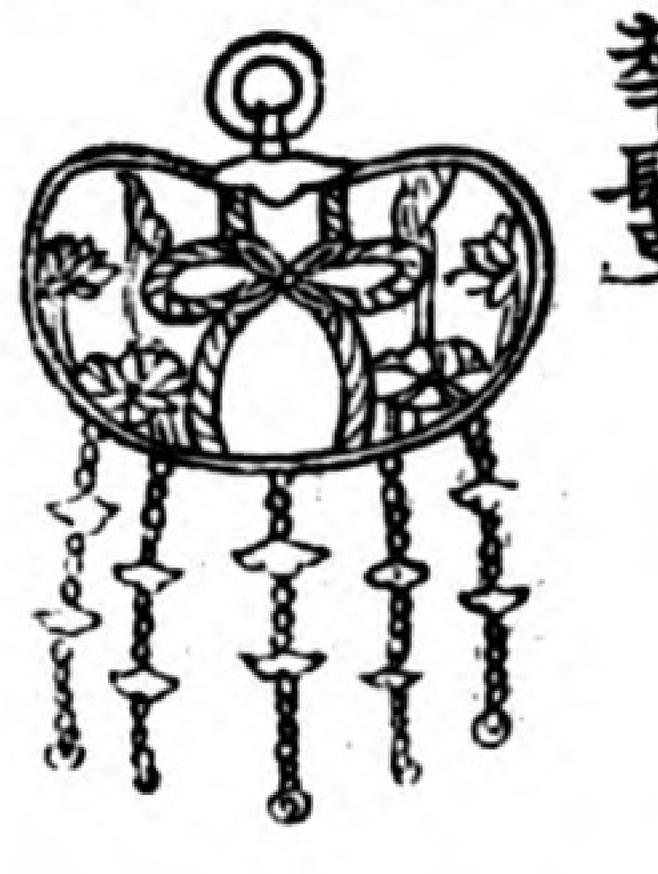
彝は鼎の一種なり支那の古周代祭典に用ひし酒器なれども爾來物代り星移り以て今日は之を香爐に用ゆるに至れり

木魚



木魚は梵寺の具なり木にて魚形をつくり中をうつろにして横に細長き穴を穿ち表に鱗の形を彫る

華鬘



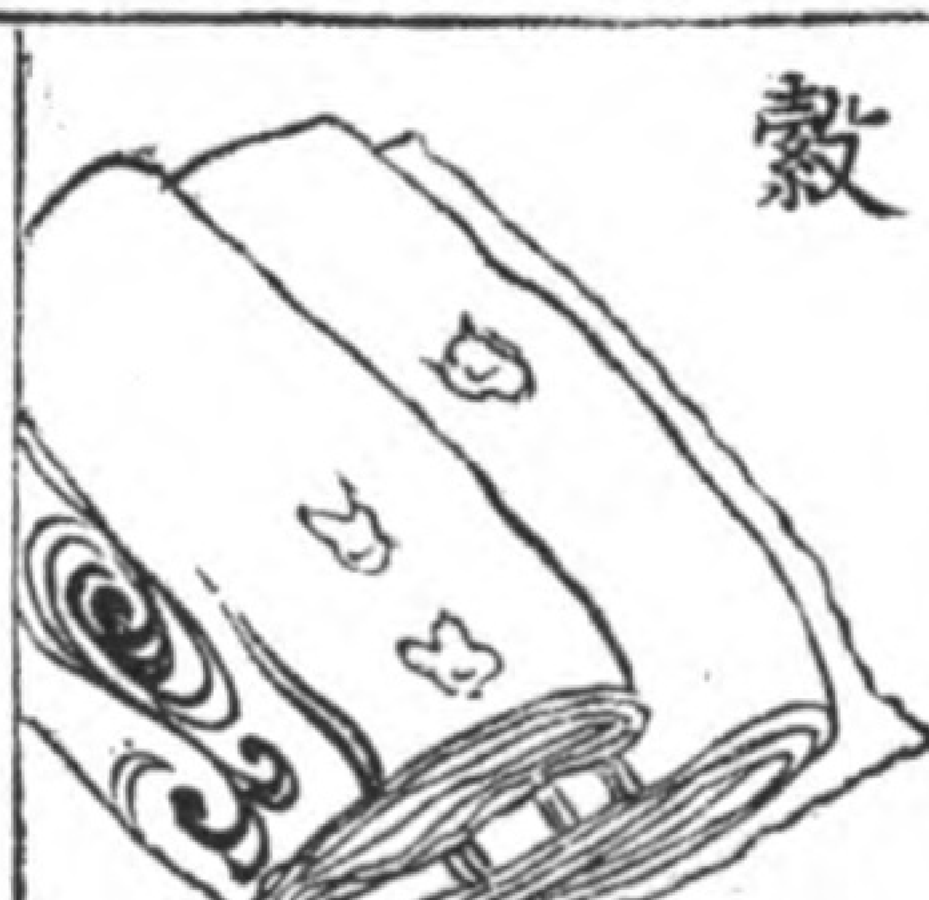
華鬘は古代支那婦人の頭髮を飾る瓔珞なり我國にては奈良朝の貴婦人華鬘を用ゐたれどもその形は大に異れり一說に華鬘は官女の頭のかざりなりと

繡



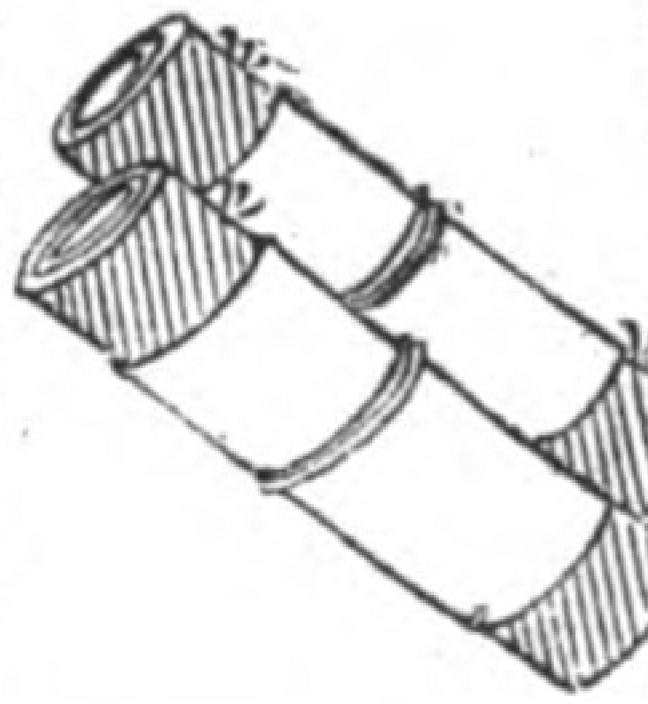
繡は五彩の刺文なり素絹の上に色糸もて種々なる摸樣をぬひつけたるもの今ぬいとりといふ

縠



是はちりめんなり、縦いとを右よりとしよこ糸を左よりとしてをりたるものなり

加賀絹



加賀絹は古加州小松より織り出す絹の名にして献品として幕府へ上げしものなり

眼の記臆（器什衣服の部）



紗

紗はうすものなり、夏の衣にして金紗銀紗紋紗の名あり



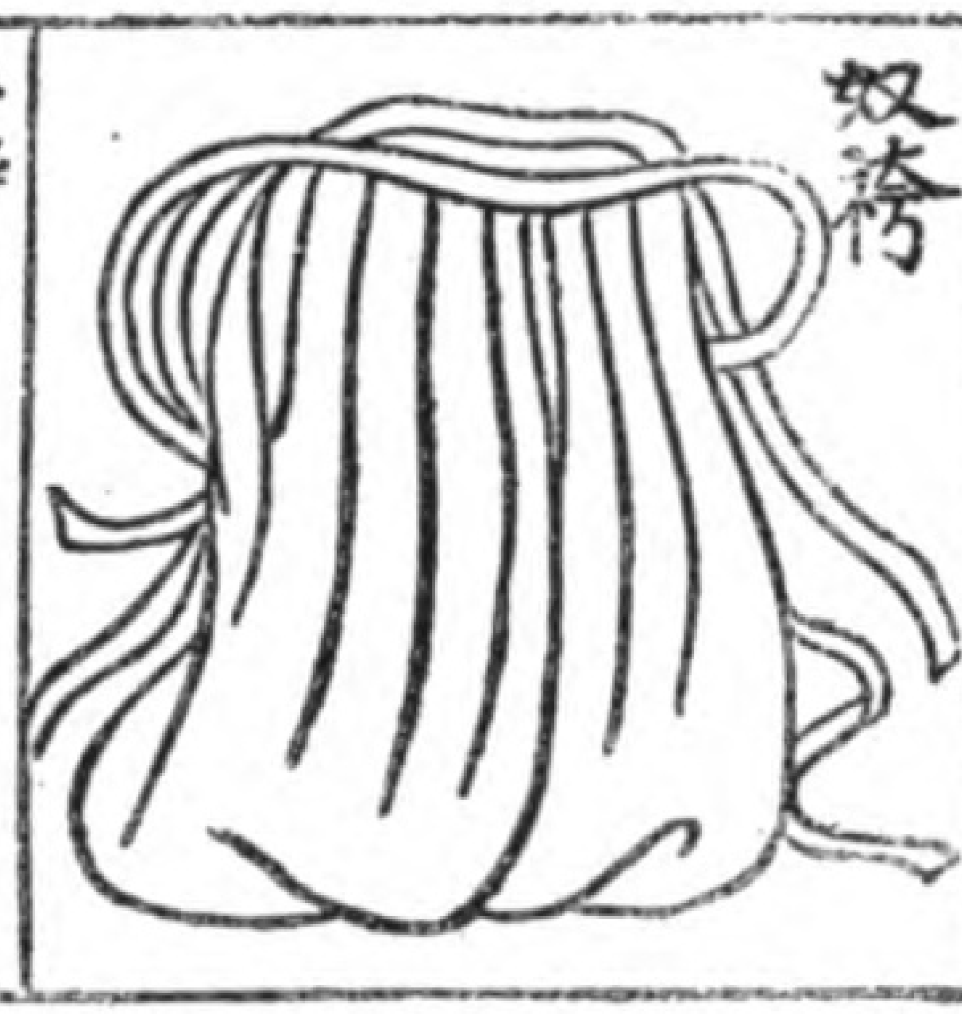
錦

錦は五色の糸を織りて花もようを出す俗にいふ金襴なり京都西陣の名産なり



緞

緞はどんすなり花段、金段毛段等あり



奴袴

奴袴は女のはかまなりむかし禁中にて女中のはきたるものそのいろ赤し



半臂

半臂古代樂人の服なり束帶の折袍の下に着る袖の殆んとなきやうなる短かき衣なり



雨衣

雨衣は紙にて造り油を塗りて雨露を凌ぐに用ゆ又毛織ものにて造る之を毡衣といふ外國傳來の品なり



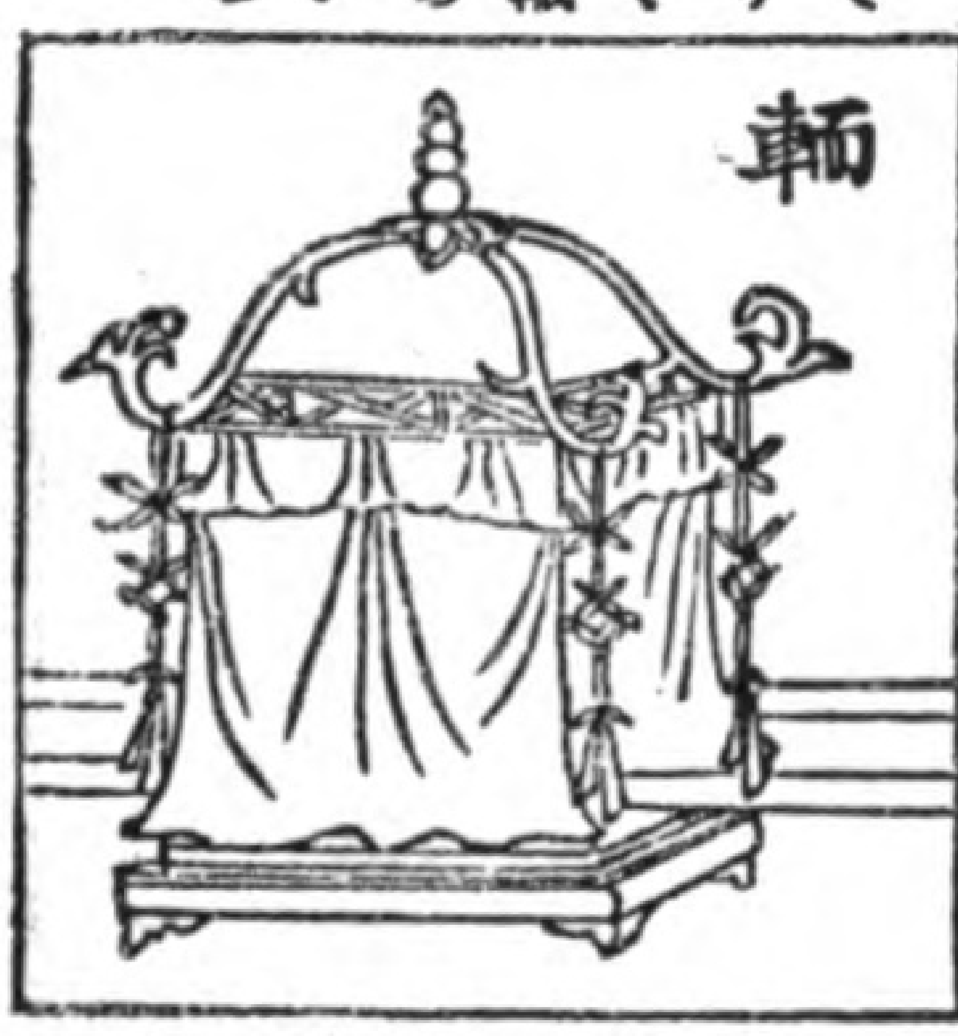
胡床

胡床は古の椅子なり、陣屋などにて用ゐし腰かけにして脚を左右より互に組み尻の當る處ろに革などを張り疊みて携帶に便にしたるものなり



靈牌

靈牌は佛者の位牌なり改名を記して佛壇に安置す



輀

是は喪車なり貴人の棺を載むるものにて後世の輿に同じ

雜録

西洋文豪 # 夫婦人情の波瀾

高木蔽日

此文の手ほどき本篇の主人公カーライルといふ人は英國近代の文豪（批評家）で日本でいへば頼山陽とか新井白石とかいふやうな大家でございましてアチラでは三歳の小供もよく承知して居りますけれども日本ではまだ廣く知られては居りません、此の篇はこの大學者の夫婦の間柄には就ての事柄、近頃舶來した外國の雜誌に出て居た極てめづらしい御話でございます聞いて極樂見て地獄とは由來文士の家居の様を罵つた言葉ですが。この文を讀めば斯る言葉のあるも又偶然でない事がわかります

（一）共に棲み難い夫

夫として共に棲み難いのが天才と愚人との二種。若し幸福の多少を云たならば、それは愚人の家庭に多いだらう。此點から見ると女は天才に嫁ぐより愚人に嫁いだ方がまだ勝である。が、實際は普通の人同士の結婚が先づ無難で、最も幸福であらう。茲に情の方面から觀察しやうと思ふ英國の文豪トーマス、カーライルは、是れまで夫としては家庭道徳に缺けた所が多く、殆ど其妻を虐待とまでは行かずとも甚しく冷遇して、爲に其妻から難物扱ひにせられ、其家庭は幸福の少なかつた天才の一例に擧げられて居て、其傳記を讀だものは今に至るまで誰も之を疑はない。有名な傳記家フラウド氏の書いた『カーライル傳』を見ると、カーライルは男として又夫として頗る批難すべき短所を有て居た様に誰にも信ぜられる。兎に角泰西の文壇ではカーライル夫婦の情合に就ては近來新に問題に爲て居るから、情のカーライルと其妻との事を考究して見ませう。そこでまづ、談の順序として其初戀の失敗から叙べませう。

（二）氣高き乙女

文人の初戀に失敗した談は少なくないが、カーライルも亦其一例に漏れない。氏は千八百十六年其齡二十二歳の時にカークカルヂーの文典學校で教師をして居たとがある。其頃圖らずもマーガレット、ゴルドン孃といふ美少女を見初めた。が、何が扨血氣盛ではあり臍帶斷て初て戀を解するに至たのであるから、氏は孃の優しい心に引寄せられて、二人の交情益々深くなるばかり。しかし好事魔多しで、茲に忽ち思ひ設けぬ故障が起た、それは孃の叔母が決して許嫁してはならぬと孃に命じた一事で、之が爲に二人の間は其局を完うせずに裂かれて了た。此マーガレット孃は即ちカーライルが後年其著『サルトル、レザルタス』といふ書物の中に美人でもあり、才氣もあり、眞面目でもあるが、しかし陰氣な變心し易い乙女として描いたブリユーマインの本體で、其篇中に、

ブリユーマインはあらゆる女竝に乙女の中にありて他に異りて見えき、其程の善さは地上の光の中に星の存するが如く、最も氣高き乙女……男は一朝其晨の星の消れ行き且暗赤色となれるを見き……女は聲を震はせて云ひぬ、二人は此後遂に又相見るとなかるべしと。

と云たのは、也許當時の光景を想起して書いたのであらう。愈々二人の間が手切れと爲た時、孃からカーライルに贈た告別狀がある。此告別狀には君の才幹は時節到來と共に世間に知らるゝ日があらう、天才は君を豪い人にするに違ひなからう、が、尚其心を優しくして溫和な氣風を養ふ樣し給へかしとの忠告があつて斯う云ふ文句が聯ねてあつた。

善德は君をして敬愛せらるべき御方樣と爲し候樣相成可申候はん。親切溫順なる擧動に依り候て君を常人との間の甚だしき懸隔を御排除相成候樣念じ上まゐらせ候。

中々適切な忠告である。其後二十年を經てから、カーライルは不圖倫敦なるハイド、パーク公園で前のマーガレット孃、（今は加奈陀ノーヴアスコシアの州知事バンナーマン夫人）に邂逅たとがある。迭に深く言葉を

こそ変さゝれ、夫人の眼には「矢張昔のトーマス其儘だ」と見えたに違ひなからう。

(三) 非結婚同士の結婚

千八百二十一年カーライル二十七歳の六月、友人エドワード、アーヴイングの紹介で、是れより二年前に世を去たウエルシユ醫學博士の息女、ウエルシユ嬢といふ其頃二十一歳の乙女の教師と爲た。此ウエルシユ嬢こそ後年カーライルの妻と爲たので、其初めはアーヴイングに師事し、後には其情人となつたのであつた。——是れだから若い男女には注意が肝腎である。——ア氏とカ氏との因縁は又誠に淺からずであつた。ウエルシユ嬢はカーライルの妻と爲て後、アーヴイングの事を想起して述懐したとがある。

わらはは若し彼御方様と結婚いたし候ひつらんには罵り叱り候聲は聞かで相濟み候事と存まゐらせ候。

と生憎アーヴイングは他の嬢と結婚したので、ウエルシユ嬢は遽に秋の扇と捨てられたのであつた。其處へカーライルが來て頻に獨逸文學の研究を勵まして居た失戀同士の間柄故、當分は孰方も陰鬱で、過去の記臆と悲痛とを忘れ様として居たのと、孰方も一たび踏で見た道の山あり川ありで存外容易く無く又平坦でないのを心に覺えて居るから、再び其道をたどらうといふ考は暫く出なかつたのとで、二人の間は無事であつたが、其間に春も立ち、秋も暮れ、頓て千八百二十三年を迎へ、カーライルの齢二十九歳、ウエルシユ嬢二十三歳と爲た時、嬢から斯う云ふ書簡をカーライルに贈つた。

わらはは君を愛しまゐらせ候……あらゆるわらはの心の中にて最善の感情は君を愛し參らする一事に籠り居り申候。然はあれど君にして若しわらはの兄君に渉らせられ候はんには、わらはは君を兄君同様愛し參らせ度存居まゐらせ候へども……君の妻——決して〳〵左樣には無御座候。

少許訝くなつて來たではあるまいか。この時のカーライルの返書は斯うであつた

御身は一人の妹の格にて此身を愛し被下候も結婚

は不被成候由、此身も愛てふ言葉のあらゆる意味を盡し申候て御身を愛し可申、且又御身よりも此身は愈々增して致結婚不申考に候

男女相愛して居て結婚せぬといふ誓紙も可笑いが、其誓紙の反古紙とならなかつた例は神武以來——ではないアダム、イヴ以來滅多にない件だ。果して三年たちて二人の中には夫婦約束が成立ち其年十月十七日に結婚した、此時カーライルは三十二歲、ウエルシユ孃は二十六歲であつた。

（四） 恐婚病

トコロが二人共大の恐婚病患者であつたとは其結婚前の書簡で解る。カーライルが二十八歲の時友人に贈つたのは斯うだ。

此等天才を有し候女姓は之を導くに其法を誤り候へば最も可怖ものに御座候。小生若し致結婚候樣なる場合致到來候へは、小生の內助者と致候て斯る女姓の一人を得度ものと存居候、尤も然る場合には小生等の生涯は地上に在りては極めて不安不恰當なる者

と相成——蜂蜜と苦蓬と、最上の怡樂と最上の痛苦と併臻り候事に可有之、一時は靑天白日を仰き候樣なる好天氣に遇ひ候歟と思ひ候へは、又忽ち烈風霜雪に和し到り候て、電擊雷轟と共に可恐暴風雨を以て相繼き候樣——都て同季節に悉く之を混淆し參り候て——晴天を見候日は常に最も可少樣相成候事と存居候

カーライルの妻の娘時代に其女友の結婚期が近づいたと聞いて、之に寄せた書面が又頗る飛放れて居る、

御許樣には近々御結婚被遊候由御知らせ被下わらははたゞ〳〵驚愕の聲を發ち候外無之候、斯く申上候へば御許樣にはわらはを心狂へるものと御思召被遊候はんも存不申候へども、御許樣の行衛も定かならぬ空中に御身を跳らせられ候て、ひた投げに投げさせられ候樣なる御振舞を拜見いたし候ては胸も潰るゝ思有之候事是非も無き次第に、斯る場合に御壽ぎ申上候はわらはには却つて天意の誘惑を受け候樣存られ〳〵。是れまでわらはの承知いたし候處にては、

初て結婚いたし候節——其戰の始まり候前に一兩の神に」なり謳歌相唱へ候て——凱旋の鹵簿の如き風をいたし候事今日の習慣に候へとも此事たるやわらはには稍々無意味、稍々神を褻瀆候事の如く被存候(中略)慥に結婚は二個の人間の死するまでは善惡共に相互に覊束いたし候事と可覺候。

(五) 恐ろしい事——煙草三服

斯る恐婚病患者の寄合で、愈々結婚の場合、其恐怖の實境と爲て來たとき、之を恐るゝのは敢て異むには當らない、が、常人の眼には殆ど其理由が解らない位なものだ。カーライル夫婦も此場合に斷首臺に登る樣な心地でもしたものらしいが、頗る可笑い觀がある。ウエルシユ孃は嫁入準備をする時に「オー、恐ろしい事だ」といひ、カーライルは心甚だ憶し、結婚の爲にテンプラドンまで旅行をしやうといふとき、弟のジヨンを伴て花嫁の馬車に同乘したいと申し出た。其含蓄方も一通ではない。が、花嫁は書簡を以て斷然之を辭拒た。

わらはの道の一寸もジョンと同行いたし候義は御斷り申上候。

カーライルの心配は尙巳まなかつた。それは花嫁が結婚の儀式を厭ひ、「嘔吐を催すべきとだ」と云つたである、之を甚く意に介て力を落して居たものゝ、叉手考へた所が詮なきことゝ思つたか、遂に斯う書いて花嫁に贈つた。

結局われらは此差迫り候儀式に付心を勞し候事多くに過ぐる義と信じ申候。

如何にも其通り、誰が結婚の式場で嘔吐を催したものがあらう。飛だ餘計な心勞をしたものさ。カーライルは是れでも尙心中の煩悶を排することが出來ず、意を落着けるには煙草の援を藉らなければならなかつたと見え。更に斯う書いてある。

叉手愈々結婚の爲め致旅行候道すがら葉卷煙草三本相喫し候事だけ御許し可被成候そは今回まさかの時に當り候て此身の安心を得る爲に候

恐婚病も此に至ては寧ろ滑稽の極である。で、結婚

が濟でから新夫婦はエヂンボローに新世帶を張たのであつた。

（六）　樂く春めき渡申候

それから漸く四箇月目、即ち千八百二十七年二月十七日にカーライルの妻が認めた書簡がある。是れは今度始めて公にせられたので、今まで世間に知れなかつたものである。之に據ると新婚匆々は中々幸福であつたとが解る。

われらは誠に靜謐に暮らし居り申候、戸内は掃き淸められ、且裝飾を施され候て、何事も皆暄き樣被覺家の外は絕て冬なき樣に相成候て、何物も樂く春めき渡り申候如く綠の色を帶び始め候樣被覺申候此時に當り候て樂き人々は數多われらに面會の爲め車を寄せさせられ、樂まざる來客も遂にはわれらの愉快と相增し候事と相成申候。われらは之が爲に曾て疲勞を覺え候樣なると無之候（中畧）わらはの良人は平生事に興味と教訓とを含み居申候。われらは讀書仕候、其種類はスコットの聖典より以下諸小說に至るまでに候、又わらは、縫物鍼と裁取針とを手に致し其餘女工は悉く之を勉め居り申候。此外には復たピアノー有之「暴れ荒み候胸を和らげ居り」申候。

（七）　戀憧れ居申候

翌年五月カーライルは妻の鄕里なるクレイゲンプットックに移轉すると爲た。妻は昔住まつた家に行て其新宅の敷物窓掛などを調へて居たが、不圖病に罹されたので書簡を夫の許へ贈つた、日附は八月二十日で斯う言ふとが書いてある。

わらゆる良人中最も親切に最も可愛良人、君にはわらはの樂しき面色を御覽被下度樣願候。今少しくわらはの不在中パルンスと共に如何なる御事被遊候ぞ哉。わらはは歸宅の上を拜見仕度

……君にはわらはの不在中パルンスと共に如何なる御事被遊候ぞ哉。わらはは歸宅の上を拜見仕度且わらはの不在中の時を度り候て其間だけ一分每に一たび接吻仕度存居りまゐらせ候。君にはわらはの斯く恐ろしく接吻いたし候に對して之を外し候樣なる事無之義と存上まゐらせ候。最愛の良人、わらはは君に戀ひ憧れ居り申まゐらせ候。

何と熱愛熱情の極ではあるまいか。此の如き熱愛熱情は恐らく類が少なからう。之に精魂を傾け來つて之を滿足させるには夫たるものも中々容易であるまい、況や學生時代に過度の勉強をした爲に、少なからず健康を害して居たカーライルに於てをや。

（八） 呼吸を聞くヿが出來る

カーライルは〃クレーゲンプットック〃に家を定めてから六年の間此處に住で居た。其間數次エヂンボローへ旅行し、倫敦には六箇月も滯在したヿがある。此時分に文學上の著作は大分に出て居る。それから千八百三十四年にチエルシアのチエーンロードに居を移し、死に至るまで爰に棲まつた。其著『法朗西革命史』の世に出たのは其三年後で、其頃カーライルの妻が友人の許へ贈た書簡には斯う呟いてある。

何たる浮世に候ぞや。心靈の和平を幸福といたし候婦人は曾て著作家に結婚いたし候樣なる事は夢み間敷處に候。

そろ〳〵不平が芽を出して來た、夫婦同棲して十年も經るといろ〳〵苦情が出來て來るものと見える。又千八百五十三年から十三年の間、カーライルが『フレデリック大帝論』を起草して居た頃は、神經の過勞と精神を一時に專にした結果、極て少許の邪魔でも堪へるヿが出來なくなつて居た。某時妻は夫の勉強室と爲て居る高樓へ推し掛けて針仕事をして居ると、先生引耳立て、運針の音を氣にして居る、手を止めて膝の上に置き、ジット動かずに控へて居ると、先生愈々堪へ難くなつたと見え「ジエーン、俺は御前の呼吸の音を聞くヿが出來る」と怒鳴り出した。それからは有繫の細君も大閉口で、夫と共に勉強室に居やうとの考を棄て、了た。

（九） 共に棲み難い妻双方の不健康

カーライルが胃病（消化不良を）を煩て氣が短く、常に癇癪を起して六ケ敷い顏をして居たとは家庭の人の爲には、如何に堪へ難い心配であつたか知れぬ。しかしカーライルの妻の病身で、感冒に罹り、頭痛に惱み、不眠症で煩たのは夫の方より一倍激かつた。カーラ

イルの神經過敏はさる事ながら、妻の神經過敏も其齒に顯はれて居る。過敏と過敏と衝突がなければ砕けぬが然うはいかぬ。女性の過敏は自分を遇する夫の心持如何に依て不穩とならうとし、男性の過敏は自分の事業に專心一意と爲て居るから、邪魔が入れば妻とても容赦はない、觸れた所で忽ち霹靂一聲となるのだ。

カーライルの妻が夫の怒り易く、陰鬱で、不親切なとがあつた樣に感じて來たのは斯な事からだ。若し斯る夫が共に棲み難い夫なら、斯る妻も亦共に棲み難い妻だらう。由是觀之若し家庭の幸福が少なかつたとすればそれは獨りカーライルばかりの罪ではなく、其妻も之を招いたのだと云はねばならぬ。否、歸する所は双方の不健康が其原因と爲たのが多い、だから男女共に健康に重きを置くべきとだ。

（十）　茶碗の礫

夫婦諍論の火元は常にカーライルの方ばかりでもなかつた。先生却て散々凹まされたともある。某日カーライルの妻の親友で、遠慮なく出入をして居たヂクツン孃といふが訪問れたとき、カーライルは烏蛹科の癇癪筋を額に匍はせ、俯目に爲て入口の閾の上に立て居た。ヂクソン孃を見ると平生の懇親な間柄にも似ず、一寸會釋したまゝ表へ飛び出して細い街路へ影を隱して了た。孃は何か家庭に波瀾があつたなと思ひながら案内も待たで室内へ進で見ると、薄暗く陰氣になつて居る中に、茶呑茶碗が床の上に飛散て居て、睡椅の上にはカーライルの妻が所在なさ相に俯臥に爲て居た。果して只事でないと思ふ間も疾しや遲し、カーライルの妻は口を開いた。

「貴女はトーマスにお會ひでしたか。」

聲は甲走て居る、孃は答へた。

「左樣、彼の御方は外へ御出掛けなさいました。わたくしは門口で御目に掛りましたが、何だか甚く御鬱氣の樣でした。一體如何なさいましたのですか、貴女。」

カーライルの妻は睡椅の上から兩眼をキラツとさせながら、さも悔し相、

「如何て、わたくしは頭痛が致しまして此睡椅に二日臥し通しに臥して居りました、それだのにトーマスは前程漸と此處へ入て參りまして、如何したのだと云ふじやありませぬか、で、わたくしはタッタ今茶呑茶碗を抛擲了て行たのです。」

茶碗の礫とは凄じい。此時の衝突は多分妻がカーライルとアシユボルトン夫人と懇意に爲たのを氣にして、譯もなく嫉妬の炎を燃やしたのに起因たのであらう。カーライルは交際塲裡に出ると至極華美な貴夫人を歎び、常に口癖の樣に彼の貴夫人は「正しく賞讃むべき方」だなぞと細君の手前も憚ず云てのける、それで家内の晴雨計が急に大嵐を豫報して來るのに氣が注かなんだなぞは無邪氣なものさ。

（十二）　終日終夜睡らざると一週間

カーライルの妻がアシユボルトン夫人の事から嫉妬を起して居た頃は、氣候の極陰欝な時季で、身は神經衰弱症を煩て居た爲に數次不眠を憂へて居たときであつた。で、千八百六十年八月二十四日オールデルレー公園から贈た書簡に斯う書いてある。

此一週間は殆ど全く睡眠不仕、又火酒と清水との外殆ど全く滋養物を攝取いたさず候。

又千八百六十二年九月二日の書簡にも同樣な事が書いてある

斯く疲勞を覺え候日には、夜に入りて眼を閉ぢ候事出來不申遂に曉の五時に達し候暫くまどろみ候かと思ひ候へば六時の時辰の打ち候前に再び善く——或は寧ろ惡しく——目覺め申候事御推察被下度候。今朝はわらはの兩眼は殆どわらはの頭の外に有之候、今晩は莫爾比涅を局量だけ服用可仕候、此事主治醫に御通じ置き——或は寧ろ御内々に成置き——被下度候。

斯う云ふ次第であつた。此間カーライルが妻に對する容子は極めて立派なものであつた相で、アミユボルトン夫人との關係は何でもなかつた事が解た時、妻は斯う書いた。

カーライル樣の優しく親切に爲し被下候事は御身に

難申上程に御座候

夫婦の交情の善いの惡いのといふとは他人の心配した程の事でないのは古今東西同一轍さ。

(十二)　痛哭可被成候

是れまでの實例に依て見るとカーライルも短所の多い不完全な夫であつたらうが、妻も亦能く似た短所を有て居た。が、それが何れも廉々しく咎め立てをする程の事か如何か解らぬ。感情の強い負嫌ひな男女の寄合になるといくらか紛紜のあるのは寧ろ當然の事さ。しかし惡い時ばかりではなく善い時もあるから保たものでそれが夫婦間の妙諦とでも云ふべきものであらう。カーライルは其内妻母が世を辭したとき、實家へ歸て居た妻の許へ書簡を贈て其悲哀の情を慰めたが、文意兩ながら親切で、平生の家内困らせとは全で別人の觀がある。否、實の處――男に贔負するではないが――これが情のカーライルの眞面目であらう。

(十三)　悲喜交々臻る

此事のあつた後カーライルは其妻の誕生日を祝て小さな物を贈與たとがある、これに關して妻は友人の許へ斯ういふ書簡を出した。

又良人はわらはに小やかなる贈物致し吳れ候。良人は誕生日等祝ひ候は徒事の如く被申、又商ふ家に參り物など求め候は世に是れ程嫌ひな事無之由被申候程にて、自用の召物窄袴などすら註文に走られず、已むなくわらはは註文に參り裁縫師を驚かし申樣なる始末に御座候。然るに此度は自身に寶石商許走せられ、極上等の香水罎を求めて之をわらはに贈り給はり候。此小やかなる贈物はわらはをして悲喜交々臻る思ひあらしめ候、是れ良人の生涯中親切を以て下し給はり候最初の賜物に御座候(下略)

此後カーライルは決して妻の誕生日を祝ふとを忘れなかつた。其れに就ては妻も少なからず忝いと思つて居たのであつた。

(十四)　必要な惡魔

カーライル夫婦は偶に別れて居るとがあると互に情書の遣り取りをして居たものだ。惡い夫が茲に示す樣

なる情書を其妻に寄せたといふ例が一體世界にあるだらうか、愛妻黨は固より苟も情を解するものは須く其眼を滿月の樣に睜つて――では照應がわるい――三日月の樣に細くして讀むべしだ。

可憐なる內君が此書を讀む時は即ち其誕生日に御座候、さればその內君たるものよろしくその心中の感觸如何を可申述筈に候、(中略)又手最愛の妻よ、茲に些か物を贈り候、是れは曾て贈りしもの丶中にて最も小やかなるものに候、之を求め候爲にわれを煩はし候など御心配あるまじく候われは如何にかして針筐を求度と存彼此相尋ね候處、心に適ひ候もの無之、遂に小やかなる寶石函を求め强ゐて之にて致滿足候。之に鍵相添ひ居候。此一函を御身に贈候へば幸に御愛玩可被成候。われはわが妻君の爲に之に充たしむべき金剛石を求め度ものと存居候。御身の既に寶石函一個所持有之候事は致承知候へとも、此品は彼に比して遙に新規なるものに御座候。又之を買求め候には極めて狡猾手段を弄し候、そは「他の貴婦人若し此品以上のもの所望被成候節は何時にても他の品と交換有之度」と申置候。愛する我が內君よわれに接嘴被成わが好意納受可被成候。よしや我等の過去は不幸なりしとも我等の將來は幸福なるべく候。

(十五) 接嘴の温存

妻の返書は斯うであつた。

吁、わらはの愛し參らする良人、わらは丶返書差上候よりも先づ最も力强き接嘴を君に致度存まゐらせ候へども、君はチェルシアに御留まり相成、わらは丶シーフォルスに罷在千里懸隔心任せず候。しかはあれと此度誕生日御祝ひ被下候御玉章竝に御封中の御品何れも御親切の段忝く、只今其小やかなる鍵を手にいたし候て、君に御禮可申上相應しき言葉出で不申候事思出候儘にわらはは參り候まで君の爲め忍びて此接嘴温存可仕候。わらは丶御賜に對し聲を放ちて歡び笑ひ、御芳志の溢る丶許なるを讃しまゐらせ、唯々其足らざるを恐れ居申候外無之候。

夫婦の夢は定めし花を趁ふ蝶となつて香氣天地に滿つる春の野に舞たであらう。

（十六）似た者夫婦

カーライル夫婦は互に能く似て居た所がある、其神經が調子外れであつたのと、消化不良を惱で居たのと、隨分我意を張て負嫌であつたのとは、鏡に映たわが影を見るが如く孰方も似て居た、恐らく斯うも似た者夫婦は又と世界にありますまい。同性の電氣相衝くで餘り似た者同士の寄合は宜しくない。加之双方の心機を他に轉らせる子女のなかつたのも夫婦間の不幸であつた。――子寶とは善く云つたもの――で、詩人テニズンは巧いことを言て居る。カーライルと其妻とは結婚して幸福さ、若し然うでなかつたならば、カーライル夫婦の代に不幸薄命な人が二個四個出來たであつたらうと。之を要するに家庭に於けるカーライルと其妻とは孰方も自分單獨の慰藉者で、又孰方も互に此上もなき加悶者であつた樣な傾向があつた。しかしそれが爲に他人が兎角の批評をするにも當るまい。如何なる時にも矢張夫婦は夫婦であつたらうと樂天風に考へた方が宜からうと思ふ。（をはり）

桂大臣幼物語

此ほど來葉山の桂伯の別莊に參客があつた、それは政治家でもなければ文人墨客の類でもない、實は此度初めて上京したといふ七十餘歲の一個の老婦で、此人は主人の伯が二歲の時、十四五歲で十年間子傅として桂家に忠勤して、伯がやゝ長じた十一歲のとき桂家から他に緣付けられた人であるさうな、

此殿は頭ばかり並外づれて大きかつたが、體はヒョ〳〵で、始終お醫者通ひ、お負けに何も食らないので、鷄卵と味噌ばかりでお育ちになつた、それに母君が此の兒は三代目に生れた我が家の闘柱じやとて、裕かならぬ家計の中ちにそれは〳〵御養育に用意の深かつたことは言葉にも盡されぬほど、衣類は木綿でこそあれ、常に洗ひ淨めたるをのみ衣せ、今いふ衛生とやらんは自然に會得し玉ひしと覺しく、去りとて家庭の敎の嚴しかりしは當時の士の家にも稀に見る所など五十餘年の昔し話しに更闌けるを忘れしぬ、聽き居る家人は只管感じ入り、蚤く母君を喪へる主人の伯は老婦の繼ぎ〳〵に語り出づるのを聞いて、今更のやう母君の慈愛の尋常ならなんだ有難さを偲ふて、喜びの涙に襟を涵され老婦は今の主人のいみじき出世に嬉し涙を禁め得なかつた、大臣大將てふ極官に陞つた伯も、此老婦の前では當年の腕白坊チャン、老婦も亦若さまござれと背を出しさうな親しさで他所の見る目も羨むばかりであつたさうな、

序でに此老婦の上に付て聞く所を紹介しやう、此人は緣重檢事（次郎氏）の母君であつて同じく果報者の一人、檢事は初め陸軍省の十二圓の雇であつたが、苦學實年明治法律學校を卒業し目出たく試驗に及第して現職に就かれたのであるさうな、緣重氏母子の今の幸福もやはり桂伯母君の賢い敎訓が其源であるかのやうに思はれる、

日用雜爼

▲老人の取扱ひ(年寄優待法)

人は年老ゆるに從ひ恰も小兒の如く身體も薄弱となり、精神智識も消耗するものなり、此時に至りては日日成長する小兒と全く反對にして日々枯凋しゆくことなれば、實に憫れむべきものなり而して老人も亦小兒の如くものに感じ易く、些少の喜びにも非常に喜び、僅かなる憂ひにも大ひに心を痛ましむるものなれば、主婦たるものは老弱に對して能く〳〵注意を加へ、親切に取扱ひ賴み少き心身を慰むることそよけれ。

第一に老人は大抵騒々しき事を厭ふものなれば常に閑靜になし之に對する言語擧動も成るべく温和鄭寧なるべし、殊に心配ともなるべき事は知らしめざると肝要なり。

又年老ゆれば家事にも關せず又世事にも頓着せざるが故に常に無聊を感ずるものなれば、老幼打交りて解し易き書物を讀み、昔物語をなし、又は世の中の出來事を語るなどつとめて快樂を與ふるやうにすべし、特に昔物語の如きは老人の何より好む處なり。

斯くの如く一方につとめて、其心を慰むると共に一方には身體の健康を保たしむる爲めに手輕き運動を勸むべし、運動は凡て生あるものには悉く必要なれど別て日々座り勝ちなる老人には最も必要なり、花壇、盆栽などの手入れも可なるべく、時には人力車に乘せて神佛參詣もよかるべく、或は小供を伴ふて郊外を廻るが如き心身を慰むること一方ならざるべし

▲仕事の手順

日本に於ける家庭内の仕事は甚だ無秩序なり、外人の眼より見る時は寧ろ亂雜とも評すべし、奥樣の命令は必らずしも無理にあらず下婢の服從又必らずしも無理にはあらず、唯双方の間に豫め仕事の順序を考へざるを以て、時間の潰るゝ事多くして實功の上ること遲し西洋にて主婦が女中を使ふを見るに一週間の仕事、一日の仕事、又は休みの時など一々定め置きて、一の

仕事にも、キチンと手順を考へ女中に命令する故、例へば寢床の片付方にせよ、大體の順序は元より毛布は幾遍たゝきて幾つ揮ふといふ事まで豫じめ承知せしむるなり、されば彼より是れに移つる際少しも時間に無駄なく、手順よく運ぶを以て我が國にて五時間にてなす仕事も彼國の下女は二時間もかゝらぬ位なり。

▲金錢の使用法

西洋の人は金錢の使用法に妙を得たりとて人々感心するもの多し、されども是れは偶然にあらず、西洋の家庭敎育の有樣を見れば自からその由來の深きを知るべし、彼國にては小兒の時より注意して一錢たりとも故なく使用することを許さず、たとへば子供がその母親に向ひ、「今叔父さんにアの鐵炮を送つて下さいと申して遣りたいから端書を一枚下さい」といふと母親は篤と考へ若しその叔父さんが近い中に遇ふやうな折でもあれば「叔父さんならば私が二三日の内にお目に懸る筈であるからその時伺つて置きませう」といふの有樣なり、而して斯く注意をする家が餘裕のなき家かといふに決して然らず、隨分有福の家計にても金錢物品を使用するに就ては一と廉の思考を經たる上ならでは決して使用せざるなり。

▲秩序的の感念

西洋の人は單に金錢に就て嚴なる家庭敎育を受くるのみならず、時間に就ても又深き細かき注意をその兒童の時に受くるなり、小學校に行きて見るに敎師は生徒に書籍帳簿等をカバンに入るゝ順序まで敎へやるなり、譬へば一番大なる本を始めにいれて、段々小さきものと入れて行く故其中より不意に或る書物を一冊丈選り出そうとする時には直ちにわかる故甚だ便利なり、若しも大なる書籍と大なる手帳の間に小なるものを入るればそれを探す爲めに種々に手をかけて無益な時間を費さゞるべからず、英國流の秩序ある生活は夙に此の秩序的敎育に由つて養はれ來りし結果といふべし。

▲虛禮の廢止

人間は社交の動物なれば絕體的にこの虛禮を廢することは能はざるべし、時には虛禮も又世の賑はしとな

るものなれば強ち非とするにあらねど、今日の如き虚儀、虚式の流行はむしろ社會の弊害といふべし。彼の葬禮に放鳥造花の如き物を贈る事近頃一般の風習となり、猫も杓子も眞似る様になりたれど是等は一時の虚飾に過ぎずして貰ひし方でも殊更見得を衒ふ一派の外は餘り有難からぬ次第、現に此間或る席にて斯る事を聞けり、我輩は某寺院の側に居るが若し葬式で花を贈るやうな事があつたら電話で知らせたまへ、大枚五圓位もする花は唯の五十錢で買つて上げやうと、實以て



笑止の至りなり、虚禮の結果斯の如く死者を辱むるに至る。

△贅澤なる遊藝

茶の湯挿花、琴の遊藝は優美なれども、今日の娯みとしては甚だ悠長にして迚も今の繁劇なる社會、日々に進歩する生活と伴ふべくあらざれば早晩この遊藝は廢さるべしといふ。女學校の教科として或る間は學ぶものもあれど、學校を出でては又省みられざるべし、今日女子が遊藝を習ふは唯嫁入の仕度として習ふのみ他へ嫁入らば最早その嗜を實行するの機會あらざるべ

し。尤も華族富豪の如き家の娘ならば習ふて置きて損はなしといふも、嫁きたる先さはとの財產家にあらざれば、嫁の遊藝を賞翫して樂しむの餘裕はなかるべく少しも困難なる家政ならば折角の藝道も大なる厄介物たるべしされはたとへ個人の爲め國家の爲め切に世の親達に望む優美にはなくて寧ろ實用になる手藝を覺へ置きて家計の萬一を補ふの用意こそ欲しけれ。

下女の取扱ひ

智識ある方々はさもなけれとも、動もすれは我家の下婢と相手になりてつまらぬ語をなし、或は何處、其處の奥さん下女のうわさ話などする主婦少なからず見受くるやうなり、料理屋や、下宿屋のおかみさんたちならばいざ知らず苟も一家の主婦として奥樣の責任ある方々にして下女にふざけ、喋々しく語ふは甚だ見苦しきのみならず、主婦たるの威嚴を損し、家の品格を落すこと大なり、尤も婢僕と雖も家の屬なれば心易く親しむべきは勿論なれとも主婦と下婢との隔を破りて餘りに心やす立すぎれば家の秩序を亂すの本となるべし。

▲清潔の嗜み

清潔は女のたしなみなり、年中必要なるものなれと夏季は一層注意せざるべからず、部屋の內は言ふまでもなく、庭前などよく奇麗に掃除して朝夕水を打つて置けば小さき狹き庭先もまた涼しくして別天地の觀あるものなり。

家の周圍のみならず、自身の身の廻りの清潔が第一なり、熱いからとて帶を解き、肌をぬぎ、髮を散して置くなとはそれこそ一層熱苦しく感せられて堪へ難きものなり、清淨に身仕度して端然とし居るは心地よきものなり。

良人が務め先より歸り來し時若し其妻が奥の間にしだらなき風をなし若しくは晝寢などして居たらば如何必らず厭に感ずるなるべし、婦人は容貌よりは形ちとていかに天然の容貌美なればとてその居動にしだらなけれは、やがて良人に嫌はるべし、この點に於て清潔は婦人の嗜の第一なり。

▲夏朝夕

車上にても徒歩にても熱き當時良人が汗になりて外より歸り來らば、直ちに冷水を盥に汲みて身を清めさせ、さつぱりとしたる着物を着換ひさせて婦人自身の清楚の風を以て喜ばしく迎へしならば良人たる人は熱さも忘れて嬉しく思ふなるべし、毎日同じ事ながらそこが婦人の務めといふものなり、朝は早く起き、晩は小早に仕事を片付けて、良人の心を適意にする樣心掛くべし。

▲食物の注意

夏の食物は特別に注意す



べきものなり、魚肉の類は新鮮なるものにあらざれば身體の障りとなる故氣をつけんとすれば隨て魚肉は餘り得られず、勿論、這は都府の事なるが海邊に行かば新鮮なる魚類は多からん、いづれにしても魚を料理するには其品の下らざる樣注意せざるべからず、若し又一兩日貯へ置かんとおもへば腹を割きて汚物を去り代りに炭の碎粉をつめ込みて又腹を合せ暗くして風通りのよき土間に置くをよしとす、一兩日は持つものなりされど酷暑の折はこの限りにあらず。

▲夏季の膳部

夏季は胡瓜もみなど稱して兎角酸味を好むものなりされば酢を使用するに就てその心得あるべし、面倒なれどもその都度一寸煮立て丶用ゆべし、酢には虫の湧くこと多きもの故注意ありたし

同じ野菜を料理するにもこしらへ方によりては隨分樣々に出來るものなり、縦へば茄子のごとき料理の方法によりて各その味を異にするがごとし。

夏と冷水

水は自然が我々に惜みなく與へて呉れる賜の一つで多く使へば使ふ程、家の中も、身體も清潔になり、井戸ならば、水質が段々良くなつて來ます。無性の人は上等の水都合を持つて居ながら、買つてゝも來たかのやうに使ひ惜み、勝手道具から、衣裳手足にまで、一寸洗へば落ちる埃垢を、大切さうに溜めて置きます。それ一つで、内兜は十分に見透されます。内兜を見透されて後指を指されるのは間接のことですが、其結果は直接に家人の健康に表はれて、好んで壽命を縮めることになるかも知れませぬ。一家の主婦たるものは、水については深い〳〵注意を拂ふべきでございます。特に物の腐り易い、病毒の繁殖傳播し易い、身體の彈力の衰へて居る、夏から秋へかけての季節には一層二層の深い注意を拂ふべきでございます。

夏から秋の暖い季節に汲置の水を嫌ふのは、此季節の温度は、物を腐らせる源因の、極々細い黴菌の類や蟲の類の繁殖に適するからで、目に見えぬから氣が付かずに居ますが、此類の顯微鏡的生物は、物に付き、風に交つて、何でも餌のあるところに行けば、そこに落付いて、ドン〳〵數を殖し、忽ちの中に非常の殖民地を造へてしまひます。ある場合には、一つの細菌が一晝夜の中に百兆にもなるといふのですから、實に油斷のならぬことで、若し人間の目が、一分の間に千五百から三千も並ぶ此細い菌類を見ることが出來るならば、縁の腐つた、内部のヌラ〳〵した木の水桶に、何

時換えたかも知れぬ古水の上へ／＼汲み込んで、平氣で居るやうな大危險は犯しますまいが、知らぬが佛、そんな水をガブ／＼飲んで飲ませて居る向が隨分ある甚しきは、「河水はどんな不潔を投げ込んでも、三尺流れゝば清まる」と、大間違ひ大馬鹿の諺を信じて疑はぬものが隨分ある、といふ有樣であるのは、あきれて物が言へぬ次第ではありませぬか。前申した通り、水の中にも、色々細菌類の餌になるやうな物が混て、居ますから、汲んで置けば、いくら嚴重に蓋をした積り



でも、いつか潛り込んで殖民地を造へます。古い木の水桶などなら、それに幾億兆と付いて居るのが、順々に出て來て殖えます。水は必ず新しいのを用ふやうに水桶は掃除し易い瀬戸物が一等、若し木桶を使ふならば、サヽラ、砂などで、始終よく洗ひ擦り、其上、時々日に曝して、日光消毒するが宜しい。日光はよく此等の細い黴菌を燒殺す力がありますから、水桶や、釣瓶、檜杓、流し、釣棚など時々此法を施すべきで、飯櫃を洗つて、よく日又は火に乾して移した御飯は饐え

悪いが、濕つて居るのに移せば早く餒える、日當りよい部屋に居れば、肺病患者はよくならぬまでも悪くはならぬと言はれて居るなど、皆これを證據立てゝ居ります。

秋の土用ぼし

御話の順は少々如何ですが、日光消毒の事を申した傳手ですから、時節柄、蟲干の事を一寸申上ませう。蟲干に當の敵とする蠹魚は、前申した黴菌類同樣、相當の温度と、濕氣と、食物と、此三つを得れば、盛に殖えて行くもので、其最好く食物は、衣類や紙類といふのですから、夏の初から秋へかけ、空に濕氣がわつて、氣候の暖い間、盛に簞笥や本箱の中を荒して、非常の板面を致しますが、此蟲の性質として、泥棒や黴菌同樣、日光を嫌ひ、日光に當れば弱り疲れますからこれを利用して、年に一度、土用中か、土用後の暑い日を撰んで、衣類を綱や竿に懸け渡し、書類を打擴げて、蟲干をする一般の習慣ですが、さて澤山ある衣類や書類を、一々落なく日光に曝すことは餘程困難で、蠹魚は本の表紙の折目、綴糸の間、衣類の重り合つて居る陰、引出しの隅などに隠れて生殘つて、仕舞込むを待つて、又候同じ板面を繰り返し、年々歳々同じ手數を懸けて居ます。ですから、蟲干の時は、よく其邊を心得て、隅々限なく日光に當てるやう、尤日光と言つても、衣類の如き、直接に太陽の強い光に當てれば色の褪める恐れあるもの、本の如き、表紙のそり返る恐れあるものは、室内に散つて居る日光でようございますが、成るべく明るい處へ久く曝露すやう、さて其上、簞笥の引出し、本箱、長持などの内部を、樟腦水、石炭酸水、アルコール、燒酎、昇汞水、此等の何れかでよく拭ひ、付いて居る蠹魚の卵を殺し、殘兵を鏖殺にするが宜しい。其中へ樟腦、ナフタリンなとを紙に包んで入れて置けば、蟲は付きませぬが、此等は早く揮發つてしまふし、ナフタリンの如きは、いやな匂ひですから、衣類には不適當です。それよりは、本

[illegible]を敷演入れて置けば、其蒸氣はよく蟫魚の害を防いで、極僅かばかりの蒸氣は別段身躰の害にはなりませぬから、至極よい方法でございませう。銀杏の葉を本の間に挿み、簞笥の引出の底など銀杏の板で造へれば蟫魚の害を除くと申して居ります。板片でも御手に入つたら御試しなさい。

蟫魚は垢の付いて居るものに多く付きます。此邊も御注意大切です。猶蟲干は、蟫魚の外の黴菌をも撲しますす。これの中には、病氣の源因になる細菌もありませう し、衣類などの地質、染色を犯すのもありませう。衣類などに含まれて居る濕氣を乾かし、綿を膨ませ、來年の梅雨時の黴害を輕くするなど蟲干は極大切のことですから、まだ御やりにならぬ方は、今で結構ですから、是非御やりになるやう、そして、申上げた處によつて、根絶し法を御試しになるやう御勸め致します

夏季と人事

東京の夏

（如何にこの夏の劇しかりしか）

◉今年の夏　去年の雨勝でわッたとは變ッて暑氣がきびしく土用入から土用アケへかけまして二十日餘りの間は天に一點の雨を見とめませんで寒暖計は槪ね九十二三度を上下して居ました。實に近年珍らしい酷暑でした。この影響で各所の海水浴は非常の大繁昌を極めました、就中込み入りましたのは箱根、日光、伊香保大磯、鎌倉、厨子、熱海などでしたが殊に箱根七湯の雜沓は八月切旬から非常の賑ひで各溫泉場はいづれも客を以て滿される有樣でした。

◉箱根の湯治客　去十日の調べに湯本塔の澤は五百廿人、宮の下奈良屋は二百人、富士屋ホテルに外國人のみ八十人、底倉梅屋に九十人、つた屋に百二十六人、

大湧谷二ヶ所に百人、芦の湯に百八十人總計すれば千四百人に上りました。避暑地の繁昌は東京の暑氣の反影でこの如き避暑の客の多かつたのは如何に東京の暑かつたかがわかります。

●上野停車場　上野より往復する避暑客は月に四千人位の數でその目的地は大略左の割合でした。

日光	一千人
伊香保	一千人
輕井澤(八分は外國人)	三百人
木曾御嶽山出羽羽黒山(信心連中)	百人内外
草津、四萬、佐渡り、磐梯等	三百人
鹽原、那須	四百人
常盤線沿岸海水浴客	五百人

◎市中瀧の繁昌、王子、十二社、目黑、轟、其他市の郊外にある瀧はいづれも大繁昌を極めましたが、中には市内の人造瀧(重に料理店に設けられしもの)が場所によつては毎日百人内外の客を入れましたのは近年稀れな事でした。

◎坂路と荷車、紅塵万丈、八百八街の道路は白ぼこりの熱砂で通行困難であるが、炎天に一日重い車を引いて行く荷馬車の困難は見るに見兼ねるほどであつた、殊に九段坂、切通し、などの坂道では往々馬の斃るゝのを見受けました。

◎池畔の納涼　兩國橋、新大橋、永代橋は暑中納涼の場所であるが、橋上に立つて人道を塞ぐは往來の邪魔といふので喧しい、それに引かへ、上野公園、不忍池畔は毎夜深更まで納涼の客が散じない中には縁臺を持ち來つて蓮の薫風を袖に占めながら酒を呑でゐる氣樂なものもあツた。

◎ビヤホールの繁昌、人とアルコールの關係は夏とビールの關係で、暑中の晩景から繁昌するのはビーヤホールに、氷店であツた、ビーヤホールのない處ろは氷店で生ビールを販賣するのもあツて一杯五錢の安直はこの夏大繁昌でした。

◎寄席と勸工場　夏季に入ると市内各興業場はいづれも寂寥を告ぐるの例ですが、本年の夏は殊に甚だしく殊に勸工場などは、目貫の場所すら午後は全く客足絶へる有様でした。

◎游泳場と釣舟　本年は昨年の雨勝なるに反し、照つゞきの暑さで在つた爲め、游泳場は仲々の繁昌にて、水衣も間に合はぬ程であつたとか、又金杉邊の貸船宿も釣船の客が例年に増して多かつたので、實入も意外に多かつたさうです、釣船といふも實は釣は其方退けで、大川の眞中へ漕ぎ出すと、ザンブと飛込んで勝手に泳ぐ者が多かつたさうです。

◎牛肉屋の二階　牛肉好の衛生家は此の暑いにも滅げず、牛肉屋の二階に上り汗たく〳〵の顔をして、牛肉や鶏を喰はないと暑中堪つたものでない、少しは脂肪質を喰はねえと夏負がして瘠せて了ふからね、と言ひながら火鉢とは一間も離れて坐つて居る、さうかと思ふとビーヤホールの二階では、此の温氣に牛肉なんぞ喰へるものか、暑中は是に限ると言つて、頻りにアイスクリームに舌鼓を打つて居ました。

◎天麩羅屋の油汗　天麩羅屋の前を通ると油汗を流して揚げて居る、其汗が鍋の中に滴り落ちはせぬかと思ふと、辟易して喰ふ氣も何も無くなつて了つたやうな譯で、自然客も少いので、一時は休業の札を掲げた所が多いやうでした。夫に引代へ氷屋の繁昌した事と言つたら、恐らく近來に其比を見ない所でしたらう。

◎鐵道馬車　暑い時に氣の毒なのは鐵道馬車の馬です彼等は炎天に曝され、焦土を驅けさせられ、而も手痛き鞭韃を蒙るのであるから、堪つたものではない。斃馬踵を接して、停車が連續するので、乘合せた車中の客の困難迷惑は一通りでありません、是も激暑の影響でせう。

◎入谷の朝　拂曉入谷へ朝顔見物に行つて見ると何れも此れも美しい物ばかりなので、つひ二鉢や三鉢は買ひたくなります。植木屋では無賃で配達するといふので、預けて來ると日中に屆けて來ますが買つた時は色も好く輪も大きかつたのが、有繋の炎天に萎れ返つて見る影もないので、何の家へ配達しても品が違ふと劍突を喰はされ、今朝見た花の貌を晝見りや御化ぢやないかなど丶言はる丶ので、配達人夫は答辯に閉口したさうです。

◎芝山内の晝　黒本尊や丸山あたりの涼しい木蔭に行つて見ると、ロハ臺は既に書生連と人夫躰の者に占領されて居る、中には木の根に蹲踞んでコクリ〳〵船を漕いで居る者もあり、又は松の根方になが〳〵と横臥つて熟睡してゐる者もありました、すると其處より物の三間とは隔てぬ道端に、甘酒屋が荷を卸して客を待ちながら、是も芝生に腰掛て涼んでゐる。それから又ラム子屋が明瓶を積んだ車を往來に捨て置いて、此の木蔭の一員となり、一シキリ休んでゆく。人は大磯鎌倉と贅を盡す世の中なのに、かゝる無雑作な平民的避暑法もあるのです。（完）





才媛詞藻

（天）避暑　信濃　竹鼻はる子

山荘に暑さけますゐて人を
田草とりつゝながめやるかな

二句原作「暑やさくる」

（地）曉風　門司　伊津見ふさ子

君かみたまとはに眠れる瀧つぼの
しふきにさむしあかつきのかせ

初句四句原作「きよきみ魂」「しぶきに迷ふ」

（人）曉風　周防　藤井はな子

病める母あとにのこして旅にゆく
わしたつめたし秋の山風

初句以下原作「のこして向ふ旅立を靜に送る曉の風」

秀逸

曉風　長崎　米田園子

訪ひくればまばら松原小松原小松ゆるがし朝風渡る

曉風　伊勢　浦江逸子

一つ一つ星消ねてゆく母のみ墓あしたの風に露のつめたき

橋　橫濱　長谷川さく子

さと廣し柳の並木くれりあひて小川たて橫橋ところ〴〵

橋　下野　やなぎ子

むかへます母の笑まひはあらさりきかとの橋のへ小草しけりて

曉風　芝　瀬なはな

大船の笛の音遠く波に消ねてあかつきさむし港江の風

避暑　河内　大矢たれ子

夏なから時雨のあめのこゝちしてつたの花ちる木かくれのやと

橋　長野　上石くに

五年をともに渡りし君はゆきて橋の袂にわれひとりなく

曉風　長州　今藤欽子

去りかれてたゝずみゐます夜の跡のもすそなにらふ曉のかせ

曉風　長門　杉山きくの子
そよとふくあかつきの風みにしみてわがみそゞろにわれをわすれぬ

避暑　淡路　島　子
涼しさぞおもひやらるゝ山中に姫君ひかすア井オリンのおと

避暑　横濱　米原　學
暁の富士うらの瀬つ瀬我かものにあつさもしらですめるこの頃

橋　麹町　神谷よし子
なつかしき笛のひゞきをしたひ來てひとり物おもふ橋のおばしま

曉風　栃木　安田文子
とかりすと出立つ背子をかどに送るたもとに寒しあかつきの風

橋　伊勢　佐々木らく子
古鄕の門のかけはしくちはてゝこけにうもれぬ十年見ぬまに

避暑　信濃　錦織孝子
病める子を祈る曉星消しかしは手ひゞくみ社にして

橋　府下　保谷いれ子
妹すゝとなきて別れし故鄕の土橋くつれて其川かれぬ

橋　伊勢　岡島粲子
閑寂き五十戸の村の夜は更けて人影もなき橋の上かな

橋　河内　櫻井喜子
四とせまへ泣きて別れし橋の上に今宵笑みつゝ君と語らふ

曉風　河内　櫻井喜子
曉の風に吹かれて脚の氣の病ある君白露ふむも

避暑　伊勢　森本さいち
扉とち月すむ門に涼みしてひるのあつさを相語る哉

橋　神戸　山村菊子
はからずも昔の友に逢ひにけり月影清き橋の上にて

曉風　岩代　菅野和子
あけがたの風かけあはき蓮の葉に眞玉くつるゝ風のすゞしき

曉風　美濃　上田君子
暖かき故園の夢にほゝゑみてさむればさむし曉の風

秋風　仙台　賀島節子
雁がねのなきて暮れゆく山の端に馬子唄さむし秋の夕風

曉風　山城　古川米子
里の子が小牛をあらう土橋のこゝのあたりよ君と別れし

曉風　横濱　長谷川さく子
山伏の貝かれ寒し羽黑山檜原吹きまくあかつきの風

曉風　山城　葉山みさを
夢さめてむれやすからぬ曉をうたてつめたき秋の初風

橋　前橋　入澤芳子
おのがため人のためとて柚人かわたせる松の千代のかけ橋

曉風　茨城　さゆり子
ふも原すみゑの如くほの見えてまたはださむしあかつきの風

佳調

●　石見　宮内登美子
あな涼しあなむ地よしあけがたの空吹くかぜに夏としもなし

●　石見　宮内晴子
常うとき人も訪ひ來て涼みてよ夏をよそなる椎の下蔭

五の宮にあつさのがれにゆかましと思ひたつよりすゞしかりけり　●　横田　静子

苔むして打ちかゝりたる丸木橋こゝろしてふめ里のわらべよ　●　秋田　浦井まつ子

山里の松ふく風も身にしみて寝ざめさびしきあかつきのかれ　●　大阪　安倍たつ子

有明の月かけふみて野に行けは吹く風すゞし小山田の里　●　大阪　霜野ひで子

夕されは岩根眞清水音すみて夏ともしらぬ木々の下かせ　●　前橋　入澤芳子

朝かほの花にやとかる白露の玉ふき亂すあかつきの風　●　前橋　入澤芳子

霄の君のめされし船は出で行きて曉さむし磯の松風　●　伊豫　片山孝子

夕月のさやけきまゝにうかれいてゝ村のはづれの橋ぎはに來ぬ　●　駿河　武子

この木橋をわたり絡れば他郷ぞとおもへば重し足のはこびは　●　大阪　田中倹子

笛の音に夢さまされて窓おせば海の香おくる曉の風　●　大阪　田中しゆん子

あつけさも村の小川に流しつゝあつきさかりを過しつるかな　●　本郷　高山喜代

曉の風を袂にふくませて濱邊を辿る少女子の影　●　福岡　飯田すみれ

こほろぎの聲まだすめるくさむらを靜かにれぶるあかつきの風　●　名古屋　鈴木蘆子

あたらしき花をかざして花うりの露にぬれたる曉の風　●　京都　平岡みち

み軍にめさるゝせこをおくるとてこの橋までは泣かず來にしを　●　安藝　松阪梅子

とくきませ思ひしよりもすゞしきとみやこの友に文かきやらむ　●　安藝　松阪梅子

朽ちはてし細谷川の柴橋は只山風のわたるなるらむ　●　前橋　岩田ふみ子

濱寺の磯なれ松かげやすらひて母もろともに帆かずよみする　●　大阪　吉田幸子

涼まむと妹と手とりて語合ひて五條の橋にいこひける哉　●　駿河　菊地武子

橋の上に親しき友とゆきあひて夜のふくろまで語りぬる哉　●　滋賀　瀧龍子

塩へかれしれやの暑さもあかつきの風にぞしばしわすられにける　●　麹町　福島安子

汐あみてかへる袂に涼かぜのそよぐこの浦夏なかりけり　●　麹町　福岡安子

須磨の浦濱うちぎはにかりれして都の夏を知らで過ごしぬ　●　鳥取　大野悦子

弟をいさとすゝめてあかつきに河原へ行けは涼風ぞ吹く　●　美濃　高木庭子

白金のさゝなみゆらぐ江の末に夢より淡き橋のかげ哉　●　土佐　梅子

● 越後 椿 子
なやむ足ひきつゝ訪ひぬこの國をひとつわたれば君が住む村

● 神戸 環 子
おもひきや沖藻の川に打渡す眞野の繼橋跡たえんとは

● 和歌山 佐武なり子
あかつきのかぜにかなしきゆめさめて遠くやみます母の如何にと

● 仙臺 う た 子
水無月の暑さ忘るゝ曉の風こそ夏の命なりけれ

● 伊勢 齋藤 つ れ
打よする磯のなみおと聞きながらあかぬ景色に夏わすれ貝

● 麹町 桜 靜 枝
夕月に語り合ひつゝ背の君と涼しき川の長橋渡る

● 伊勢 三谷はな子
岩田橋渡ればすぐに伯母が家さて此の橋のいつも戀しき

● 東京 佐々木 富江子
病癒ゑてかへる夕日の故郷のくちし土橋に思ひみだるゝ

● 宇都宮 千 代 子
堪へかたき都のちりも鴨原に歇がたりして夏わすれけり

● 周防 渡邊 靜 子
蓮葉の露なり〱は玉と成り明け方近き風靜かなり

● 甲斐 志 村 や ね
鳴る神の外に渡らんものもなし大空高き虹の掛橋

● 名古屋 定 子
忍ひやへかよひなれにし橋の上に君と別るゝおほろ夜の月

● 仙臺 草間はる子

● 備後 磯 子 島
ばら色の雲ひむがしにもねそめてとまやの煙かろくたなびく

● 四ッ谷 内山とよ子
萩咲ける野道をたどる牛追ひの笛の音あはれ黄昏の空

● 福岡 と も 子
待つひとはいまだ來なくに日は入りて川の橋爪ほたる飛ふなり

● 京都 三の宮 露子
にほの海夕ばえながき夏の日をさゝしく暮るゝ勢田の長橋

● 長門 植村せい子
師の君を見送る波止の朝風にあかぬ別れの袖ふきかへす

● 神奈川 川井あさ子
鎌倉に避暑せる友の繪葉書を母に示して物語する

● 長門 桂 野 花 子
おちいりし人の卒塔婆を見るたにも身の毛よたちぬ谷の桁はし

● 大阪 眞 木 て い
有明の月の光もおぼろなり我袖かろく海の風ふく

● 岩代 安孫子 け さ
破れ三昧を命のつなと橋の上にもの乞ふ女あはれ何を思ふ

● 信州 錦 織 千 代
たらち根のゐまさぬ宿をあはれとや思ひて訪ふか曉の風

● 長野 錦 織 千 代
かしま立ちの袂押ふてさして行く霧ふかき空風吹き渡る

● 美濃 船 守 春 子
こゝのみは浮世の夏とおもほえず鎌倉山の風清くして

船出せし君が白帆の見えずなりて波路しづかに曉の風ふく

すまわかし舞子の濱の涼しさを日記にかきて母に送らむ
● 常州 まゆり

暑さなば避けに來ませと箱根なる親しき友の音づれのふみ
● 尾張 森美代子

歌にのみせんはくち惜しみだくみの君をまれかんすまのかりやに
● 大阪 福田和子

世の人にとく醒覺よと山寺の鐘の音送るあかつきのかぜ
● 石見 宮内晴子

高殿にこのうな原のかぜしめておもひなき身のけふくれにけり
● 河内 大矢たれ子

賑はしき三味の音いつかきゐゆきて萩が花ちる橋ぎはの家
● 河内 大矢たれ子

あけあけの月かげさむき圓窓にきりの葉さそふ秋のはつ風
● 長崎 山口丸子

橋の上ふく風きよくすゞしさよいざいもつれて來てすゞまゝし
● 磐城 作山美子

姉の君と手とりさまよふ夕ぐれに思ひ出多し里川の橋
● 備前 駒井友子

たまはりし夏のやすみを背の君と暑さ避くべく有馬にゆかん
● 茨城 菊地みれ子

曉にむして吹け百草の露うるはしき我庭の面を
● 栃木 鶴玉子

みやしろの鈴吹きならす朝風に池のはちすの花一トつちる
● 備後 矢野るい子

大磯の濱の松風身にしめて夏ともしらず日を暮しつゝ
● 茨城 菊地みれ子

足引の谷間に古りし丸木橋杣人ならで誰もわたらず
● 岩代 和子

谷川の流れに沿へる古里の小松か岡に清き風ふく
● 攝津 中郁清

朝風に露ちる野邊の草ふみて脚やめる背のそゞろありきます
● 名古屋 定子

穂に出てし尾花の末に月おちて曉さむし秋の初風
● 下野 ちか子

今さかむかきのあさがほかぞへつゝたゞずむ袖に朝風ぞ吹く
● 駿河 菊地武子

風清き蓮の池の曉を袖ふりはへて妹とめくりぬ
● 下野 近子

しらつゆをやどしてにほふ白蓮をゆりうごかして朝風そふく
● 神戸 中村菊子

山川の清く涼しき岸にそひてこの柴の屋のいかに樂しき
● 德島 深尾富久子

簾巻きて葉かげ涼しきおばしまに思ふ事なくて鯉に餌をやる
● 信州 小林道子

夕立は高嶺のあたりこゐゆきて大松わたる日傘繪日傘
● 下總 稲垣ちとせ

塵深き街を去りて山里の淸水のもとに夏をわすれん
● 東京 大久保靜子

靜なる里の小川の丸木ばし夕べ涼しく螢とぶなり

鎌倉にあつさを避けてすこやかになりしこの身をいへつとにせむ
● 本鄕 渡邊きん子

病む母のくすりとりにと急ぎ行けば谷の小川は橋落ちにけり
● 駿河 相 子

快會おへてこゝに三年の古里の波止場に今日を曉の風
● 京橋 佐々木正子

都路の夏をはなれて山里に月と風との友をたつれん
● 仙臺 歌 子

ほし影に鄕を出てたる旅人のたもとを拂ふ曉の風
● 福島 齋藤ちか子

夕月夜我慕ふ人か濱里にしらぶる琴の音ぞ涼しき
● 長門 飯田ふじ子

征の人の生血しほりておのれのみ榮華の遊暑をなすもありとか
● 神田 高篠ふさ子

谷川にかゝれる杉のまる木橋渡るも涼し夏の夜の月
● 下野 美 喜 江

見し夢のなごり悲しき我やどのあかつき寒し秋の初風
● 岡山 長谷川波子

病む母と有馬の湯に暑さ避けて病いねして共によろこぶ
● 奈良 增田ロク

蓮葉をかろくわたれるあかつきの風にたまれるおとしつかなり
● 大和 森木かめ子

大磯に暑さをさくるあて人はから き浮世の潮は知らしな
● 越後 坪井わか

● [illegible]本 [illegible]子

旅衣汽車にあかしの曉はまどもる風の心地よきかな
● 秋田 佐藤千代能子

馬洗ふこしつはかへりし里川の土橋のほとり螢とぶなり
● 千葉 根本とみ

曉の風はよけれど 花さく園の露原心してふけ
● 上總 山崎まつ子

けふよりは都大路をよそにして峯の清水の下の庵か那
● 下總 淸水澄江子

瀧の音通ふ木の間のつり床に都の暑さゆめに見るかな
● 神田 高篠ふさ子

丸木橋一つわたれば松がげに戀しなつかし乳母か家みゆ
● 千葉 谷川あさ子

小雨降る土橋の上を渡り行くかさをなゝめの少女美し
● 大阪 か た 子

吹く風に露の玉ちる夏草にしばし宿れる有明の月
● 府下 千 代 子

音われなき友とちと渡りにしこの川橋よ今はくちぬる
● 四谷 す ゝ き

夜もすから待ちわびたりし曉の風ぞ涼しく吹き初にける
● 福井 き よ 子

水にすむ小魚の數もみゆる迄さやかに宿れ秋の夜の月
● 熊本 白藤すさぶ

君忍ぶこの橋の上に昨日も今日も君がみうたを誦して泣く哉
● 因幡 原田久子

おきいてゝ先づ見渡せば小山田の早苗を渡る風の涼しき

● 東京 よれ子

衣うつ音たえ〴〵に更け行きて松風寒し曉の空

● 大阪 武田ことみ

星影はいつしか消て蓮葉の露吹きみだすあかつきのかぜ

● 備後 木村まさ代

こぞの宵月にうかれて我友と涼みし橋は形見と成ぬ

● 石見 宮内登美子

山里にのがれし身にも今日はたゞ都の暑さおもひこそやれ

● 山口 藤本文子

ことをへて宵子とあかしのうら風にうき世の外の月も出てけり

● 東京 芙蓉

思ひなやむ少女子ひとりたゝずみて月かげ白しおとなせの橋

● 熊本 加納やす子

ほの白うともしゆらめき風かをり蓮の池殿夜は明けむとす

● 秋田 佐藤一子

吾宿のあたりは秋の心地してふく風すゞし山かけの里

● 秋田 佐藤一子

螢追ふ子らはかへりて里川の小はしのほとり只水の音

● 長門 桂野花子

つく〴〵と夏の夕べを此橋にかたりし君よ今はいますず

● 芝 川井喜久子

旅人のゆきゝは絶ねて更け渡る月影さびし瀬田の長橋

● 下野 清水澄江子

さかしまにふすまにうつる木の影をゆるくうごかす曉の風

● 岩代 横山きく子

ちる露の玉のこぼしてくれ竹の葉末を渡るあかつきのかぜ

● 京都 西澤重子

よもすがら物思ふ夜のあけそめてあけかた寒むく風も身にしむ

● 小石川 富代子

造つ瀧のかけましぬると聞傳ふ此橋の上よ昔おぼゆる

● 茨城 櫻井こう子

ちり深き都の暑さ遠くろかな松はみどりに砂しろき濱に

● 甲斐 清泉

奥山の谷にかけたる丸木橋渡る人なく苔むしにけり

● 本所 夏木散子

箏とりて風箏吹きて暮すかな夏をよそなる濱の松原

● 前橋 直井瀬子

つら〳〵と浮世かこちて橋の上たゝずみをれば星一つ流る

● 兵庫 柳田鶴子

いざや君月ものぼりぬ三とせぶり村の土橋に夕凉せん

● 横濱 實佐保

ゆく水の音のみ冷て曉の風にゆらるゝ朝顔の花

● 橫濱 米原箏

軒の富士うらの瀧つ瀨我がものにあつさをよその山かけの庵

● 岩手 明石の浦子

山人のたゞ世渡りの一筋に朝夕通ふたにの柴はし

● 大阪 田中しゆん子

水清く吹く風すゞしいさやとく思ひたちませ浪華津の友

● 信濃 錦織幸子

あたらしき歯の少女身をすてゝ橋を守りの神としなりぬ

したはしや虚空にかゝる虹霓の橋細く消ゆれば夕顔の咲く
●　岡山　在木眞喜子

[illegible]ひとつまた橋ひとつたねく〳〵に霧のうちよりあらはろゝかな
●　神田　藤枝子

[illegible]れやらぬよべのあつさも忘れけりつり床の上のあかつきの風
●　大阪　松谷さい子

ゆめのごと女神のもすそ白みきて[illegible]をわたるあかつきの風
●　土佐　ますゑ

わたりゆく山がつ遠くゆるぎたゆてかづらの橋にましらなくなり
●　土佐　ますゑ

有明の月かけおちて山守のかれの音ひくし曉の風
●　長野　小林光子

日をさふる木蔭ぞすゞしかけ渡す釣床の上けふもくらしつ
●　栃木　安田文子

[illegible]はれて虹のかけはし顯はれぬ入日を受くる那智の神山
●　越後　小林靜枝

涼しさにちりの浮世もきよからん北斗きゆゆく曉の風
●　甲府　村松三次子

[illegible]草に露のしら玉ちる見ねてあかつきわたる風のすゞしさ
●　上總　齋賀うめ子

きのふけふ暑さをよそに瀧守のすゞしき庵に宿りけるかな
●　千葉　山崎せい子

[illegible]つたひ暑さゝけつゝ友とちとひつかたりつ船遊ひせり
●　上總　齋賀こと子

●　京都　太田妙子

旅人の昔語りをきゝてだにいとゞあやふし木曾のかけ橋
●　東京　はな子

都路のあつさをさけて山かけの臥しよぎ宿に友を待つかな
●　土佐　ますゑ

なかじまに燈籠のほかけ淡くなりて夢に似たりな池の呉橋
●　大阪　今木繁子

あかつきに月影あはく星きゆて尾花にそよく風靜かなり
●　大阪　堀川しづ子

あかつきの風一しきりそよふきてわら家の軒に煙ひくゝ舞ふ
●　岡山　橋本芳子

谷川に星かげあはきあさぼらけ吹く風寒く松のつゆ散る
●　甲斐　芦澤はな子

おのづから風に伏木の丸木橋萬も[illegible]も渡りける哉
●　甲府　村松下枝子

月きよき夕はいとゞ忍ばるゝわが故里のはしのあたりを
●　伊勢　岡島琴子

月に眠る童の影は今見ねず音覺ゆる矢はぎ川の橋
●　大阪　千代子

[illegible]の上に立ちやすらへばひろの間のあつさわするゝ河風ぞふく
●　房州　なみ子

波の音と松ふく風を友として今年は夏も忘れはてける
●　下野　すみ子

岩間よりしみづ流れて風すゞし夏のあつさをこゝにわすれん
●　大阪　井上桂子

紅葉時雨ふるや深谷の月影にましらむれよる木曾のかけ橋

● 尾道 白萱薇子
行きくれて何處を宿と定めなき秋の〱路にうづらなくなり

○ 芝區 三島睦子
ねさめせし牛のなく音に月おちて牧場すゞしき曉の風

● 長崎 山口丸子
しばしとて月見るひまによはふけてなほさりがたき橋のすゞしさ

● 信州 片倉いそ子
夕立は早ふり過ぎて山の端に涼しく殘る虹のかけ橋

● 河内 大矢たれ子
絆ふきし衣とりいてかされても猶もすゞしきあかつきの風

● 駿河 楓子
ほまれ得て旅路かへれる背の君と箱根にあそぶ今日のたのしき

● 岡山 長谷川濱子
何事も變り勝ちなる世の中にむかしながらの橋柱かな

● 伊勢 河村いと子
朝日子は彼方の空をいろとりて露けき野邊に風渡るなり

● 芝 薄なばな
大空ゆ廣野にかけし虹のはし美くしみ神あもりますらむか

● 越後 照子
なき人を慕ふねさめの悲しさをはらひて涼し曉の風

● 攝津 田村まつよ
はつきこそ憂きを忘るゝ時なれや外つ國人につかはるゝ身は

● 相州 鈴木ひさ子
草高く露も地に出る曉の野路吹く風に馬追ひて行く

● 長野 さゆり子
おりたちてあさげの料をつむそでに涼しくかよう風ぞゆかしき

和歌兼題（〆切九月十五日）

虫

秋　雨（披露十月五日）

燈

▲家庭日記（〆切九月十五日）

▲寫生文（披露十月五日）

▲課題（幸福の個條）

人々が幸福と信ずるもの十二ヶ條を列記せられたし他人の言に依らず書物によらず各種の人が自から信ずる處を列記せられたし

▲各地料理（募集）

投書文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴ろべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿一切返却せず

恐しかりしもの

和歌山　藤田いさを

草深き田舍にすみては都の君達の夢にもしらぬ恐しき目に遇ふものよ。己が記憶呼びおこして、こゝに記し、君達がよわき胸に波打たしめむとするは鬼か、魔か、我が心は夢うつゝなり罪は皆、夏草がおどろのもと、新綠の葉うらに問ひ給へや。

○蛇

その昔、惡魔に現身を貸したる蛇こそ恐ろしけれ。鼻をうつ惡臭あるにあらず。肌を汚す粘液あるにあらず。虎の如き爪あるにあらず。犀の角あるにあらず。狼の牙あるにあらず。鰐魚の甲あるにもあらず。口に厭惡の體に不快の聲色あるにもあらず。而かも其の形を一瞥する時は、云ひしらず怪しき恐怖の念、冷く五體を這ひまはるは何故ぞや。單に其の形を胸中に想起してさへ、何とはしらぬ不快の念の塊とけて流れて首より下り、腰部を一めぐり、さて脛へと傳ひ落つるが如く感ずるは何の爲めぞや。

當らずば許させ給へ。其の理は生物學者の說く所にあらずして、寧ろ哲學者に讓らむと思ふ心を、一と夏、里の子にその〻かされ、草露ふみしだきて野道わけ入りし時、長きもの、のたうちて足にふる〻よと覺えしが、生冷く、生暖く、異樣の觸覺骨に沁みて思はず飛び退きつ。見れば一つの蛇！

其の時の氣味惡さ、恐ろしさ、天つよはひの半は慥に縮めけむ。あはて歸るに久しく足ふるひき。あゝ蛇よ、とく此の世の外に去らずや。イーブの跡追ふ姬君なくとも、夏の自然汝れあるが爲めに我れ恐ろしきを。

○毛虫

暫しの凉をとらむと書卷携へて綠蔭に座しつ。詩の一句二句いたく心にしみて、想像の翼狂ひに狂ひて幾何の時をか經たりけむ。やをら身を起して、ふとゆんでの肩さき見れば、あなむくつけ、毛虫と云ふいみじきもの茶色して大きやかなるが休らふ樣に居たる、身もすくむ樣に覺えて、目を眠り身をふるはしつゝ右手なる書に

で、五六度はかきおとしけむ。まだかと恐る〳〵目を開きて見ればなかりき。されど、首のわたりはひまわる様覺えて久しく安しき心はなかりき。

夏の夜

長野　山本こまつ

蚊遣の烟が軒端の月を罩むるの夕、夕顔棚の下に据風呂浴みて置石を自然の凉み臺に聞くや小田の蛙の聲、程近き素封家の離れ亭に吊りたる風鈴の音、門川のせゝらぎ、律に鳴くなる行々子、月を踏んで家路を辿る田夫の俚謠等一つとして慰籍を與へざるはなし。

魚釣より歸りし弟のいと晩かりしかば、定めし獲物多かりつらんと思ひしに何事ぞ鮠一つだに持ち歸らでしかも半身泥に塗れたるに如何はしつると母上の先づ問ひ給へば苦笑していらへせぬに、さらば必らず泥鰌取らんと例の泥沼に落ちたるならんと兄上の仰せたまへば弟は思はず吹き出しゝが扨はまさしくそれに相違なけんと家内中どつと一時に笑ひ興じぬ。

祖母君にはさすがに蚊遣を嫌ひたまふにはあらねど特に蚊帳を進めてありしが今宵蚊多くその中に入りしとてもだえたまふに兄上さらば燒きて參らせんと伺ひ侍りしが勝氣の祖母君なか〳〵にうべなひたまはず自ら燭秉りてやゝしばし蚊を襲ひたまふ内如何しけん蚊帳の裾に火が燃え付きて急に大騒ぎせられしも可笑しかりし。

美くしき女神に逢ひたる夢より醒めて現ともなく暫し物思ふ折しもあれ門の戶叩く音してけり、さては盜人かと耳欹てゝありしがさるにても此月夜にさる筈のあるまじと思ふ刹那又もや頻りにトン〳〵と叩きそめけるにいよ〳〵唯事ならじと添伏の兄上に告げまくほりす時俄に水鷄の聲しければさては誑られしよなといさゝか打腹立たるも笑止の極みなりけり。

こだまに響く犬の遠吠の外は四隣人靜り、水鷄もいつしか遠退きて何をもだえのあるとしもなく眠られぬ儘に細りし燈火かき立てゝ物の本など繙けどなか〳〵に氣の移らず兎角して又まどろまんとする時しもあれ、雲井

をかけて鳴く時鳥の一聲、過ぎにし首夏の頃には夜な／＼いをねず待ちわびしが其恨みも忘られて、いと嬉しく夢かと計り打ち喜びあわたゞしく窓引き明け仰ぐ空には往き來の雲の脚早く利鎌の如き月隱見して鳥の名殘の影も止めざりき。

海水浴より

若瀨芙蓉

あつし／＼といふも年ごとのならひながらわきてこの一日二日がほどはえたえがたく候ところいかに在しますのかと御けしき伺ひ上候、此地に參りしは昨日のとゝ思ひ居り候ひしに日記の紙數のかさみゆくに今更ながらおどろかれ申候しとゝり同じ心に語らん友もなくたゞ松風浪の音を友にしほたれがちにあかしくらし居候さればこの浦のけしきもすてがたう朝はもろとりのねぐら離るゝ頃よりいでたち候へば夜のまに浪の清めしまさごぢはいさゝかのちりもなくわが足跡にけがさん事の何となく罪深う思はれ東の海の紅を流せしごとくあかねさし候頃まで立ちつくすが常にて候かゝる折伯母君の在しまさばといつも／＼同じことをくりかへし居候實に紫たちたる雲かと昔のひとのいひけんもことはりとおぼえ申候ひるつかた暑さを犯して磯べに出候ひぬれば男も女も若き老いたる三々五々うちつどひよせてはかへす浪の中事ともせで汐あみ陸にのぼりてかはきたる砂にまぶるゝなどゝかやうにおぼえしかつうら若かき姫たち玉の肌えをしげもなく日にさらしあやしげなる笠やうもの頂きたはむれ語ふなどこそ伯母君の見もなさばいかにのたまふらん又しても例のとく面うちおほひ相應しからぬわざよと御まゆひそめ給はめ夕つかたは三日月のかげほのめく頃よりそゞろありき致し候へばあやしの伏屋よりかやり火のうちけぶるは秋ならねとあはれ涼うあしまのほたるは沖のいさり火とまがふもをかしく候かくてもはづかにつれ／＼をなぐさみ居しされどともすればこなたの空のみながめられてもとより人氣すくなきあたりにはいへども都のみ目なれ在す御方には一日二日はものめづらしからめとなされしまゝ御こしのほどかいかゞや田舎のことで何の御もてなしもいはねど此浦には網引せし鮮魚の味はことのほかにいまゝそもこのあまかす

みが御覽し終はり度く其折はかならず停車場まで御むかへにまかるべくと今よりたのしみ居候聞こえわげ度きことのみなるまさこのかずよりしげくいへども何も／＼御まのわたりにとかして

夕暮の逍遥

長門　桂野花子

美はしき花の咲きにほふ春の夢に消え失せて、露の玉を宿せる夏草の名殘未だつきず、さるにはや秋は、木の葉蟲の音に知られていと物哀れに感ぜらるゝなり。今し夕日の影花やかに照りかゞやき　黄金色の雲に映じたる樣げに美はし、軒端に音づるゝ風もそよ／＼と心地よく野邊の景色もいかならむと思ひ立ち夕食も急ぎがてに終り妹と共に家を出でぬ。家並を離れて小川を渡れば野の面廣く見渡され向ひの山々も倚殘の光に照らされたる麗しさ、妹のよぶに氣附きて見れば女郎花とりてよと賴むなり、道のほとり叢の中には此の花黄金の粒なして咲けるはいと艶なるものなり、又苅萱など多くおひ茂れる中に桔梗の如き紫の花の小さきが咲けるも面白し、此のわたり春はつみ草に夏は螢狩りにさはぎ合へと秋になりては誰一人來るもの無きは誠に浮世の樣にや、など考ふる折から蟲の音いと淸らかに且つは朗らかに調べ奏づる樣譬へん方なし、かゝる仙境ともいふべきになどて世の人は來りて耳を傾けゐる。かくて妹の淋しさにや堪へ得ざりけむ、又は家の戀しかりけむ、歸らばやと勸むるまゝに蟲の聲に送られて家路につきぬ。

夏の夜

小西雅子

黑くすみ繪のやうなる氏神の森の上たかく十五日の月はいと淸らかなる光をはなてり鏡川の水そこのけがれは見えでしろかねのさゞ波さら／＼とゆるう流れゆく。その末は筆山のわたり、山も水も一つ色にほのかに白うけぶれるけしきのいかに淸らかなるよ新月橋上すゞしき風にふかれつゝこの景色をながめ入りたる友とわれ、

心はこの月の如く清く晴れ渡りて世のうきもなやみも悲しみもいづこにかゆきけむ。神の美しきみ手に清き水もてうき世のおもひは皆洗ひ去られし如くいとすが〳〵しうなりけり。あゝはれ寫眞の術を知りたらむには此の清くゆかしき月のけしきをうつし出さむを。懸賞には見事一等を得む、と云ひて友もわれもほゝ笑みつゝ欄によりぬ。空をあふぎ下ゆく水をながめて二人は言葉もあらざりき。あゝ思へばことしの春なりし。つみ草のかへるさ、この橋の上にたゝずみて紅いとふかき椿の花をながしき。眞紅もゆるがやうなる椿の花は清き水の上を夕日にはえてゆるやかに流れゆきしよ。あゝかの花のゆくへやいかになど共にしのびあひぬ。かゝる夜[illegible]すゞみ舟うけてこの川を下りたらむには、かゝる夜この川きしの家に琴ひきたらむにはなどかたりあひつゝ來むもちの夜には必ず桂濱に月をめでむよと二人はこよひ月の前にちかひたりき。さま〳〵のつきぬ話に夜や更けゝむあたりはいとしづけくなりぬ。釣する人のかゞり火にや濱の暗らき川の面に小さき火のひかりさしてあたりの水は金色にかゞやきつ。をりしもすゞ風さと渡るにつれてほのかなる笛の音ひゞき來ぬ低く〳〵しづみゆくかと思へばやう〳〵高くさえわたりてふしあはれに、曉々の聲ほがらかに近づき來る。友も我も云ひがたき感にうたれてしばし夢心地に其音をきゝ居たりきあまりに夜ふけてはといふ友の言にわれにかへりし時、笛の音はすでに絶えたり。げにかへるさをも忘れたりしよとわかぬけしきを後にして二人はつれだちてかへり路につきぬ。橋をいでんとして見かへれば月はます〳〵さえ渡りて夜はいよ〳〵しづかなり。


秋草
応用


撫子


應用唐草


應用青浪

▲婦人割烹會

今回宇野彌太郎（本會教頭日本公使館庖厨主任）眞野なりゑ（元女子職業學校割烹教師）両氏主任となりて婦人割烹會といふを設立したり。會の目的家庭の主婦、幷に令嬢方に家庭に切實なる飲食一切の調理献立を實習せしめ食膳に於ける衛生經濟を助けんとの趣意にて講習の科目を▲日本料理▲西洋料理▲和洋製菓の三科に分ち其他雑件として支那料理幷に「すし」「しるこ」「漬物」等とし、講習は毎週一回午後一時よりとす一年約五十回にて卒業の見込なり會は麹町區有樂町三丁目一番地

▲海軍下士卒家族共勵會

海軍下士卒家族愛護の目的を以て海軍士官の有志夫人に依り計畫されたるは横須賀の海軍下士卒家族共勵會とす今組織と近況とを聞くに幹部は士官の有志夫人之に當り會員には下士卒の有志家を集めたり而して幹部並に會員が相互の補助と勤勉に依り家族に自營の道を興すと共に下士卒に後顧の憂を除き自然に家族の美風を養成して品位を高め下士卒の忠勤を奨勵して義務を樂むる等苟も愛護の範圍に入る事業は悉く網羅して漏すなきを期し漸次此主義を擴張して一般士人の同情に訴へ大に繁殖を計らんとする仕組なりと云ふ、而して愛護の目的を逹する爲めには婦人の手藝に專屬する所の衣服の製作を選んで主なる事業とし官許を得て海軍所要の軍服を會員に裁縫せしめ之に對する勞銀を以て會員自營の資に充て家族をして閑居徒食の弊なからしめんとするものゝ如し、會の創立は本年一月十五日にして當時會員は下士卒の家族僅かに九名なりしも六月末日には百三十餘名の多きに達し爾來會員たらんとするもの續々あり今後此事業の發展期して待つべきものあらんと又會の設立に就て世間の同情を惹くこと少なからず特に山階宮、華頂宮両殿下には各其御附武官を遣され各工場及び其事業の詳細を取調べ又有栖川宮威仁親王妃、山階宮菊麿王妃、華頂宮博恭王妃各殿下にも各五十圓を下賜してミシン一臺宛を供せられ且つ懇篤なる稱讃と將來の繁榮を期するの令詞を賜はり侯爵前田夫人よりも若干の寄附金あり其他海軍部内有志夫人の金品寄贈の擧あり早晩有爲となりて同會を潤す所あるべしと云ふ、

▲日米倶樂部

竹川澄子氏が主幹として組織せる日米倶樂部は男女を問はず米國に遊びたる者又は之に遊ばんとする人及其趣意を賛成する人々を集めて會員となし其娛樂と便利とを圖る團體にして本部を東京に支部を桑港に置き毎月會報を發行する由尚ほ時々總會協議會懇話會を開く（會員は月費五十錢を出金す）由にて假事務所を外神田仲町の福田屋に設け昨今會員募集中なり亦た同會の目的は殊に婦人の渡航を奨勵し以て海外事業家の好伴侶たる賢良貞烈なる婦人の養成に盡すにありといふ同會の事業は左の如し

▲倶樂部會館を建設する事▲内外諸新聞雜誌書籍圖書等を備置き會員の縱覽に供する事▲集會宿泊飲食其他遊技等の設備をなす事▲新歸朝者に各種の便益を與ふる事▲新渡航者の爲めに適當の指導をなし特に渡航後の心得及び自活の方法等を講習せしむる事▲在外會員の爲めに通信並に物品購買送逹等の代辨をなす事▲會報を發行する事

▲大日本歌道奨勵會

總裁久我建通、會長鍋島直大、顧問渡邊男、長岡子、東久世伯、千家男、及び御歌所連中の名に依つて、組織せられたる大日本歌道奨勵會は歌學を奨勵し國歌の振興に努むるを以て目的とし、普ねく流派の異同を問はず之を會員とし、

歌人相互の交誼を厚うすると共に其の便宜を圖るに在り。而して該會員たる者は宮中月次御歌會の兼題を詠進して之を帝室に献納するの榮譽を享くるにありといふ。尚ほ該會にては毎月一回册子「歌」を發刊して會員に頒ち、年々大會臨時會を催して大に歌道の發展に盡さんとすと、會費は毎月金二十五錢の由にて本部事務所を麹町有樂町神宮奉齋會内に置き目下會員の募集中なりと

▲富士登山の二佳話

長田嘉納の兩夫人が纎弱き女の身にて登山を試みたることは別項記する如くなるが、之れとは少し後れて下駄穿の婦人登山者こそあらはれたれ、其人は是れ三河國豐橋町闘屋の酒井周子といふ婦人にて從來何處へ旅するにも下駄の方が便利なりとそれのみ用ゐ居りしが今回は下駄穿きにて富士登山せんと思ひ立ち去十二日從者二名と共に同地を出發して同午後六時頃須走に着し翌朝登山せしが登降共何の故障もなく平氣にて下山歸郷せしには同地の者孰れも舌を卷いて驚きたりとぞ壯の事といふべし。又た紀州日高郡清川村の大木虎吉といふ人本年八十三歳の高齢にて直吉(六十一歳)廣助(五十九歳)鶴藏(五十七歳)及びソノ(五十二歳)の四子と十三人の孫と六人の曾孫を持てる果報芽出たき人なるが先年より眼病に罹り此程大阪に出でゝ療治し其全快祝に若者を驚かさんと富士登山を思ひ立ち一家惣出にて元氣よく登山を終り歸郷したる由なり、虎吉老人は此の旅行により慥に十年の命を延ばしたりとて「足輕くのこらずめぐる富士の山」と口吟み擶けれど老人の幸福此一句の中に在りとて喜び居れりと芽出度元氣といふべし

▲故英女皇の紀念像

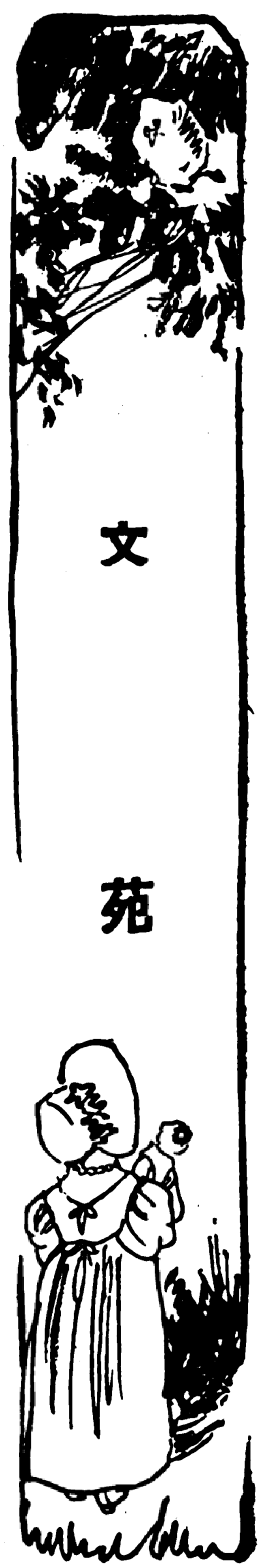
濠洲メルボルン市にては故女皇の紀念像を建設する計畫ありて、之れが彫刻者は懸賞を以て濠洲及歐洲各國より募集することゝせしが、今日まで意匠圖案を送致したるもの二十八件に上りしより頃日建設委員なして之が撰擇を爲さしめしに、同洲シドニー市の彫像家ジエームスワイト氏の出案を採用するに決したり、紀念像は高さ三十六呎、用材は青銅と定められたるよしにて、臺座には花崗石を用ひ、座の四隅には「智識、正義、歴史、進歩」の四者を擬入したる大理石像を立たしむる計畫なりと云ふ工費は約六萬圓と概算せられ、一般の寄附金を以て之に當つる豫定なりと

▲印度婦人の活動

近來印度においても一般に女子が活動を始めたり、カルカッタに存する最大の女子倶樂部は一千百六十八人の會員ありて、常に最も盛なる集會を催して女權擴張の方針を議し居れり、又ボンベイには女子社會的倶樂部なるものありて、女權擴張の運動及び一般社會の社會問題に對しては商議會を開きて女子の進むべき方針を定めて運動する等却々前者の及ぶ所にあらず、又スマチーサミチーと稱する女子の女權擴張會は凡て女子によりて資本をつくられ月刊雜誌を發行して其機關となしをれるが其記者も事務員も一切女子の手によりて爲さるゝなりと

▲●●●●●●●袖珍名著文庫

(卷の五、六、七)今回は三種一時に出版せり、體裁印刷の如く瀟洒、卷の五は藤岡作太郎氏校訂の今昔物語選、同書中より趣味ある談話四十五を拔萃せる物、卷の六は關根正直氏校訂の六樹園作近江縣物語、卷の七は芳賀矢一氏校訂の狂言二十番、驚流より珍らし物のみを集めし物にていづれも趣味津々たり。（冨山房發行）



小説

村の教師

田村松魚

上

秋の收穫はとうやらすんでしまつたけれど、今歳は例年にない不作で、一村の人々は孰も顏色がなかつた。例ならば收穫が濟むと、直ぐと鎭守八幡の祭禮で、それは賑かであるのが、それも今年はとう〳〵立消えとなつて了つて、幟桿は意久地なく雨垂落に横へられて凉かな白雨に朽ちさうになつてゐる。見渡す一面の田の面にいゝ、ぢけ切つた稻が漸く寸と延びて、それが夕風に點首いてゐる。ハラ〳〵と落ちる榛の木の葉、たまに畔道の泥にまみれてゐる落穗を、勢なげの雀の子が食へて、引つぱり合ひをして居る、いづれ秋は寂しいものながら、早や冬も間近にならうといふ昨日今日、全村は宛然でさびれ切つてゐる。

此の不景氣が影響を來たした爲に、村長や助役の俸給も半額とやら、三分一とやらに引下げられたので、その縮小主義の一村の經濟は引いて小學校の訓導の頭にも響いたのである。

村中一等の月給取であつた校長の某殿も、この二月前の俸給がまた下らないとかで、それを不平に辭職をし

て了つた。

その代りとして今度新に縣立の師範學校を卒業した倉島常雄といふ男が校長の地位を占めてからといふものは此校の最下の敎員であつた吉村廉治といふ若者との折合がつかぬ。倉島は極めて高慢の强い男で、乃公こそ此の一村の學者だ、敎育家だ、物識りだ、この寂れ切つた寒村を救濟すべく來たる慈善家だと云はぬ計りに校長風を吹かして、それは大した威張り方である。

敎育の方針が如何の、兒童を誘導する覺悟は斯うの、自分の主義はこれ〳〵だのと、月刊の雜誌や、又は此間までテーブルの上で筆記をしたノートから引張りだした事柄を、自家の名論のやうに吹聽して、改革々々、進取々々、と獨りで大氣燄であるゝで校長の次の椅子に坐つてゐる、半白の鄕先生などは大に恐れ入つて、何もかも此の新校長の名論卓說を、御無理御尤で聞いで居た。

男敎師と云つてはこの老先生の下に、今一人の鈴木といふ目の惡るい人の好いのと、それに吉村廉治が居るばかり、他は二人の女敎員、これは裁縫課を受持つて居るが、一人は村長の姪とかに當る肥えた赤ら顏の先生、それから今一人は即ち吉村敎員の細君なので、名はお爲といつて、至極敎授に熱心で、裁縫術にも甚だ熟して居る女敎員である。

年は吉村とは三つ違ひで今年は二十、年はまだ若いが、それは腹の確乎した先生ぢやと、村中の評判で、女生徒も此の人に能く馴染でゐた。

縹緻は左程美いと云ふ程ではないが、先づこの村では指折の容色である。何處かに品格があつた、身の廻りも木綿物づくしであるけれども小薩張りして、何處までも甲斐々々しい。それにすらりとした身長の、例の海老茶の袴が大層能く似合ふのである。

倉島校長は二十六歳で、横太りのした、眼の丸い、鼻のひしやげた、口の特に大きい人、それが近頃貯へた薄ら髯を大事さうにいつも上の方へひねり上げて、これは獨乙風だとか云つて珍重して居る。

この人はまだ無妻である。此の村へ就職して來る時、村はづれの渡頭まで敎員や生徒が出迎をして居た時、この敎師の中に、女敎員で美しいのが、橋の破損を繕ふ爲に積みかさねた材木の傍で、多くの生徒を指揮して新校長の自分に向つて敬禮をさせた時、チラと一ト目見て、アゝ、美しい女敎員だ、と斯う思つた。女敎員といふと十中の八九、否、殆んど總てに於て標緻の好いのは無いものと決まつて居るやうに思つて居た倉島先生は斯ういふ僻村の小學校に斯ういふ美しい女敎員が居ることかと思つたのであつた。

すぐと學校へ到着して、敎員室の第一位に椅子を占めた時に、その得意は思ふべしであつたが、その得意の代りに甚だ失望した事があつた。

それは外でもないので、美しい女敎員は自分の下を勤むべき吉村敎員の細君であるといふことを知つたので。斯ういふ事が、矢張り吉村敎員と衝突する原因の一つとなつて居るのであらう。何にかにつけて新校長と吉村敎員とは議論が合はぬのである。

素より新校長は立派に學校を卒業して兎に角くこれでも敎育論の一條位は讀んだ人で敎育といふ事に就いては中々な議論を持つて居るといふことである。然るに吉村敎員は左樣いふ出ではないのである。

今はすつかり零落して了つたが、この村の鄕士の子息であつた。六七年以前まで生存て居た父が漢學に詳しい所から、總て父より敎育を受けて居た。父の死後は獨學であつた。で敎育學や何ぞといふやうな事は甚だ多くを知つて居なかつたが、兎に角二年程前檢定試驗を受けて、その證書を持つてゐた。

學力は中々あるといふ事である、今の妻のお爲は去年の春めとつたので、此の人も矢張り吉村同格の家柄で、

矢張り貧乏人で、矢張り片親で、他に親族も何もなかつたのが、此の吉村へ嫁つて來たのであつた。隨分所々から嫁にと望まれたのであつたが、自分は孰れも斷つて了つて、十九の春まで獨住、田舍では早婚が通常だから、母親は大層心配をしてゐたのが、緣あつて吉村の妻となつた。

母親は安堵した爲であつたが、間もなく眠るやうに亡なつた。

吉村とお爲との夫婦中は極めて好のである。お爲が吉村に對して能く事へることは素より、その姑に對しても拔目なく孝養を盡して居た。けれども吉村の家は廉治の父が多くの負債を殘して亡くなつたので、廉治はそれは苦しい生計をして居た、とても夫婦の薄給で以て、その多額の借財を償ふことは思ひも寄らなかつた。けれどもお爲は儉約に儉約を積んで、僅少ながらも良夫の重荷を輕くせんと、それに一方ならず心を碎いたのであつた。

最初吉村の後家は元は自分の家と同格であつた家の娘のお爲、村の評判の好いのは勿論の事、縹緻までも尋常すぐれたお爲を我子の廉次の爲に一方ならず望んでゐたのであつたが、然し今は多くの負債を背負つた上に廉次とても僅かに小學教師の末席に連る位の事、中々此方から望んだ處で、よしや彼方も仝じ貧乏の中とは云へ快く廉次の妻に呉れる事ではない、村では屈指の豪農とも云はれる家から嫁に欲しい、と其家柄や人柄に惚れ込んで口を掛けられて居るお爲の事だから、何れ其方の嫁御寮になることであらう、と殆んと斷念して居たのであつたが、矢張緣のあつたものと見えて、お爲は快く廉治の妻となつた。此時お爲の胸の中の覺悟は、自分の家も貧困に陷つて、とても女の手一つでは家名を回復することが出來ぬから、何卒して自分の力になるやうな確乎した男を賴つて、そして其人の一家をも整理しやうし、また自分の家の家名をも續がせて、亡き父の爲に女ながらも孝道を全ふしやうと云ふ考であつた、その立派な考からして、廉治の妻となつたのである。で

先づ如何にしても良人の家の家名を良人諸共に恢復せねばならぬ、その一大希望が少しでも成功すれば、やがて自分の家も恢復せられ得るのであるから、と唯それを一生の願望としてゐた。

で、如何ぞして良人廉治を出世させたく思つたのであるが、併し事に當つて見ると思ふ樣には決して行かぬもので、一ト月夫婦が必死となつて兒童の教育に從事して、僅かに一家を支へる位の收入しか得られないのである。

それのみか、此の秋は意外の不作、村一統の不景氣で其所にも此所にも歎息の聲を聞くのだ、お爲は甚だ安からず思つた。まだそれ計りではない、此度新校長が來てからといふものは、良人廉治と校長との折合がどうも丸く行かぬ、日に必ず二三度は良人の顔に不平不快な色があり〳〵見えるのを見ると、お爲は身を切らるゝやうであつた。

それはまだよいが、新校長が良人に辛らく當る代りに、自分には一倍に優しくする、自分の事を吉村さん〳〵と云つて後を追ひ廻さぬ計にされるのが、何より〳〵辛らいのであつた。

もう新校長が此の村に來てから殆んど半月程になる、其間お爲は日に増し胸の苦しみを增すので、家に歸つても學校へ出ても、心の晴々しい事は寸時もないのである。お爲は此の所置を如何にすれば好いかと苦慮してゐるのであつた。

(中)

十一時の柝が鳴ると、ワーッといふ聲が一時に揚つて、我先にと生徒は運動場に驅け出た。

吉村教員は靜かに教室を出て、教員室に這入つた。茶縞の手織の質味な羽織に、藍色の小倉の袴をつけ、稍々

退屈そうな顔をして自分の椅子に腰を卸さうとした所を、「吉村君ッ」と嚴格な聲で呼んだのは倉島校長であつた。

「ハイ、」と云つて腰も卸ろさず其方を向く、「君、一寸と此處へ來て呉れたまへ、少し君に注意をせんければならん。」

と立樣の黒羅沙の大分白墨の粉で汚てゐる洋服を着て、例の八字髯の淡いのを捻つていふ。

吉村は其聲に應じて校長の前へ出た、丁度椅子が無かつたので、其面前へ直立した。

「御用ですか。」

「フム、別に要といふぢやアないがね、どうも君のやうな那樣な亂暴な無責任な教授をして呉れちやア困るぢやないか、エ、些つと注意をしてやつて呉れんけりやア困るよ、」と苦り切つた顔をして云ふ。

「エ、……、何か、私の不都合でもありましたんで、……、」

と吉村はまた始まつたか、と腹には思つたが左わらず云つた。

「不都合でもありましたかぢやア、ないぢやアないか、那樣いふ授業法といふものアありやアせんぞ、君、」

「何がですか、」

「ハヽヽヽ、君は僕が斯う注意を加へても自分の爲て居る事が現今の教授法でない！、兒童の爲に甚だ不利益で、非常な害毒を與へるといふ事が氣が附かんかね、」

と冷然として口元に嘲笑の色を充分に表はして云ふ。

「私の教授法が惡るいのですか、……、私の仕方が、……、どうも私には何處が惡るいといふ事が分りませんそれは分つて居れば、直ぐと改めるのですが、……、何處が惡るいのですか、」

「困つた人だね、それだから君に能く云ふのだ、苟も君、一村の兒童をあづかつて居るといふ事は、極めて責任の重大なものであるだよ。」

「道理です。……」

「その重大な責任を擔ふて居るものが、唯一時間なら一時間といふ時間を何でも兒童の腦へ詰め込みさへすりア好い、それで敎師の責任は盡し得られたでは困らうぢやないか、君はそれで好からう、併し僕が困るよ、此の學校の是非善惡は凡て此の倉島の一身に及ぶのだからね、」

「ハイ、御尤です、」

と云つて居る所へ、お爲も授業を終へて這入つて來たが、また倉島と良人と何か云ひ合つて居るので、惡い所へ這入つたものと思ひながら、自分の椅子に腰を卸した。其他の敎師も互に顏を見合しては如何なる事かと心配をして居る。

此時倉島校長は一際聲を鋭くして、

「さうぢやアないか、一校の毀譽褒貶は皆なこの倉島一人の身に集まつて來るのだ、君達が、那樣いふ不規則な不整頓な、無茶な亂暴な授業をしてくれると、實に子弟を預けて居る父兄に對して云分けがないぢやアないか、此度の校長が來てから急に生徒の品行が惡るくなつたの、又は生徒の物覺が遲鈍になつたのと云はれまいものでもない、若しさういふ小言を父兄の口から聞ひたら君は如何に辯解する積りか。エ、君」

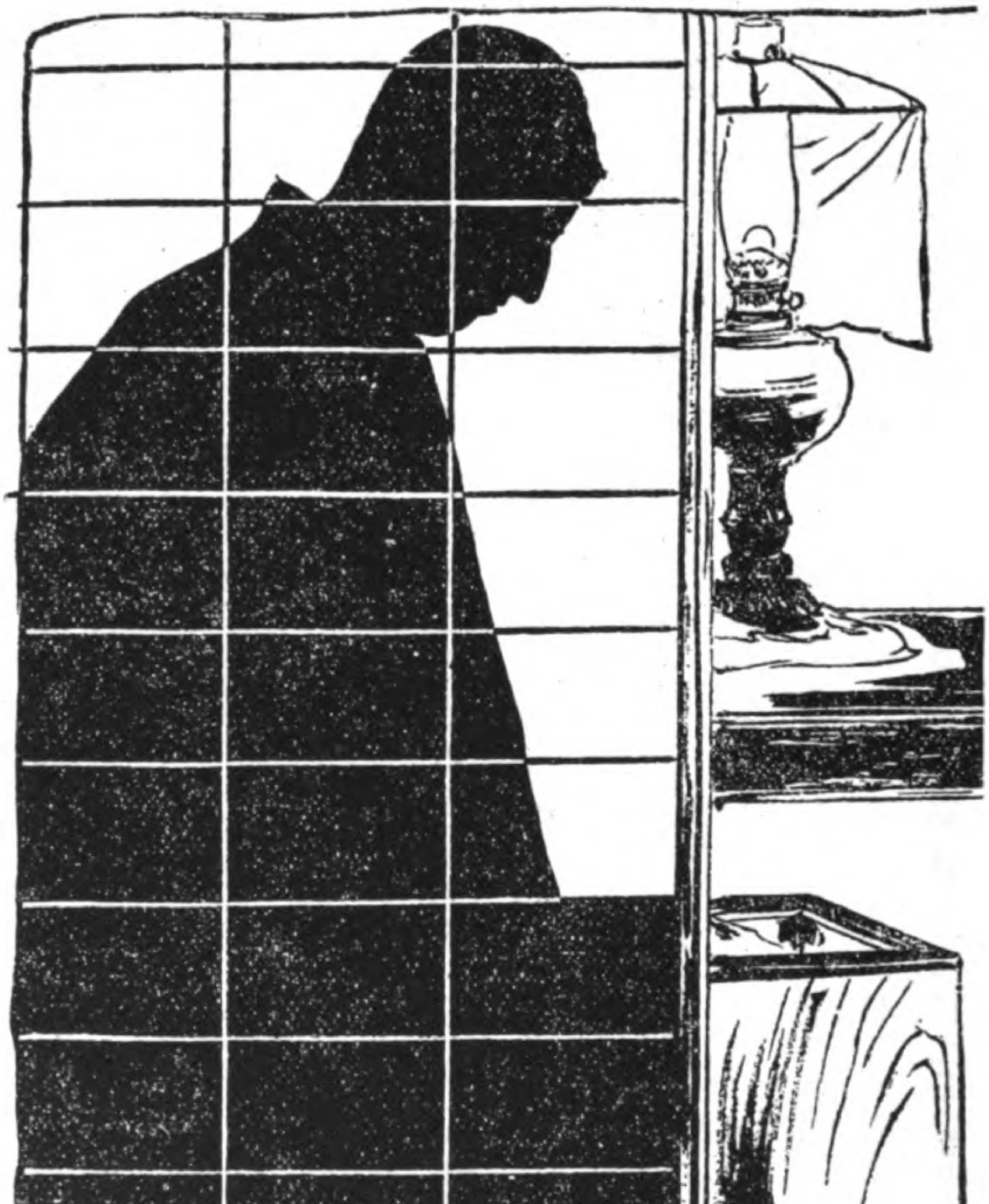
「これア校長の御言葉とも覺えません、私は生徒の父兄達から、さういふ質問を受けるやうな敎授はしない積りですが、私は此迄の通り、自分の出來得る丈の熱心と誠實とを以て敎授して居るのです、何も貴君が御出になつてから自分が怠惰けるといふ樣な事は決して致しません、前校長の時と同じやうにやつてゐるのです。」

「ハヽヽヽ、それが第一君の間違ひだ、自分は決して前校長の授業法を完全なものだとは云ひませんよ、君は何ぞといふと前校長々々といふ、君が前校長にどれだけ信用されてゐたか、またどれ丈け負最にされてゐたか、それは我輩は知らん、十九世紀の頭腦を以て、また寺子屋風の敎授法を唯一の敎方だと、考へてゐた人に君が如何に信依されてゐるか、其樣なことは我輩に於て何等の發明を得へぬのだ、一體君等の頭腦は古い、大に陳腐である。然しその陳腐でゐるといふ事を自覺して、我等の云ふことを用ひてくれる鈴木氏や佐久間氏などは、極めて敎育に熱心な方と思つて自分は甚だ敬服してゐるが、君は全然その陳腐な敎授法を善良なものと心得て居て、何か自分で學んだ漢籍だの何んだのと云ふやうなものを鼻に掛けて、そして自ら學識を衒つて居るではないか、そういふ



心得で以てまだ腦髓の輕弱な兒童に接して如何するのだ。エ、君ちと注意をしてくれたまへ。」

「校長、貴君の云ふ事は一向私の腑に落ちぬです、一体何處が私の落度です如何なる事が教授法に欠けて居るのです、先づそれから承はりませう。」と吉村は少し聲を高めた。



此時お爲は、良人の身の上を氣遣ふた。日頃から我が良人は新校長の所置に對して甚だしく憤を含んでゐるのである。此間ももはや自分は新校長に忍ぶことが出來ぬ・とまでも云つて居たのである。此末、此の一場の議論は如何なることであらうか、鈴木や佐久間などいふ老人株の人達が此所へ口を出して呉れゝばよいのに、何事も校長の言葉を御無理御尤で聞いて居るやうな腑甲斐ない人の、とても此の場を旨く納め得られやう筈もない、さればとて自分が今此處へ口を出すべき所ではない、何卒して良人は此度

は我慢をして呉れて、兎に角遠の謀をゆる〳〵決する事にして呉れゝば好いのに、とお爲は一方ならず氣を揉んだのであつた。

併し又考へて見れば餘りに無法とも亂暴とも云ひやうのない校長の言葉、一校を預つて、敎育者の任を擔ふて居る程の人の口には出されまじき餘りの雜言、理の上から云へば一も二もなく我が良人の云ふべきこと及び行ふべき事は正しいのであるのに、校長といふ悲しさには、それをも非と曲げられて、斯ういふ恥辱を受けるとは餘り心外なてと、これといふのも矢張り自分の身に關した事が幾分かその原因となつて居るのではあるまいか、とお爲は一入心安からず思つて、片唾づを呑んでゐた。

校長は威丈高となつた。

「何んです、吉村君」

とずつと頭を延ばして鋭い眼をして白眼みながら、

「吉村君、私は君の細君の前だから、と思つて云ひ度いことをも默つて、君に幾分か氣の毒に思ふので同情を表して穩當に云つて居りやア、却つて君は人の言葉尻を取つて爭論を仕掛けやうとするのだね、よろしい、君がさういふ考なら此方も其積りでゐる。よろしい。」

「實に校長、貴君は妙に人の言葉を惡意に解するぢやアありませんか、私が決して貴君に爭論を仕掛けるのぢやないです、併し貴君が私の授業法が舊式であるとか、十九世紀だとか、寺子屋風だとか、兒童の品行を惡るくするとか、生徒の腦髓を滅茶々々にするとか仰しやるから、如何なる點が左樣いふ弊害を來す點であるかそれを御聞申すのです、其所が分らんけれア、私は自分の授業法の是非が分らんのです、で、貴君が此所は宜しくない、と思召す所を指點して仰しやつて下さい、さうすれば、私は其後充分自分の授業法に就いて熟慮し

て、そして果して惡るいと思つたら、其際直に改めて御言葉に從ふやうに致します、決して他意はないのです。」

「ハヽヽヽヽ、君は中々論客だ、甚だ確實な頭腦を以た人だ、併し君、能く考へて見たまへ、先程も君が教授をして居る所を見ると、まるで寺子屋風だ、十九世紀だ、讀本の素讀をやらして、自分は椅子に腰をかけて默つて生徒の讀むのを聞いて、間違がわつても正しはせず、生徒同士でワイ〳〵爭をさせて居るではないか那樣いふ授業法が何處にある。那樣いふことをして、それで教師の任務が盡されるものなら、師範學校などは不必要なものだ、四年間といふ歳月を刻苦して教育學を納めるには當らないのだ。生徒同士に那のやうな思ひ思ひの爭をさせて、そして教師は默つて笑つてゐるといふやうな、そんな教授法が何處にある、これが寺子屋風でなくて何んだ、十九世紀の頭腦にわらずして何んぞやだ。餘り馬鹿々々しいではないか。」

「校長、貴君の御説は餘り單純な御考ではないかと思ふ、生徒各自に思ひ〳〵の考を云はせるが惡るいとか素讀をさせたが如何だとか仰しやるが、其樣なら貴方は如何いふ教授法を御取りになるのです、甚だ貴方の御言葉が要領を得ません、私は先程の一時間は熱心に生徒が或る章に於て、考へ及ぼして各自の小さな胸に懐いた考を云はして見て、そして生徒が小さな思想の優劣を確めやうと試みて居たのです、それは私は何處までも惡るい事とは思はんです、唯教師が講釋をして、その口から直に生徒の耳に入れて、それ切りにして了ふのは却つて生徒の意識を發達させる道ではないと思ふのです。」

「君は中々理窟屋だ、併しそれはへボ理窟といふものだ、年の行かぬものにさういふ經まりもつかぬ考を云はせた所で決してその生徒の智識の優劣を直に知り得られるものぢやアない。決して君の云ふやうに小供が高尙の考を以ては居らぬ。それよりか確實な教師の説明を能く腦髓に染み込ますが兒童の智識を開發する良法だ、

併し君の樣な人では、それは或は覺束ないかも知れん、君は教育論は何を讀んだか、西洋の教育家などの特說など丶云ふものを讀んだことがあるか、又は現今の我邦の教育の卓論などを聞いたことはあるまい、エ、君、如何いふものを讀んだ。」

「左樣なものは私は讀みません」

「そら、そういふ君だ、それで以て教育の事を語るは餘りに大膽だ、ねえ、さうぢやアないか、鈴木君どうです、佐久間君もどうです、教育學の一頁をも讀んで居らんものが教育の事を論ずるといふものは餘り大膽ではないか、君、鈴木君は如何思ふです。」

と倉島校長は自分の傍に居た鈴木に向つて問ふた丶

「それは無論校長の仰しやる通り、教育論だの教育學だのといふものを讀んで居らん者には分らん事と思ひます。」

「フム、佐久間君は如何思ひます。君は、……」

「私も鈴木君と同說で、私などは近世の學問をして居らんもので、當時の學說といふものは一向不承知でありますで、……とうも校長の御指教を受けんでは好けませんで……。」

と大枠の眼鏡をかけた、半白の頭を二三度下げた。

「さうでせうとも、……、あの、吉村女教は如何御考へです、吉村君は貴女の良人だが、教育の議論に付いては決して夫婦といふ愛情を中に狹んでは困る、貴女の考へた通りを眞直に云ふてお貰ひせんければ。……エ、如何ですか、貴女の御考は。……」

「エッ、」と云つてお爲は頭を擡げた。

「貴女の御考は……。」

「ハイ、あの、私の……」とお爲は躊躇した。無論校長の論旨は何を云ふのか筋さへ立たぬ。殆んど教育の事を語るべき智識も學力も持たぬ人の云ふやうな、極めて淺薄な言葉である。そして唯我が良人の廉治を陷いれやうとのみ思ふ意氣惡るき心から云ひ出した言葉に外ならぬのを、それを校長の權力で以て強ゐて自己の說を是としやうとするといふ事は云ふまでもないことであると、お爲は心に校長を憤つた。

けれども今校長の說に從はざれば、自分を夫婦の情合からして良人の肩を以たのだと云はれるに決まつて居る斯ふいふ無法な亂暴な人に向つて、兎角を云ふは極めて我等夫婦の身に取つて不利益なことである。何事も長いものには捲れろで、御無理御尤と聞き流した方が、此の際我等の身に取つては利益であらう、と斯ふ思つた併し、また思ひ返せば、今此所で、自分が校長の言葉を是とすれば、此所で良人廉治が如何ばかり自分を怒るであらうか、勿論是非善惡は云ふに足らぬ一場の爭論、それを兎や角云ふのは餘りに智慧のないことであるとは思ひながらも、如何しても校長の說に服することは出來ぬのである。

それでお爲は默然としてゐた。

「どうです、吉村女教、貴女の御說は、……、ハ……、矢張り吉村君に憚つてゐるですね、併し貴女も教員の一員である。一人の教員の資格として說を立てゝ貰はねばならぬ、此處は一家族ではない、一つの學校であるのだ。」

「さうでございます、決して妾はさういふ考を以て居て御答をせぬのではありません。」

「成程さうでせう、さうなくてはならぬ、では私の說が是であるか、吉村君の說が是であるか、伺ひませう。」

と校長は髯をひねくり廻した。

「校長、それでは申上ますが、妾は貴方の御說は餘りお考のない御言葉と思ひます、吉村は妾の良人でございますが、御言葉通りに妾が一個の敎師の資格として申しませうなら、もつと筋が立て居やうと思ひます、尤も只今の事は是非を分ける程のことではありますまいと思ひますが、あの、敎育學とか、敎育論とかいふやうなものを讀んで居らねば敎育の事は話も出來ず、また生徒をも敎育が出來ぬといふやうな事はありますまいかと思ひます、よしや敎育論の百冊も讀んで居りました所で、實際生徒を敎へ導くことが下手であれば役には立つまいかと思ひます。例令ば農學論の一冊も暗誦してゐませいでも、百姓は立派に植附もすれば收穫もするところを見ますと、一槪に書物を讀んだから、それで直とその事が實際に役に立つかどうか、と云ふことは云はれますまいと思ひます。校長の御言葉でございますが、妾は御說に從うことは出來ません、ハイ、あの、吉村敎員の敎授法はさまで欠點はありますまいと思ひます、ハイ、左樣でございます。」

と女性の辯にしては如何にも明晰に、そして立派に、明瞭と云つて退けた。

校長は眼を丸くして驚いた。それに對して何等の言葉も發せず、苦り切つて居た。

吉村も妻の言葉の餘り思ひ切つた口振に驚いた。併し世に此程痛快なことはない、好く云つて呉れた、と吉村は心に妻に謝した。此時の嬉しさに、我身に來るべき今後の災厄をも思ひ及ぼさなかつたのである。

此時、丁度授業が始まるべく柝が鳴る、生徒は運動場より一齊に敎室へ馳せた。

敎師もそれ〳〵受持の敎室へと出て行つた。

(下)

秋の夜は如何にも物靜かである。もう一人の老母は寢に就てしまつた。
その後で廉治と妻のお爲とは、四疊半に小さな火鉢を中にして、身の上を語り合つて居る。
「實に此度の校長程分らぬ男はない、どうしても俺は那樣いふ男の下に就て居ることは嫌だ、今日もあの通りの無法をいふのだ。あの時、校長の權力で、お前にまで自分の說に贊成させようとしたが、能くお前はあの時眞直に云つて與れた、俺は那樣いふ嬉しいことはなかつた。もう、どうなつても好い、此の不景氣な時節に今俺が退いてはおッ母樣も困るだらうが、併しもう、俺は一日もあの男の下を勤めることは嫌だ。また、お前をもあゝいふ男の下に、勤めさせたくない、假令餓死しても嫌だ。」
「ご道理でございます、わたくしも今迄は一家の事やまたお母上樣にも御心配を掛けまいと思ひまして、いろいろ貴君の御心をも成程ならばお押へになる方がよろしうございませうといふやうに申して居りましたが、もう、今日といふ今日はふつゝり思ひ斷めて了ひました。それに貴君にはまだ御話も致しませんでしたが、私が學校へ勤めて居ては矢張り能くないことがございますから、妾も今日限りもう止めやうと思ひます、貴君も、それ程御嫌ならば美しう御止めなされた方が好うございませう。」
「フム、止る、止る、もう一日も嫌だ、那樣な男の下に誰が居るものか、アヽ、今迄何故早く止めなかつたかアヽ嫌だ、〳〵。」
「では、貴君は屹度御止になりますか、」
「止めるとも、……、お前も止めなさい。」
「ハイ、妾も止めます、」
「それが好い、アヽ、氣が晴々した。」と吉村は抛げるやうに云つたが、心中は猶甚だ安からぬ色が見えた。

「併し、貴君、あの、貴君もお廢めになり、妾も止めますれば、此から後如何して暮をお立てになりますか。」

「エヽ」と吉村は今更のやうに青褪めた顔をして妻を見て、

「……、サア、其所だ、如何すれば好いだらう。其所を考へると、實に悲しい、アヽ、如何すれば好いか、今迄兩人して勤めて居たればこそどうか斯うかお母上さんに御安心をさせて行けたやうなもの、、兩人が止めるとすると、……此の不景氣な時節に、……アヽ、如何すれば好か、併し俺はもう如何しても教員は嫌だ。」

「では、如何しても御嫌ですか、」

「フム、死んでも嫌だ、あの校長が居る以上は、」

「おやア貴君、それ程貴君が決心をなさつたものなら、あの、貴方。どうぞ、一つ立派に御奮發なさつて、此の吉村の家名を揚げて下さいませぬか。」とキッと云つて、活々とした眼で良人を覗上げた。

「エッ、奮發して吉村の家名を揚げて與れつて、……。」

「ハイ、あの校長に鼻を明す程な立派な方になつて下さいまし。」

「エッ。」と吉村はキッと妻の顔を凝視めた。

「お願でございます、貴君も立派な男子でございませう、あの校長に那樣いふ侮辱を受けて、そして唯嫌で止すでは男子が立ちますまい。」

「フム、道理だ、……、併し、どうして俺の男子が立つだらう。如何したら立派な男になれるか。」

「貴君、どうぞ、東京へ御修業に出て下さい今から五年間、妾は如何なことをしてもお母上樣は立派に御介抱します。また貴君の學費の幾分かは送ります。」

「エッお前がッ」と吉村は驚愕にうたれながら、

「どうして、……左様いふことがお前に出來るか。」
「イエ、出來ます、此の身体一つを妾は五年間貴君の御修業なさる爲に殺して了ひます。妾は絹機織に傭れます。そして夜は一生懸命に賃仕事をします。屹度御迷惑は掛けません。」
「ア、、有難い、お爲。」と吉村の眼は輝いた。

*　*　*　*　*　*　*　*

年の暮に吉村は上京の途に就いた。お爲は毎日機織工場へ通つて居るといふことである。

（完）

紀行
瀛車の旅

まぼろし

江湖の諸嬢よ、余は此頃まで本誌に筆を執りつゝあつた記者です、しかも余は性來朴柄一篇の人物であるから、誌上でも兎角堅くるしい事ばかり申して、諸嬢をして大分困しめたでわらうと思ひますが、こん度は、その代りに聊か諸嬢のお慰みとなるもの、否慰みとまでは行かずとも、幾らか其の倦厭の心を去らしむるやうにと思ひ、時節柄「瀛車旅行」と題せる一文を物しました、しかし、これは諸嬢に取つて或は、直接の利益が無いかも知れませんが、併し必らず世間には随分無用の用といふ事かわりますからまづそう思ふて御覧を願ふのである。

▲歸省心

「歸去來兮、田園將蕪、胡不歸云々」とは、余輩が塾生時代に暗誦した古い文句ですか、これは中々

名句です、しかし余の歸省心の發生したのは、這般の文句の意味とは異りまして、敢て退隱を欲したのではありませんが、余はこの春の頃から、何うも歸省したいといふ心が、頻りに胸の中に湧いて來てたまらない、それは何んであるかといふに、余は元來奥州の極端なる舊小南部地方から出たものですが、一体奥州といへば諸嬢も御承知の、いはゆる山國で、極殺風景な無趣味な處ろです、しかし、實際は中々言ふに言はれぬ風趣や情味があつて、これを硬い言葉で申せば、奥州の山水は確かに一種の特色を有つてゐるのは事實であります、さるを、余が數年前に奥州の土地をはなれ、東京に出でゝからといふものは、學業や職務の忙しさに追はれ、時時は奥州の山水を音づれんと思ひつゝも、出京の年一たび歸省したきり遂に其意を果さなかつた爲めに因緣ある身の何んとなく奥州の山水の慕しくなつて來たのも、歸省心を起さしめたる一つですが、なほ其外に余をして歸省を促がし、而かも急がしめたる一つの動機が別にある、其れは別段の事でもない、年老ひたる兩親より、家の都合もあしければ、暫時なりとも歸省せよ、との書信の度々參りしため、さらでも時々ば故鄉を音づれ、父母を慰め、兄弟や友達と親しく談笑もすべきものなるを、去りがたき用事のあり是非とも歸省せよとの手紙に接しては、たとへ自分の身に種々なる事情の有りて、容易に閑散の得られざるにもせよ、こん度こそは必ず一寸なりとも歸省せんと思ひ定めたのが、格別に余をして歸省を決行せしむるに至つた動機であります、そこで余は歸省の途に就いたのであります。

▲上野出發

余は歸省を決心したが種々なる係り合ひもあり、それは永久に歸へるにもあらねば深く氣にも懸けざれど、第一に旅行の費用に困つた、財囊に欠乏を訴へつゝあるのは書生の常ながら、余は是れまで金といふものに心を用ゐぬから、無い時には實際財布の底を叩いても鐚一文無いことがある、そういふ工合で歸省せんとした折り

にも、嚢中僅かに小遣錢位しかない、　自分は旅費の爲めに大いに頭を痛ました、別に美しい着物も買はない、錦繡を着て故郷に入るといふ事は僕に取つては所詮駄目だ、そこで余は極めて質素なる書生風で參らんと決心した。

「いま其出立の時の身装はといへば、頭には臺灣パナマの垢じみたる帽子、身には木綿縮の白ッぽい單衣、それに携ふるものは、スコッチとジックと鞄二つ、これには歸村中の慰みにとて、種々なる書物を入れてあり、身装といへばまづこんなものである。

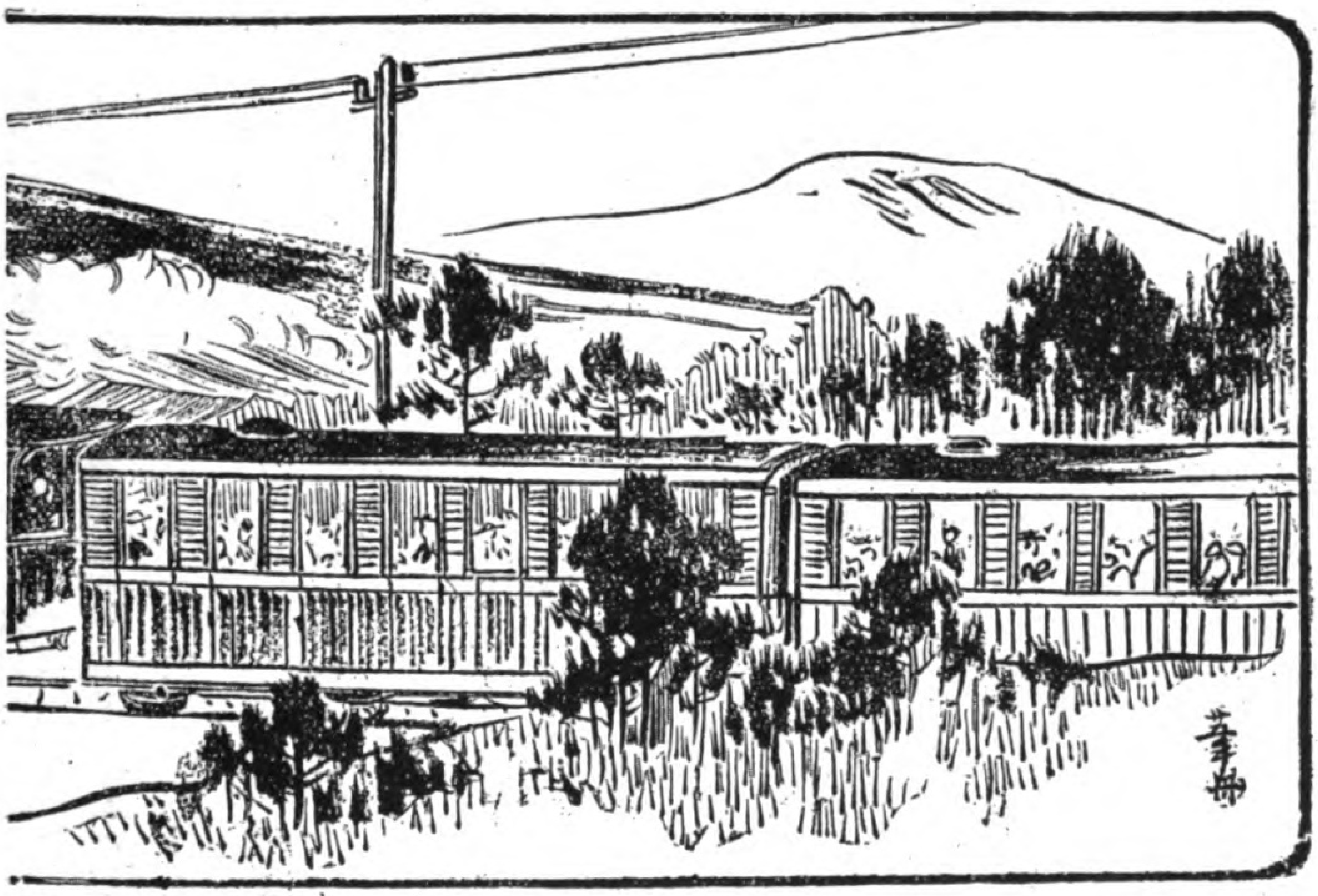
さて、旅行の準備も漸く整ひ、いよ／＼上野を出發したのは八月の二十二日午後六時、道伴れをと思ひて内々心當りを探がしたけれど、學生は大抵暑中休暇の初めに早々歸へるものは歸り、其他のものは甘く見つからず、眼を丸くして停車場を見渡したけれど、知れる人は一人も見えず、そこで見送りにとて來た一人の友人と發車の時間を待つて居た、ところが其の友人は暫なりとも別を惜むとて、大宮邊りまで見送らんと言ひ出した一應斷つたけれど、それは遠慮に及ばずとて共に滊車に乘り、赤羽まで來ると、もう日はそろ／＼暮れかゝつて來たから、其處で友人に別れ、一人つくねんとしてサード車室の一隅に腰をかけて居つた。

さて上野を將さに出發せんとする時の感想は如何であつたらう、四百哩の旅行はなに決して臆くでない、また珍らしくもない、が閑散の中に身を置かれた吾れには、多少の文學的否詩的感想が起らないでもなかつた、何にしろ數年間他國に客たりし吾れ、今や久し振りにて故郷に向ふの時であるから、何んとなく自己胸中の情緒の動き初むるのも無理はない、此時此間の感想には、住み馴れし第二の故郷と暫し別れを告ぐるのを惜むのも、生み落された土、遊んで育つた地を久し振りにて音づるゝ戀ひしき心も、皆此の中に籠つて居るであらう、この時ぞ是れ飄々たる遊子が、向ふ二十時間ばかりの後には、罪なき故郷の民、自然的なる故郷の山水を訪はん

とて、其身を滊車てふ鉄車に運ばるゝのであるから、まだ接せぬ先きから故郷は眼に見えて來るやうで、言はゞ此間こそは、故郷てふものが想像の中に浮びつゝある期間である、であゝ時間が早く經過すればよい、余は故郷の戀しいのみならず、無用の時間を滊車の中に送るのを好まない、と斯う自分は思ふた。

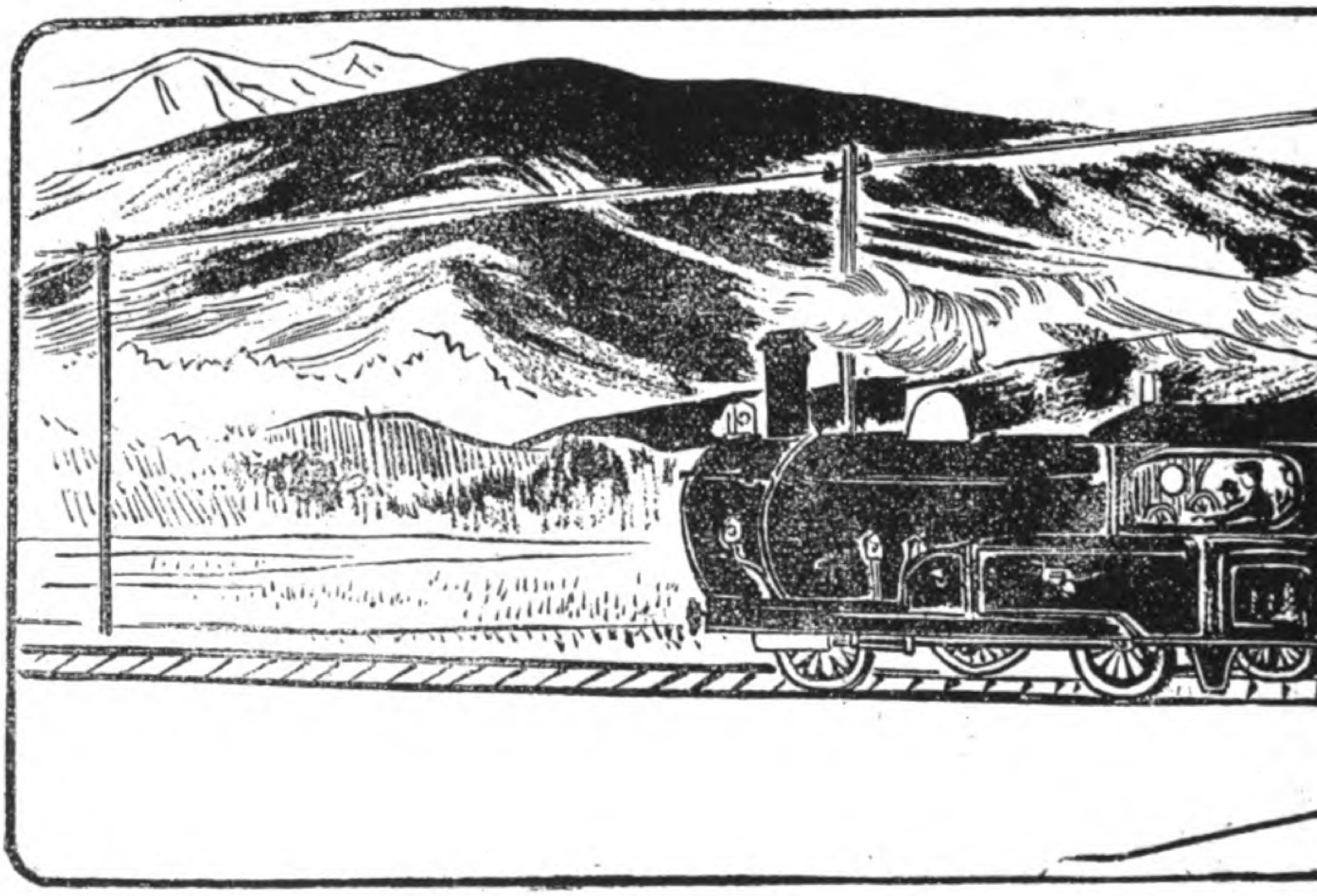
▲車中の小社會觀

進んで淀みなき滊車は、車中に腰を懸けつゝある吾々を運びつゝ、時々刻々と一直線に東北の方へ向つて走つた、赤羽で日は暮れ、友人にも別れたが、大宮で日は確かりと暮



れて終ひ、暗々たる夜の幕は、周邊の山も、川も、野も皆蔽ひ隠くした、やがては滊車の中も暗うなつた、そこで余は傍に餘席のあるを幸ひに、毛布を敷き、鞄に身を凭せて半臥の姿となり、頭の上から照らす小暗き燈光にて、書物を見つゝ居た、ところが夏分のことゝて、各停車場とも夕刻から乘り込む客が多く、七八時頃には車中が隨分騒々しくなつて來た、從つて余の側にも人がビッシリと詰て、身動きも容易に出來ぬやうになつた、そこでまづ仕方がないから、起きて片隅の方に身を寄せ、直ぐ側に居る東北人

(商人らしき人)と話を爲しつゝ夕飯を濟ましたが、それは何處の滊車も同じ事ながら、見渡せば余の乘り居る車室も種々雜多なる人々を以て充たされ、紳士らしき人も居れば乞食のやうな者も居り、男もあれば女もあり、漸く腰が立つばかりの老人や、母の懷に抱かれてスヤ〳〵と眠る稚兒もあり、甚だしきは、盲目者らしきものが杖をつきつゝ、人に送られて入つて來たのもあつた、鐵道會社は、賃金を取るために人を乘せるもので、人柄などを選ぶべき譯合もないから、如何なる人々と席を並ぶるのも是非もないが



これだから何うも下等滊車は厭だと思ふた、尤も自分も顧れば貧乏人の一人だから止むを得ないが、やがて此等の異樣なる人々凡そ三四十名ばかりが、一列車の中に在りて、いろ〳〵な浮世話を爲し、やれ誰樣が金を儲けたの、損したの、やれ誰樣の病氣は何うだ、やれ誰樣は幸福な人だの言ふのは未だよいが、湯屋で能くある如くに俗謠の復習を遣つたり、又た辨當の喰空や唾などを車中に吐き散らかしたには閉口した、業々しく公德心を擔ぎ出だすまでもないが、これには、あきれて物が言へない、そこで、余は一個

の感想を引き起した、わゝ滊車の中は一種の小社會である、人員こそあまりに多數ならざれ、種々なる人間を集合せる一の團體であるから、之れを小社會と見ても差支はない、そうして此等幾多の人々は、何處より來りて何處へ行くものかは知らねど、之れを一々吟味して見たなら、金儲を目的にて赴く人もあらん、功名を夢みつゝ赴く人もあらん、或は親や兄弟乃至は妻子の病氣にでも見舞ふが爲めに赴く人もあらん、或は暢氣に見物旅行を試むる人もあらん、或は又た慈善家、道德家も居れば、賭博や、詐欺、竊盜などの犯罪者も其中に無しとは限らず、其目的こそ異なれ、いづれも皆人間の生活及び社交上の必要より、文明の利器たる滊車の便を假りて、東西に奔走しつゝあるのであらう、頗る社會的の趣味を感ずるもの丶如くであつた、斯かる空想に耽けりつゝある間に、時間は經過し、滊車は餘程進行して、宇都宮を通り過ぎた頃には、早や時辰儀は十時を示めし、客も幾分か少くなりたれば、氣が頗る淸々としたまゝ、こん度は本當に椅子に身を横へ、鞄を枕にうつ〳〵と眠り初めた。

▲夏の夜の滊車

晝の蒸し暑いのを厭ひて、夏季の旅客は皆夜行滊車を選むので、夕刻より十二時頃までも、各驛から乘り込む客は、續々として引きも切らぬ、が自分も實驗して見るに、矢張り夜行滊車の方が好い、何せかといふに、第一滊車の中が涼しくて、晝の車中の熱牢のやうなのに比較すると、よほど淸々としてよろしい、殊に窓をひらけば、風の無い日でも多少の涼風が入つて來て、自分の顔を吹くと丶もに、睡氣をば何處へやら持つてゆくので、頗る氣持がよく且衞生上にもよからうと思ふ、次ぎには、夜行に乘り込む客が多いので、晝の客が宛かも萎れたやうな姿で居るのとは違つて、人間が生き返つたやうにハキ〳〵して話合ふなど、中々賑かになつて來る、之れは幾分か車中の無聊を醫するにも足るだらうと思はれる、其の他にも、滊車の窓から時々は道筋の夜

景が覗かれる、そうすると、月夜などは格別、川のある邊りでは、隨分好い景色が見られる、倘は注意深い人の眼から見たなら、澤山に夜行滊車の効能ともいふべきものがあらう、しかし、又其の欠點を數へて見たら、これも隨分少くはあるまい、それは何んであるかと云ふと、夜行滊車もあまり込まぬ時なら宜しいが、非常に乘客の多い時は、隨分混雜してうるさいのみならで、其の蒸し暑いことも夥しい、が晝の滊車に比較したら、それでも幾分かはよからう、そうして十時過ぎになると、乘客は皆半睡の姿を催ふして來るから、囂々たる騷擾の聲は幾らか靜りて、こん度は耳に聞ゆるものは何んにも無い、夜の更くると共に、滊車の鐵路を軋る音のみが高くなつて來るので、滊車の外は極ひッそりとなり、言はゞ山も、川も、草も、木も皆眠つたやうな模樣になつて來る、それで何んだか初更の時分とは反して、寂しいやうな氣がして來る、が其時分には如何なる神經質の人間でも、眠らずには居られなくなつて來るから、ついコクリ〳〵と一睡の夢を買うのである、三更の頃から曉までの夜滊車の光景は、病氣のある人か、左もなくば不眠性の神經家かでなければ、能く之れを見て居るものもなからうが、いづれ此の時刻の滊車の中は、一種の雜居的寢室の如きものに爲つて來るであらう、其時分になると、滊車に馴れぬ人や心配性の人は、あまり熟睡せぬやうにと何か飲食でも遣るか、煙草でも吹かして居るの、だが余輩の如き書生は、凡ての事が不規律であるから、多くは寢ころんで居るやうな態度で、何か本でも讀みつゝ、半分は眠つて居るのである、そうしてゐる中には、夜が明けて東の空がほの〳〵と白くなつて來るのは間もないやうだ、以上はまづザッと夜の滊車の光景とでもいふべきものでせう。

▲車窓よりの眺望

東海道の滊車は、鐵道に沿うて海を控へてゐるから、窓よりの眺めに富んで居るやうだが、東山道の滊車は之れと反對で、上野を發して日鐵の東北線（別に田端岩沼間に常盤線あり、これは其名の如く常陸磐城の二ヶ國

に跨りて海岸に接近し居れど）を直行し、宇都宮、白河、福島、二本松とだん〳〵各驛を通過して東北に赴くに從ひ、廣い海原の眺めもないから、たゞ眼にうつるものは、山や、川や、野や、田甫のやうなものばかりで、車窓の眺望といつたら、極單調で、且つ趣味も淺いやうな感んじがする、また鐵路に沿うてあまり都會も見えぬから、まるで滊車に乘つて未開の天地、野蠻の國へでも入つて行くやうな氣がするので、いや實に寂しくて心細くてたまつたものでない、しかし、それは單に東北滊車を一面から觀察したので、又た他の一面から見ると、東山道の滊車旅行は、東海道などゝはちがふが、また一種の好景と趣味とに富んでゐるやうである、いまこれを一寸言つて見ようならば、上野から仙臺までは、車窓より眺望は、原野や藪のやうなものばかりで、極平板に流がれゐる趣だが、仙臺より先きになると、之れと正反對で、こん度は見渡す限り山ばかりである、滊車はだん〳〵と山の中に登つて這入ッて行くやうで、一進一軋、次第に森々たる山氣が我身を襲うて來るやうな氣がする、であるから、東海道の滊車は、水の風趣に富んでゐるものとせば、東山道の滊車は、山の風趣に富んで居るものである、しかし、此の山の風趣に富んでゐるのは、東北線滊車旅行の特色とでもいふべきものである、何人でも試みに滊車に乘つて東北に旅行したならば、此の特色ある風趣を目睹して、一種異樣の感想に打たるゝであらう。

▲車中の一珍客

余の乘つた滊車は、夜のほの〴〵と明けゆく頃、仙臺驛に着いた、其所で一寸滊車から降りて、顏を洗ひ口を嗽いで、さて朝餐をも濟ました、すると間もなく滊車は發車したが、此驛から乘つた一人の紳士風の人（故ありて其名をいはず）があつた、斯人いまは閑散にして教育上の講究に心を潛めて居るそうだが、嘗ては女學校の教員をしたことがあり、多年女子教育にたづさわつた人といふことが分つたそこで余も女子教育に關係して

居る者です、といふと、それでは女學校の教員であるかとの反問に、實は御存知もあらんが、東京博文館より發行する女學世界の記者ですと打ち明けた、ところが先生大いに喜び、何にか女子教育上に參考となるべき御話を承りたいと出で來られた余はまだ貴下等の如き實地の教育家に向つて、御話するほどの學問はありませんと辭したが、先生の熱心が其顏面に現れてゐたから、然らば余は余の位地からして余が女子教育に對する管見を御話申さんとて、左の如き一話を爲した。

教育の事は、貴下等の如き專門家の能く知らるゝ處であるから言はぬとして、余は雜誌記者としての側から、女子教育に對する希望を一寸述べて見ませう、一體我國の女子教育は、明治八九年頃に始めて女學校の設立を見た位のことで、其頃には極微々たるもので、爾後も久しい間は振はなかつた、是れは一般に女權の發達せぬ爲めでもありましたらう、然るに數年前ことに兩三年以來は、一般に家庭の改善の聲が高まつて來た結果として、女子教育は非常なる勢を以て勃興し、從つては女學校の簇生は恰かも雨後の筍の如くになつて來ました、そうして其隆盛に赴いたと共に、大分各女學校の設備及び内容も整頓して來ました、これは近年文部省の當局者が、實業教育と共に女子教育に重きを置くに至つたのと、實際の女子教育家の力、殊に時勢てふものが此に至らしめたのであらうとは思ひますが、兎も角女子教育の爲め、否申さば國家の裏面的發達の爲めに喜ぶべき現象であらうと思ひます、然るにです、女子教育は近年大いに好成績を現はして來たのには相違ありませんが、併し之れは學校内の教育方法が整備して來たといふに過ぎません、尙は學校以外の教育方法は、未だ充分に發達し整美の域に進んでは居りません、而して學校以外に於ける女子教育方法としては、女學に關する雜誌の如きも確かに其一つであると私は信じます、勿論學校教育の效果は、根本的に智德を上進せしむるものでありませうが、しかし、女子の如き學校教育の期間の短く、學校よりは家庭に於

て多くの修養を積まねばならぬ性質と事情とを有するものには、之れが教育の補助機關として、女學雜誌の整備を期するのが最も必要であらうと思ひます、それだから、余輩は自分の關係する「女學世界」にも、敢て專門的に偏することは出來ませんが、常に女子教育といふことを念頭に置き、又た確かに誌面の一部分をば專ら斯教育の爲めに犧牲に供して居ります、つまり余輩の理想は、之れを學理的にいへば、社會教育の側から女子教育の爲めに大いに盡さんといふ考へであります、勿論普通の雜誌に具ふるが如き趣味とか娯樂とかをも混じては居りますが、まづ余の記者としての女子教育意見は斯んなものであります、そうして一言申したいは、我國の女子教育主義としては、必ずしも古風の日本教育主義を固執せよとはいはず、又た歐米其儘の教育主義を斷行せよともいはず、要は和洋折衷主義の下に、一個の獨立せる日本的教育を施すに在るべく、これぞ現時の時勢に適應すべき唯一觀念であらうと考へます、而して逼般の思想と我國現時の各女學校の風と果して適合すべきや否や、余は其の鑒別に苦しむのである。

と意氣軒昂氣焔万丈といふ態で滔々と述べました、彼の紳士は、教育者以外の思想家より有益なる談話を聞くを得たるを謝すとて、後は宮城縣の普通教育の頗る高度に在ることや、其他文學上の話などを爲しつゝ居る間に、汽車は已に岩手縣の縣境を通り越して一ノ關に入りましたが、彼の客は遺憾ながらこゝから下車しますと言つたので俄かに談敵を失ひ、余のみ獨り茫然として汽車の中に殘された。

▲東北の山水

奥州一帶の山水には、異樣の風趣を具ふることは、前にも少しく述べましたが實際何うも、言ふに言はれぬ特色を具へてゐるやうである、しかし、其れは我々の如き奥州產れの者が、左もなくば、一度奥州旅行を試みた人でなければ、話したばかりでは分り兼ねる點もあらうが、それは確かに事實である、余は何にも物好きに

奥州山水の案内ぶれをするではない、其近い證據には、先年今の國民新聞社主徳富氏が、當時内務省の勅任參事官といふ肩書のある御役人様として、公用を帶びて一寸東北へ行かれたことがある、それは勿論文物制度を調査するのが目的であつたらうけれど、彼れは普通の事務的俗吏ではない、文學の趣味や、社會的の智識を有つて居る人であるから、旅行中餘程東北の自然的風景に感じたものと見えて、歸京するや否や直ぐと、彼れの才氣ある想と筆とを以て、其眼中に映じた「東北の山水」を描き出だし、即ち東北紀行文の如きものを國民新聞に掲載して、世人の注意を惹き喝采を博したことがある、そうして其紀行文中には、確か斯ういふことが書いてある筈だ「余は東北の山水に一種の特色を具ふるを認む、何んとなれば、東北山水の風趣たるや、雄大で、奇拔で、而かも非常なる變化に富んでゐるので、之れを中國邊に於ては到底見ることの出來ない所があるからである、そうして東北山水の特色を認むると同時に、又た東北の人物の特色は、斯かる自然的風趣に涵養せちれたるもの多かるべきを思ふ」と、之れは余輩が猶ほ奥州に在りて、蘇峯の文を愛讀した時に讀んだのが、能く吾人奥州に因緣ある者に適したと見えて、今尚ほ記臆の中に遺つてゐるのであるが、蘇峯は確かに現時文壇に於ける該博的思想家なる丈け、余輩の言はんと欲するところを能く言つたものと思ふ、東北の山水については、大要は蘇峯の文で盡されてゐるから、別に管々しく言ふ必要もないが、元來奥州一帶の地は、いはゆる山國なので、何處へ行つても高く聳ゆる山や嶽、または鑿で削つたやうな嶮しい崖ばかりが多く、左もなくば極狹い深い壑底があるといふやうなもので、田畑や野原のやうなものも無いではないが、中國筋のやうな廣々とした田面や平野は見ることは出來ない、從つて地勢は、恰かも馬背のやうな頗る急激的狹斜地に爲つてゐる申さば巍峨として高く雲表を衝くの孤峰を見るかと思へば、其下には奔放の勢を以て馳走する急流があるといふやうな譯で、實に不可思議なる多種多樣の風趣に富んでゐる、概して人爲的の風趣には乏しいが、自然的

の奇異絶妙なる風趣をば具えてゐるもの丶如くである、要するに、雄大で、奇抜で、而かも變化に富んでゐるのは、東北山水の特色であらうと思はれる、而して余は、東北の人文の程度の遲れてゐるのは好まないが、東北の壯大なる自然的特色の風景を大いに愛好すべきものである、故に余は時に臨んで這般風景の中に閑遊して、我が腸をあらひ、精神を煅煉したく思ふてゐる、余が此一文に同感の方々は、夏季の休暇でも利用して一たびは東北旅行を試み賜へ、但し女子諸君にはチッと不向かは知らねと、山高く水淸き東北の天地は、確かに心身の保養になるでせう。（完）



女學世界 定期増刊秋の卷

第三卷 第拾貳號

花すゝき

秋涼は人をして物に親しましむ、物に親しむの時にあらざれば書を讀んで得る處ろ鮮からざるべし、秋氣は人をして眞面目ならしむ、人眞面目の時にあらざれは、書を讀んで其の味を解する深からざるべし。「花すゝき」は即ち此の讀書的好季節を以て秋の家庭に一段の新趣味を供せんとす。本篇別ちて▲文藝▲逸話▲詞藻▲社會の四欄とし各欄特別の面目を發揮せんとするもの目次下の如し

▲九月十五日發行▼

●目次●

次號記事豫告

（第三卷第拾參號十月五日發行）

▲婦人の目的　三輪田眞佐子
▲貴婦人の嗜好（四）　中村鈴子
▲家政廿四時　川西璞
▲勞力と食物　塚本はま子
▲一日醫者　糸左近
▲源氏梗概　尾上柴舟
▲二宮尊德の幼時　報德生
▲魚の生活　今井彙氏
▲電氣の話　武田櫻桃
▲當代名流の家庭（二）　勝間生
▲英語實習　藤生貞子
▲倫敦淑女の化粧　藤本夕飈
▲名古屋の慈善家　小畑蓬城
▲（小說）秋の嘆　泉斜汀
▲婦女雜觀　大町桂月
▲泰西家庭奇談　嚴谷小波

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……十二冊
　｛增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

不許複製

明治卅六年九月五日發行　第參卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館發兌

千河岸貫一君著

女訓評釋

正價六拾錢　郵稅拾錢

醫學士小林利三郎君著

眼のはなし

全一冊中判形極美本
正價拾八錢郵稅四錢

眼のはなしは岡山醫學校教諭醫學士小林先生の用意に成るもの、先生は大學卒業后大學院におりて眼科の教室に助手となり院を出てより各地病院に眼科の醫長として刀圭を執られたれば此書が如何に手易にして良好なるかを證す

大町、白河兩君合著（全五冊）

帝國漢文讀本

正價一卷二卷各卅錢三卷四卷五卷各卅五錢郵稅各六錢

木村小舟君著

理科手引草

全一冊洋裝紙數三百廿頁
正價卅八錢　郵稅金八錢

本書は理科學の初步を尤も簡明に現實の材料を捉へて說明したるものにして少年讀者が智能の發達には尤も有益なる良書なれば家庭教育の要具として父兄諸君は朝な夕な其子弟に嗜讀せしめて理科思想の養成に勉めらるべし

太田才次郎君著

全國兒童遊戲法

全三冊洋裝菊判美本
賣價一冊拾錢郵稅四錢

遊戲は兒童の發育成長に偉大なる影響を及ぼす者にして、近來は教育上最も注意を要する一事項とせられたり本書は本邦全國に涉る兒童の遊戲法を蒐めたるものにして各地の習慣を基礎とせる趣味ある書實にの家庭教育上の好參考書也

木村小舟君著

理科春秋

全一冊洋裝紙數二百頁
正價廿錢　郵稅金四錢

理科春秋は四季に於ける理科の各現象を現實に捕へ來りて平易簡明なる研究を爲したるものなれば少年讀者の好讀物として最も有益なるもの彼れ等は此書を一讀して興味に迎へられ知らず識らず理科の智識を養成すべし

寒澤振作君著

新撰五千字典

正價　拾錢　郵稅六錢

福田富次君著

佛蘭西文典

定價四拾錢　郵稅拾錢

（後付の二）

◀博文館發兌▶

松本君平君著

●新聞學

賣價五十錢　郵税十錢

博文館編輯局編纂

●四大法典草案

全壹册洋裝紙數三百廿八頁
賣價金十錢　郵税金六錢

川崎三郎君著

小文章

賣價十錢　郵税四錢

農商務省特許局編纂

●特許意匠審決錄

全壹册洋裝紙數五百七十二頁
賣價金五十錢　郵税金十二錢

首藤環先生著

●醫術開業試驗問答叢書

前編正價六十錢　郵税金八錢
後編正價九十錢　郵税金十四錢

法律を研究する者は法の精神に通ずるを要し法の精神に通せんと欲すれば其母法及草案等に就て立法の趣旨を講究するとを要す本書は刑法法例民法商法の修正案を蒐めたるものなれば法學研究家の是非熟讀せらるべき必要書なり

山田富太郎君著

●文官高等判檢事辯護士及第者答案集

全壹册洋裝紙數二百五十二頁
正價金三十五錢　郵税金六錢

特許意匠に關する審決錄は商工業者の必讀すべきものにして等閑に附すべからざるものなり何となれば是より將來世の進運に隨て殊に益々此種の爭ひ及出願に關し種々の事件を生ずべければなり

本書は前編後編に分ち前編には前期試驗問題を後編には後期試驗問題を蒐成して當該試驗の希望者に貢献す殊に其問題は何れも最近のものにして叙列に系統あれば單に試驗問題とのみせずして研究資料として見るに足る

西島良爾君著

淸國一斑

賣價十五錢　郵税六錢

高等文官判檢事辯護士試驗及第者の答案を蒐めたるものにして當該受驗者の參考としては此上なき良書なり坊間此種の書多數なれども何れも實際の答案にあらずして單に問題に對する答を附したるものなれば是と彼とは其差月鼈なり

寒澤振作君著

商業文範

正價廿五錢　郵税六錢

(後付の三)

▶博文館發兌◀

島田法學士著

衆議院議員 **選擧法論**

正價四十錢　郵稅六錢

松井柏軒君著

●**上杉謙信**

全一册洋裝紙皮金字入
正價金二十錢郵稅四錢

著者謙信と同國に生れ、謙信の偉蹟を歷訪し、其武烈を尊崇して、此著あり、謙信の面目風彩、生けるが如く、且つ當時の諸英傑及びナポレヲン等に比較し來りて、謙信の面目殊に揚れり、落莫たる近時の讀書社會を賑はすもの、恐らく此書なるべし

市川義方君著

水理眞寶

賣價金三十錢　郵稅八錢

福地櫻痴居士作

●**芳哉義士の譽**

全一册洋裝紙數百八十頁
正價金三十錢郵稅金六錢

本書は福痴先生の作にして赤穗の義士復讐事了りて后幕府之を處する制裁に關し當時議論兩派に分れたる條より義士の當時に於ける体度寫し得て眞に迫れり加之登場の優亦天下の名人此書に對して之を賞味せば時の遷るをも知らずしても過すを得む

水田南陽外史譯

●**魔法醫者**

全一册洋裝紙皮金字入
賣價十二錢　郵稅四錢

本書は南陽外史が例の筆を以て譯出せられたるものにして着想の奇警俊抜讀一讀興趣湧き一頁は一頁より妙境に入りて或は危むべく或は哀むへく或は恐るべく而して或は復喜ふへきものあり小說に嗜好ある人是非一讀あれ

山口慶一君著

新舊對照 **刑法蒐論**

正價八十錢　郵稅十五錢

福地櫻痴居士作

●**山中平九郎**

全一册洋裝菊判形頗美本
正價金三十錢郵稅金六錢

山中平九郎は時の名優にして其伎は世の魁たり優曾て工夫を凝して幽靈に扮するや隠りの趣向を案し一度場に登るや其悽愴の情人をして其眞ならざるを疑はしめたり櫻痴先生之を劇に登さんとて靈筆を呵して此書を作す行文趣向は今更言はずもがな

博文館編輯局編纂

改正商法

賣價五錢　郵稅二錢

（後付の四）

◀博文館發兌▶

干河岸貫一君著

日本女子立志論（全二冊）

正價一冊六十錢郵稅八錢

門脇眞枝先生著

●狐憑病新論

正價五拾錢　郵稅八錢

東京控訴院編纂

東京控訴院裁判錄

賣價拾五錢郵稅四錢

呦鹿庵主人著

●溪韻松聲

正價拾錢郵稅六錢

門脇眞枝先生著

●精神病看護學

正價五拾錢　郵稅八錢

本書は著者が醫科大學精神病學教室に於ける研究の餘滴にして狐憑病を精神病理學上より觀察し精細微なる斷論を下したるものなり行文通俗平易なれば流石に幽玄なる精神現象を縷々說き來りて頗る痛快を感ぜしむ

近來看護學に關する書多しと雖精神病の看護學に至りては本書を以て嚆矢とす著者は王子精神病院長門脇先生の著に成るものにして記するに流暢なる明文を以てしたれば讀み易く解し易く教科書としても參考書としても其比なし

國府犀東君著

●花ざくろ

賣價廿五錢郵稅四錢

古言に曰く、語快なれば人をして舞はしめ語悲しければ人をして泣しめ、語險なれば人をして危ふましめ、語怒れば人をして劍を按せしめ、語激すれば人をして筆を投せしめ、語高ければ人をして雲に入らしめ、語低ければ人をして石に下らしむと、溪韻松聲の謂なり

故高山博士曰く滿載の詩篇春秋の粉脂を萃め粲然として人目を射るが如く或は香韻錯落亂山雲に聳ゆるが如く或は餘情依稀暮笛風に咽ぶが如く或は豪爽或は幽婉或は離奇或は妖嬌讀者をして應接に遑あらざらしむと以て內容を知るに足る

市岡正一君著

戶籍事務取扱全書

賣價金三拾錢郵稅十六錢

市岡正一君著

戶籍事務實行問答

賣價金十五郵稅金六錢

（後付の六）

博文館發兌

姉崎文學博士著

上世 印度宗教史

賣價五十錢　郵稅八錢

北一龜君編纂

現行試驗 規則大全

全一冊洋裝紙數二百九十頁
正價金四十五錢郵稅金六錢

本書は文官高等試驗及普通試驗を始め其他判檢事試驗辯護士試驗より各種の試驗に至る迄其現行規則を枚擧せるものにして公職に從事せんと欲するものゝ座右を離すべからさる要書なれば其希望を有する人は是非購讀暗記すへきなり

農商務省特許局編纂

特許發明分類表

全壹冊洋裝紙數二百卅頁
賣價金四十錢郵稅金六錢

特許發明分類表は農商務省特許局の御編纂に係るものにして各種の發明品の特許せられたるものを分類して一覽に便せるもの商工業者及農業家が各其業務上熟覽を要すべき要冊なれば是非購讀ありたきものなり

加藤文學士著

宗教新論

賣價七十錢　郵稅拾錢

國府白河兩君合著

支那學術史綱

賣價十五錢　郵稅四錢

英學新報社校訂詳註

英文百百合

全壹冊洋裝中判美本
正價金二十錢　郵稅二錢

荊棘の間に落ちし種の白百合を憐わる人の移し植ゑて庭園の眺めと愛で育てぬれば瘠せすくみたりし葉も莖ものびやかにサイケ姫の白妙の袖をかへるか塵に染まぬ其花の香よ露よエロス君の朝の風の翼に乘りて舞ひ下るよ

稻垣、藤川、兩君合著

實用警察會話

全壹冊洋裝上製紙數三百頁
正價金四十錢　郵稅金四錢

本書は京都府警察本部に職を奉せらるゝ稻垣藤川兩君の共著にして其活用に快便なるは今更敢て喋々を要せざるか世の語學に志あるの士は其警察官たると否とに限らす誰にても穩當の語學書なれば購ふて活用の秘訣とせられたし

釋雲照律師述

國民 教育の方針

正價七十五錢郵稅十二錢

博文館發兌

篠田大越山脇三君合著
會社法釋義
賣價二十錢　郵稅六錢

島田豐君著
學生用英和辭典
全壹冊洋裝紙皮上製金字入
正價金壹圓卅錢　郵稅十錢

坪谷善四郎君著
工業進化論
賣價十五錢　郵稅八錢

石川辰之助君著
英語會話教科書
全壹冊洋裝中判金字入
賣價金卅五錢郵稅金四錢

ハワード、スワン君著
英文 極東の光
全壹冊洋裝中判上製金字入
正價金五十五錢郵稅金八錢

島田豐君が英學に精通せらるゝとは世の人の偏く知る所本辭書は著者が學生の爲めに特に編せられたる辭書にして講學の便を主とせられたるものなれば其索引の輕便は素より記臆の上にも容易ならざる注意を置かれたり

島田豐、島田弟丸兩君著
學生用英和辭典
全壹冊洋裝紙皮金字入
正價金壹圓郵稅金十錢

本書は石川辰之助君が英語の會話に就て苦心經營の餘に成りたる教科書にして其修得上常に困難を感ずる所記臆に不便なる處等は殊更意を用ゐて最も平易に了得せられ得る樣綴られたる教科書なり

本書はハワード、スワン氏が夫人と共に米國より本邦に來朝せらるる途上及來朝后本邦の各社會に於ける事情に就て其所感を記述せられたるもの英學研究家の研究資料には恰當の良書なり

市原寅松君著
國有林野法釋義
賣價十五錢　郵稅六錢

斯書は邦語に因て英語を索引する辭書にして其編纂の注意は周到にして俗に所謂痒處に手の届く程の適切なれば英語の研究者此書によりて其記臆を補ふ上に修得の便利大なり

福島陸軍少將著
四聲聯珠
正價二圓五十錢郵稅廿錢

女學世界

毎月壹回五日發行

(明治參拾參年貮月廿五日第參種郵便物認可) 第參卷第拾壹號 (明治參拾六年九月五日發行)



(定價金貮拾錢)